

銀河彼方での物語

秋鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「スター・ウォーズ エピソード1／ファントム・メナス」から10数年前の、ジェダイ・マスター、クワイ・ガン・ジンと彼のパダワン、オビ・ワン・ケノービ師弟の若き頃を描いた冒険譚です。

「JEDI APPRENTICE」（ジェダイ・アプレンティス／未邦訳）シリーズをベースにしていますが、知らなくても楽しめるはずです（と言いますが、私も粗筋程度しか知りません・・・）。

気になった方はどうぞ。

*ちなみに、この冒険譚は勿論、最初から目を通してもいいのですが、一つ一つのタイトルが単独でも成立していますので、タイトルごとに読んでくださっても構いません。

〈補足〉

この小説、実は10数年前に書いたものです。共同管理人だったSWサイトに投稿していましたが、サイトは2005年に閉鎖。

それ以降、我がPCの中で眠りについておりました。この度、このまま眠らせておくのももったいないかも・・・と思ひまして、いろいろ手直しをして投稿した次第です。

なんか読んだことがあるなどと思われる方も方に一人もいらつしやるかもしれませんが、そういった次第ですので、よろしくお願ひします。

目次

1. 追憶の環	— T u i o k u n o W a — (アルカス編／架空の惑星)	
第1話	不穏な始まり	1
第2話	勇み足の代償	9
第3話	難航する捜索	16
第4話	痛ましい状態	22
第5話	隠された思惑	25
第6話	予想外の展開	31
第7話	連鎖する記憶	37
2. 夢見の森	— Y u m e m i n o M o r i — (キャッツーク編)	
第1話	緑豊かな惑星	44
第2話	指示を受けて	50
第3話	悩みゆえの夢	56
第4話	巨木に癒され	63
3. 常和の花	— T o k o w a n o H a n a — (クテラ編／架空の街)	
プロローグ		73
<前編>		
第1話	荒れ果てた街	75
第2話	王からの依頼	79
第3話	真夜中の刺客	85
第4話	少女との再会	94
第5話	触れあう思い	100

第6話	忍び寄る危機	107
第7話	混迷する事態	115

<後編>

第8話	戦いの始まり	123
第9話	悲しみの犠牲	130
第10話	工場での戦い1	140
第11話	工場での戦い2	149
第12話	工場での戦い3	155
第13話	黄昏時の決着	161
第14話	復興への一歩	167
第15話	逆らった理由	176
エピソード		179

「JEDI APPRENTICE」の紹介

「JEDI APPRENTICE」について	183
-----------------------	-----

4. 黒耀の光 — Kokuyono no Hikari — (宇宙海賊編)

第1話	海賊船の襲撃	187
第2話	孤軍奮闘の末	192
第3話	宇宙での戦い	201
第4話	宇宙戦の果て	209

5. 流過の都 — Ryukano no Miyako — (オルデラン編)

第1話	表敬訪問にて	219
第2話	狙われる少年	226
第3話	カーチエイス	234

第4話 腹黒い襲撃者

第5話 崖端での攻防

第6話 一件落着の後

第7話 増えた同行者

外伝「Dark Fear」(復讐編)

プロローグ

<前編>

第1話 ゆくえ知れず

第2話 謎の手がかり

第3話 囚われの弟子

第4話 暗黒面の恐怖

第5話 予期せぬ再会

第6話 過去との闘い

<後編>

第7話 元弟子と弟子

第8話 紙一重の攻防

第9話 待ち受ける罠1

第10話 待ち受ける罠2

第11話 手負いの反撃

第12話 砕かれた希望

第13話 残り20分……

第14話 残り15分……

第15話 残り10分……

第16話 全て終わって

エピローグ

1. 追憶の環 — T u i o k u n o W a a — (アルカス編／架空の惑星)

第1話 不穏な始まり

「いいか、何があつても私の傍を離れるな。わかつたな」

「はい、マスター」

と殊勝な応答をしているが、いささか食傷気味である。

惑星アルカスの首都リルパの宇宙港に着く前から、万事が万事この調子で、ジェダイ・マスター、クワイ・ガン・ジンは若き彼の弟子、オビ・ワン・ケノービに今回の任務の危険性を充分認識させようとしていたからだ。

惑星アルカス — 銀河の首都をコルサントと位置づけるなら、どちらかと言えば辺境リムに近い所にある星で、二つの月を持つ。

大地は星の約8割を覆い、南半球には山脈が多く、北半球は砂漠も含む平地が広がっている。そして、首都リルパは北半球に位置し、商売がこの地を潤している。

そんな知識をこの惑星に関して仕入れていた。

今、二人の目前には、両側に店が並び人々が溢れ、活気がある様相を呈す街並みが広がっている。

怪しげな土産物売る露天商の掛け声が響き、観光客をひきつけていた。

クワイ・ガンは街に溶け込み、通りがかりの旅行者風情を装いながら足音静かに歩いている。

彼の目的は何か、オビ・ワンにはわからなかった。

昨夜この惑星に着き、宿屋で一泊すると、今朝から首都の探索に向かったのである。

今回の任務 — それは、首都リルパで行われているというスパイス密売の実態調査であった。

スパイスは、通常街で売られている比較的手に入りやすいものから、グリッターステイムのようにケッセルで採掘しないと採れない貴

重な物まで幅広い。

貴重なスパイスは本来共和国が管理すべきものだが、裏取引で売られているものも多い。法外な値段で売れるからだ。

そこで、事態を重く見たジェダイ評議会は、クワイ・ガンと彼の若きパダワンをこの任務に遣わしたのであった。

何度、クワイ・ガンに問いかけようとしたことか。その都度オビ・ワンはその疑問を心の奥底にしまい込んだ。

(何を探しているんですか?)

クワイ・ガンに話す意思があれば自ら口を開くだろう。それまで待つしかない。

横目でマスターを見上げ、気づかれぬよう溜め息をつく。そんなオビ・ワンの心を知ってか知らずか、クワイ・ガンの歩調は変わらな

い。

ふと、そんな師の足が突然止まった。

クワイ・ガンは店の看板を眺めた。

「宝石店」とある。

(宝石店?)

訝しげに首を傾げるオビ・ワンに、

「ここにいるんだ」

彼のマスターは声をかけた。

(ここって、店の外ってこと?)

「僕も行きます」

「いや・・・お前はここで待つほうがいいだろう。ここから動くな、わかったな?」

「・・・はい、マスター」

表情に現れぬよう素直に応える。しかし、心の中では少し不満だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

クワイ・ガンは店に足を踏み入れた。

ごく普通の宝石店に見える。強化ガラスで造られたカウンターの下に箱に入った宝石が並ぶ。

一見してオルデラン産やレリア産の宝石とわかる物もあったが、あとは美しくかつ人を妖しく惑わせる光を放っていることのみ感じ取れるだけだ。

「何か、用かね？」

しゃがれた声とともに主人が顔を出した。アイソリアンだ。

別名ハンマーヘッドとも呼ばれる彼らは、その名の通り、ハンマーのような突き出した顔の両端に眼が離れてついている。

「土産に宝石を買いだいたいんだが」

クワイⅡガンは笑みを浮かべ、旅行者のふりを装って訊ねた。

「いいとも、ここには素晴らしい宝石がいっぱいある。今ならお買い得だよ」

一通り宝石を見て、クワイⅡガンは首を振った。

「いや、もつと良い宝石があるはずだ。高い宝石が、な」

主人は驚いた顔をした。しばし、そんな金持ちには見えないクワイⅡガンを穴の空くほど見つめたあと

「ちよつと待ってな」

言葉を残し、奥に消えた。

ややあつて主人が戻ってくる。その手には煌びやかな宝飾が施された宝石箱をいくつか抱えている。それをカウンターの上に乗せる。いかにも無造作に置き、店主は客に気を遣っていないかに見える。

しかし、視界には入らないが、カウンターの向こう側からブラスタールを構えているのは明白だ。こんな街では気を抜いたらやっつけられないのだ。

蓋を開け中身を確認しつつ、クワイⅡガンは煌く宝石を見ていたが、首を振った。

「これらも私の探している物ではない」

主人は驚いて、声を上げる。

「ここにあるので全部だ。これ以上高い宝石なんてないぞ」

「それなら・・・」

クワイⅡガンは言葉を切って、主人を静かな眼ざしで見つめた。意味深な光をたたえて。

「高い宝石を売ってくれる所を紹介してくれないか？」

主人は沈黙した。心当たりがあるのかもしれない。それとも、クワイⅡガンの意図したことが呑み込めたのかもしれないなかった。

「・・・わかった。高くて魅力のある宝石を売る店を教えよう」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

あてもなく通りを眺め、しばらく辛抱強く待つていたオビⅡワンだったが、代わり映えもない街並みを見るにも飽きてきた。

(・・・疲れたな・・・)

痺れを切らし体の向きを変えると、宝石店の外に並べられている怪しげな土産物を見始める。

何やら四角い箱。平たい。箱の正面にボタンがある。ボタンを押してみる。蓋が開き、スクリーンが現れる。

右横に切れ目があるから、データパットを入れると、どうやらこのスクリーンに様々な画像が現れるらしい。パットに入ったちよつとした画像を楽しむための物なのかもしれない。

オビⅡワンはそれを元に戻すと、溜め息をついた。

そして、店の様子を覗き込む。

彼のマスターは背中を丸めてカウンターに肘をつき、まだ店主と何やら話し込んでいる。長くかかりそうだ。

オビⅡワンはもう一つ、先ほどより深い溜め息を漏らすと、不意にその場を離れた。

気配を街の空気と同化させ、街の人々に違和感を抱かせないようにする。これはクワイⅡガンと任務にあたるたびに身をもつて習得した技である。

オビⅡワンは、買い物を行うために街をぶらつく一般市民にすつかり溶け込んでいた。

しかし、注意は怠らない。ここは密売が行われている街なのだ。一見ごくありふれた街に見えるが、影で何が行われているかわからない。

充分周りに気を配り、だが、そんな素振りを少しも見せずに、オビⅡワンはひたすら街を歩いていった。

10標準分ぐらい歩いただろうか。

不意にオビⅡワンは、右手にある普通の家と思われる建物と建物の間にある細い横道にそれた。

横道は100mほど続いている。オビⅡワンはさつきとはうって変わって慎重にゆつくりと歩を進めた。

そして、横道が終わる手前で、壁に背をつけ前方を見やる。

そこには倉庫があった。何の倉庫かはわからないが、薄汚れて誰も立ち寄りなくなつて久しいようだ。

(いや、そんなことはないな)

オビⅡワンは口の端に笑みを浮かべると、素早く走り寄り倉庫の影に身を隠し、様子を探る。倉庫の周りには誰もいないらしい。

一瞬ホツとし、しかし、何があつても対処できるよう一層緊張を高め身にフォースをまとい、朽ち果てゆがんだ入口の扉から中を伺う。

(いた。多分彼らだ)

複数の影が、天井に取りつけられた黄色いライトに照らされ、揺らめいている。フォースを取り込み、聴覚を鋭くした。

「早くよこせ」

「そう、焦るな」

それに対し、聞いたことがない言語が苛立ちの返事を返す。

「わかつてるさーほら、これがお前の取り分のスパイスだ」

どうやら人間とエイリアンが雑多に混ざっているらしい。

ここは密売の現場だろう。

先ほど街並みを眺めていた時、普通の人なら気づかぬはずの不穏な微かな気配をフォースで感じた。しかし、相手に気づかれぬよう土産物を見てやり過ぎし、それとなくあとをつけてきたが、勘は外れていなかったようだ。

オビⅡワンは密かにほくそえんだ。

(よし、この場所をマスターに知らせよう。そのためには何人いるか確認しておいた方がいいかもしれない)

オビⅡワンは身を乗り出し、集中しながら前方の闇にフォースを送った。

荒くれどもの苛立ちや興奮した気持ちが流れ込んでくる。

(一人、二人・・・七、いや八人はいるかも・・・)

「そこにいるのは、誰だ。何をしている!？」

(しまった!)

前方に注意を払っていたために後方が疎かになってしまった。

「前を向いてろ!死にたくなかったらな」

心臓がドキドキ音を立て始め、一瞬にして体が熱くなる。だが、平静を取り戻そうと、手元にフォースを引き寄せる。

そして、背後の気配を探り始めた。

ブラスターの銃口がオビⅡワンの背に向いているのがわかる。

(二人・・・)

渦巻く殺意がひしひしと感じられるなか、オビⅡワンは正確に人数を把握した。

(中の彼らに気づかれないうちに、後ろの二人を倒そう)

そう決め、呼吸を落ちつかせて機会を図る。

ところが

「どうした?何かあったのか?」

倉庫内から声が飛んだ。と同時に入口に駆け寄る足音が聞こえる。

万事急すだ。

ここで今、オビⅡワンがフォースを使って背後の二人を倒した所で、中にいる奴らの攻撃を防ぎきることができかわからない。

が、オビⅡワンは鼓動が激しく高鳴る中で、自分が妙に落ちついていることを感じ取っていた。

(うまくいけば、彼らから密売のことを聞けるかもしれない)

「ここじゃ、まずい。誰かに見られるかもしれねえからな」

「・・・入れ!!」

ドンツと荒々しくオビⅡワンは背中をこぼかれ、倉庫の中に転びそうになりつつ足を踏み入れた。天井の薄明るい光しか放たないライトによって、全体を見極めるのは難しかったが、フォースで探ると、積み重なる巨大な木箱に隠れこちらを伺っている者が数人いることがわかった。

「何だ、まだ子供じゃねえか」

「さあ言え。何故ここにいる？誰に頼まれた？」

オビィワンはか弱い子供を装うことに決めた。その方が相手も油断するからだ。

「頼まれたわけじゃないよ。通りかかったただけなんだ」

「ふん、本当か？」

さも信じられないといった風に、背後にいた男が鼻を鳴らす。こんな街では子供も素直には育ちにくいのだ。

「本当だよ。ねえ、母さんの所に返してよ」

「まだ、子供だ。返してやろうぜ」

上の方から声がする。

それに対し、耳障りな言語が憤懣たる響きをもって放たれた。

続いて背後の男が言葉を吐き出す。

「ホストグの言う通りだ。ザーロブ、お前は相変わらず甘ちゃんだぜ。子供といえども俺達の顔を見たからには容赦しない」

(やはり説得は無理か・・・仕方ないな)

しかし、オビィワンはむぎむぎと殺られるつもりは毛頭なかった。

(最初が肝心。きつと彼らは油断してる。最初の攻撃で何人倒せるか、それが重要だ。倒しそこなったら、残りはきつと慎重になるだろう)

高揚感が高まり体が熱くなる、かつ冷静を保ちつつ、オビィワンは背後にいた男——屈強そうな大男、どうやらこいつが、このボスらしい——が、オビィワンにブラスターの銃口を向けるのを静かに見守った。

きつと相手は観念したと思っっているに違いない。

ふと笑みが漏れそうになる所を押え、その一瞬を狙う。ブラスターの光線が放たれるその一瞬を。

発射音が暗闇に響き渡った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

店の外に出るまで気が抜けなかった。

いくら旅行者然としても、もしかしたら不信人物と思われたか

もしれない。

あの店主には、普通の旅行者だというイメージをフォースで植えつけてはおいたが。

と、独り沈思していたために、オビⅡワンがいないのにしばらく気づかなかった。

(どこに行ったのだ!?)

辺りを見渡す。道を埋め尽くした人ごみにより若きパダワンの影形も見えない。急ぎフォースで探る。微かにそれらしきフォースに触れる。

／／オビⅡワン?／／

試しに呼びかけてみる。返事はない。返答する余裕もないのかも
しれない。

クワイⅡガンは溜め息を大きくついた。

(あれほど、一人で歩き回るなど言ったのに)

不安が急速に膨らむ。早く探したほうが良さそうだ。嫌な予感が
する。

クワイⅡガンはフォースを感じた方向へ急いだ。

第2話 勇み足の代償

瞬間、一人の男が積み上げられた木箱の上から胸を押えたまま転がり落ち、1秒ほど遅れて相次いで三人もの影が地面に音を立てて倒れ込んだ。

苦痛に満ちたうめき声が広がる。

何が起きたかのかわからないと呆然とした表情を浮かべていたボスが、目を凝らし闇に浮かぶ青い棒状の美しき光を見とめた。

「ジェダイだ!!」こいつ。くそつ、やりやがったな」

怒号が巻き起こり、ますます殺意が濃くなる中、意に介せずオビワンは静かにライトセーバーを構えていた。

ブラスターの光線を打ち返し他の者に当て、返す刃で三人の腕を構えたブラスターごと切り落としたのだ。痛いだろうが仕方がない。こうでもしなければ自分の身が危ない。

しかし、今はフォースが彼と共にある。それだけで安心できた。

「やっちまえっ!!」

その声に弾かれたように、四方八方からブラスターの光線がオビワンの目がけて発射される。オビワンは打ち返し、または跳躍してかわした。

セーバーで撥ね返された光線が天井のライトを吹き飛ばし、辺りは一面の暗闇となった。微かに壊れた入口のドアから光が漏れている。

青く光るライトセーバーは、どこからでも良く見え格好の的になっていたが、オビワンは攻撃を避けつつ暗闇から飛来する光線の発射元を見極めた。フォースを研ぎ澄ませれば、漆黒の闇など何てことはない。

(あそことあそこにいる)

オビワンはライトセーバーのスイッチを切り、空に高く跳躍し宙返りして木箱の上に静かに着地する。

「どこだった!!奴はどこに行っただっ」

青い光を見失った奴らが右往左往しているのが感じられた。

フォースを自らに集め、暖かい気流が体中を見たすのを思い浮かべ

るとオビⅡワンは手をかざした。

倉庫の隅に転がっていた擦り切れた鎖が、目指す二人に蛇のように襲いかかる。

「うわあっ」

不意を衝かれた二人は悲鳴を上げたが、鎖は彼らに二重三重と巻きつき体の自由を奪った。その中の一人が『ザーロブ』と呼ばれた人物であることをフォースを伸ばして確認し、オビⅡワンはホツとした。

(彼は僕を助けようとしてくれた。殺したくないし、傷つけたくもない)

残りは・・・四人。

辺りの気配を探る。四人は床にいるらしい。ブラスタアの攻撃は止んでいる。彼らは完全に敵を見失ったのだろう。

オビⅡワンは闇を透かし下を覗き見た。呼吸が荒い。

(フォースを使いすぎたからかな?これじゃ、マスターに怒られてしまう)

無言で眉をひそめ自分を見ているクワイⅡガンの姿が思い浮かんだ。

(だめだ。体力をつけないと)

溜め息が零れる。しかし、その思いを振り切り、今に集中した。

(今、この戦いに集中するんだ。彼らがいる場所は大体わかっている。早く片づけないと。マスターが心配しているかもしれない)

オビⅡワンはとんぼを切って、膝を曲げ音もなく床に飛び降りた。

攻撃に転じようと立ち上がった瞬間

(あ・・・れ・・・?)

頭がクラツとし、足がよろめいた。思わず右手に力が入り、ライトセーバーのスイツチが入ってしまう。

突然現れた青い光に、

「いたぞっ、あそこだ!!」

再びブラスタアの光線が飛び交う。

(しまったっ)

急いでセーバーを構え応戦する。だが先ほどに比べ体に切れがな

い。

(何かおかしい・・・?)

フォースを使って原因を探ろうとしても、その暇も惜しいほどレーザーが向かってくる。しばし撥ね返し、突如、彼は宙に飛び上がった。一回転するとともに奴らの背後に降り立ち、セーバーを横薙ぎに一閃する。

「うわああ」

のた打ち回る二人の密売人を余所に、オビⅡワンはすかさず前方に走り出た。目にも止まらぬ速さで反対側にいた人物に切りかかる。

「ぐわっ」

何時の間にかオビⅡワンは一人だけ残った影の正面に立ち、彼の首元にライトセーバーの刃先を向けていた。

「無駄な抵抗はしない方がいいよ」

オビⅡワンはニツコリ笑って言った。

「痛い目にあいたくなかったら」

「・・・何が望みだ」

内から溢れくる恐怖をどうにか押え、ボスは声を絞り出した。

「あなた達のことを知りたいんだ」

「知って・・・どうするんだ？保安部隊に訴えるんだろう？」

ドスを利かせたつもりだったようだが、微妙に声が震えているのがわかる。

「それは、内容しただいだね」

オビⅡワンはニツコリ微笑む。

ボスは考え込んだ。どう無事にここから逃げようか思案しているのかもしれない。

この中で彼が一番事情に通じているだろう。

オビⅡワンはそう考え最後に残したのだ。

無言で見守るうちに、だんだん息苦しくなってきた。沈黙のプレッシャーに耐え切れなくなった訳ではない。何かがおかしい。

頭がふらふらする。体が火照ったように熱い。気を抜けば視界に霞がかかってくる。

(そういえば、昨日から熱があつたような気がする・・・)

続けざまに任務が続いた上に休息の時間もなかったからだろう。

でも、マスターには言えなかった。

ジエダイたるもの、任務が続いて当たり前なのだ。

こんなことでマスターを煩わせたくなかつたし、マスターに体力がないと呆れた顔をされるかもしれないと考えるだけで怖かつた。

(早く終わらせよう。このまま彼をマスターの元に連れて行くか、逃げられないようにしておけばいい)

その時、危険を感じた。纏っていたフォースの導きにより、意図せず右に体をかわす。

「つうつ」

いや、かわしたつもりだったが、思ったより体がついていかずブラスターの光線が左のふくらはぎをかすつたのだ。

熱い痛みが全身を走りぬける。その痛みに気を取られた瞬間、激しく振り下ろされた拳で右手を叩かれ、思わずライトセーバーを取り落とす。

目の前に銃口が突きつけられた。

「形勢逆転だな」

ボスは可笑しそうに安堵の響きを感じさせながら言う。

背後にも殺意を感じる。先ほど右腕をプラスチックごと切り落としたのに、何故その痛みには耐えられるんだ？

「驚いたろ」

背後の敵はゆっくりと体を起こした。

「俺の手は人工義手でね。機械の手を切り落とされても痛くも痒くもないのさ。やられたふりして機会を窺っていたんだ」

オビⅡワンは心を落ちつかせようと試みた。

(考えろ、何か活路があるはずだ)

後ろから近づく気配がする。

オビⅡワンはフォースをかき集めると、左のふくらはぎに送った。徐々に痛みが和らぐ。

「おい、逆に俺が聞く番だ。誰の命令でここに来た。何を探っている

？」

「さあ？」

肩をすくめ余裕の笑みを見せるオビⅡワン。

何故まだ余裕があるのか、何か俺達の知らない切り札を持っているんじゃないかと、ボスがたじろいだその時。

オビⅡワンの手が素早く動いた。

右手が振られると、引き寄せられた青い光にボスの持つブラスターの銃口が切り口鮮やかに切断され、同時に後ろから飛んできたブラスターの光線が、発射した本人に跳ね返された。

声もなく敵は倒れる。

ボスに対峙しようと、振り向いたオビⅡワンの右肩が突然焼けつく激痛に襲われた。

弾みで吹っ飛び、倒れ込む。手から離れたライトセーバーが彼方に転がった。

ボスがブラスターを構えたまま歩み寄ってくる。

「予備のブラスターだ。残念だったな」

オビⅡワンは左手で肩を必死に押さえながら、相手を見あげた。

光線が貫通した右肩からズキズキと痛みが激しい波のように押し寄せる。

歯を食いしばり痛みを堪えるが、その押さええる左手が震え始める。

「勝負あったな」

ブラスターの銃口はオビⅡワンの頭に狙いをつけた。

熱と肩の痛みにより、オビⅡワンは意識を保つのが難しくなってきた。

それでも敵を睨みつける。最後の力を振り絞って。

不意に、倉庫のドアがギツと音を立てた。

ハッとそちらに注意を走らせたボスは、一瞬後には、軽くなった右手を驚いて見つめる。

フォースによって飛ばされたブラスターが、乾いた音を立てパーマクリートの床を転がった。

「くそっ!!」

巨大な体躯のボスは、いきなりオビⅡワンにのしかかると、首に両手をかけた。

一瞬にして酸素の供給が止まる。

肺が酸素を求めカツと熱くなり、心臓がまるで頭にあるように激しい動悸が体全体を揺さぶる。

何とかして空気を吸い込もうと喘ぐが、無駄な努力と言わんばかりに、より一層ボスの手が首に食い込んだ。

周囲が暗くなり光景がぐるぐると渦を巻き始める。

(このまま・・・じゃ・・・殺される)

しかし、そう思う間も意識は遠のき、深い闇に包み込まれそうになる。

ついにボスの手を剥がそうともがいていたオビⅡワンの左手が、力なく床に落ちた。

瞼が閉じられた青白い顔を、ボスは覗きこむ。

(殺ったか?)

緊張を緩めたその瞬間、強烈な勢いで胸を押され、ボスは5m後方に飛ばされた。

音を立て地面に激突しつつ痛みに顔をしかめながら、何があったんだと訝しげに上体を起こすボスの視線が、

「ゴ、ゴホッ、ゴホゴホッ」

と激しく咳き込むオビⅡワンに驚異の眼差しを伴い注がれる。

彼には、消えゆく意識を繋ぎとめ渾身の力で集めたフォースが、彼を飛ばしたなんて信じられないに違いない。ましてやこんな重傷の少年が。

が、それは刹那のことで、ボスはすかさず立ちあがりオビⅡワンに向かった。彼の目は怒りで燃え上がっている。

しかし、彼の突進は途中で止まった。怒りから驚きに、そして、戸惑いの表情に変わり、ボスはゆっくりと横向きに床に転がった。

未だ激しく上体を上下に揺らし喘いでいたオビⅡワンだったが、体を休めながら時間をかけ這うようにボスに近づくと、その胸に突き刺さる青く輝くライトセーバーを引き抜いた。

(殺す・・・つもりはなかった・・・けど・・・)
時々意識を失いそうになりながら、座り込みしばし息を落ちつかせる。

(・・・マスターに・・・伝えないと)

立ちあがろうとするが、膝に力が入らない。右肩の痛みは耐え難いほどになっている。

オビⅡワンはスローモーションのように床に崩れ落ちた。

手足の先が徐々に冷たくなる。何も感じない、感じられない。

(このまま・・・僕は死ぬ・・・のかな・・・)

闇が思考を蝕む。意識が遠くなっていく。

突如、光が差し込みオビⅡワンの体を照らす。

倉庫の入り口のドアが開き、誰かが立っていた。

何か叫んでいるようだったが、水の中にいるみたいでオビⅡワンにはその内容は届かなかった。

(マスター・・・?)

近づいてくる足音を微かに感じながら、オビⅡワンの意識は闇に呑み込まれていった。

第3話 難航する搜索

突然彼方で、今まで微かに感じていたフォースが急激に激しい渦を巻き起こし、途端、消えた。

クワイⅡガンは思わず足を止める。

(オビⅡワンの身に何か?)

言い知れ得ぬ不安が鎌首を持ち上げ、クワイⅡガンの心臓を締めつける。

急いでコムリンクを鳴らす。オビⅡワンも持っているはずだ。いざという時のために。しかし、コムリンクは鳴り続けたままだった。

彼は緊張に固まった表情を見せつつ、先ほどまでフォースが感じられた場所に向うため、急ぎ足で歩き始めた。

どのくらい歩いたことだろう。

クワイⅡガンの右手前方、横道の辺りに人だかりができているのが見てとれた。

制服を着、銃を持った屈強な男が数人、野次馬を追い払うように立っている。

あれが街の人の言う保安部隊とやらだろう。この街の治安を守っている組織とのことだ。

その傍に数台の反重力車ホバーカーが浮いていて、呻き声を上げる怪我人が積みまれている。

迷わずそこに足を進める。

「何かあったのか?」

近くにいた人の良さそうな、一見ヒューマノイドに見える年配の女性に声をかける。女性は胡散臭そうにクワイⅡガンをじろじろ見やった。

クワイⅡガンはさりげなく手をかざし、彼女の心に穏やかにさせるフォースを送った。

途端に女性はしゃべりだす。誰かに話したくて仕方がなかったようだ。

「いやね、小耳に挟んだんだけど。ついさっき、あの奥の」

と、横道の奥に立っている古い倉庫を指さし

「あそこで乱闘騒ぎがあったらしいんだよ。この辺には、ああいったろくでもない奴らが多いんだけど、そいつらが何人かで少年を襲ったみたいなんだ。たった一人の少年を、さ」

(オビⅡワンか?)

クワイⅡガンは内心苛立ちを覚えた。早く先を聞きたい。

「ところが、その少年が滅法強くてさ。あつという間に皆やられてしまったらしいよ」

「それで、その少年は?」

焦りを奥底にしまい込み、何事もないかの風を装い、穏やかにクワイⅡガンは聞いた。

「わからないんだ。だって、保安部隊が乗り込んだ時には、もう影も形もなかったからね」

(無事だといいいのだが。しかし、どこに行つたのだ?)

「でもね、ぼく、見たんだ」

その女性の傍らにいた少年がいきなり話し始めた。少年がいたことすら気づかなかつた。

それほど、オビⅡワンのことで頭が一杯だつたらしい。

「見たこともない、わかい男の人がね、走つて来たんだ。男の子をかかえていたよ。その子、気を失つてたみたいだった。かおが青白かつたもん」

(何だと?)

クワイⅡガンはしやがみ込み、まだ幼き少年に目線を合わせた。

「どちらの方角に行つたか、わかるかな?」

「あっち」

男の子は指を指した。クワイⅡガンが歩いてきたのと反対の方角に走つて行つたらしい。

そちらの方角は街の郊外に続く道だ。宿屋も多くあり、仕入れた知識から考えると医療センター^{メディ}もあるはずだ。

クワイⅡガンは頭を戻して続ける。

「どんな男の人だったか、教えてくれるかな?」

「うーんとね。ぜんぜん知らない人だった。きつと、このまちな人じゃないよ」

「特徴とかは？」

「あんた、保安部隊のもんかい？」

ふと不安になったのだろう、女性が突っぱねるような言い方で遮った。おびえた目で見つめる。面倒に巻き込まれたくないのだろう。

「いや、違う。私はその少年を探しているのだ」

やや一呼吸置いて、そして、再びそれとわからぬよう手をかざす。

「保護者なのだ」

「あら、そう？それは大変だね」

「かつこいい人だったよ。せは、おじさんよりちよつと低いかな。けど、あんまりとくちようとかは、わかんないや」

クワイⅡガンは思わず深い溜め息をつきそうになり、急いで口を一文字に結んだ。これ以上は聞き出せそうにない。しかも、これ以上人目につきたくない。

「ありがとう」

という言葉を残し、足早にその場を去った。

もしかしたら、オビⅡワンが担ぎ込まれているかもしれない医療センターメデイに向けて。

☆☆☆☆☆☆☆☆

体が燃えるように熱かった。喉が水分を求めて喘いでいる。

オビⅡワンは重い脛をどうにか持ちあげた。

霞む視界の向こうに茶色の背景とポツと光る丸いものが見える。じつと必死に目を凝らしているうちに、それは天井とそこから吊り下がる灯りということがわかった。

（こっちは……どこだろう……？）

声にならない眩きを漏らす。

（僕は……どうしたんだ？）

何も考えられないぐらい重い思考を振り絞り、オビⅡワンは考えた。

（そうだ……あいつらと戦って……気を失ったんだ）

体が鉛のように重い。身じろぎさえすることができない。全身が火を吹いているようだ。汗がびっしりと服を湿らせている。

(水・・・水が・・・欲しい・・・)

ふと、左手からカチャカチャというリズムカルな音が聞こえるのに気づいた。

やもすれば眠りに落ちそうになる頭をどうにか左に向け、熱にうるむ瞳を向ける。

(マスター・・・?)

しかし、違った。

そこに居たのは、背中から判断するしかないが、若そうな、恐らくヒューマノイドだと思われる男だ。クワイガンよりは細身で髪も短めである。

彼はオビワンに背を向け、テーブルに乗ったキーパットのような物を両手で打っていた。

気配に気づいたのか、男は振り向いた。

「おつ、気がついたか?」

ニツコリ微笑みながら彼は向かってきた。

「大丈夫か? 坊主」

「・・・」

かすれる声をどうにか出し、オビワンは訊ねる。

「しばらく休んでいた方がいいぞ。熱が高いからな」

彼は傍を離れ、しばらくして、なみなみ水が入ったグラスを持ってきた。

体を起こそうとするが、全く力が入らない。男はそんなオビワンを助け、水を飲ませてくれた。

冷たい感覚が火照った喉を通りぬけ、とても気持ちがいい。

喉を鳴らしながら水を飲み干し、ホッと一息つくと、再び睡魔が襲ってきた。

力なくベットに沈み込むと、オビワンの意識は混濁し、気を失うように眠りについた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

医療センターにもオビⅡワンはいなかった。

続々と先ほどの乱闘で担ぎ込まれる男達を余所に、クワイⅡガンは同時期に医療センターに運び込まれた少年がいなかったか、受付のドロイドに確認を取る。

しかし、答えはN.O.だった。

(医療センターでもない。ならば、どこに?)

相変わらずオビⅡワンは、自分のフォースの呼びかけにも応えな
い。再びコムリンクを鳴らしたが、返事もない。

クワイⅡガンは再び焦る心を静めつつ、ただでさえ少ない情報を得るために歩き出した。

嫌な予感がする。

何度心の中でこの言葉を繰り返したことか。

オビⅡワンが行方不明になってから丸一日たった。何かトラブルに巻き込まれていなければいいが。

昨日一睡もできなかった。

オビⅡワンのフォースが感じられない今、自分から探し回るしかない。フォースが感じられないということは、オビⅡワンは気を失っているか、さもなければ……生きてはいないということだ。まさか、自分のフォースが届かない遠くに行っているという訳ではなからうが。

いや、その可能性もなくはない。何しろここは密売が公然と行われている街なのだから。子供一人連れ去られた所で誰も気にしないのだ。

見知らぬ若い男……

彼は気を失ったオビⅡワンを抱え、どこへ連れていったというのだ。

焦る心を静めつつ、クワイⅡガンは考えた。

落ちつけ、落ちつくんだ。ジェダイ・マスターらしくもない。

医療センターにいないとなれば、この街の者でない者が行く所、子供を連れ込んでも不思議がられない所と言えば、宿屋しかあるまい。

気を失った子供を連れているなら、そんなに遠くへも行けまい。リルパの宿屋を片っ端からあたってみるか。

もし、その若い男が宇宙船を持っていたら・・・そんな可能性は考えないことにした。

とりあえず、できることをやっていこう。多分、フォースが導いてくれるはずだ。

いつでも危険を察知できるようにフォースを纏いながら、クワイ||ガンは街を足早に歩く。微かなフォースの揺らめきさえもあれば、すぐ感じ取れるように。

数多い宿屋に向かいながら。

第4話 痛ましい状態

(・・・どれくらい時間が・・・経ったんだろう・・・)

意識が戻り始めると、オビⅡワンは最大限の努力をして、ようやく重い瞼をこじ開けた。熱で潤んだ瞳を周りに向ける。変わらず先ほどの場所だ。

やや快復しつつある思考は、マスターが心配しているかもしれない、早くマスターに連絡しないと、オビⅡワンを駆り立てる。

しかし、体が全く言うことをきかない。まるで鉄の布団が覆い被さっているように身動き一つままならない。

それでもフォースを何とかかき集め、状態を確認してみる。

熱が高い。それはわかつている。あと傷は・・・そうだ、左足と右肩にブラスターの光線を受けたんだ。

右肩は怖くて探れない。直視する勇氣も今は出なかった。ま、いかにせん、顔を動かすことも容易ではないのだが。先に左足にフォースを送る。布が巻いてある。あの人が手当てしてくれたらしい。左足の傷はちよつとした火傷程度で熱を帯びているが大丈夫だろう。

右肩は・・・オビⅡワンは恐る恐るフォースを伸ばした。途端、思わず声を漏らす。悲惨だった。左足と同じく布が巻いてあり、消毒や手当はされているが、光線が貫通した箇所は筋肉は筋が切断され、肉は赤く焼け爛れ、かなりの高熱を発している。フォースの導きか、骨は掠める程度にしか損傷していなかったことが不幸中の幸いだった。

体が麻痺しているせいか痛みは鈍くしか感じない。

しかし、気持ちを落ちつかせて探ったにも関わらず、ただでさえ青白い顔から更に血の気が失せ、気を失いかけた。慌てて意識をはつきりさせる。

(ちゃんとした治療を受けるまでは、当分右手は使えそうにない・・・)

「よお。気分はどうだい?」

突然、視界に彼の笑顔が飛び込んできた。

「・・・さつきよりは・・・大丈夫です・・・」

言葉を絞り出すように掠れた声で応える。喉は依然として水分を

求めている。

「あなたは・・・誰なんですか？どうして・・・僕を？」

「余りしゃべらない方がいいな。体力を消耗しちまう。俺の名はジェネヴァー。ルポライターみたいなものかな。いろいろな惑星に行つてその土地を調べ、ガイドブックを作っているんだ。お勧めの店や旅行者が決して足を踏み入れてはいけない場所なんかを載せているんだが、これがまた、売れるんだぜ」

そう言つて彼はニッコリ笑つた。オビⅡワンが真剣に聞いているのを見ると、彼は台所に向かいながら話を続けた。

「で、今回も同じようにこの星に来て、あちこち胡散臭い場所をぶらついてたらさ、たまたまあの倉庫の前を横切つた。音が聞こえて、好奇心旺盛な俺は中を覗き込んだんだ。そうして坊主を見つけたって訳さ」

水が入ったグラスを持ち、片目をつぶつてウインクする。人懐こそうな人だ。ルポライターという職業柄そのような性格になるのかもしれない。

「ほら、水だ」

「ありがとう・・・ございます」

また上体を起こすのを手伝ってもらいながら、水を流し込む。

体のすみずみまで冷たい感覚が広がっていくようで、生きているという喜びとともにしばらく余韻を味わつた。

「僕は・・・オビⅡワン・ケノービです。・・・でも、どうして・・・介抱・・・」

「しゃべらない方がいいって言つたばかりだぞ」

少し窘める顔をし、しかし、すぐに一転して微笑んだ。

「ま、困つた時はお互いさまさ。死にそんな奴を放っておく訳にはいかないだろう？・・・それに、死に別れた弟が丁度坊主と同じぐらいの歳だつたんだ」

悲しげな横顔を見せる。

オビⅡワンは慌てて言つた。

「す、すみません・・・」

急にニカツとした笑顔を見せて、彼は

「気にするなつて。いいつてことよ、過去のことだしな。それより、坊主、お前一人か？」

話を変えた。

(そうだ、マスター……)

「マスターが……僕の師匠……なんですけど」

呼吸を整え、再び口を開く

「彼と連絡を……取らないと……」

「本当だったらお前についてやりたいが、その師匠とやらを探した方が良さそうだな。どんな特徴をしている？」

頭が朦朧としてきた。瞼が重い。確かにしゃべりすぎたのかもしれない。

「おい、大丈夫か？」

「……すみません……」

閉じていた瞼を開き、オビⅡワンは辛うじて声を出した。

「背が高く……がっしりとして……茶色いローブを纏っています。……

髪は少し長め……で……青い眼で……」

「もういい、もういいよ。とりあえず名前を教えてください」

喘ぎつつ、オビⅡワンは必死に声を絞り出した。

「クワイⅡガン・ジン……」

意識を保つ気力もついえ、オビⅡワンの思考は闇に消えた。

(かなり酷い状態だ。この星の原始的な医療じゃ、大した治療は望めないかもしれないが、早めに医療センターメデイに連れていった方がいいな。……とりあえず、坊主の師匠を探そう)

彼は、腕の中で意識を失ったオビⅡワンを見つめる。端から見ても呼吸が荒いのがわかった。ベットに静かに横たえたと布団を掛ける。

オビⅡワンの顔を眺め、彼は一瞬寂しそうな顔をし、それから振り向くとそっと部屋を出ていった。

第5話 隠された思惑

「見かけない顔だな？」

「だから、先ほどから謝っているだろう？先を急いでいるのだ。通してくれないか」

溜め息を押し殺しつつ、軽く手を振りながら、焦げ茶色のローブを纏った背の高い人物が言った。

「あ？ああ、通してやるとも」

昼間から酔っ払っているのだろう、ろれつが回らなくなりそうな口調で、先ほどまで立ちほだかっていたならず者が急に了承の返事をした。

これだから泥酔者の言うことはわからない。

「おいっ、何を言っているんだ。こいつは、俺達にぶつかってきたんだぜっ。慰謝料ぐらいはもらわないと」

傍にいた同じく酔っ払いのならず者が、相棒の肩を掴み揺さぶる。

「そ、そうだな、俺、何、言ってるんだ？」

酔っ払いにぶつかるつもりはなかった。いや、逆にバーから出てきた酔っ払いが、ぶつかってきたのだ。

こちらが慰謝料をもらいたい そんな言葉を呟いた訳ではないが、そんな風に言いたげなローブの人物である。

だんだん人だかりが増えてきた。争いが起きると見るや、野次馬根性丸出しで集まってくる物好きもいるものである。

ローブの人物はふうと溜め息をつくとき、酔っ払いを無視して歩き始めた。

「おい、待て。待てって言うてるだろー！」

声に怒気が含まれ、数歩進んだ人物は止まった。

彼にブラスターが向けられている。

ローブを纏った男は、さりげなく手を振った。

突然風が巻き起こり、道に積もっていた砂を巻きあげる。

視界が一瞬悪くなり、しばしして風がおさまった時には、二人の泥酔者は風で飛ばされてきたと思われる店の看板の下敷きになって、の

びていた。

男の姿はもうなかった。

ローブを纏った影は歩を緩めるでもなく、ひたすら道を歩いている。

(やっと見つけた)

ジエネヴァーはニヤリとした。慌てて追いかけてようとすると、手で抱えていた、溢れんばかりに積み込まれた袋から瓶が零れ落ちた。

(やべっ)

瓶は、ローブを被った人物の足元に転がっていく。

歩みを止めそれを拾いあげた人物の元に、ジエネヴァーはにこやかに笑いながら駆け寄った。

「悪い、悪い。落としちゃまって」

細かく砕かれた薬草がガラスの瓶に詰まっている。

瓶を手渡されたジエネヴァーは

「ありがとう。さっきはすごかったな」

と笑いながら声をかけた。

男は微笑みを絶やさず言い返す。

「何のことかな?」

「あの、ならず者さ。いや、いいんだ。俺の気のせいかもしれない。あんた、クワイⅡガン・ジンだろ?」

「そうかもしれないが、そうでないかもしれない」

「だって、オビⅡワンが言ってた特徴にそっくりだ」

クワイⅡガンと呼ばれた人物は、ゆっくりとジエネヴァーを見た。

年齢は25、6標準歳ぐらいだろうか。髪の毛は焦げ茶色でくせ毛である。同じく焦げ茶の瞳を持つ、なかなかのハンサムだ。

その男は、そんな風に考えていたのかもしれない。ジエネヴァーを推し量るような表情で見つめている。

ややあつて口を開く。

「オビⅡワンを知っているのか?」

「ああ。今、俺の宿屋にいる。動けないんだ、怪我がひどくて。あんたを探してくれって頼まれたのさ」

「・・・案内してくれ」

「いいぜ」

ジエネヴァーはニヤリと笑うと、彼を引き連れ道を戻り始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

懐かしく暖かい、まるで父親とも思える接触が、オビⅡワンの目覚めを促した。

(マスター?)

体は少し動けるようにはなったが、飛び回るには程遠い。しかし、(マスターが僕を見つけてくれた。もうすぐここに来るだろう。だけど、こんな無様な姿を見せる訳にはいかない)

その嬉しいような、気恥ずかしいような一心が、オビⅡワンの体を無理矢理動かした。

布団を跳ね除けると、右肩を気遣いながら体の左側を下に向け、肘を起こす。ここまでは何とかできた。それから、体を動かしベットの角に伸ばした足をかけると、左手に全体重をかけ勢いをつけ上体を持ち上げた。

すぐに、恐ろしい程の目眩が襲い、頭が鈍器で殴られたようにグラツと揺れ、混沌に引き摺りこまれそうになる。

必死でベットの縁に手をかけ、倒れまいとふんばり、目眩が落ちつくのを待った。

ようやく視界がはつきりしてくる。ただ、ここから立ち上がり歩く勇氣はまだ出なかった。

その時、部屋のドアが大きく開け放たれ

「オビⅡワンっ!!」

との切羽詰まった声とともに、偉大で優しく包み込むようなフォースを放つクワイⅡガンの姿が現れた。その背後には、ジエネヴァーが、上体を起こしているオビⅡワンに驚いた表情を見せている。

「おい、坊主っ」

「・・・マスター！すみません、僕・・・」

オビⅡワンは慌てて何も考えず立ち上がった。左足に鈍痛が走ると同時に、血の気が失せ頭の中が真っ白になった。

気を失ったのは本当に一瞬だったようだ。

気がつくと、オビⅡワンはベットに腰かけ、その上クワイⅡガンが大きな両手で支えていてくれた。倒れないように。

「・・・大丈夫か？」

相変わらず穏やかで優しい声。心配そうに覗き込む青い澄んだ瞳。

逆にオビⅡワンは、マスターの言いつけに背きあの場を離れたことに対し、すまないという気持ちでいっぱいになる。

「・・・はい、大丈夫です」

恐縮し、消え入りそうな声で辛うじて応えた。

「いや、まだ無理だろう。しばらく私が治療してやろう」

「いいえ、大丈夫です。もう帰れます」

クワイⅡガンは思わず微笑む。

(相変わらず頑固だな)

「坊主、お前はついさつきまで昏睡状態だったんだぞ？あまり無理しない方がいいと思うな」

ジェネヴァーに言われ、ふと先ほどまでの様子を思い出すと、張り詰めていた気持ちが緩み、軽い目眩に襲われる。

確かにまだ歩ける状態ではないことは、自分がよくわかっていた。治療しないままここを離れても、マスターに迷惑かけるだけだということも。

でも、気持ちには焦っていた。任務はどうなったのだろうか？失敗してクワイⅡガンに対する評議会の評価を下げたくない・・・

「お前が心配することは何もない。いや、逆にお前のおかげで上手くいくだろう」

驚いて顔を上げるオビⅡワン。

クワイⅡガンは口の端に笑みを浮かべる。

／／後で話してやろう／／

そんなフォースが感じられた。

「・・・すみません・・・」

オビⅡワンは心底から謝ると、クワイⅡガンの治療に身を委ねた。

「そうだ、クワイⅡガン。ちよつといいか？」

台所で何やらぐそぐそやっていた、ジエネヴァーが声をかける。「何だ？」

「この坊主のために良さそうな薬を買ったんだが、店主に勧められるまま買っちゃって、どれがどれやらさっぱりわからん。あんた見て、欲しい物があつたら持つて行くかい？」

「そうだな。有り難くいただくとしよう」

クワイⅡガンは微笑み、しかし、さりげなくジエネヴァーの心を探ってみる。

彼の心の中は親切心で満ちていた。というか、オビⅡワンへの労わりの気持ちで溢れていた。

(何故だろう?)

訝しげに思う間に、クワイⅡガンは台所に立っていた。

目の前には、雑種多々な薬草が瓶に詰められ、うずたかく積み重ねられている。原始的な惑星ゆえに、これらの薬草での治療が一般的なのだ。

(これは、頭痛の薬。この草は多分、出血止めの薬だな)

クワイⅡガンが薬を選んでいる間、ジエネヴァーは水が入ったグラスをトレイに乗せ、オビⅡワンの元へ運んでくれた。

「水だ。飲みな」

ニツコリ笑いかける

「ありがとうございます」

オビⅡワンはトレイからグラスを取ると、うまそうに喉を鳴らして飲み始めた。

「しかし、すまなかつたな」

薬を選びつつクワイⅡガンが言う。

「オビⅡワンがかなりお世話になったようだ」

ジエネヴァーはクワイⅡガンに顔を向けた。

「何てことないさ。この坊主は俺の死んだ弟に、どことなく面影が似てるんだ。それに俺はあんたにも会いたかつたんだ」

オビⅡワンは、グラスをトレイに戻そうとして、息を呑んだ。

「弟を殺したあんたにさ、クワイⅡガン・ジン」

トレイの下から、ブラスタアの銃口がオビⅡワンに向けられていた

|

第6話 予想外の展開

静けさが支配する部屋の中に、トレイが床に転がる音だけが大きく響く。

「ようやく、あんたに会えたよ。長かったな。おっと、坊主、おとなしくしてな。動くとき怪我するぜ」

銃口は確かにオビⅡワンに向いている。

この至近距離では、フォースを使って外すこともできない。何よりフォースをちゃんと使いこなせるかもわからない。今の体では。

それはクワイⅡガンも同じだ。ジェダイ・マスターとはいえ、この距離の光線を例えフォースを使つたとしても、跳ね返すことができるかわからない。

クワイⅡガンは押し黙つたまま離れた台所に立っている。もしクワイⅡガンが何か行動を起こせば、オビⅡワンの命はないだろう。

偉大なるジェダイ・マスターは沈黙を纏い、両手を組み袖の中に入っていた。その顔には憂いの表情と悲しみの表情が入り交じっている。

ややあつて、オビⅡワンが口を開いた。

「マスターがあなたの弟を殺したって？そんなの嘘だ」

オビⅡワンはジェネヴァアの気を逸らし、隙を狙っていた。話しかけていれば、何か突破口が開くかもしれない。

ただ、自分にこんなに優しくしてくれたジェネヴァアの、クワイⅡガンに対する憎悪が信じられないのかもしれない。

「嘘じゃねえ」

穏やかに言い含めるように話しかけるその言葉に、逆に真実が感じられる。

「弟は、まだあの頃14標準歳だった。俺達はその時チャラムという惑星に住んでいた。ある日突然争いが起こつたんだ。弟はその巻き添えをくらつて死んだ。殺したのはジェダイだった」

(ザナトスだ)

クワイⅡガンは苦い気持ちで思った。

ザナトス —— それは、オビⅡワンの前に彼の弟子だったジェダイ。ダークサイドに堕ちてしまった若き青年の名。

惑星チャラムの政府はその当時、揺れ動いていた。

次期政権を巡って保守派と革新派が争っていたのだ。その争いが民間に及ぶや、ジェダイ評議会はクワイⅡガンとその弟子ザナトスに、争いの調停を命じた。

チャラムに着いた時は、時既に遅く、保守派のリーダーが革新派に監禁され、革新派が政権を握ろうとしていた。

クワイⅡガンとザナトスは二手に分かれ保守派のリーダーを救いにいったが、その際、軽はずみな行動を起こしたザナトスと革新派の間で激しい戦闘が起こり、何人かの民間人が犠牲となった。動かぬ少年にすぎり付きながら慟哭している青年がいたが・・・それが、彼か。あの時、ザナトスが平然とした顔つきで、それを眺めていたのを覚えてる。

苦虫を噛み潰したような顔をし、それから、クワイⅡガンは沈痛な面持ちでジェネヴァーを見やった。

「あの子が君の弟だったのか」

「そうだ。幼い頃両親を亡くした俺達にとっては、かけがいのない肉親だったんだ。それをお前が殺した」

「それは、私ではない —— いや、私だ」

弟子の不始末は自分がつけねばならない。クワイⅡガンは溜め息をついた。

オビⅡワンがショックを受けた表情で、自分を見つめている。

訳を話せばオビⅡワンだったら理解してくれるかもしれない。が、今はそんな時間もなかった。

悲しみに顔をゆがめながら、オビⅡワンが重たい口を開いた。

「あなたは、僕がマスターの弟子だって知っていたんですか？」

「もちろん、全て調査済みさ。スパイスの密売を通じて情報網は確保していたからな」

（では、彼が密売のボス？本当の？）

「ど、どうして・・・あの時、僕を・・・殺さなかった・・・んですか

？」

急に舌がもつれる。驚きのあまり頭がうまく働かないのか？

(いや、違う。何かが・・・おかしい・・・)

「オビⅡワン？」

オビⅡワンはベットのの上に倒れ伏した。こんな緊急事態だということに。

何故か急激に睡魔が押し寄せる。

(まさか・・・?)

「お前は傷つけたくないんだ、オビⅡワン」

ジェネヴァーは初めてオビⅡワンと呼んだ。

「しばらく眠っていてくれ」

(あの水に催眠作用がある薬が・・・?もしかして今まで飲んだ水にも全部?・・・僕を・・・ここから出さないために・・・?)

(ダメだ、寝ちゃだめだ。マスターが殺されてしまうかもしれない。でも、ジェネヴァーも殺すわけにはいかない。彼はきつと良い人だ。僕を助けてくれた・・・)

オビⅡワンはやもすると陥りそうになる眠気を振り払い、右肩に左手を当てた。

先ほど軽くだが、クワイⅡガンが治癒してくれた箇所。まだ全く完治していない損傷が酷い傷。オビⅡワンは深く息を吸うと、その右肩の傷に爪を突き立てた。

「ぐっ」

激痛の余りしばらく声が出ない。しかし、眠気は少し納まった。

「オビⅡワン!？」

「何をしている?坊主っ」

口々に叫ぶ声が聞こえたが、それに対する余裕もなかった。激痛が治まるのを待つが、簡単に治まってもらっても困るのだ。

ようやく、伏せていた顔を上げると、絞り出すように声を出した。「マスターを・・・殺させはしません・・・そして、あなたも。ジェネヴァー、お願いです・・・。過去のごときは水に流してくれませんか?」「無理だっ。この日を待ちわびて生きてきたというのに。たったこの

時、この瞬間だけを夢見て」

ジエネヴァーも吐き捨てるように言葉を出す。

クワイⅡガンは静かに言った。

「もし私を倒したとしても、オビⅡワンはどうなる？ 無事に帰してくれるのか？」

「!?」

驚愕の表情を見せるオビⅡワンに、ブラスターの銃口を向けたままジエネヴァーは答えた。

「坊主は困だったんだ。クワイⅡガン、あんたをおびき寄せるためのだから、あんたを殺したら用はない」

（それだけじゃない。．．．それだけじゃないはず）

「さて、おしやべりは終わりだ」

ブラスターの銃口がゆっくりクワイⅡガンに向いた。

「まだ死ぬ訳にはいかない。私にはまだ、私を必要としてくれている者がいる」

微かに笑みさえ浮かべクワイⅡガンは言う。

その言葉を聞いて、オビⅡワンはベッドに横たわったまま嬉しさに顔をほころばせた。

（僕には、マスターが必要なんだ。．．何があっても、どうあっても。それをマスターがわかっている）

お互いに相手を大切に想う心が通じ合い、師弟の間に見えない、しかし固い絆が結ばれた。それは喜ばしい事実だった。

その時。

オビⅡワンはもう自分のことは気にならなかった。クワイⅡガンさえ助かれば良かった。

（マスターはこれからの世界に必要な人だ。僕の命に換えても）

渾身の力を振り絞って、気を抜けば塞がりそうな瞼を押し留めてオビⅡワンは体を起こした。

クワイⅡガンがフォースを通じて言葉を伝え、その動きを止めようとしているが、フォースを纏う力もないオビⅡワンには届かない。

彼はもたれかかるようにジエネヴァーの体に抱きついた。

「おい、止めろっ!!死にたいのかっ!!」

不意を突かれたジェネヴァーは、体を捻りオビⅡワンを振り払おうとする。

「・・・マスターは・・・彼は僕にとって、父親の・・・ような・・・だから」

ろれつが回らなくなりそうな言葉をどうかに紡ぎ出し、オビⅡワンは続けた。

「だから、・・・彼を殺させる訳にはいかない」

「!?くそっ、ちくしょおっ!!」

ジェネヴァーの遣りきれない怒りを込めた言葉が部屋にこだまし、その反動でオビⅡワンはベットに叩きつけられた。

その激しい衝撃に世界が一瞬にして暗くなった。

「オビⅡワンっ!!」

クワイⅡガンが素早く近づこうとする気配を、うっすら感じる。

起きあがる余力もなかった。

ビュンツと光線が発射される音とともに、何か重いものがバタツと床に倒れる音が微かに聞こえたが、あとはもう何もかもわからなくなった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ゴオオオ・・・ン

荘厳な鐘が鳴り響く、その低い音が耳朵を揺さぶる。

オビⅡワンはハツと目を覚ました。

再び鐘が何かを告げるように鳴り、日が落ちたすぐ後の薄青い霞がこもる静寂な部屋にこだまする。

この鐘の音は聞き覚えがある。

コルサントのジェダイ聖堂にいた時から、時々風に流れてきた鐘の音に似ている。葬列の調べ と。

オビⅡワンはベットから体を起こすと、素早く辺りを見まわした。

(……は……)

部屋には、扉のない入口越しに通路から明かりが差し、行き交う人々の囁き声が微かに聞こえる。

「葬儀が執り行われ・・・」

「まさか、こんなことに・・・」

「偉大なるジェダイ・マスターが・・・」

(マスター・・・?)

一瞬の戸惑いとともに共に記憶が溢れ出るように蘇った。

(僕は・・・。ジェネヴァーが・・・。そうだ、マスター。あの後どうなったんだっ?)

気を失うまでの記憶を取り戻すと、オビⅡワンは立ちあがった。

居たたまれない気持ちに彼を突き動かす。

(葬儀って・・・まさか。まさか? まさか!!)

なりふり構わずオビⅡワンは駆け出した。

喪服を着た人々が歩いていく、その方向に。ゆっくりと歩いている彼らをもどかしく思いながら、掻き分けつつ。

長く伸びた通路の先に、小さなこじんまりとした部屋が見えてくる。ガラスが嵌め込まれていないその部屋の窓から、赤い揺れる光が幾重にも延び、通路や天空を照らしている。

オビⅡワンは部屋に辿り着き、

言葉を失った。

炬火がたかれ、今まさに火葬されんばかりに石の寝台に横たわっている人影。

がっしりとした体躯。どこか野生味を帯びた、しかし繊細な、まるで寝ているように穏やかな顔。強靱な意志を思わせる顎。金髪の髪。

両眼から涙がぼろぼろ零れてくる。止めどめもなく。

(こんなのってない。こんなのって・・・)

オビⅡワンは人々を掻き分け、前に進み出ようとした。

火葬される前の今ならまだ、生き返りそうな気がして。

しかし、もうその青い澄んだ瞳はオビⅡワンを見ることはない。その穏やかで優しい声が、オビⅡワンに掛けられることもない。父親のように暖かく包んでくれるフォースもない。

「・・・嘘だ。嘘だっ。嘘だーっ!!」

第7話 連鎖する記憶

「・・・ワン？オビワンっ!？」

自分を呼ぶ声に促され、目を開けた。

「大丈夫か？うなされていたようだが」

涙で潤んだ視界に見えるその姿 ——

「マスター・・・？」

「何だ。怖い夢でも見たのか？」

クワイガンは口の端に笑みをのせ、言う。

オビワンは涙を湛え無言で彼を見つめると、次の瞬間、マスターに抱きついた。

「お、おいつ。オビワン!？」

しかし、彼は声も漏らさず、クワイガンの大きな胸に顔を埋め、肩を震わせている。時々微かに嗚咽が混じるのを、クワイガンは聞いた。

痛みを伴うほど強い力で自分にしがみついている少年の頭を優しく撫でる。

あれほどの危険に遭ったのだ。ほっとして気が緩んだのかもしれない

「もう、大丈夫だ。心配することはない」

少年は泣きじやくりながら、激しく首を横に振った。

「・・・違う・・・違うん、です」

仕方ないなといった風にクワイガンは苦笑し、心落ち着かせるフォースを静かにオビワンに送った。ある時は峻嶺な山を思わせる険しさを示し、ある時は大地を照らす光のような全てを包含するフォースを。

「落ちついたか？」

静かに放たれた言葉に促され、オビワンは体を離した。

「・・・すみません」

落ちつきは取り戻したものの、真っ直ぐクワイガンを見ようとはしない。目を真っ赤に泣き腫らし、ベットに腰かけたまま下を向いて

黙っている。その両手はチュニツクの裾をしつかり握り締めていた。クワイⅡガンは溜め息をつき、

「ま、元気になったなら何よりだ。3日3晩意識を失っていたのだからな。全くお前は無茶をする」

窘めつつも呆れ、しかし、心なしか嬉しそうな顔をする。

その言葉に、ようやくオビⅡワンは記憶の糸を手繰り始めた。

(そうだ、傷っ！)

慌てて左足を見、右肩に手をあてる。かなり良くなっている。クワイⅡガンが癒してくれたに違いない。それから高い熱もない。

「オビⅡワン。余り無理をするものじゃない。体調が優れない時は、前もって言うておくものだ」

全てお見通しだったらしい。顔が真っ赤になる。

「すみません……。これから、気をつけます」

心から殊勝に反省する。自分が原因でクワイⅡガンを危ない目に合わせたかと思うと、素直に謝る心も生じるものだ。

「……任務はどうなったんですか?」

人心地つくと、オビⅡワンは訊ねた。失敗だ そんな言葉が返ってくるのを半ば恐れながら。

「無事片づいた。全部とは言えんが、めぼしい密売集団を一毛打尽にしたのだ。残りは今後リルパの政府が、私が掴んだ情報により調査を進めていくだろう。オビⅡワン、お前のおかげだ」

「僕の?」

思わぬ言葉を聞き、オビⅡワンは驚いて顔を上げた。腫れた赤い眼が痛々しいが、好奇心を取り戻しつつあるようだ。

「そうだ、オビⅡワン。お前が倉庫で倒した密売人を探っていくと、ほとんどの密売集団に辿りついたのだからな」

「そうなんですか……。でも、マスターはどうやって情報を得たのですか?」

聞かれてクワイⅡガンは、口の端を笑みで歪ませ、いたずらっ子のように瞳を輝かせた。

「私がなぜ宝石店を探していたか、知っているか?」

オビⅡワンはかぶりを振る。

「首都リルパは商売の盛んな都市だが、特に宝石の輸出は類を見ないほど頻繁に行われている。しかも、その宝石の輸出先と、やはりスパイスの密売が盛んに行われていると噂される星々のほとんどが、同システム星系にあると聞けば、何かあると思うだろう?」

「宝石……宝石箱ですか?」

「そうだ。宝石箱に入っているクッション、入国管理局でもセンサーに引っかからないような加工が施されていたのだが、あの下にスパイスを隠して売っていたのだ。グリッターステイムぐらいの貴重な物になれば、少量で莫大な利益が出るからな。ま、簡単な答えだ。そこで、スパイスを欲しがっているとかわせて、法外な値段で宝石を売買している店を探していたのだ」

オビⅡワンは道理でといった風に頷き、納得した。

思い出したようにクワイⅡガンは弟子に、懐から取り出したライトセーバーとコムリンクを渡す。

「宿屋の戸棚の中にあつた。ジェネヴァーがしまっておいたのだろう」

両手で受け取りながらオビⅡワンはおずおずと聞いた。

「……彼はどうなりました?」

クワイⅡガンは無言で首を横に振った。

「彼は……自殺した」

「えっ!?!」

走馬灯のように彼の表情、仕種が蘇る。

(自殺なんて……何故……)

「彼はどうしても私を殺すことができなかつたようだ。いや、本当は殺す気だつたのだろうが、オビⅡワン、お前が言った言葉により、彼は彼みたいな不幸な者がこれ以上生まれることを望まなかつたのだろう、自ら命を絶つたのだ」

(そうか……やっぱり彼は良い人だつたんだ……)

再び涙が出そうになつて慌てて堪える。

「僕を殺すこともできたのに……」

優しくクワイⅡガンは微笑む。

「たまたま近くの惑星にいた彼は、私達がここに来るとの情報を得た。そして、あの倉庫に誘い込んで殺そうと計画していた。ところが、オビⅡワン、お前しかその場に来なかった。だから、彼は計画を変更し、お前を囷として使うことにしたのだ。しかし、情が移ったのだろう。お前は死んだ弟にどことなく似ていたし、まして彼の兄をも殺さなかつた。肉親を大切にするジェネヴァーにとってみれば、敵と情の板挟みになつただろうな」

「兄……？つて、もしかして、ザーロブ？」

クワイⅡガンは静かに肯いた。

「あの倉庫に誘い込むことは、密売元締めの子エネヴァーにとって諸刃の剣だったが、そうまでして彼は私を殺したかつたのだろう」

先ほどの夢がありありと思い出された。一歩間違えれば本当になつていたかもしれないあの夢。

余りにもリアル過ぎて本当だとしか思えなかつたあの夢。

「どうした？」

思いつめた顔をしていたのだろう、クワイⅡガンが声をかけた。

「……嫌な夢を見ました。マスターが、マスターが……」

その先は言葉にならなかつた。否、言葉にしてしまえば本当になりそうな気がしたからかもしれない。

「私が死ぬ夢か？」

オビⅡワンは驚愕して、クワイⅡガンを見つめた。しかし、師匠の顔は凧いだ海のように静けさを湛えている。

「そうだな、いつかは死ぬかもしれない」

「そんなこと言わないでください。マスター……」

「若きパダワンよ」

微笑みすら見せてクワイⅡガンは言った。

「死ぬということはフォースと一つになるということだ。何も恐れることはない。それに、お前が一人前になるまでは死なん。心配だからな」

「本当ですね。約束ですよ」

「ああ。約束しよう」

クワイⅡガンはニツコリと笑った――

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「・・・Ⅱワン？オビⅡワンっ!？」

自分を呼ぶ声に促され、目を開けた。

「大丈夫ですか？かなりお疲れのようですが」

白く霞む視界をはっきりさせると、アミダラ女王の侍女の姿になった。

「ああ、大丈夫だ」

軽く頭を振る。

「間もなく始まります。どうぞ、お越しくくださいませ」

侍女はお辞儀をし、去っていった。

侍女の姿が扉のない入口から通路へと消えると、オビⅡワンは溜め息をついた。

どうやら、うたた寝をしていたらしい。一晩眠らずに彼の傍で泣き明かしていたのだ。疲れが出たのだろう。

夢を見た。

マスターが死なないと誓った夢を。

その前はどんな夢だったか覚えていないが、そこだけは妙にはつきり覚えている。

そう、彼は確かに私にそう誓った。10年以上も前に。惑星アルカスの首都リルパでの任務の時に。

だが・・・

オビⅡワンは頭を振った。涙は出尽くしたと思ったのに、何故また視界が歪むのだろう。何故まだ頬を熱いものが落ちるのだろう。

ゴオオオ・・・ン

突如荘厳な鐘が鳴り響く、その低い音が耳朶を揺さぶる。

再び鐘が何かを告げるように鳴り、日が落ちたすぐ後の薄青い霞がこもる静寂な部屋にこだまする。

この鐘の音は聞き覚えがある。

コルサントのジェダイ聖堂にいた時から、時々風に流れてきた鐘の

音に似ている。葬列の調べと。

通路から明かりが差し、行き交う人々の囁き声が微かに聞こえる。

「葬儀が執り行われ・・・」

「まさか、こんなことに・・・」

「偉大なるジエダイ・マスターが・・・」

オビⅡワンはローブを羽織ると、沈痛な面持ちで部屋を離れ歩を進めていく。

喪服を着た人々が歩いていく、その方向に。

長く伸びた通路の先に、小さなこじんまりとした部屋が見えてくる。ガラスが嵌め込まれていないその部屋の窓から、赤い揺れる光が幾重にも延び、通路や天空を照らしている。

オビⅡワンは部屋に辿り着き、

無言でその光景を眺めた。

炬火がたかれ、今まさに火葬されんばかりに石の寝台に横たわっている人影。

がっしりとした体躯。どこか野生味を帯びた、しかし繊細な、まるで寝ているように穏やかな顔。強靱な意志を思わせる顎。金髪の髪。アナキン・スカイウォーカーが悲しい表情を留めたまま、近寄ってくる。

オビⅡワンは彼を傍に引き寄せると、静かに寝台の横でクワイⅡガンを見守った。

しかし、もうその青い澄んだ瞳はオビⅡワンを見ることはない。

その穏やかで優しい声が、オビⅡワンに掛けられることもない。

父親のように暖かく包んでくれるフォースもない。

(マスター・・・あなたが死んだなんて、まだ信じられません・・・)
今にも炬火が点され、彼を覆い隠そうとする。

ふと少年の声が聞こえた気がした。

・・・嘘だ。嘘だつ。嘘だー！

それは少年の声だったのか、それとも内なる自分の声だったのか・・・

炬火がオビⅡワンの顔を照らす。必死に涙を堪える。

もう、泣くことは許されない。私はジェダイ・ナイトなのだ。

アナキン、そうこの少年を導き、立派なジェダイに育てあげろ。それが、私の使命であり、クワイ・ガンの遺言なのだ。

「アナキン、君は立派なジェダイになる。約束しよう」

炎から立ち上る煙は、それ自体意思があるかのように澄み切った天空目指して伸びていった――

End

(2000年頃執筆)

2. 夢見の森 — Y u m e m i n o M o r i — (キヤツシーク編)

第1話 緑豊かな惑星

宇宙船は、反重力装置リバルサーリフトを起動させ静かに上昇すると、一転して加速し宇宙港を飛び立った。

見る見るうちに地表は小さくなり箱庭のようになる。

そして、ついに惑星全体を視界に捉えるまでになった。

惑星は薄い茶色がかつた碧色の輝く宝石のように光りを放ち、白い雲の渦が回りを取りまき覆っている。

あの下には、何百万、何千万というヒューマノイド及びエイリアンを含む生き物が、それぞれの生活を送り人生を過ごしているのだ。

しばし飛ぶと、惑星は光の点と消えその痕跡は跡形もなくなり、ただそこには無数の星々と暗闇が存在するのみ。

ひたすら黒い、何もかも吸い込んでしまいそうな空間が続いているのだ。

そんな中では、自分は何てちっぽけな存在なのだろう。

ちっぽけで・・・無力で・・・

「どうした？ 傷が痛むのか？」

ビクツと物思いから覚め、頬杖をついていた顔を窓から離し急ぎ振りむくと、通信室から出てきた彼のマスターが心配そうな顔で見つめている。

「いいえ、違います。大丈夫です。それより」

と、オビワン・ケノービは逆に問いかけた。

「コルサントと連絡は取れましたか？」

「ああ」

ジェダイ・マスターであるクワイガン・ジンは若きパダワンの横に腰を下ろした。

5、6人乗り用のこの宇宙船は、それでも多くの人と荷物を運べるようにシンプル且つこじんまりと造られてる。クワイガンにとつ

てみれば、彼の今座っているこの席は小さすぎるかもしれない。だが、そんなことは気にかけずクワイⅡガンは言葉を継いだ。

「次の目的地は、キャツシークだ」

「キャツシークと言うと、ウーキー族の惑星ですか？」

「そうだ」

クワイⅡガンは静かに頷いた。

「キャツシークはここからそれほど遠くはない。マスター・ヨードが我々にそこに向かうよう、指示したのだ。詳しいことは着いてから説明する」

そう言うのと、クワイⅡガンは目を閉じた。

(いろいろあって、マスターも疲れているのかもしれない)

オビⅡワンは窓に顔を戻す。

ウーキー族というのは実際見たことはないが、聞いたことはある。巨大な体を持ち体毛は長く、腕力は強く犬歯は鋭い。ウーキーを怒らせるものではないと。

ウーキー語がわからないオビⅡワンは、次の任務がどんなものになるか正直不安だった。ただ困難なものになるかもしれないという漠然たる思いはあった。

暗闇が続べる世界が広がっている中、オビⅡワンの脳裏には先ほど離れたばかりの惑星アルカスの姿だけが焼きついていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

1 標準時間ほどハイパースペースを走行すると、宇宙船は通常空間に出た。

と、眼下に惑星キャツシークの姿が広がる。

「うわあ」

オビⅡワンは思わず歓声を上げ、窓に顔をくっつけるように覗き込んだ。

見渡す限り緑色の波。この高さからはつきりわかるほどの巨木の群生。

そこは瑞々しく生命力あふれる惑星だった。

「すごいですね、マスター！こんなに大きな木がいっぱい生えてい

て・・・本当にすごいですっ

閉じていた目を開けると、クワイⅡガンは微笑んだ。

「そうか、オビⅡワンは、このように自然が多い惑星には行ったことはなかったか」

「ここまですごい自然は初めてです」

余程感激したのだろう、オビⅡワンは顔を輝かせ、しきりにすごいを連発している。

そんな様子を見て、オビⅡワンもまだまだ子供だなど思うとともに、そんな無邪気な表情を久しぶりに見たような気がして、クワイⅡガンは思わず頬が緩むのを感じた。

宇宙船は木々の間を縫うように飛んでいく。

不意に森が開けると、鮮やかな緑に囲まれた巨大なプラットフォーム、そして、その上に立つ潰れた卵のような形をした街が見えてきた。

「あれは、ルーククロロの街だ」

クワイⅡガンがポツリと言った。

「ルーククロロ、ですか？」

「あの街にはわかりやすいウーキー語が話せるウーキーがいる。その方が何かと都合が良いからな」

オビⅡワンは顔を前に向けた。彼の興味はまだこの惑星に魅き寄せられている。

そうこうしているうちに宇宙船はプラットフォームに着陸し、オビⅡワンは未知の世界へ一步を踏み出した。

前を歩くクワイⅡガンに大人しく付いていくものの、視線は留まらずあちこちをさまざましている。

ルーククロロの街は、縦横に交差する巨木の枝で造られた台の上の街で、幅1kmぐらいの大きさだ。二、三階建ての家もところどころ見うけられる、自然とうまく調和した街であった。

クワイⅡガンの行く手には何人かの人影があった。

どうやら、ジェダイ・マスターとその若きパダワンがこの街に着くことは、先刻通知済みだったらしい。

オビⅡワンは初めてウーキー族を見た。

一見すると大きな縫いぐるみのようなものである。焦茶色の長い体毛、つぶらな黒い瞳。長い逞しい腕。二本足で立つその身長は、ゆうにクワイⅡガンの背丈を越えている。

そのウーキーの群れから一人のウーキーが前に進み出た。

クワイⅡガンが優雅にお辞儀をするのを見て、慌ててオビⅡワンもお辞儀をする。

そのウーキーは牙を剥き出し言った。

「ようこそお出で下さいました、ジェダイ・マスター。そして若きジェダイ。私はラルラチーン、ラルラとお呼びください。お疲れでしょう、どうぞ、家を用意しました。そちらで存分とくつろいでください」
ウーキー語がわかるクワイⅡガンは躊躇なく標準語ベージックで答えた。そのウーキーが標準語ベージックがわかると疑いもしない様子で。

「お心遣い痛み入ります。私の名はクワイⅡガン・ジン、そしてこちらは弟子のオビⅡワン・ケノービ。しばらくの間、よろしくお願いします」

オビⅡワンにはウーキーが何を言っているのかさっぱりわからなかったが、紹介しあっているというのは何となく理解できた。

ウーキーに微笑む。しかし、顔は少し引きつっている。

(外見で判断しちゃいけない)

オビⅡワンはフォースを伸ばし、このウーキーの心を探ってみた。

そこには穏やかな海のような静けさが広がっている。

ウーキーという種族は、実は外見に似合わず優しく繊細な心を持っているのかもしれない。しかし一度怒れば、そうとも言えないだろうが。

先ほどよりもずっと落ちついてクワイⅡガンの傍で佇む。

クワイⅡガンがちらつと彼の方を振り向き、眉を上げ苦笑するのが見えた。

【それから】

と前に出ていたウーキーは後ろを見て、控えていたもう一人のウーキーを手招きして呼んだ。

【こちらが、フレールです。よろしくお願いします】

「(ちら)そ」

とクワイ||ガンは微笑みオビ||ワンを前に呼んだ。

「オビ||ワン、彼がラルラことラルラチーン、そして彼がフレールだ」

「初めまして、オビ||ワン・ケノービです」

ベースック標準語が通じるかわからなかったが、とりあえず挨拶を送る。

ラルラというウーキーはわかったという風に声を出し、フレールという名のウーキーは僅か一歩でオビ||ワンの元に近づくと、いきなり彼をぎゅっと抱き締めた。

「わっ」

突然のことでかなり慌てふためく。

そんなことはお構いなしにフレールは抱き締めたまま、自分の腹ぐらいの背丈までしかないオビ||ワンの頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

乱暴に頭を撫でられながら、いつも自分が気を張った挨拶をしていたのを思い出し、こんな親しみのある挨拶もいかなとオビ||ワンは恥かしいようなくすぐったいような感情を噛み締めながら、なすがままになっている。

そんな様子を端からクワイ||ガンは微笑ましそうに見守っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

午後、街に着いたため、初日クワイ||ガンはオビ||ワンにこの惑星の詳細を教えるに留まった。

ウーキー族のしきたり。

ウーキー族は何より名誉を重んじること。そして「命の借り」。

ウーキーにとつて「命の借り」とは自分の命よりも大切な物である。

森の仕組み。

キャツシークの生態系には7つのレベルがあり、第7層は木の枝のてっぺんである。

だんだん下に行けば行くほど下層になるのだが、勇敢なウーキー族の男でさえ第4層までしか降りたことがないと言う。

ましてや地表などというものを見たというウーキーは伝説にすら登場しない。それほど下層はウーキーにとつても未知の世界なのだ。

そして、惑星のほとんどを覆っている巨木ロシユアのこと。

またその幹や枝に寄生するブライダル・ヴェール・サッカーや、幅の広い葉っぱをつけている偽シル、クシー蔓。

それから、そこに棲まう生き物のこと。

オビⅡワンはこの惑星についての一通りの知識を得た。

夕方、ラルラが美味しそうな料理を運んでくれた。

二人は礼を言い、ヒューマノイドの口に合うよう調理された料理

—— 通常ウーキーは生肉を食し、調理された料理でもスパイスが効き過ぎることがあるからだ —— に舌鼓を打ったのであった。

第2話 指示を受けて

翌朝、クワイⅡガンはこの街に来て初めてオビⅡワンに指示を出した。

「今回、お前はあのフレールの傍についていて欲しい」

「フレールの傍に？彼は狙われているのですか？」

クワイⅡガンは聞かれて何故か考え込んだ。

「？」

不思議がるオビⅡワンにややあつてマスターは口を開く。しばらく考えをまとめようとしていたのかもしれない。

「実は彼はあるウーキーに狙われているのだ。フレールはこの街一番の狩り上手なのだ、別の街のウーキーが自分の方が狩りが上手いと豪語し、フレールの名誉を汚すようなことを言ったそうだ。それが街同士の争いに発展しかけているらしい。ウーキーにとって名誉は何よりも大事なものだからな。・・・わかったな？」

「はい、マスター」

オビⅡワンは素直に了承した。

「私はいろいろなウーキーに話を聞いて、争いの元を調査し調停することにする。オビⅡワン」

言葉を止め、彼は若きパダワンを見やった。

「はい？」

「頼んだぞ」

「はい、マスター」

真摯に答えるオビⅡワンに微笑みかけるクワイⅡガンであった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

ルークロクの郊外に設けられた仮の家から、外に出てみる。

ワサワサと揺れる緑色のロシユアの葉が街の回りを囲み、見渡す限り緑色の海である。上を見上げると、青い空が広がり白い雲が彩りを添え、清々しい気持ちになった。

「フルルルル」

声を掛けられ振り向くと、一人のウーキーが大股で歩いてくる。

「フレール・・・？」

そのウーキーはニヤツと笑みを浮かべ——それが笑みというならば、だが——オビⅡワンの元に近づくと背中をバンバン叩き始めた。

ウーキーにとつて、背中を叩くこと、抱き締めること、相手を揺さぶること、これらは全て親愛の証なのだと聞いていた。

しかし、余りの強烈な挨拶に思わず息がつまる。

「いたた、もう、いいよ。わかった、わかった」

慌てて叩かせるのを止めると、オビⅡワンは苦笑いをしながらフレールを眺めた。

フレールは何故？という風に首を傾げている。オビⅡワンは思わず吹き出し、笑い始めた。フレールも訳がわからないまま声を上げて笑い始める。

白い一筋の雲が風に流れて空を横切っていった。

「僕は君を守るように言われたんだ」

プラットフォームの片隅に腰を下ろし、オビⅡワンはフレールに話しかける。

足元にはロシユアの葉が重なり合って緑色の絨毯のようになっていいる。覗き込むと地表は全く見えない。どれほどの高みにこの場所はあるのだろうか。

覗いていてオビⅡワンは軽い眩暈に襲われた。

急いで頭を振り、隣に座っているウーキーを見やる。

ウーキーは首を傾げた。その意味するところはわからないが、君の助けがなくても自分の身は自分で守れると言いたいのかもしいれない。「だから、これから君の行く所には僕も必ずついていく。わかった？」

再び首を傾げ、それから牙を剥き出し笑った。了解したのだろうか。

オビⅡワンはつくづく彼らの言葉がわかったら・・・と思わずにはいられなかった。

午前中、ルークロクの街を案内してくれたフレールは、午後になるとオビⅡワンを伴い森に出かけた。

第7層、そして、第6層の上の方を見せて回る。

オビィワンには初めて見る光景で、見るもの全てが珍しかった。

フレールはウーキー語しか話せなかったが、標準語は理解できたので身振り手振りで教えてもらい、及びクワイィガンから仕入れた知識と照らし合わせて、何とかオビィワンにもその物の名前ぐらいはわかるまでになった。

そして、フレールと一緒にいる間、彼の豊かな表情を見ることで彼の言いたいことがなんとなく感じるようになってきた。

しかし、ウーキー語が理解できたらと思うこともやはりままあるのだった。

そんな時、別のウーキーが現れた。

そのウーキーはフレールに吼える。

フレールは駆け寄っていった。

「よお、ショーランじゃないか。何をしてるんだ？」

「おお、フレール。いいところで会ったね。今から陰シヤドロー・フォレスト 森に行くんだ、客人をもてなすための獲物を捕りに。君もどうだい？ 狩りがうまい君がくれば助かるんだけどな」

「そうだな、行ってもいいぜ。その前に、あの小さき勇者を街に帰した方がいいな。陰シヤドロー・フォレスト 森に連れていくには危険すぎる」

「そうだね。じゃ、僕先に行ってるよ」

「ああ、後から追いつくから、行っててくれ」

二人でウーキー語でしばらく話していた後、フレールはようやく踵を返しオビィワンの元に帰って来た。

「どうしたの？」

訊ねるオビィワンに、フレールは唸り、付いてこいと合図をする。要領を得ず、言われるままオビィワンはフレールに付いて歩き始めた。

30標準分ぐらい歩いただろうか。

ルークロクの街並みが樹海の向こうに見えてくると、フレールは「フルル」

と唸り、街を指差すと行けといった仕草をする。

「フレール？ ちよつと待ってよ」

確かにここまで来てしまえばルーククロの街は目と鼻の先。オビ
Ⅱワンにだつて一人で帰れる。

オビⅡワンが街の方を確認したのを見届けると、ウーキーは体を返
し巨大な体に似合わず恐ろしいスピードで走り始めた。街とは逆の
方向へ。

しかし、彼はフレールを守らなくてはならなかった。そのため
は、常に一緒にいなければならない。

「どこ行くの!?!」

ウーキーが唸る声が聞こえたが、あつという間にその茶色い姿は樹
木の間消えた。

フレールの傍について欲しい

マスターの言葉が蘇る。

オビⅡワンは唇を噛み締めると走り始めた。

フレールを追つて。巨大で広大な森に。

フォースを伸ばすと、かろうじてフレールのフォースを感じるこ
とができる。オビⅡワンはその後を辿つて行く。

しかし、ロシユアの木が巨木とはいえ、ウーキーのようにしなやか
な肉体と土地鑑を持つているならともかく、人間にはこの木の枝と枝
の間を飛び越えて進んでいくとなれば至難の技である。

枝の直径が2mあったとしても、だ。交差していればまだいい。飛
び越えねばならないとなれば、フォースを使うしかあるまい。

そうして、フレールの姿を追いつつ、オビⅡワンは次第に森の下
層に入り込んでいった。

日が当たりにくいいため、苔が密集している木の枝を用心深く歩きな
がら、フォースでフレールの行方を探す。

どれほど探したかわからない。1標準時間か2標準時間ぐらい
経っているかもしれない。

ようやく、フレールのフォースを間近に感じられた。

フォースの使いすぎで息が上がり、体は疲れていたが

／／フレールっ!!／／

と、フォースを送った瞬間、すぐ傍のロシユアの葉の陰から見たこ

ともない生き物が驚いて飛び出してきた。

ぶつかりそうになり、慌てて避けたオビィワンの足が枝を踏み外した。枝に生えている苔が拍車をかけた。

「うわああっ!!」

ルークロロの街から下を覗いた風景が頭に浮かぶ。地表が全く見え、ひたすら木の幹だけがそびえ立っていたその景色を。

オビィワンは奈落に吸い込まれるように落下していった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

【偉大なるジェダイ・マスター!そこにいらつしやったんですね?】

いつも冷静なラルラが血相を変えて走ってきた。

クワイィガンは他のウーキーと話をしていた所だった。ただならぬ様子に眉をひそめる。

「何かあったのですか?」

【小さき勇者が行方不明とのことです】

クワイィガンは眉間に皺を寄せ、ラルラに向き直った。そして、静かに促す。

「何があったというのです?」

シャドール・フォレスト

【先ほどフレールが来まして、今、シャドール・フォレスト 森から戻ってきたのだが、小さき勇者の姿が見当たらない。彼には先にルークロロの街に帰るよう伝えたはずだと言うのです。私達が街中探したのですが、彼の姿は見当たりません。まさか、森に一人で行ったのではないか・・・と】
クワイィガンは沈痛な面持ちを破り訊ねた。

【もし一人で森に入ったとして、ヒューマノイドの子供が無事に戻ってくる確率が高いのですか?】

ラルラは唸り声をあげた。

【何とも言えません。しかし、不慣れな森です。確率は・・・】

【低いのですね】

【ご期待に応えられず、申し訳ありません】

マスターは深い溜め息を漏らした。

【フレールに話を聞きたいのだが、フレールはいますか?】

【彼は小さき勇者が帰ってきていないと聞くと、すぐさま森に探しに

行きました」

「そうですか」

【貴方はどうされますか？偉大なるジエダイ・マスター】

「私はここで待ちましょう。私にとっても不慣れな森だ。オビワンとフレールを信じます」

ラルラはわかったと吼えると、急ぎ足でその場を去る。

そこには独り心配げに佇むクワイガンの姿だけがあった。

第3話 悩みゆえの夢

(本当に大きな木だな・・・)

幹全体を視界に入れることさえもできないロシユアの木が真つ直ぐ天高くそびえ、茂る大きな葉が青空を覆い隠している。

そのため日の光はほんの僅かしかここまで届かない。光が差さないので、この辺りには苔類やシダ類しか生えず、じめじめとした空気を醸している。

オビⅡワンは仰向けに天空を見上げるような形で、ロシユアの木の枝上に倒れていた。

このまま倒れていたら誰にも見つからず、キャツシークに棲むという肉食獣の餌食になりかねない。もし、そうならなかったとしても、ここで朽ち果てる可能性もある。

しかし、動くことができないのには訳があつた。

ロシユアの葉にぶつかりながら落下速度を弱め、最後にフォースを体に集め、何とか直撃だけは免れたが、フォースを使いきり疲れた体と落ちる際に捻った足首の捻挫により、立ちあがることもままならなかつたからだ。それに・・・。

頭は何故か冷めている。

(本当に本当に大きな木だ・・・)

オビⅡワンは再び思った。

この樹木達は何百年、何千年、もしくは何万年と変わらずこの姿で生きていくのだろう。

それに比べ、自分達の人生の何て短いことか。

そして、何て小さく孤独な存在で有ることよ。

ちっぽけで・・・無力で・・・

フォースが使えるからといって、人一人の命を救えないのなら何のためのジェダイか。

ジェネヴァー・・・彼を救いたかつた・・・

やりきれない、切ない想いが彼を支配する。

オビⅡワンは静かに瞳を閉じた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

(ここは、どこだろう?)

まるで星のない宇宙に浮かぶが如く、漆黒の闇が広がっている。足元を見ても暗闇。空を見上げても光さえ差さない。何も無い世界。自分だけが存在する世界。

ふと心細さを覚える。すると、闇が一層濃くなったような気がする。

(誰も、何もいないんだろうか・・・)

不意に背後から微かなフォースの揺らめきが、命の煌きが感じられた。

すかさず振りむくと

「うわあ」

歓声が口から漏れた。

そこには、先ほどまでなかったはずだが、一本の大きな木が立っていた。

「すごくきれいだ・・・」

その木は見たこともない木だった。

黒褐色の幹がうねるように天に伸び、無数の枝を広げている。その枝の至る所に薄いピンク色をした小さな花びらが、今が盛りとほのかな香りとともに咲き誇っている。

オビィワンはその美しい木を見あげた。

だが、すぐに寂寥感が押し寄せてくる。空しさが込みあげてくる。

(ここには僕と、この木しかない)

「オビィワン」

突如闇に響き渡るその声に驚き、下を向いていた顔を上げる。

その木の横に人影が見えた。影は徐々に形を取り二人の姿になる。

「!?・・・父さん?母さん!」

逞しく精悍な父親。いつも明るく優しい母親。別れた時の姿のままだ。

「オビィワン、がんばっているか?」

父親の声が聞こえる。変わらず穏やかな声。

(父さん・・・母さん・・・)

涙がポロポロと零れそうになる。必死で歯を食いしばり堪える。思わず駆け寄りたくなる。駆け寄って母親に抱き締めてもらいたかった。何も言わず受けとめて欲しかった。

この心細さを消して欲しかった。

「オビィワン」

母親の優しい声がかかる。

「辛いことも悲しいこともあるかもしれない。でも、私達はあなたを誇りを持って送り出したの。あなたが立派なジェダイになることを信じて」

「母さんっ・・・」

「何があっても負けない勇気を持って。私達はいつでもあなたのことを心から想っているわ・・・」

ニッコリと微笑む母親の顔が、姿がだんだんぼやけていく。

涙のせいだけではない。彼らは消えようとしている。

まだ彼らと一緒にいたい。切なさが気持ちを支配しオビィワンは思わず叫んだ。

「待って！まだ・・・」

しかし、二人の姿は闇に溶け込むように消えてしまった。

「まだ、話したいことがいっぱいあったのに・・・」

再び空しさが込みあげオビィワンは涙をぬぐった。

「オビィワン」

再び声が響く。涙をぬぐいさると目を凝らす。

「マスターっ？マスター・ヨーダ・・・」

影は小柄な一人の影に集約した。

「悩みがある、そうじゃろう？」

「・・・はい、マスター・ヨーダ」

オビィワンは偉大なるジェダイ・マスターの前に跪いた。

「言ってみよ」

(これは・・・夢だ。マスター・ヨーダがここにいるはずがない。きつと、僕の迷いがこんな夢を見させているんだ。だから、僕が何を言お

うとヨーダは気にしないはずだ・・・」

オビⅡワンは唾を飲み込むと、覚悟を決めて声を出した。

「僕は一人の人間を助けられませんでした。たった一人の人間を救えないのなら、・・・ジェダイになる資格がないのかもしれない」

「ジェダイとて完璧ではない。それがその人間の運命さだめだったのじゃ」

「でも、未来は変わりやすいものだどあなたは以前言いました。もしかしたら、その運命を変えられたかもしれないのに・・・」

ヨーダは無言で杖をつきつつ歩き出した。オビⅡワンはその姿を目で追う。

ややあつてヨーダはポツリと言った。

「オビⅡワン、この木は何と言う木か知っておるかの？」

杖で指す方向を見やり、オビⅡワンは首を振った。

「いいえ、知りません」

「これは、伝説の中でしか出てこないリーチエの木じゃ。幻の惑星ルサエに生えているという な」

木の名も惑星の名も初めて耳にする名前である。

「リーチエの花は、一生に一度だけこのように美しく咲き乱れるという。わしらの一生もこのようなものじゃ。この宇宙の歴史に比べれば、一瞬の如き人生で何を残すか。それを考えてみるのもよからう」
相変わらず禅問答のようなヨーダの言葉に、オビⅡワンは一生懸命考え込む。

と、ヨーダの偉大なる姿は闇に紛れて消えてしまった。

オビⅡワンはまた独りになった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「何か手がかりはつかめましたか？」

「いいえ、偉大なるジェダイ・マスター。まだ、小さき勇者の行方は全く・・・。フレールからも何の連絡もありません」

「そうですか」

溜め息とともに言葉を吐き出す。

他のウーキーと連絡を取り合うためにラルラが家を離れると、クワイⅡガンは目を閉じ、瞑想し始めた。

パダワンのフォースを例え僅かでも探すことができれば。
キャツシークの森はそれ自体生命に溢れ、フォースで満ち満ちているのだ。

この広大な樹海で、自分の弟子の小さなフォースを探す・・・大変なことだが不可能なことではなかった。つながりさえあれば。

そして、ついに目指すフォースを捕らえた。

彼の弟子は微かだが、まだフォースを放っている。クワイ||ガンはそれにそっと近づくと、優しく包み込み囁きかけた。

／／オビ||ワン／／
と。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「オビ||ワン」

三度目に闇の中で呼びかける声がある。オビ||ワンはハッと声のした方を見つめた。

「!・マスター!!」

クワイ||ガンはリーチエの木の横に立っていた。

(このマスターも夢だ・・・。僕は変な夢ばかり見ている・・・)

苦笑を漏らす。

「ここにいたのか。心配したぞ」

「・・・すみません、マスター」

オビ||ワンはうつむいた。そんな様子を見て苦笑いしながらクワイ||ガンは問う。

「どうして森に行ったんだ？」

「フレールを追って迷子になったんです。・・・それより、マスター」

と一回言葉を切ったオビ||ワンは思いつめた表情で再び口を開いた。

「・・・僕はジェダイになれるのでしょうか？ ジェネヴァーを救えなかった、こんな僕は・・・」

「それで今まで悩んでいたのか？」

「はい・・・」

クワイ||ガンは優しい眼ざしでじっと見つめている。

オビⅡワンは闇の中で怪しくも美しく咲き続ける木を指して、言葉
を続けた。

「マスター・ヨードは、この木がリーチエの木と言いました。一生に
たった一度だけきれいに花を咲かせる木だ、人の一生もこの木の花と
同じで短い、その間に何を残すか考えてみよ」と

「意味がわかるか？」

「あまり良くわかりません」

クワイⅡガンは歩き出し、リーチエの木の幹に手を触れた。風もな
いの木はそよぎ出す。

「確かに人の一生は短い。できることも限られているだろう。しか
し、その間に悔いの残さぬような人生が送れば、死ぬ時に安らかな
気持ちで死ねるようなら、その者は素晴らしい人生を送ったといえる
のではないか。ジエダイと言っても限りがある。ジエネヴァーを救
えなかったかもしれない。しかし、今後そのフォースを使い、もつと
多くの人々を救うことになるかもしれない。悩むこともあるだろう。
だが、悩み立ち止まっても仕方がないのだ。歩き出せねば。違
うか？」

「なんとなくわかった気がします」

オビⅡワンは心の中の寂寥感がだんだん消えていくのを感じた。

それとともに、暖かい流れが自分の中で脈打ち、そして、周りの空
気も暖かさを帯びてきたことも。

リーチエの木が風に揺れるようにそよいだ。

咲き乱れる花びらが一斉に枝から離れ、オビⅡワンの周りに舞う。

「わあ」

花びらは渦となり暗闇に舞い落ちる。

暖かい・・・

オビⅡワンは自分を取り囲む巨大で暖かな流れを心の底から感じ
た。

「オビⅡワン」

クワイⅡガンが声をかける。

「街まで戻ってこれるな？」

そう言い放つと、彼は花吹雪の間に消えた。

(街？戻る？何のこと・・・？)

花びらの舞いが渦を巻き、ぐるぐる、ぐるぐると

そして、オビィワンは目を開けた。

――

第4話 巨木に癒され

(夢だったんだ・・・)

『街まで戻ってこれるな?』

不意に、夢の中でクワイーガンが言った言葉を思い出す。

(そうだ、こんなところで寝ている訳にはいかない。フレールを探さない)

体は疲れ切っていたが、なんとか上体を起こし始める。

その時オビワンは、自分の体を支えるように暖かい流れが渦巻いているのを感じた。

自分の周囲に巨大で暖かいフォースが取り巻いているのを。それは天突くように生えているロシユアの木から感じられた。

(そうか、君たちが僕にあの夢を見せてくれたんだね。僕を勇気づけるために)

今や彼は、自分を労わり、傷 —— 心の傷を含めて —— を癒そうとする、巨木の暖かい意志を心の底から感じ取っていた。

この心地よい流れをオビワンは心ゆくまで味わった。

瞬間、取り巻くフォースに邪悪な影が過ぎった。

オビワンはハツと周囲に注意を向ける。

前方のロシユアの葉影から、獣の荒い息遣いが聞こえてくる。一匹ではない。二、三匹はいるようだ。

(僕を狙ってる)

オビワンはライトセーバーを右手に持ち、いつでも起動できるように構えた。

幹に背をつけ、体を起こしただけのこの状態で満足に闘えるか不安もあったが、不安に捕われるなど自分に言い聞かせフォースを引き寄せる。

獣は姿を現した。全部で三匹。

体長1mほど。鼻先は尖り、耳は長く、目つきは爛々としている。開いた口から親指ほどの牙が並んでいるのが見えた。そして、5本の足。

(影を狩る者だつ)

昨日マスターから話を聞いた。ウーキー達も恐れるほどの肉食獣ケックラグ・ロー。

(でも、彼らはもつと下層にいるはず。どうしてこんなところまで？それとも僕がそんなに下層まで落ちたのだろうか?)

立ちあがれないまでも、傷めていない方の左足を動かし立て膝をつく。これならまだ闘い易い。

ライトローバーを起動し斜めに構えた。

影を狩る者達は、ちよつと戸惑ったようだ。見慣れぬ武器を見たからかもしれない。しかし、一瞬後には躊躇することなく輪を狭める。

オビⅡワンはフォースを手元に集め纏った。

と、一匹の獣が右手から、続けざまもう一匹が左から突っ込んできた。

右上段から切り落とすと、返すセイバーで左から切り上げる。二匹は悲鳴と怒号を撒き散らしながら、ロシユアの枝から下に落ちていった。

(もう一匹は —— 上だっ!!)

すかさずセイバーを突き上げる。

「ギャンツ!!」

獣の悲鳴は聞こえたが手応えがない。

「!?」

オビⅡワンが見上げると、獣が幹に射止められている。そこに突き刺さる一本の太い矢。

(もしかしてっ!!)

急いで矢が飛んできたと思われる方向に視線を向けると

「フルルルルル・・・」

ボウキヤスター
弩弓銃を手にした一人のウーキーが、猛スピードで駆け寄ってくる。

「フレールっ!」

オビⅡワンが喜びの声を上げると、ウーキーは彼をギュツと抱き締めめた。フレールの抱擁は激しく、オビⅡワンは骨が折れるかもと半ば心配した。しかし

(こんなにまで僕のこと、心配してくれたんだ・・・)
と思うと嬉しさが滲み出てくる。

(暖かい・・・)

ひとしきり経って気が済んだのだろう。フレールはようやくオビ
IIワンを離すと傷がないか調べ始めた。

「大丈夫。右足を捻挫しただけ」

歩けるか?と問いただしているような顔つきに

「わからない。けど、やってみる」

マスター・ヨードに聞かれたら、「やってみる」のではない「やるの
じゃ」と言われそうだなと内心苦笑しながら応える。

それを聞いてフレールは首を振ると、いきなり背中を向けた。

「え、背中に乗れって?」

フレールは唸る。肯定だ。

(それは恥ずかしい・・・どうしよう・・・)

ついに痺れを切らしたフレールは歯を剥き出して吠えた。

ウーキーを怒らせるものではない

との警告が頭に響く。

観念し、オビIIワンはフレールの背中に身を預けた。

フレールはロシユアの葉を避け枝に飛び移りながら、ルークロロの
街へ戻っていく。

ウーキーは気を遣って激しい走りをしなかった。ゆえに、その揺れ
が心地よさを出し、疲れきっていたオビIIワンはいつしか眠ってし
まった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

夕暮れ時、クワイIIガンが仮の家を出て街の郊外に向かっていく
と、フレールの遠吠えからそうとわかったラルラ達ウーキーが、総出
でオビIIワンを迎えに出ていた。

【おお、偉大なるジェダイ・マスター!!小さき勇者は無事なようです。
本当に良かった】

「あなた方にもご迷惑をおかけしました。申し訳ない」

【小さき勇者が戻られたというのに意外でもなさそうですね。どうや

らご存知だったようだ」

ラルラはニヤツと笑った。

クワイⅡガンも微笑み返す。

【小さき勇者は幸せ者ですね。こんなに心配し、しかも、信用してくれている者がいて】

笑うとラルラは、ようやくブラットフォームに辿り着いたフレールの元へと駆け寄る。クワイⅡガンも静かにその後を追った。

【どうやら、眠っているようですね。かなり疲れたのでしょうか。このまま仮の家まで運ばせますか？】

「いいえ、私が運んで行きましょう。フレール」

呼びかけると、ウーキーに近寄った。

「いろいろ迷惑をかけて済まなかった。ありがとう」

フレールは首を振ると、ニツと笑った。

【友達だから。当たり前のことです】

嬉しさに目を細め、クワイⅡガンは言う。

「オビⅡワンが聞いたら喜びそうだ」

ウーキーも再びニヤツと笑いオビⅡワンを背から降ろすと、クワイⅡガンにそつと渡した。

彼は、自分のローブでオビⅡワンをくるみ両手で抱きかかえると、その場にいたウーキー達に深々とお辞儀をし、その場を後にした。

家に向かいつつ、すやすやと寝息を立て穏やかに眠るオビⅡワンの顔を見ながら

(来る前までとは違い、悩みがふつきれたようだな。ここに来て本当に良かった)

微笑みクワイⅡガンは歩いていく。

彼の背後では、無事に小さき勇者を連れ帰ってきたフレールが皆の歓声を浴びていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

遠くで鳥の鳴く声が聞こえる。顔に光が当たって眩しい。

オビⅡワンはゆっくりと目を覚ました。

一瞬ここがどこだかわからなかった。

(あれ?・・・)

じつと考え込み、はたと思い当たる。

(ということは、ここはルークロ口の仮の家?!?あのまま眠っちゃったんだ・・・って、今、もう朝?)

激しく狼狽する。

(あんな格好をマスターに見られたんだろうか・・・)

背負われてルークロ口の街に着くなんて恥ずかしい。しかも仮にもジエダイの卵なのに・・・

「起きたようだな。よく眠っていたぞ」

(うわあああつ)

「マ、マ、マスターっ」

オビⅡワンは思わず飛び起きた。

「どうした?」

しかし当の本人は平然としている。

「いや、あの、その・・・ご、ご迷惑をかけて、すみませんでしたっ」とても、背負われていた僕を見ましたか?なんて聞けやしない。

「ああ、とりあえずお前が無事で良かったよ。お腹が空いただろう。ファクトリン・ミートパイをもらってきてやったぞ」

そんな動揺しているオビⅡワンを余所に、マスターは淡々と話を進めている。

(み、見てなかったんだろうか・・・)

「あ、ありがとうございます」

お腹が鳴る。確かに腹が減っている。考えてみれば昨日から何も食べていない。

オビⅡワンはミートパイに嚙りついた。

「ああ、そうだ。背負われていたお前はまだまだ子供だなと考えさせられた。いつもは歳以上に気を張っているが、ふとしたことで本来の年齢に戻るものだな」

オビⅡワンは激しく咽せ込み、あやうく窒息しかけた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

【もう行かれるのですね】

「そろそろ、コルサントに戻らないとならないのです。あなた方には大変お世話になりました」

クワイⅡガンが言うと同時に、オビⅡワンも深々とお辞儀をした。一抹の寂しさが漂う。オビⅡワンはそれと知れぬよう、周りを見まわした。

と、気づいたようにクワイⅡガンが訊ねる。

「フレールは？」

「今こちらに向かっているはずですが。急な出立でしたので、連絡が遅くなりまして」

「そうですか・・・」

プラットフォームの片隅に止まっている宇宙船の周りの動きが慌ただしくなっている。間もなく出発の時刻だ。

クワイⅡガンはちらつとそちらに視線を向けると、戻して言った。

「本当にお世話になりました。このお礼は何と言ったら良いか」

「いえいえ、お気遣いなく。あなた方ジェダイをお迎えできただけでも、この街にとつて喜ばしいことなのです。そしてフレールにとつても、小さき勇者を助けたことで彼はこの街の新たな勇者となりました。彼の名誉も子々孫々と受け継がれていくことでしょう」

クワイⅡガンは微笑み、別れの言葉を口に出した。

「それでは、我々は参ります。また会える日を心よりお待ちしております。す。フォースと共にあらんことを」

「フォースと共にあらんことを」

クワイⅡガンとオビⅡワンはラルラに別れを告げ、船へと向かった。

しかし、オビⅡワンは、フレールに一度でも会いたい、会ってお礼がしたいという気持ちでいっぱいだった。

彼は本当に間に合わないのだろうか・・・

宇宙船のタラップが視界に入ってきた。オビⅡワンはしばし立ち止まり溜め息をつくとき、タラップに足を乗せた。その時

「フルルルル・・・」

聞きなれたあの声。

「フレールっ!!」

オビⅡワンは躊躇い、タラップの上の方を歩いているクワイⅡガンを見つめた。クワイⅡガンは優しく肯く。

「行ってきなさい」

「はいっ、マスター!!」

オビⅡワンは駆け出した。フレールに向かつて。

二人は中央で出会うとギユツと抱き締めあった。

言葉はなかった。いや、いらなかった。

(フレール、本当にありがとう……。君と会えて良かったよ)

突然オビⅡワンの頭に別の思考が流れてきた。

／／俺も君と会えて楽しかったよ／／

「!? フレール?」

オビⅡワンは見上げる。フレールはニヤツと歯を剥き出して笑った。

今この瞬間、友情の想いがフォースを通じて伝わったのかもしれない。

／／あの時は本当にありがとう／／

／／友達を助けるのは、当たり前さ／／

／／君と別れるのは寂しいな……。／／

／／なあゝに言ってるんだ。また会えるさ、いつだって／／

／／そうだね。また会えるね／／

オビⅡワンの瞳から零れ落ちた涙が、フレールの毛に吸い込まれていった。

／／ジエダイらしくもない。もっと強くならなきゃダメだな／／

フレールは笑った。

／／そうだね。もっと強くなる。心も体も／／

／／楽しみにしてるぜ、小さき勇者／／

／／本当に本当に、ありがとう。君のことは忘れない／／

大口を開けて笑うと、フレールは宇宙船を指さした。

／／行きな。船が行っちゃうぜ／／

／／じゃ、また会う日まで／／

／／元気でな／／

オビⅡワンは涙を堪えるとフレールを見つめ、それから宇宙船に向かって駆け出した。

宇宙船が離陸し小さくなり消えてしまうまで、ラルラとフレールはじつと青空を見上げていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

碧玉のようなキャツシックがだんだん小さくなると、オビⅡワンは微かな溜め息をついた。

「どうした?」

通信室から出てきた彼のマスターが心配そうな顔で見つめている。

「いえ、いろいろと思いついたら、長いようで短い任務だった」と

「任務?何のことだ?」

「何のことって、フレールを守ってくれという任務ですよ。マスターが争いを調停するまでの」

クワイⅡガンは不思議そうな顔つきをして若きパダワンの横に腰をおろした。

「私は任務だなんて一言も言っていないぞ」

「えっ!?だって目的地がキャツシックで、マスター・ヨーダに指示されて・・・それにフレールの傍にいらって・・・」

「その言葉のどこに、任務という言葉がある?」

「えっっっ?」

クワイⅡガンは、訳が分からず呆然としているオビⅡワンを尻目に微笑んだあと。

「お前が何か悩んでいるようだったから、マスター・ヨーダにコルサントに戻る前に寄り道をしたいと申し出たのだ。気分転換も必要だったからな。そうしたらマスター・ヨーダが寄り道するなら、アルカスから近いキャツシックが良いとおっしゃったのだよ。それでここに来たのだ」

「な、な、な・・・」

(もしかして・・・やられたぁーっ!!)

「フ、フ、フレールの傍にいてくれと言うのはっ?」

「フレールを守れとは言っていないだろう？フレールにはお前と遊んでくれと伝えてはおいたが」

(道理でフレールが不思議そうな顔をした訳だ・・・)

「で、では、あの争いの調停とか・・・言うのは？」

クワイⅡガンはニツコリ笑った。

「あれは嘘だ」

「う、う、嘘ーーーっ!？」

「お前は、休息を取るためキャツシークに寄ると言ったら素直に聞いたか？きつと自分のことはさておいて、すぐにコルサントに戻ると言っってきたかなかっただろう。頑固だからな」

「う・・・」

「たまにはいいではないか」

だんだん怒る気力も失せてきた。マスターも自分のことを思っいてくれたのだ。悪気はなかったに違いない。悪気があっても困るが。

「・・・ありがとうございます」

ようやくお礼の言葉が出る。

そんなオビⅡワンを見てクワイⅡガンは彼の頭を撫でて微笑んだ。

「ようやく元気が出たようだな」

オビⅡワンは溜め息とともに言葉を出した。

「・・・ご心配をおかけしました」

「コルサントまでは長旅だ。ゆっくり休んでいくといい」

「はい、マスター」

クワイⅡガンは瞳を閉じた。

オビⅡワンも眠ろうとして、ふと新たな疑問に捕われた。

(あれ？そう言えばマスターって、どうして僕が悩んでいた理由を聞かないんだろう？あの時・・・夢で・・・って、もしかして、僕の夢の中に出てきたマスターって本物ー？？？どういこと??でも、道理で『街に戻ってこれるな』って、うわあああーっ。すごく素直な自分を見せてしまった・・・)

オビⅡワンのひたすら葛藤する姿に、横にいるクワイⅡガンは寝た

ふりをしながら笑いを堪えるのに必死になっていたのであった。

余談 ——

コルサントに戻り、マスター・ヨードに挨拶に行ったオビワゴンが、真っ先に「わしの問いに対する答えは出たかの？」と聞かれ、慌てふためく一幕もあったらしい……

End

(2000年頃執筆)

3. 常和の花 — Tokowa no Hana — (クテラ編／架空の街) プロローグ

ジェダイ・マスター、クワイ・ガン・ジンは溜め息をつくど、前方に広がるハイペースの光の渦を見つめつつ、フツと笑みを漏らした。

(今ごろ、怒っているだろうな・・・)

自分はそれほど未熟なのかと落胆し、やるせなさや怒りに肩を震わせているさまが容易に目に浮かぶ。

(だが、今回の任務はかなり危険なものになるだろう。連れていく訳にはいかない。それに・・・評議会もそのことを了承した)

今回の危険性を滔々と述べるヨーダの姿が蘇った。

(しかたがないことなのだ)

しかし、頭で認識していても、心の中では一抹の寂しさが通り抜けるのは隠せなかった。

「もうすぐ目的地に着きますが」

クワイ・ガンのその物思いを破るように、宇宙船のパイロットが声をかけた。

「わかった。余り目立たないように着陸して欲しい」

「了解しました」

その時、通信機から雑音交じりの声が聞こえた。

「ピー ガガツ こちらは管制塔。ガーツ その宇宙船、応答されまし」

「こちらはクルーザー、＜Winged Horse＞。着陸許可を願いたい」

「この惑星はただ今、不安定な政情。直ちに引き返すよう警告する」

パイロットは後ろを振り返り不安そうにクワイ・ガンを眺める。彼は穏やかに頷いた。

それに後押しされるよう、パイロットが言葉を継いだ。

「この船には商人が乗っている。被災地に薬をもたらすためにこの惑星を訪れたのだ。着陸許可を願いたい」

永遠とも思える沈黙が続いた後

「………了解。こちらの指示に従って、着陸されたし」

ホツとしたパイロットは通信機を切ると、管制塔に指示された座標へ宇宙船を向けた。

空から見る下の光景は、所々広大な範囲に破壊された建物や赤い炎や煙が立ち昇っているのが見え、まるで地獄のようだった。

「管制官も言っていた通り、ここでの争いは本当にひどいものですね」

宇宙港 —— これが宇宙港と呼べるのなら だが —— あちこちに爆発で開けられたと思しき大きな穴が空いていて、焦げた匂いが立ち込めている。

黒い煤がついた巨大なパーマクリートの固まりが、ごろごろと転がっていた。

「全くだ。難しい任務になりそうだな」

クワイⅡガンは現場の惨状を見ながら、低い声で言った。

一通り見渡した後、彼は薬の入った袋を肩から下げ

「君もそろそろ行った方がいいだろう。ここに長居は無用だ」

と大股に歩き出した。

パイロットはその背中に向かって、気づかわしい表情を浮かべながら口を開いた。

「わかりました。連絡を受け次第、またお迎えに上がります。……お

気をつけて、マスター・ジエダイ」

「私はただの商人に過ぎないが？」

振り向きざま口の端を歪めニヤツと笑うと、クワイⅡガンは街の方へ足早に歩いていった。

<前編>

第1話 荒れ果てた街

真南に位置する宇宙港から真っ直ぐ北へと伸びる大通り。テレスト通りである。

そしてテレスト通りの突き当たりには、この街を建設した人物の子孫が代々治めているエルカスト城がある。

クワイーガン^{クワイーガン}の第一の目的は、この城を訪れ当主に話を聞くこと。王からジェダイ評議会に援助要請が入ったからだ。

城に向かいながら街の様子を窺う。

大通りの両脇に佇む店々は昼間だというのにシャッターを下ろし、シンと静まり返っている。逆にその店の前で商いを行う露天商の方が、まだ賑わっている。

露天商の扱う物は主に武器。

ブラスタターはともかく、小型なキャノン砲、バイブプロブレード振動ナイフ、サーマル・デトネーター熱爆弾等、様々な武器が広げられているのだ。

中古ばかりではない。新品な武器も揃えられ、この街でのこれら武器の需要性が高いことを示していた。

このテレスト通りはこの街クテラを東西に分つ分岐点である。

東西に分かれて争うこの街での唯一の保護区域であるため、露天商も安心して商いができるのだ。しかし、夜になればその限りでないが。

そのため、昔からこの通りに店を持つ者は恐れて店開きをしようとならない。何が起こるかかわからないからだ。

だから、この街は露天商だけが賑わう一風変わった都市となっていた。

いくら保護区域とは言え、戦いの名残はここにもあちこちと残っている。

今にも崩れそうな店。爆風が襲ったと思われる家々の破片。焼けた煤がこびりつく壁。

(ひどい状態だ)

顔をしかめながら歩く。通りを同じく行き交う、大通りにしては少ない通行人にも生気が余り感じられない。

長引く争いで精神的にも肉体的にも疲れ果てているのだろう。

(まずはこの争いの元凶をつきとめ解決しなければ。このままではいずれ遠からず、この街は廃墟と化すだろう)

思案しつつ北に向かってしていると、突然、前方左側から轟音が鳴り響き、地面が激しく揺れた。

(爆発か!? ここからそんなに遠くはない)

クワイ||ガンは駆け出した。巨大な炎が上がる場所に向けて。地獄のようだった。

燃え上がる炎。赤々と照らされ崩れ落ちる石造りのかなり大きな建物。巨大な固まりや破片が散乱している。

その周りには呻き声を上げる怪我人。ピクリとも動かぬ人々。泣き叫ぶ子供の声。足元に転がる肉片。

騒ぎを嗅ぎつけ、警備ドロイドや消火活動ドロイドが数多く集まり、個々の職分を勤めている。

クワイ||ガンは身近に居た親子に急ぎ足で近づいた。まだ幼き子供が動かぬ親にすがりついて泣いている。

「ママツ、ママツ、おきてよ。ねえ！」

クワイ||ガンはしゃがみ込むと、倒れている女性の呼吸の有無を確認する。そして、泣きじやくる子供を痛ましそうに見つめた。何を言ったわけではないが、子供は察したらしい。

「いや、うそでしょ。ママ、ママーーー!!」

クワイ||ガンはそつと、その子供に暖かなフォースを送り少しでも落ちつかせると、唇を噛み締め沈痛な面持ちで立ちあがった。

(こんな争いは止めさせねばならない。一刻も早く)

遠くから低い轟音を撒き散らし何か近づいてくる。

瞳を凝らすと、それは7台のスピーダーバイクとわかった。

それらは現場に土煙を撒いて止まると、先頭の明らかに改造されたとわかるスピーダーに乗っていた者が、後方のスピーダーに向けて叫

んだ。

「ロイは医メデイカル・ステーション療 所ホバーカーに行つて、搬送車を3・・・いや4台連れてこい。デイルとクーンは消火活動を手伝えつ。残りの者は救助活動を行う!!まだ奴らが潜んでいるかもしれないからな。注意して作業に当たれ!!」

テキパキと手馴れたように指令を出すと一斉に散った。

彼らのおかげで怪我人は一か所にまとめられ、燃え盛っていた炎の鎮火も早かった。

ホバーカーが到着するまで、クワイガンは怪我人の手当てを持つていた薬で行う。

しばらくして着いたホバーカーが怪我人を医メデイカル・ステーション療 所ホバーカーに配送すると、クワイガンは燻った煙をまだ漂わせている廃墟に歩み寄った。「全く、ひどいもんだ」

先頭のスピーダーに乗っていた者が、何時の間にか傍にいて同じく建物の跡を眺め、そう吐き捨てる。

「ここには何があつたのだ?」

静かにクワイガンが訊ねると

「ただの遊技場さ」

遣り切れない怒りを込めた言葉が返ってくる。

「遊技場? 何故そんな所が爆発したのか?」

驚きの表情を浮かべるクワイガンに、その者は言った。

「人が多く死ねばいいんだろう、テラフの奴らは・・・っ」

「テラフ・・・」

その呟きに、ふと不信感を覚えたのかもしれない。その者はクワイガンに向き直りじっと見つめた。

「あんた・・・この街のもんじゃないね。何者なんだ?」

「私は商人だ。薬の商いを行っている。この星には先ほど来たばかりなのだ」

持っていた薬で手当てを行うクワイガンの姿は見ていたはずだ。でも、納得がいかないらしい。

「ふくん、商人ね。それにしても、全く隙がないが」

「いろいろな星に行っているからな。自然に用心深くなるうというものだ」

その者はクワイⅡガンを探るように見つめている。ヘルメットを被っているため相手の表情は窺い知れない。

「ま、いいさ。気に入らない応えだが、信用してやろう。悪いことを企んでいる奴には、そんな澄んだ目の奴はいないからな」

そう言つて被っていたヘルメットを取った。

鮮やかなオレンジ色のウェーブがかつた髪がヘルメットから零れ落ちる。

「あたしの名はベレルガ。あんたは？」

まだ若き女性とは思わず意表をつかれたクワイⅡガンだったが、そんなことは面にも出さず

「クワイⅡガン・ジンだ」

と穏やかに応える。

「驚かないんだね。ますますあなたに興味が沸いたよ。この街は初めてなんだろ？商人の組合を紹介してやろうか」

「いや、ありがたいが、今は急いでいるのだ。用事があつてな」

「ふくん？」

ベレルガは再び茶色の瞳で探るようにつめた後

「わかった。また縁があつたら会おう、商人さんよ」

最後の商人を何故か強調させ、ベレルガは仲間の所に駆け寄っている。

スピーダー達が去っていくと、後には廃墟と化した建物とクワイⅡガンだけが取り残された。

気がつけばドロイド達の姿も見えなくなっている。

そして、この騒ぎを見に来る野次馬もない。爆発なんて日常ありふれたことなのだろうか。

この星にオビⅡワンを連れてこなくて正解だったと、しみじみ実感するクワイⅡガンだった。

第2話 王からの依頼

白亜のベマール石で出来ているその城は、こじんまりとしてはいたが頑丈な造りになっていて、建設した者のこだわりを感じさせる爽やかな建物だった。

クワイⅡガンは今その城の通路を、灯りを持った召し使いと執事に連れられ謁見の間へと向かっていた。

薄暗い内部は、壁に灯された燭台の灯りに照らされ揺らめいているように見える。

しばらく歩いた後、天井につくかと思われる巨大な赤い布に覆われた扉が見えてきた。その回りには煌びやかな豪華な装飾が施されている。

「こちらが謁見の間です。王はここでお待ちです」

年老いた執事が言い、召し使いが扉を開けた。

一面赤い絨毯が敷きつめられた、その奥まった場所に王はいた。

「マスター・ジエダイをお連れしました」

執事の声に窓辺に佇んでいた王は振りかえると、玉座に歩みより腰を下ろした。

クワイⅡガンは前に進み出、その玉座に上がる階段の下で跪いて挨拶を述べる。

「ジエダイ・マスター、クワイⅡガン・ジンと申します。要請により参上致しました」

「顔を上げてください、マスター・ジエダイ」

声の若さに内心驚きながらも、クワイⅡガンは頭をあげる。

そこにはまだ30標準歳前半と思われる、彫りの深い顔立ちのくつきりした金髪碧眼の王がいた。

彼は執事達に顔を向けると

「お前達は下がってよい。私はマスター・ジエダイと内々の話があるのだ」

執事と召し使いは一礼して去って行った。

扉が閉まると、静けさが辺りを満たした。

ややあつて王が口を開く。

「ようこそお越しくございました。堅苦しい挨拶は抜きにしましょう。貴方を招いたのは他でもありません、この街の様子はもうご覧になりましたか？」

「はい。ここに来る途中に拝見しました」

その答えに含まれる感情を察したのだろう、王は溜め息をつくと続けた。

「その通り。今この街は、テレスト通りを境として東西に分かれ昼夜争いが絶えません。先ほども爆発があつたようですが」

「遊技場が破壊されました。死傷者が多数出た模様です」

「そうですね．．．私がこの街を統治し始めてまだ間も有りません。息子の私から見ても偉大な統治者であつた父王でさえ、この争いに心を痛める余り、心労から体調を崩し．．．二年前みまかりました。私の微力な力ではこの争いを収めることができないでしょう。そこで、貴方にお願ひがあります」

王は悲嘆に面を染めながら言った。

「貴方にこの争いを収めて欲しいのです。できますか？ マスター・ジエダイ」

クワイーガンは王の顔をじつと見つめた。そして、微笑を湛えて言った。

「そのために私はこの惑星に來たのです。持てる限りの力を尽くしましょう」

「ありがとうございます」

心からの感謝の念を込め、王は微笑んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆

陽が本日最後の煌きを空に放っている。

街が茜色に染まる頃、クワイーガンは城から離れた。

「しばらくこちらをお使いください」

小柄な老執事は城からほど近いウェスト側にある一軒家までクワイーガンを案内し、入り口を指し示した。

その家は、実際は館と言うべきに相応しく一階建てではあつたが、

瀟洒な造りになっている。

さぞかし平和な時代であつたら、この景色に美しく彩りを添えるであろう石造りの建物であつた。だが、今は住む者のない空家と化していた。

「もし不都合なことがあれば、何なりと申し出てください。マスター・ジエダイ」

「いえ、私のことはクワイーガンとお呼びください。ジエダイがこの争いに干渉したと街の人々が知つたら、人々の感情を逆撫でもするかもしれません。できれば平和的に解決したいのです」

「賢察恐れ入ります。では、そのように致しましょう」

その場を謝し、執事は城に戻つていった。

クワイーガンは家に入ると、必要最低限度の家具しか置いていない部屋部屋を見渡した。

(想像以上にこの争いは人々の生活を圧迫しているようだ)

被つていたポンチョを脱ぎ、ベットの傍に置かれた椅子に腰をかけると、彼は今までの話を総合し、頭の中で如何にこの争いを收拾させるか考えを巡らせ始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

同じくその頃。

夕暮れ時、人影もまばらになりつつある街。

一人の者が道端に長い影を落しながら歩いていく。

ふと影は立ち止まり周囲を見渡し、誰も自分に気を止めていないことを確認すると素早く左手に折れた。

細い路地が続く。そこはもうウエストである。

イーストとウエストを隔てる真っ直ぐに南北を横切る大きなテレスト通り。ここは保護区域となつており、ここでは何人たりとも争いを起こすことはできない。

しかし、一步横道へ入れば別だ。

茶色のローブを纏つた小柄な影は辺りを気にし、しかし、確固たる目的があるかのように先へ進む。

黄昏時だというのに人通りは全くない。この時間に外出するよう

な命知らずの者は多くないのだ。

しばらく歩いてみると、左手に石造りの建物が密集する中、そこだけぽっかり空いた空間が現れた。

否、空間というのは当てはまらない。建物の名残だ。

かなり以前に爆発で吹き飛ばされたと思しき石造りの家の残骸。基礎や壁は少し残っているものの屋根はすっかりない。

何も無い家の跡地。空虚になって久しい場所。

だが、その人物の足はそこに向かっていている。一体何があるというのだろうか？

廃墟のような跡地に辿りついたそのローブ姿の人物の足が、ふと止まった。

誰もいないと思っていたその瓦礫の山の影から、複数の男達の小声がしたのだ。

かの人物は躊躇った。引き返そうとする。が、その拍子に足元の石を蹴飛ばし、壁に当たる音が静寂に響き渡った。

「誰だ!？」

男達が走り出た。目は血走っているが、一見普通の、どこにでもいるような男達である。特にならず者といった風ではない。

なのに、何故このように殺気走っているのか？この街の荒廃と関係があるのだろうか。

「こんな所で何うるちよろしてる?」

「ここは、ウエスト・クテラだぞ。見かけない顔だな。お前、オレベフじゃないだろ!」

通常争いの多いこの街では、パトロール・ドロイドが宙を浮遊しながら僅かな武器音やブラスターの発射音などを感知し、争いの場所に辿りつくと、逆らう者には攻撃を行いながら取締りを行っている。

しかし、残念なことに、今この付近に浮遊している姿は見られなかった。また、通りかかる者の姿もない。

止める者は誰もいない。

だが、ローブの人物は沈黙を保ったままだ。

男達は苛立ちを隠せず、口々に叫ぶ。

「黙ってないで、何か言ったらどうなんだ!!」

「・・・それとも、口がきけるようにしてやろうか」
バイプロフレード
振動ナイフがローブ姿の人物に狙いを定めた。

ガラガラッ・・・!!

突如、廃墟と化していた家の壁が豪快な音を立てて崩れ落ちた。

微かな音も逃がさないパトロール・ドロイドが遠くからその音を聞きつけ、現場に凄まじいスピードで到着する。

「才前達、ソコデ何ヲシテイル?逮捕スル」

「お、俺達は何もしてないぞ!」

ドロイドは機械的な音声で言い放った。

「問答無用ダ」

男達は慌てて逃げ出した。

何かにつけてドロイドが支配しているこの街では、ドロイド——特にパトロール・ドロイドに逆らったら牢獄行きという噂もあるのだ。

あとには、ローブを纏った小柄な者だけがポツリと残された。

そこへ、他に誰もいなくなつたと見るや駆け寄ってきた影が一つ。

「大丈夫?けがは無かった?」

聞かれて小柄な者は無言で頷く。

駆け寄って来た影はホツとし、それと気づかれぬよう腰のベルトに武器をさすと被っていたフードを取った。

「良かった、無事で」

小柄な者はじりりと後ずさりをし、急に背を向けると脱兎の如く逃げ出した。

「あ、ちよつと、待って!」

走って行くその者のフードが風に煽られ、頭から離れそうになる。慌ててフードをpushさえつつ夕闇に消えて行く。

しかし、それを凝視する少年の瞳には、そのフードからわずかに垣間見えた、夕陽に反射してきらめく薄い青紫色をした長い髪の残像がいつまでも残っていた。

(また、会えるかな)

一人ごち、やや彼方を立ち去りがたく眺めていたが、踵を返すと、彼もまた朱が消えかかる宵の街に走り去っていった。

第3話 真夜中の刺客

深夜。皆が寝静まる真夜中。

通常だったら出歩くこともないこの時間帯。しかし、何かを企む者にとつては都合の良い時。

音もなく忍び寄る影が三つ。

それらはある一軒の石で造られた家の前で佇んでいた。

一つの影が懐から何か物を取り出す。それは一見ペンライトのように見えた。

周りを気にし、それからおもむろにスイッチを入れる。その先からレーザービームらしき光が出、そこだけ木で作られたドアに当たった。

その僅かな光は暗黒に棲まう彼らの顔をおぼろげながら照らし出した。

ローディアンが二人、クラトウイナンが一人。

ローディアン、それは複眼にバクのような鼻、緑色の皮膚をした二本足の種族である。彼らの背中には頭骨まで一本の刺々しい隆起が走っており、指は長くしなやかで先端に吸盤が付いている。

暴力と死に取りつかれているとも言われる者達だ。

そしてクラトウイナン。

オリーブ・グリーンから暗い茶色にわたるきめの粗い皮膚をした長身のヒューマノイド型種族で、平らで薄い犬鼻、厚い眉の下に暗い目がある。粘り強さと獰猛さ、揺るぎ無い忠誠心を併せ持つ。

その彼らにより、黙々と無言のうちに行われる作業。

糸のように細く集約されたその光はシユウと軽い音を立てつつ円を描き、しばらくして消えた。

影がその円の真ん中を軽く押すと、ドアが丸く切り取られ、人が通りぬけられるほどの穴となった。

一人、また一人と影達はその穴の奥へ消えた。

広い内部に関わらずこじんまりとした部屋が続く。部屋のドアを開け、中を確認しつつ彼らは一番奥まった部屋まで難なく辿りつく。

軋みさえ鳴らさずに音もなくドアを開けると、右手のベツトサイドの灯りに照らされ、ベツトの上に膨らみが見えた。

彼らはそこに素早く静かに近づき、一人の者が巨大な振動ナイフバイプロフレードを取りだし振りかざすと――

思いつきり力を込めて振りおろした。

「!?」

余りの手応えのなさに慌ててカバーをめくる。

そこには引き裂かれた枕があるだけだ。

「い、いないぞ、どこだっ!?逃げられたか!?」

と、部屋の左隅、暗がりから静かな声が放たれた。

「こんな夜更けに客が来るとは聞いていないが?」

驚愕の気配が侵入者から感じられたその瞬間。

ローディアンが一人、全身でぶつかってくる。

それをクワイ||ガンは右に半身で躲すと、振動ナイフバイプロフレードが風を撒いて

空を切った。

その突き出された右手首を左手で強く掴み、と同時に伸び切つてスキだらけの侵入者の腹部に、右膝蹴りを食らわす。

うっと呻きながら体を二つに折るその後頭部に、両手で組んだ拳を叩きつけた。

脳震盪を起こし崩れ落ちるローディアンを尻目に、彼の手から零れ落ちたナイフをフォースで一瞬の後に引き寄せつつ、もう一人のローディアンが放った消音サイレンサー付きブラスターの光線が、顔めがけて飛んでくるのを紙一重で躲す。

振り返りざま、手首を捻ってナイフを投げた。

ナイフは光のようにビュンツと唸りを上げてローディアンの胸に突き刺さり、勢いで彼の体ごと石壁に串刺しにする。

床に落ちたブラスターをまたもやフォースで手元に呼ぶと、残ったもう一人のクラトウイナンの胸元に銃口を向けた。

その間、僅か10標準秒。

余りの速さに呆然としている暗殺者に

「さて、話してもらえるかな」

クワイIIガンは穏やかに語りかける。

「な、何のことだ」

訛りがある共通語ベシックだが聞き取れぬことはない。しかし、恐怖の色が混じっているらしく苦勞を要したが。

「誰の命令でここに来たのだ？ どうして私を殺そうとする？ 私が誰だか知っているのか？」

「・・・教える必要はないし、・・・聞く必要もないっ!!」

言い放つと、いつの間にか手にしていた丸い物体のスイッチを押し
た。

永遠とも思える一瞬が過ぎたが、何も起こらない。

「言い忘れていたが」

クワイIIガンは微笑んで言った。

「その熱サーマル・デトネーター爆弾の起爆装置は壊れているぞ」

「な、何っ!？」

慌てて自分の右手を見

「くそっ」

途端に床に投げ捨てた。

「俺は何も知らない。教えてもらってもいない。ただ、お前を殺すよ
う言われただけだ」

クワイIIガンは無言でブラスターを構え直す。

「ほ、本当だ。何も知らないんだ」

フォースで探ってみる。恐怖と焦燥があるものの確かに何も知ら
ないようだ。

クワイIIガンは軽く溜め息をつくど、フォースを全身に集め、塊と
し投げつけた。

暗殺者は吹っ飛び壁に激しく激突した後、床に倒れ込んだ。

(執事に連絡した方がいいだろう)

気を失っている暗殺者二人を館の物置に置いてあつた古びた紐で
縛った後、クワイIIガンは身支度をして城へと向かった。

「どうしてあの家に侵入者が・・・」

いまだ寝ぼけ眼で眠い目を擦りつつ、やせ細った執事は問いを繰り返

返した。

彼は寝ている所をクワイⅡガンに起きたため、身支度する間もなく寝間着の上にガウンを羽織った姿で、クワイⅡガンの後をついてくる。

その二人の後ろを城の警備をしていた兵隊達が数人、執事の指令により歩いてきていた。

「王と貴方以外に、私があの家泊ることを知っている者はいますか？」

執事は頭を振って眠気を飛ばすと、はっきりと言った。

「いえ、いません。いないはずです」

クワイⅡガンは溜め息を軽くついた。

「そうですか。しかし、昨日、私があの家に入るのを、誰かに見られたかもしれませんね」

しばらく考え込んだ後、執事が口を開いた。

「・・・クワイⅡガン、たまたまあの家に押し入ったら貴方がいて、驚いて襲ったというのは考えられませんか？」

微笑みを浮かべクワイⅡガンは応えた。

「昨日まであの家は空家だったのですよ。そんな空家にドアを焼き切るようなたいそうな武器を持って忍び込む者がいますか？」

「では、一体誰が・・・」

「それを貴方がたに任せようと思っっているのです。あの者達から何か聞き出せるかもしれませんからね」

目指す館まであともう少しの所。

一瞬、邪悪な気配を感じた。それは刹那のことだったが、クワイⅡガンの心に影を残すには十分だった。

足を止め漆黒の闇を見ずかす。この惑星の衛星である月の明りが僅かに辺りを照らしてはいるが、夜は濃い密度を保ち体に纏わりついてくる。

「どうしました？クワイ・・・」

「しっ」

執事が話しかけるのを制し、クワイⅡガンは視覚を鋭くさせた。

途端、何者かが闇に紛れて素早い身のこなしで去っていくのを感じた。クワイⅡガン達が目ざしている正にその館から。

夜、しかも不慣れな街において追いかけても無理だろうと判断し、クワイⅡガンは眉をひそめつつ建物を見やる。急激に嫌な予感が湧き出てくる。

ややあつて再び歩み始めると、不思議そうに自分を眺めている執事にポツリと言った。

「今しがた、あの館から不審な人物が去っていきました」

「では、侵入者を助け出しに来たのでしょうか？そうであれば、一足遅かったと・・・」

「いえ、そうとも思えません。その人物は一人で去りました。それに・・・」

急にフォースが危険を告げた。思わず足が止まる。

次の瞬間。

目の前の館が大音響を上げて、爆発を起こした。

天を焦がさんばかりに炎の柱が上がる。

嵐のように爆風が押し寄せ、クワイⅡガンはフォースを集めると自分と執事、警備兵達の体を覆った。そのフォースを掠めるように瓦礫となった石や木切れが激しい勢いで飛んで行く。

爆風が収まるとようやく彼らは体を起こした。

「こ、これは、一体・・・？」

その後が言葉にならない。年老いた執事は乱れた白髪も気にせず呆然と佇んだ。

「先ほどの者が、サーマル・デトネーター熱爆弾を仕掛けたのでしょうか。タイマー付の」

顔をしかめながらクワイⅡガンは答えた。

騒ぎを聞きつけ、パトロール・ドロイド P・DとFファイアファイティング・ドロイド F・Dが周辺に駆けつけて

くると消火に飛び回っている。

しばらくして執事も何とか立ち直ると

「や、館の中を捜索してきます」

と言い放ち、従っていた警備兵とともに現場に走っていった。

一人取り残されたクワイⅡガンは思案顔で考えた。

(口封じのためか・・・しかし、何も知らない者達だ。殺す必要があるのだろうか。となると、やはり狙いは私か。どうやら、この街にはジェダイがいると都合の悪い者がいるらしい)

苦笑する。狙われるのは慣れている。だが、早く相手を突き止めねば。

でなければ

(私だけではない。私に関わる者にも被害が及ぶかもしれない)

といった深刻な事態に陥る可能性もあった。

(しかし、本当に誰が私を狙っているのだ？しかも気になることがある。昼間の様子から見て、この街にヒューマノイド以外の人種がいるように思えなかったが・・・)

その時、お馴染みの轟音を立てながら1台のスピーダーバイクが現場に到着した。運転していた者はバイクを置くと、つかつかとクワイーガンに向かって歩いてくる。

「まあ、あなたか」

ヘルメットを脱ぎつつ、ベレルガが噛みつきそうな勢いで言った。

「あなたのいる所には、必ず爆発騒ぎが付きまとうな」

暗にあなたがやったんじゃないのか と言いたそうである。昼の時は信用したが二度目ともなるとその信用も脆くも崩れるのかもしれない。

クワイーガンは思わず苦笑した。

「私が泊っていた家が爆発させられたのだからな。私がいてもおかしくはないだろう?」

ベレルガは廃虚と化し、ようやく火も収まりつつある館に視線を走らせた。

「あの家に?」

「そうだが?」

今度はまじまじとクワイーガンを見つめた。何か考え込んでいる様子が窺える。

そんなくるくると変わる表情を、興味深くクワイーガンは見ている。

沈黙の後、彼女は再び口を開いた。

「あの館は今ではあんなに寂れているが、城から一番近く立派な造りのため、王と深い関わりがある者しか泊れないようになってはいるはずだ。なのに、何故あんなが？」

「関わりが深いなら、城の中に泊るはずではないのか？」

「そうとも言えない。今あの城には王の部屋しか家具類が置いてないんだ。ほとんど全て、争いに巻き込まれた人民に分け与えたからな」
（そうか、そういうことか。人民を城に迎えることもできたが、さすがに他国の使者が訪れた時に都合が悪いということだろう）

「で、もう質問はいいだろ？何であんたはあの家に泊れるんだ？」

「私か？王からこの星に招かれたからだ」

「何のために？」

クワイⅡガンは肩から提げていた袋を担ぎなおした。ベレルガの視線がそちらに向かう。

「王はこの争いに心を痛めておいでだ。そして、心痛の余り床に臥せがちになられた。そこで、病を良く治すと評判の私を呼ばれたのだ」
ぎつしりと薬の瓶が入っているこの袋。身支度する際持つて行くか迷ったが、持つてきて正解だった。

この商売道具はカモフラージュにもなる大事な物なのだ。

「王が、病気にっ!？」

ベレルガは思ったほか深刻な顔つきで考え込んでいる。その顔が必要以上に青ざめていると感じたのは気のせいか。

ちよつとオーバーに言い過ぎたかなと後ろめたく思いつつ、正体を知られないためにもこの方がいいだろうと自分に言い聞かせるクワイⅡガンだった。

「クワイⅡガン、やはり残念なことに生存者はいない模様です」

執事が息を切らして駆けてきた。

「おや、ザアーレじゃないか」

白髪頭の執事に気がついてベレルガが驚きの声を上げる。

「おお、これはベレルガ様。お久しぶりでございます」

この二人の関係が気になりつつも、クワイⅡガンは彼女に微笑みか

けた。

「これで、私が王に招かれたことを信じてもらえたかな？」

ベレルガは顔を背けて足元を見つめ、吐き捨てるように言った。

「あんたのやることなすこと、気に入らないな。筋道が通り過ぎていて」

クワイⅡガンは聞いて微笑む。筋道が通っている——確かに彼女の言う通りなのだ。辻褄が合うように脚色しながら説明してきたのだから。

てつきり逆切れされるかと思いきや、全く逆の効果をもたらしたことにベレルガは一瞬唾然とし、それから怒りに赤く頬を染め、いきなり踵を返すと無言で自分のバイク目がけて走り去っていった。

「本当は心の優しい方なのですが」

取り成すように執事が言った。

「いえ、気にしていませんよ。彼女は鋭い感性を持っている。いずれ私の正体に気づくかもしれません」

「あの方の父親は、この城の近衛隊長だった方なのです。三年前の暴動で惜しくも亡くなられました……。その時、近衛団も解散してしまいました。父親の遺志を受け継いで、あの方はこの街の治安を守ろうとしているのです」

「わかりますよ、彼女は冷徹な心の奥底に熱い情熱を秘めている。王は素晴らしい部下をお持ちだ」

クワイⅡガンはニツコリ笑った。

「ところで、何か手がかりはありましたか？」

「いえ、全く。どういふつもりなんでしょう……。この館を爆破して何の得があるのやら」

無言に徹し、クワイⅡガンは敢えて自分の考えを述べなかつた。いたずらに刺激しても王に多大な心配を与えるだけだ。

「とりあえず貴方が無事で良かった。また新しい家を探しますので、少々お待ちいただけますか？」

「私は無論構いません。その間に街へ出て情報を得るとしましょう」

執事ザアーレは一礼すると、警備兵を引き連れ城に戻っていった。

(この争いを調停するのは、少々やっかいなことになりそうだ)

またしても、オビワンを連れてこなくて良かったと思うとともに、この任務の先行きに暗雲立ち込めるものを感じた。

(嫌な予感がする)

第4話 少女との再会

朝のテレスト通り。

この時間帯だけは武器販売の露天商も影を潜め、変わって様々な食材を売る者達がちらほら見かけられるようになる。ちよつとした朝市のような。

その中で、一際人々が集まっている箇所があった。

押しつ押しされつ賑わいながら買っている人々の手にあるのは野菜だった。

他にも野菜を売る者がいながら、何故この一角に集まるのだろうか？

と突然、他の野菜売りが立ちあがり、誰も寄りつかない自分の売り場を離れると、そこに向かった。手には護身用の電気棒を握り締めている。

「どけ」

その男は買い物客を手荒く追い払うと、野菜を売っている者の前に立ちはだかった。

人々は男の剣幕に押されながらも、どうなることかと近くで見守っている。

茶色いローブを頭から被った小柄な者が、座ったまま男を見あげた。

「何でここで売ってるんだ？」

「いつも売ってる。何も悪いことはしてない」

小さな、しかし、澄んだ声が凜と答える。

「お前がいると邪魔なんだよ、この突然変異がっ!!」

その言葉にローブを被った者はビクツと反応する。

「邪魔だ、行っちゃまえ。行かないと——」

男は電気棒を大きく振りかざした。だが、小柄な者はピクリとも動かない。

引くに引かれぬ男は

「どうなっても知らないからなっ!!」

と言い捨て、棒を脳天目がけて振り下ろし——

「周りから人々の悲鳴が上がり——
小柄な者が身をすくめ——

突如、男は左横から強烈な衝撃を受けた。振りおろした腕が宙を切り、電気棒が危うく男の足を直撃しかける。

「かろうじて躲した彼は、何事かと怒り心頭で睨みつけた。

「あ、ごめんなさい。よろけちゃったんだ」

そこには、すまなそうに謝る一人の少年の姿がある。

よろけたにしては凄まじい勢いでぶつかって来たことにも思い至らず、電気棒が足に直撃しかけたことしか頭のない男は怒鳴った。

「危ないじゃないか、この坊主っ!!」

少年は男を見あげ言った。

「おじさんこそ危ないよ、そんな物振りまわしたら。・・・だって」

ニツコリ笑うと少年は続ける。

「それ、壊れてるから」

「ばかな、先日買って・・・」

と狼狽しながら電気棒を男が見た瞬間、棒からいきなり電気が放出され青い火花を散らす。

「うわわっ」

火花はバチバチ飛び散り、男はスパークする棒をどうしていいかわからず慌てふためく。

「ほらね」

少年は楽しそうにそんな様子を見つめている。

ついに男は棒を放り投げると、バツが悪くなったのか野菜売りの者にも少年にも目もくれず、転がるように走り去っていった。

まだ地面に火花を散らしている電気棒を、通りかかった
清掃ドロイドクリーニング・ドロイドが拾得物発見とばかりに、すかさず拾い上げ持ち去って
いく。

その様子に何となく感心しつつ

「もう大丈夫だよ」

と声をかけ後ろを振り返った少年が見たものは。

主を失った野菜と散らばったクレジット数枚。

売っていた者は忽然と姿を消していた。

(また、行っちゃった・・・)

寂しそうな顔をし、しばし佇む少年の姿があった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

家のドアが音を立てて閉まり、台所で朝食の支度をしていた女性は
何事かと振り向いた。

「どうしたの？」

ドアの前には、茶色いローブを頭からすっぽり被った小柄な者がポツリと立っていた。

女性は一つにまとめた長い黒髪をなびかせ近づくと、しゃがみ込みその顔を心配げに見やる。

「また、何か言われたのね」

かの者はコクリと頷くと、女性にしがみついた。フードがはずれ、美しき長い薄紫色の髪が溢れ出た。まるで止めど無く流れる涙のよう
うに。

無言で女性は抱き締めた。

その時、閉じたドアから軽いノックの音が聞こえた。

顔を上げると、体を離し女性が言う。

「いいわ、私が出る。あなたは奥にいて」

ゆつくりとドアに近づきしばらく様子を窺った後、彼女は勢い良く
ドアを開けた。

そこには、手に抱えられるだけ野菜を持った少年が微笑を湛えて
立っていた。

「あの・・・？」

不審な眼差しで問いかける女性に、少年は慌てて

「あ、あの、これ、あの子がテレスト通りで売っていた野菜なんです。
で、こちらがクレジット、野菜の代金です。置いていっちゃったか
ら・・・」

しばらく考え理解したのか、女性はようやくホツとした表情を浮か
べた。

「ありがとう。わざわざ持ってきてくれたのね」

女性の後ろから今のやり取りを聞いていたのだろう。ローブ姿の女の子が顔をおずおずと覗かせた。

それに気づいた少年はニツコリ笑って

「こんにちは。また会ったね」

と挨拶を投げかける。しかし、少女は沈黙したままだ。

「あら、知り合いなの？」

女性は不思議そうに問う。少女は思いつきり首を横に振った。

(う・・・)

シヨックを受ける少年を余所に、女性は何事かを察した風に微笑みを見せて言葉をかけた。

「折角持ってきてくれたのだし、あなたもどう？これから朝食なの」

「あ、いえ、そんな。」迷惑はかけられません」

途端にお腹が鳴る。少年は耳まで真っ赤になってうつむいた。

ニツコリ笑うと女性は少年を家に招き入れた。

目の前には決して豪華とは言えないが、美味しそうなパン、サラダ、野菜スープが並んでいる。

「さあ、どうぞ。お食べになって」

女性は微笑んだ。

「はい。本当にすみません・・・いただきます！」

言うが早く、少年は手を動かし料理を口に運ぶ。その食いつぷりに呆れつつ可笑しさを感じ、女性と少女は顔を見合わせると声を出して笑った。

しばらくして人心地がついたのだろう。少年は二人の視線に気づき慌ててスプーンとフォークを皿に置くと、照れながら言った。

「すみません、昨日からほとんど何も食べていないんです」

今まで無言で食事を取っていた少女が初めて口を開いた。

「あなた誰？テラフでもオレベフでもないでしょ？見たことないもん」

女性も同感だと言わんばかりに小首を傾げ、少年を見やる。

「僕はオビィワン・ケノービと言います。昨日の夕方に来たばかりなので、まだこの星のことがよくわからなくて・・・テラフとオレベフっ

「何ですか？」

口を開きかけた少女を制し、女性が話し始めた。

「この街クテラはちょうど丸い形をしているの。その丸い街の南北を貫くようにテレスト通りがあつて、今は西と東。ウエスト・クテラとイースト・クテラという呼び名で分散されていて、ウエスト・クテラにはオレベフが、イースト・クテラにはテラフが住んでいるわ。昔から住んでいた住民達と、この星がコルサントに近いのに排他的であることに目をつけた、世捨て人のような者達が後から来て、両者を区別して前者を先住民^{オレベフ}、後者を後住民^{テラフ}と呼ぶのよ」

「その・・・先住民^{オレベフ}と後住民^{テラフ}というのは互いに争っているんですか？」
「昔は確かにいざこざがあつたけど、今ほどじゃなかった。三年前ある事件があつて暴動が勃発したの。それ以来、激しい争いに発展してしまつて・・・」

「ある事件？」

「ごめんなさい。今は余り話したくないの」

女性の顔が顕著に曇る。オビⅡワンは慌てて話題を変えた。

「あ、すみません。変なこと聞いてしまつて。・・・貴方がたはどちらになるんですか？」

「私達は後住民^{テラフ}よ。四年ほど前にこの惑星に来たの。あら、ごめんなさいね、自己紹介がまだで。私はリシータ。で、この子が」

その言葉を引きとつて少女が言葉を継いだ。

「リアウイステ。リアって呼ばれてる」

「よろしくね、リア」

ニツコリ微笑みながら自分を見るオビⅡワンに、リアはポツリとまるで独り言のように呟いた。

「・・・あなたはリアのこと、他の人みたいに見ないのね」

「えっ？どうして？」

「リアの髪、普通と違うのに・・・」

「うん、最初見た時、驚いた。すごくきれいな髪だと思って」

「それだけ？」

「それだけだよ。どうして？」

不思議そうに見つめるその眼ざしに

「・・・何でもない」

急に居心地が悪くなったのだろう、リアは席を立つと

「ごちそうさま」

と言つて家の外に出て行ってしまった。

不意に家の中が静けさを取り戻す。ややあつてリシータが言う。

「オビⅡワン、リアと仲良くしてあげてね。・・・あなたにだったらあの子、心を開くかもしれない」

「?・・・はい。でも、僕を信用してくれるんですか?今、会ったばかりなのに」

「そんなに澄んだ瞳をしているんですもの。信用するわ」

リシータは儂げに微笑んだ。大人の女性にそう言われ、オビⅡワンは頬を赤く染めると、照れ隠しのために再び食事に専念した。

第5話 触れあう思い

食事を終えるとオビⅡワンは家の外に出て、リアの姿を探した。

彼女はほどなく見つかった。腰まで達するかという薄い紫色の長い髪を後ろで軽く三つ編みにし、一生懸命、目の前の畑で水撒きを行っていたからだ。畝の間にスプリンクラーのような装置が転々とし、畑の隅にある装置のスイッチを入れると一斉に水を放出する。

日の光を浴びてきらきら輝く水は命の水となり、畑に生育している野菜に降り注ぐ。野菜はその恵に喜び、小刻みに体を震わせているように見える。

オビⅡワンはリアに近づくと声をかけた。

「すごい畑だね。これ君の家の?」

「そうよ」

あくまでも仕事に専念しつつ少女は応えた。でも、他の者に対するほどの冷たさはない。オビⅡワンには心を許しているのか?

逆にリアが訊ねた。

「よく家がわかったね」

「君が売っていた周りの人達に聞いたんだ、家の場所を」

「場所だけ?他に何も言っていなかった?」

「いや、別に」

何かを考えるようにリアは沈黙する。無言のまま水分放出機を止めると畑に向かった。オビⅡワンも慌てて後をついていく。

畑にしゃがみ込み、生えている雑草をむしりながら、ようやくリアは口を開いた。

「・・・リアは特別へんいなんだって」

「とくべつへんい?」

突然の聞き慣れない言葉にオビⅡワンは意表を突かれ、ただ鸚鵡返しに訊ねた。

「いでんしの情報が変化して、急に両親とはちがう固体になること」

「む、難しいこと、知ってるんだね」

リアは勢い良く雑草を引き抜いた。まるでそれ自体に怒りをぶつ

けるように。

「だって、リアを見た人は必ず言うんだもの。特別へんい、いでんしが変わったんだって」

「違うようには見えないけど」

「・・・このかみの色。普通の人じゃないって。でもリアが特別へんいじゃないのに」

「?・・・お母さんの髪の色は黒だね」

「ママ? そうだけど。ああ、違うの。リシータはママじゃないの」

「えっ? 違うの?」

「だってリア、10標準さいだよ。リシータは24標準さいだもん。」

リシータはね、ママの妹なの」

「じゃ、お母さんは?」

「・・・三年前死んじやった」

「ごめん・・・」

つかの間、沈黙が全てを支配する。

オビⅡワンは困惑して、かけるべき言葉を必死に考えた。そんな彼の心を知ってか知らずか次に言葉を発したのはリアだった。

「あの場所ね・・・ママのおはかなの」

「えっ?」

不意に会話が飛んだため、オビⅡワンは頭を目まぐるしく回転させ記憶を辿る。ついにそれに相当する場所が見つかった。リアと最初に出会った場所だ。

「あの・・・ウエスト・クテラにあった、壊れかけた家のこと?」

「そう。あの家にはリアとママが三年前まで住んでいたの。リシータは四年前ここに来たって言ってたけど、あれはうそ。四年前この星に来たのはリアとママ。リシータは体が弱いから、昔からここで野菜を作っていたんだ。だれにもかんしゅう・・・かんしょ・・・」

「干渉?」

「そうそう、かんしようされなくて気持ちが悪だからって。それに街の空気、特によごれている空気が体に良くないから街のはずれにいるの、とも言ってた」

「……」

「……でね、三年前ママがあの家で殺され、家がばくはされてから、あの家がママのおはかになったの。ママの体、ドロイドに持ってかれちゃったから……」

「またしても会話に飛躍が生じた。この飛躍はリアが言いたくないことを隠すために使うのだと、オビⅡワンは薄々感じ始めた。」

「それで、あの時もあるそこにいたの?」

「時々さびしくなるとあの家に行くんだ。先住民側オレベフにあつて危ないけど、ママに会うために」

「なんとなくわかる気がした。形見も何も無い状態で、唯一あの場所だけがママを思い出させる心の拠り所なのだろう。あの壊れた廃墟だけが。」

「少しずつ移動しながらリアは無心で雑草を引き抜いていた。だが、オビⅡワンは彼女の中に誰にも悟られないようにしまい込んだ、哀しみの感情を見た。」

「この街ってドロイドが多いんだね」

「自分でもあまり冴えた会話のかわし方じゃないなど内心苦笑しつつ、オビⅡワンは話題を変えた。」

「うん。パトロール・ドロイド ファイアファイティング・ドロイド クリーニング・ドロイド でも、争いで死んじやった人を片づけるドロイドもいるし、人を殺すドロイドもいるよ」

「本当に!?!」

「この街はね、人からかんしようされるのが嫌いな街なの。だからドロイドが多く使われている」

「そんなものなのかな……?」

「少年は割り切れない物を感じながら言った。街それぞれ個性がある。それはその街の歴史でもある。それでも……」

「それでも……寂しくはないのかな。人との関わりがない街なんて」
「突如リアが意を決したように顔を上げると、オビⅡワンの顔を真剣な眼ざしで見つめた。」

「それより、あなたジェダイ?」

「えっ!?・・・どうしてそう思うの?」

オビⅡワンの心臓が早鐘のように鳴る。フォースを使うのは極めて限定した。バレるはずなんて・・・

「だって、この前も今日も不思議な力を感じたもん。少しだけだけど」
「君もフォースを感じられるの!?!」

「フォースっていうんだ、その力」

(げっ・・・しまった。つい・・・)

オビⅡワンは呼吸を整え平静さを取り戻そうとする。本当のことを言うべきか、言わざるべきか――

真摯な視線に耐えかねて、彼は口を開いた。

「僕はジェダイじゃない。確かにジェダイを目指していたけど、フォースが弱くてなれなかったんだ。ジェダイになれない者は農夫になるしかなくて・・・で、僕はこの星に農夫として来たんだ。この星の食糧不足をなくすために」

ちよつとオーバーに言い過ぎたかなと後ろめたく思いつつ、正体を知られないためにもこの方がいいだろう、だって、クワイⅡガンのパダワンになれなかったら本当に農夫になるところだったし。きつと、マスターだったらこのように対応したはずだと自分に言い聞かせるオビⅡワンだった。

「なんだ、ジェダイじゃないんだ。ジェダイだったらリアのパパのこと、知ってるかと思っただのに」

「リアのお父さん、ジェダイなの!?!」

「パパはジェダイだから銀河を飛び回っているのよって、いつもママが言ってた。あなたの髪の色もパパそっくりねって。でもリアはパパのことを覚えてない。パパを探すためにあちこちに行ったけど見つからなくて。リアのこともあって疲れたママはこの星にやってきたの」

「そうなんだ・・・」

悲しげな表情をする少年に、元気づけるようにリアは明るく言った。

「でも、オビⅡワン。農夫ならリアの畑を手伝ってくれるよね。いい

？」

☆☆☆☆☆☆☆☆

夕食の後片づけをしながら、リシータが言った。

「オビィワン、もし行くあてがないのなら泊っていてもいいのよ」

「そ、そこまで甘える訳にはいきません」

それを聞いてリアがニヤニヤしながら意地悪く言った。

「じゃ、行くあてがあるんだ」

「う……」

「遠慮せず泊っていきなさいな。私達も男の人がいた方が気が休まるもの。家についても安全とは限らないのよ、この街では。それに夜は特に危険なの。外に出る人はほとんどいないわ」

「僕、まだ子供ですけど……」

「大丈夫、あなた、しっかりしているから」

微笑みさえ漂わせているリシータの言葉にオビィワンは一瞬頬を赤く染め、それから真剣な瞳で訊ねた。

「この街には治安を守るものはいないんですか？ そういった組織とか」

「今は全く麻痺しているわ。 パトロール・ドロイド P・Dだけが見回りを行い、異変があるとセンサーで関知し駆けつけてくるけれど、彼らには処理能力はないの。以前だったら、そのP・Dが集めたデータを処理し、事件の内容や原因・犯人を特定していったのだけど、争いが起こると真っ先にそういった組織は壊滅させられたものだから」

「先住民の人達って、そんなにひどいこと行ってるんですか？ テラフ 後住民に対して」

「リアから見れば先住民も後住民も同じだけど」

「……先住民は集団で襲うの、人や家々を。彼らが去った後には殺戮のあとしか残ってない。血も涙もない人々よっ」

リシータは肩を震わせた。

「現に姉だって……姉だって……っ」

「ごめんなさい、あなたを悲しませるつもりはなかったんです。ただ……争いを終わらせられないかと思って」

「無理よ」

「それは無理ね」

「無理なんですか？」

リシータは俯いたまま言った。きつぱりと。

「ここまで争いが激化するともうだめ。この争いは誰にも止められない。誰にも」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

夜、皆が寝静まった頃。

不意に妙な気配を感じオビⅡワンは目を開けた。すぐさま頭をはつきりさせる。気配はまだ漂っている。

(この家からじゃない)

それに気づきしばし安堵する。だが、胸騒ぎを感じさせる気配。邪悪な感情。

オビⅡワンは隣りの部屋で寝ているリア達を気づかいそつとベットから身を起すと、身支度をし、家の外に出た。

月(衛星)が辺りを明るく照らしている。畑の野菜も光を浴び青白く染まっている。

オビⅡワンは腰のライトセーバーを確認すると、気配が立ち込めている場所に小走りで音も立てずに駆けていった。

と急に立ち止まり、家の物陰に隠れると息を潜める。

道の右手にある大きな家から、複数の影が飛び出てきたからである。彼らは手に何かを抱え忍びやかに去っていく。

(一体、何者なんだ?)

彼らが視界から消え失せたのを確認するとオビⅡワンはその家に走り寄り、少し開いているドアから中を窺う。

勿論何があっても良いように、僅かにフォースを伸ばしながら。

中を垣間見た途端

(うっ・・・)

オビⅡワンはしばらく絶句した。

中は荒らされ、椅子やテーブルが転がっている。

壁には切り傷がつき、カーテンは切り裂かれ、金目の物はほとんど

なくなっているようだ。そして。

かつて人だった原形を留めないほどの肉片が、床一面を染める血の池に浮かんでいる。転がる手や足が辛うじて元の姿を推測させる唯一のものだった。

(どうして・・・こんな・・・ひどいことを)

ショックを受けて思わず後ずさる。膝はガクガク震え、口の中に苦いものが込み上げてくる。

オビⅡワンは吐き気をなんとか堪えると、心を落ち着かせようとした。

息を数回吐き出し、だんだん気持ちが落ちついてくると、おもむろに腰からライトセーバーを取り出し起動させる。

光は、青ざめたオビⅡワンの顔をますます青く見せた。

彼は家の周りを囲む塀に向けて、セーバーを切りおろす。

ガラララ・・・ッ

轟音とともに衝撃が夜の静寂を走る。

異変に気づいたP・Dが音の元に飛んでくるのを感じつつ、あとはドロイドに任せるためオビⅡワンは急いでその場を去った。顔を悲憤に染めながら。

そんな彼の様子を、暗闇からそっと眺めていた影があったことにも気づかずに。

第6話 忍び寄る危機

「お早うございます……」

「お早う、オビⅡワン。昨日はゆっくり眠れたかしら？」

「は、はい……」

嘘だ。昨夜はあの一件以来、全く眠れなかった。目をつぶるとあの惨劇の様子が瞼の裏に蘇る。食欲もはつきり言っていない。

「あの……リアは？」

「あの子ならテレスト通りに出かけたわ。今朝取った新鮮な野菜を売りに」

「昨日あんなことがあったのにな？」

「何があったか知らないけれど、あの子は強い子よ。私とは全然違う……」

「え？」

「何でもないわ。それより朝食は？食べるでしょ？」

「すみません。ちよつと食欲がなくて」

「もしかして、あの事件を情報端末のニュースで見たの？」

「あの事件？」

「昨日の夜、もう深夜といってもいい頃だけど、ここからちよつとしか離れていないネイガントさんの家に先住民が強盗に入ったらしいの。すぐさまP・Dが駆けつけたけど、悲惨な状況だったらしいわ……」

あ、ごめんなさい。余計に食欲をなくしてしまったかしら。大丈夫？顔が青いわ」

「だ、大丈夫です。ちよつと外の空気を吸ってきますっ」

オビⅡワンは言い放つと、慌てて外に飛び出た。

青い空が広がり、澄み切った朝の風が頬に心地よい。瑞々しく茂った畑の野菜が涼風に揺られている。

深呼吸を何回か行くと、ようやく気分がすっきりしてきた。

(まだまだダメだな、こんなんじや。ジエダイらしくない)

深い深い溜め息を漏らす。

「どうしたの？」

「うわっ」

戻ってきたリアの気配に全く気づかず、オビⅡワンは驚きの声を上げた。

「そんなに驚かなくてもいいのに」

「ごめんごめん。全く君の気配に気づかなかったものだから」

「だめね、そんなんじゃない。あなた本当にジェダイ？」

呆れたようにリアが鋭い言葉を発する。オビⅡワンはしどろもどろになりながら慌てて応えた。

「ち、違うって、昨日言った・・・」

「昨日の夜、リア、あなたを見たの。ネイガントさんの家の近くで。あなたきれいに光る武器出したでしょ。あれジェダイの武器でしょ？」

心臓がキュツと音を立てて縮まるような気がする。顔が青ざめた。

「あ、あの場に君もいたの？」

「あなたが家を出る気配がしたものだから、気になったの。それで後をつけたわけ。大丈夫だった？ 気持ち悪そうにしてたけど」

（みつともないところを見られた・・・）

「そんなに落ち込まない。元気だしなよ」

（どっちが年上かわからない・・・）

ますます落ち込むオビⅡワンに、リアはニッコリ笑いながらパンパンと肩を叩いて励ますのであった。

（でも、僕の隠した気配に気づくってことは、さうとうフォースが強いんだろうな）

「本当にリア、フォースが強いんだね。まだ10標準歳なんだよね？ なら急げば可能性があるかも」

「何の？」

「ジェダイのパダワン —— 弟子ってことだけど —— になれるかもしれない」

「リアがジェダイになってどうするの？」

「そうしたらお父さんを探すことができるかもしれない、ね？」

「パパを・・・？ でも、ジェダイになるって大変なんですよ？」

「君ぐらいフォースが強ければ大丈夫だよ、多分」

「リアがジエダイ……。そしたらパパに会えるかも……。でもリア、リシートを置いてはいけない……」

「そうだね……」

オビⅡワンは寂しそうに微笑んだ。

「ねえ、どうやったらフォースを使えるの？」

「君がいつもやっている方法を使えばいいんだよ」

「いつもやっている方法？」

「野菜を育てる時に君は意識しなくてもフォースを使っているんだ。だから野菜がおいしくなって、多くの人達が買いに来るんだよ」

「リアはただ、一つ一つの野菜に愛情を込めて世話しているだけだよ」

「そう。フォースを使いこなすには集中力が必要なんだ。それを君は実践しているって訳」

「集中力ね。わかった、ありがとオビⅡワン」

リアは輝くばかりの美しい笑顔を見せた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

後ろから規則正しいエンジンの音が風に乗って流れてくる。

それはテスト通りを南下するクワイⅡガンの後を、一定の距離を保ちながらびったりついてきていた。

彼は思わず苦笑した。

音の主はわかっている。声を掛けにくいのだろう。そろそろこちらから助け船を出してやった方がいいのかもしれない。

クワイⅡガンはゆっくりと振り向いた。

「や、やあ」

スピーダーバイクに跨ったベレルガが、慌てて手を上げて挨拶した。

「面白い物かな？」

「い、いや、たまたまあんたを見かけたから。その……一昨日はひどいこと言ってごめん。あたしも爆破事件が多くてイライラしてたんだ」

「別にはしてないが」

「それは良かった」

心からホツとしたような声を漏らし、ベレルガはバイクから降りた。

クワイーガンの横に並ぶと、スピーターバイクを引きながら歩調を合わせ歩き始めた。ただ少し大股気味にはなつたが。

しばらく無言のまま歩く。どうやらベレルガは今までと打って変わって話しにくそうだ。

逆にクワイーガンから話の口火を切った。

「昨日も爆発があつたようだな」

「ああ、3件ほどね。しかも1件は図書館ライブラリーだぜ。あんな所に何の脅威があるってんだ？ 後住民テラフの奴等、全く手加減というものを知らない」吐き捨てるようにベレルガが言う。彼女自身、自分の力が及ばないことをいまいましく思っているのかもしれない。

「今まで多くの爆破事件があつたと思うが、犯人は捕まっているのか？」

「全くだね。そういつた事件を調査し、犯人を逮捕する組織は、真つ先に破壊されたんだ。野放し状態だよ」

話の焦点がこの争いに向いている今なら、聞くチャンスかもしれない。

クワイーガンは一番聞きかかったこと、この先住民オレベフと後住民テラフの争いの元となつた原因を聞くべく、話を振った。

「そうか。．．．ところで、三年前に何があつたのだ？」

ベレルガは不思議そうな顔つきをし、しかし、暗い表情を浮かべながらも素直に答えてくれた。

「商人なのに変なこと聞くね。ま、いいけど。．．．ちようど三年ぐらい前に、一人の先住民オレベフが街で複数の後住民テラフに殺害されるって事件があつたんだ。しかもその先住民オレベフは現王の母君でさ。王家はこの街

——特に先住民オレベフにとって街の象徴だったから民衆は怒り狂つたんだ。．．．それで、後住民テラフの人々と争いが始まつたんだ」

「後住民テラフに復讐したのだな？」

彼女は辛そうに頷いた。黄色味がかかった赤い髪がサラサラと揺れる。

「あの時、民衆の心は狂ってたからね。結局、犯人は捕まらないし、後住民たちも、誰もかれも知らないと言い張って犯人を差し出そうとしない。かくまっているんじゃないかって疑い、何十人何百人という後住民の人々を殺したんだ」

「それが今にまで尾を引いている——と」
「ああ」

クワイⅡガンは一瞬ジェダイ・マスターの顔つきに戻ると、さりげなく、しかし、慎重に訊ねた。

「敢えて聞くが、この争いは終わると思うか？」

「無理だね。こうなったら誰にも止められないよ」
重苦しい沈黙のみが存在した。

テレスト通りには相変わらず武器の露天商が並び、威勢の良い掛け声が飛びかわっている。また、その露天商めがけて客が集まっていた。

そんな中、二人は黙々と歩いていた。

ベレルガが独り言を呟くように言った。

「あたしき、三年前、近衛団が解体しちまった時に、近衛隊長だった父さんの遺志を受け継いで、この街を守って行けるって自信があったんだ。でも、浅はかだったよ」

いささか自暴自棄気味な彼女に、クワイⅡガンは元気づけるかのように微笑を浮かべた。

「それでも必死に守っているのだろう？この街を。命がけで。執事のザアーレにも言ったことがある。王は素晴らしい部下をお持ちだな」

「素晴らしい部下ってあたしのこと？」

「他に誰がいるかな？」

クワイⅡガンは微笑んだ。

一瞬、頬を染めて照れを見せたベレルガだったが、それを隠すように慌てて口を開いた。

「そ、そうだ、あたしの仲間を紹介するよ。あたしと同じようにこの街を守りたいっていう、命知らずな野郎どもをね」

まだ情報が少なすぎる。そう考えクワイⅡガンはベレルガに付いていくことにした。

誘われるまま右手、ウエスト・クエーラの細い路地に入り込んだ。しばらく歩くと広場、と言ってもそれほど広くない、どちらかと言えば空き地と言った方が的確な場所が見えてくる。

そこには何台かのスपीダーバイクと男達が屯っていた。

「何もない時はあいつら、あそこにいるんだ。で、好きなバイクの手入れや改造をしているって訳さ」

ベレルガの説明にクワイⅡガンは静かに頷く。

向かってくる二人に気づいたのか、男の一人が声を掛けてきた。

「よ、ベレルガ。その男は？」

「つい先日知り合った薬の商人で、クワイⅡガンって言うんだ。で、クワイⅡガン、こつちがセニス家の名立たる四人兄弟さ」

クワイⅡガンは会釈をした。ベレルガが引き続き言葉を継ぐ。

「これが長男のロイことナプロイサス」

逞しい二の腕を見せ力を誇示する長男。

「で、そっちの神経質そうなのがデイルことデイルフオダ」

「神経質そうで悪かったな」

と苦笑しながら、しゃがみ込んでバイクを磨いている男がポツリと呟いた。

ハハハと口を開け、ベレルガは紹介を続けた。

「セニス四兄弟一の美男、クーンことサシクーン」

「どうも」

額にかかる髪をかきあげつつ優男が挨拶を返す。

「最後に、まだまだやんちゃなジョンことクイルジョン」

「こんにちはっ」

まだ青年にも達していないだろう年齢の少年が立ちあがって、ぴよこりとお辞儀をした。

「セニス家も代々、近衛として王家に仕えていたんだ。で、三年前から一緒にこの街を平和にするために闘っているのさ」

一通り男達を眺め渡し、クワイⅡガンは感心して言う。

「頼もしい男達だな」

「だろ？だから、あたしも遅しくなるって訳だ」

男達の間から笑いが上がった。つられてベレルガも笑い出す。クワイールガンも微笑みを見せた。

が、突然、その笑いが凍りついた。

彼らがいる空き地を囲み、何十体という、しかも見たことのないドロイドが突然降って湧いたように現れたのだ。

高さは1m80cmほど。頭は逆三角形をし、両隅に複眼のような目がついている。首は細く、胴部と腹部とは関節のような部位で繋がっている。

腹部の脇から生えるように二本の足が出、しかも、くの字に曲がり長い足の甲へと伸びている。

そして手。胴部から生えるその手は、それ自体曲線を描く鎌となり獲物を求めている。

ざっと見て20体ほど。

「シクル・ドロイドだっ……」

ベレルガから思わず漏れた叫びを聞きとがめてクワイールガンが訊ねた。

「聞いたこともないが」

「テラフ後住民に狂った科学者がいるんだ。そいつの工場で生産している。

鎌が見えるだろ？だから、あたし達は鎌ドロイドシクル・ドロイドって呼んでるんだ。

しかも厄介なことに、あの体、ブラスタアが利かない。撥ね返してしまふのさ。それにすごい跳躍力を持っている。3mは軽々跳ぶね。

付け加えてあの鎌ときた」

「では、こちらに攻撃してくるとなれば、あの鎌と跳躍だけが脅威となる訳だな」

「まあね。でも、あんまり甘く見ない方がいい。奴等にはもう何十人と殺されているんだ」

「そのドロイドが何故ここに？」

「きつとあたし達を殺りにきたんだ。ついに目障りになったんだらうよ」

男達が口々に声を上げた。

「ベレルガ、すっかり囲まれているぜ」

「どうする？」

こんな事で弱腰になるようなベレルガではないことは皆、承知していた。ただ指揮をとってもらいたかったのだ。

「どうするもなにも・・・強行突破しかないだろうっ!!・・・クワイ||ガン、すまないね。あんたを巻き込んでしまった。あたし達が逃げ道を作つたらすかさず逃げてくれ」

(もう潮時だな。これ以上ライトセーバーなしでは闘えまい)

「いや、私が道を切り開く。道が出来たら君達こそ逃げるんだ」

「無理だよ、あんたじゃっ!!」

「ただの商人ならそうだろう。だが、私は違う」

クワイ||ガンは、今までポンチョに隠れていたライトセーバーを腰から抜き放ち起動した。

美しい碧色に輝く光が皆の目を射る。

「あんた・・・やっぱり」

「私が合図をしたら行くんだ。いいな？」

有無を言わさぬ迫力にベレルガは思わず肯く。

円陣を組みドロイドに睨みをきかせているバイク達の前に静かに歩を進めると、クワイ||ガンはライトセーバーを右に構える。

ドロイドが一斉に鎌を振り上げ、この中で一番手強そうな獲物に襲いかかった。

第7話 混乱する事態

瞬間、クワイールガンは身をかがめ左へと走りながら、セーバーを右から横薙にした。

腹を切り裂かれた2体のドロイドが倒れる。

左目に姿を捉えると、すかさずセーバー持つ手を返し、左下段から右に切りあげる。

右上から跳躍し飛び込んできたドロイドの腹部にセーバーを突き刺すと、それを左に勢い良く振り払い奥にいる奴等にぶつける。

その勢いにかけて、左から襲ってきたドロイド数体の鎌と首を一瞬に切り落とす。

と同時に前方に駆け出した。

体を横に一回転させて勢いをつけると右下から切り上げ、正面に立っているドロイドの頭上からセーバーを切り降ろす。

するとドロイドの群れに隙間ができた。

バイクが1台通ることができるようぐらいの間が。

「行けっ!!」

クワイールガンの合図により、バイクが轟音を立てて1台また1台と駆け抜ける。

ドロイドを牽制し、向かってくる物は切り捨てつつ、彼は5台全てが通り過ぎるまで待ち、通過した直後、彼もドロイドの輪から抜け出した。

しかし、まだドロイドの群れに対峙している。

「クワイールガン、あんたも早くっ!!」

15mほど向こうからベレルガが叫ぶ。

ジェダイ・マスターは静かに言った。

「いや。このドロイドをこのまま放置する訳にはいかない。私達が立ち去れば、他の者を襲うだろう」

彼が輪から抜け出したのは、周囲から向かってくる敵と闘うより、前方だけに集中すれば良い戦法を選んだがためだった。

ドロイドも侮りがたい敵と見たのか、容易には攻撃をしかけてこな

くなくなった。

このまま睨み合いが続くかと思われたその時。

クワイ||ガンは突然危険を察知し、右横へ跳ぶように転がった。

つい一瞬前まで彼がいた空間を裂くように、巨大な光線が尾を引いてドロイド達に炸裂する。

一発二発三発と。

飛び散る破片をフォースで遮り、辺りが静かになったと見るやクワイ||ガンは体を起した。

キャノン砲に爆撃されたドロイド達は跡形もなく瓦礫と化している。

「大丈夫かい？クワイ||ガン」

近寄ってきたベレルガがニツコリ笑いかけた。

少し唾然としていたクワイ||ガンだったが、吐息とともに苦笑する。

「ずいぶん派手だな。私に当たることは考えなかったのか？」

「それは全く考えなかったさ。だってジェダイだろ？」

再びクワイ||ガンは苦笑するしかなかった。

「あれの」

とベラルガは後方にある、愛車に付いている改造型キャノン砲を指差し

「使用には二つ難点があつてね。一つは敵が近距離にいたら使えない。自分も巻き添えを食うからね。もう一つはエネルギーを大量に消費するんだ。あまり使うとバイクが走らなくなっちゃう」

「クワイ||ガン、あんた、すごいんだなっ」

駆け寄ってきたジョンが目を輝かせる。

「ばか。偉大なジェダイだぞ。敬意を払うんだ」

次男のデイルに頭をこづかれ、ジョンは舌を出した。

「しかし、あなたがいれば先住民は安心ですね。これで後住民の奴等なんて目じゃないぜ」

ロイが勝ち誇った笑みを浮かべると、皆がそれに呼応し志気が高まった。

ただ一人、無言で眉をしかめるジエダイ・マスター以外は。

「ただ言っておくが」

ややあつて溜め息をつくつと、クワイⅡガンは皆の喜びに水を差した。

「私はどちら側にもつかない。中立な立場をとらなくてはならないのだ、ジエダイとして」

「だけど、あんたは王に招かれたって言ったじゃないか。あれは本当なんだろうか？」

ベレルガが食い下がった。

「確かに王に招かれた。しかし、それはこの街の争いをなくすよう要請を受けたからだ。それ以外の何物でもない」

クワイⅡガンの返答に今度はロイが切り返した。

「争いはなくなるでしょう。貴方がこちら側についてくれれば。後住民なんてあつという間です」

「それでは根本的な解決にならない。後住民の意見はどうなる？」

「後住民の意見なんて聞く必要はありませんよ」

「ベレルガ。君はどう思うのだ？」

俯いてやり取りを聞いていた彼女に、クワイⅡガンは声をかけた。

「あたしは・・・争いがなくなればそれでいいと思ってる。争いがなくなり後住民とも平和的に暮らしていけるのならそれで。だけど、そんなことできるんだろうか。今まで多くの血を流しすぎた。こんな悲惨な争いを簡単に終わらせるなんて」

「簡単には行かないだろう。だが、終わらせなくてはならない。こんな無意味な争いは」

押し黙ったままのベレルガ達を一通り見渡すと、クワイⅡガンは再び口を開いた。

「それにあのドロイド達は、私を倒すために送られてきた可能性もある。結果的には君達を助けたことになったが、ジエダイにとって危険にさらされている人々がいれば助けるのは当たり前のこと。それによつて先住民側オレベフについたということにはならないはずだ」

「それでも・・・ないんだ。ほら」

苦笑を浮かべたベレルガが上を指さした。

クワイⅡガンは見あげて呆然とする。

周囲の建物の二階から、この騒ぎを見ていた多くの人々の顔が覗いていたからだ。

彼らの表情から期待と興奮と優越感がひしひしとうかがえる。

(やっかいなことになったな・・・)

クワイⅡガンは溜め息を漏らすしかなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「どのような状況ですか？マスター・ジエダイ」

エルカスト城に報告しに行ったクワイⅡガンに対し、開口一番、王は訊ねた。

「ますます困難な状況になりつつあります」

溜め息を飲み込んで、今までの出来事をかいつまんで正直に告げる。

「そうですか・・・」

と王は言ったときり沈黙に面を浸した。

クワイⅡガンも跪いたまま思案に暮れる。

ややあつてジエダイ・マスターは言葉を紡ぎ出した。

「聞きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？賢明なる王よ」「何なりと」

「この街の生い立ちとはどのようなものですか？」

「先祖代々から受け継いでいる知識に添ってお答えしましょう。この惑星エルフィダイスは誕生してからこのかた、溶けることのない厚い氷河に覆われておりました。光を与えるはずの輝く恒星からも離れていたからです。しかし、何百年か前に、この星に一個の隕石が衝突し、巨大なクレーターを穿ったのです。その跡は思いのほか深く、その分、惑星のコアに近づいたため、氷河に覆われた地表より温度が高くなり、人々が住むに適した土地となったようです。その後、私の先祖のアジェス王がこの地を発見、一緒に来ていたヒューマノイドたちとともに開拓し街を築き上げ、そして、代々アジェスの名とともにその地盤は受け継がれてきました。そのクレーターこそがこの街なの

です」

「この星には他に街はない。だから、排他的になるのですね」

「先住民^{オレベフ}達は自分達が造った街だという自負があります。そこに、他の惑星から来た人々が住みつく。普通の星々であれば問題はないのですが、この街では排除の原因になるようです。それはヒューマノイドに限らず他の人種に対しても同じなのです」

「今現在、テレスト通りを隔てて、ウエストとイーストにはつきりと分断されていますが、政治や経済も別れているのでしょうか？」

「政治や経済は無きに等しい状態です。先住民側^{オレベフ}は私の統治に従っておりませんが、後住民側^{テラフ}は新たに政府を造りました。しかし、混乱状態が続く今、両方ともうまく機能しているとは言えません」

「最後にもう一つ。聞くのものはばかられる質問なのですが。・・・あなたの母君のことです」

途端、現アジェス王は苦悶の色を浮かべた。最も思い出さたくもない記憶なのだろう。しかし、彼はその質問を真っ向から受けとめた。

「女王は、私から見ても聡明で賢く、父王を影から支えていた素晴らしい女性でした。私と女王はよく人目を忍んで街に出かけました。街の実態を知り王に伝えることが私の務めと、よく女王はおっしゃっていましたから。そして、私も次期王として、街の現状を知ることが大切だとわかっていましたから。ところが、三年前のあの日、たまたま私に用があり、一緒に行けなかったあの日・・・女王は路地^{テラフ}で後住民のならず者数人に囲まれました。女王は自分の身分を打ち明け、慈悲を乞うたようですが・・・そのまま帰らぬ人となったのです」

しばしの沈黙の後、クワイⅡガンは静かに言った。

「ご心痛お察しいたします。大変^ご無礼なことをお聞きして、申し訳ありませんでした」

「いいのです。もう・・・過ぎたことですから」

「いろいろとありがとうございました。では、失礼させていただきます」

クワイⅡガンは深々と一礼して立ち上がり、謁見の間を辞そうとした。

その後ろ姿へ

「マスター・ジエダイ」

王は声をかけた。

クワイーガンは振り返る。

「どうか争いを収めていただきたい。亡き女王のためにも」

承知したという風に深々お辞儀を返すと、再び振り向き、静かにその場を離れていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

・王と執事しか、あの館に自分が泊まることを知らなかったはず。他に知りえる立場の者は？

・街で滅多に見かけることのないエイリアン達。しかし、襲ってきたのは事実。裏で暗躍か？

・マッドサイエンティストと呼ばれる人物はどう関わってくるのか？

・事件、事故の処理をする組織が真つ先に壊滅させられたのは？
頭の中で問題を箇条書きにし、そこから一つの答えを導き出す。

（事情はだいたい把握できた。だが、これらをわかってもらうにはまだ材料が足りないし、説明する場もない。・・・それにしても、早いものだ。私がこの星に来てからもう4日目になろうとしているとは）
クワイーガンは目を開けた。

空は白みかけていたが明け方にはまだ時間がある。何故か目が冴えて、いつもより早めに起き出した。

（オビワンは元気だろうか・・・。まだ怒っているかもしれないな。ま、いずれは私の気持ちもわかってくれるだろう）

苦笑しつつ身支度をする。

薬の入った袋を肩にかけた瞬間。

フォースに乱れが生じ、それは起こった。

耳をつんざくばかりの轟音と家が軋みを上げるほどの振動。

テーブルやベットが激しく揺れ動き、爆発音が絶え間なく聞こえる。

（また、爆破か!?!しかし、これほど激しい爆破は初めてだ）

クワイ||ガンは素早く館の外に出る。

彼の瞳には、先住民側オレベフのそう遠くない場所に上がる爆風と黒煙、飛び散る火花が映っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「お願いです、この子だけは助けてください。どうか、お願いですっ！」

膝を曲げ、崩れるようにママが覆い被さってきた。漆黒の長い髪がリアの顔にかかり、その黒い瞳から溢れる涙がリアの顔を濡らす。

「リア・・・あなただけでも生きて。生きて、パパを探して・・・。ママからの最後のお願いよ・・・」

ママの声が途切れ途切れに聞こえる。

「ママ、やだ。死なないでっ!! ママっ!!」

悲しげに微笑むママの顔。突き刺さるナイフの切っ先。真っ赤に染まる視界。

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!!!」

リアは飛び起きた。

(・・・夢・・・?)

夢とわかってても呼吸は荒い。生々しすぎる夢。いや、あれは現実。過去にあった出来事。

(何だろう・・・胸がどきどきする。嫌なことが起こりそうな・・・)

突然、巨大な風が家を揺らした。

一瞬、何が起こったのかわからなかったが、落ちつくと同時に思い当たった。何かが爆発したようだ。

慌てて家の外に出る。

外には既にオビ||ワンが立っていて、赤く燃える方向を厳しい表情で眺めていた。

「オビ||ワンっ!」

「リア。また爆破があったみたいだ」

彼は眉をひそめ悔しそうな声で言う。

「いつもより早く目が覚めて、外を散歩していたら突然。あの方向には何があるの?」

「……後住民テラフの学園アカデミの方向だわ」

オビIIワンの顔色がサツと変わる。刹那振り向くと、まだ爆破の余韻が残るその場所に向かって駆け出した。

「待って、リアも行くっ!!」

この星を訪れて4日目。

しかし、その日が、良くも悪くもこの街の歴史に鮮烈な一ページを残そうとしていることを、まだ誰も知る良しもなかった。

<後編>

第8話 戦いの始まり

燻る炎と火の粉が舞い散り、辺りを赤々と照らしていた。

充分離れているはずだが、広大な領域が燃え盛っているため、肌に突き刺さるような熱さが染みこむ。

クワイーガンは立ち尽くしているベレルガを素早く見つけ、傍に近寄った。

「ベレルガ」

彼女は振り向きもせず現場を睨みつけている。無言の沈黙に彼女の激しい怒りが感じられた。ようやく言葉を吐き出す。

メデイカル・ステーション
「医療 所だ。ここにあったのは。あいつら、絶対許せない」

「落ちつくのだ。後住民の仕業とは限らないはずだぞ」

「あいつら以外に誰がやるってんだ？」

そこへ、4台のスピーダーバイクが粉塵を飛ばして、目の前で急停車した。

「おい、ベレルガ。人々がテスト通りに集まり始めているぞ」

「非常に険悪な雰囲気だ」

「ついに前面戦争に突入しちまいそうな感じだぜ」

乗っている男達が口々に叫ぶ。ベレルガが聞き返す。

「ということの後住民の人々も集まっているのか？」

「ああ。後住民でも学園が破壊されたって言ってるが、そんなこと、本当かわからねえ」

「わかった、すぐそっちに向かう。お前達はなるべく民衆が先走らないよう見張っているんだ」

「OK」

4台のスピーダーバイクはエンジンをふかすと、元来た方向へ走り去っていった。

ベレルガも自分の愛機に向かうと、スロットルを捻ってエンジンを点火させた。

「この救出活動はいいのか？」

悔しさを顔に滲ませベルガが応える。

「あたしが来た時、既にここは火の海だった。生存者がいるとは思えないほどにねっ!!・・・クワイガン。あんたも行くんだろ？」

彼は現場の調査をしたかったが、とても今の状態では無理だった。それに通りに集まりつつある群衆も気になる。

「そうだ」

彼女は親指をくいと反らし後部座席を差した。

素早く軽やかにクワイガンが跨ると、スピードは爆音を響かせ猛スピードで飛び去っていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「ひどすぎる・・・」

オビワンは思わず言葉を漏らした。

白み始めた天を赤々と染める紅蓮の炎。

その下には学園アカデミーがあったはずだが、焼け焦げた建物の残骸が残るのみ。学園アカデミーに隣接する職員宿舎も影形すら無い。

近くにいる数人の人々が声高に話し合っていた。

「先住民オレベフの仕業だよ。だって、焼け跡からバラバラになった死体が出てくるんだぜ。絶対メツタ刺しにしてから火を放ったに決まってる」

「どうやら、テレスト通りに皆集まって、先住民オレベフの奴等に抗議するみたいだ」

「抗議なんて生ぬるいんだよ。俺達も行くこうぜ」

現場そつちのけで皆、移動を始めた。

オビワンはせめてこの火を鎮火させてからと思ったが、生存者が絶望視され、FF・Dが消火活動を行い、延焼は免れそうな今、彼にできることはなかった。

「オビワン・・・」

茶色いローブを頭からすっぽり被ったりリアが恐々と声をかける。

その声で彼は、今まで怒りに染まった顔をしていたことに気づき苦笑した。

「ごめん、リア。僕は皆の様子を見に行く。争いを止めなきゃならな

い」

「リアも行く」

「危険だよ。君はリシータさんと家にいて欲しい」

「リアも行くっ!!」

「……しようがないな。じゃ、僕の傍から離れちゃだめだよ。いいね？」

コクリと肯く少女に溜め息を漏らしつつ、オビⅡワンとリアはテレ
スト通りに向かって駆け出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

幅15mはあろうかというテレスト通りは、今や一触即発の危機を
はらんでいた。

ウエストとイーストから集まってきた民衆が、この通りを挟んで睨
み合っていたからだ。

今まで燻っていた相手に対する怒りが、今朝の凄惨なる出来事によ
り一層燃え上がったのだろう。

睨み合つたまま、まだ口々に相手を罵倒することで済んでいるが、
何か起きたらすぐにでも戦いに発展しそうなピリピリとした雰囲気
を醸している。

クワイⅡガンがベレルガのスピーダーに乗って到着したのはそんな
時だった。

彼の姿を見た途端、先住民側から喜びと期待の声があがる。それは
津波のように先住民側に浸透した。

「おい、後住民ども。お前達は今日でお終いだ。こっちはジェダイ
がいるんだからなっ!!」

この言葉は後住民側に動揺をもたらした。ジェダイに勝てるだろ
うか？

同じくクワイⅡガンも眉をひそめて状況を見守っている。

不本意ではあったがジェダイの存在を知らしめることにより、争い
に対する何らかの打開案を模索しようとしていた。

彼は群集から押されるままに先住民の前面に出、腕を組んだまま
立った。内心、溜め息を漏らしながら。

(マスター!?)

その姿に一番動揺したのは、後住民側テラフの後方からこの成り行きを固唾を飲んで見つめていたオビⅡワンだった。

(どうしてマスターが先住民側オレベフに!? ジェダイは中立の立場を取らなきゃいけないって……。それなのにどうして?)

傍にいたリアにはオビⅡワンの心の動揺が手に取るようにわかった。何を思っているかまではわからなくとも。

(オビⅡワン? 大丈夫?)

心配そうな視線に気づき、オビⅡワンは慌てて動揺を抑え、リアに微笑んでみせる。

その時。

「ジェダイならこっちにもいるぜっ!!」

後住民側テラフから発せられた声に、少年の心臓は驚掴みにされたように一瞬痛くなり、鼓動は音を立てて早くなった。

(まさか……?)

「ほら、その坊主だっ」

周囲の視線が突き刺さる。オビⅡワンは思わず身を縮めた。

「こんな坊主が? まさか」

「いや、俺は見たんだ。この坊主が青く光る棒を振り回すのを。あれは絶対ジェダイの武器だ」

(もしかしてあの夜、リア以外にも見られてた……?)

激しく気持ち動揺するオビⅡワンは、この状態に対処する方法も見つからないまま、後住民側テラフの前面に引っ張り出された。

クワイⅡガンは自分の目を疑った。人々の群れから押し出されるように現れたのは、紛れも無く自分のパダワンだったからである。

(どうして、ここにオビⅡワンが?)

努めて平静を保とうとするも、心は落ちつかない。

落ちつかないのは弟子も同じようで、彼の方を見ようとはせず、所在なげに俯いている。

だが、そんな二人へ追い討ちをかけるように無情の一声が飛んだ。

「どっちにもジェダイがいるのなら、闘わせて勝った方がこの街を支

配するってのはどうだ？」

クワイⅡガンはハツとして若きパダワンを見つめた。

オビⅡワンは落ちついた眼ざしで顔を上げ、マスターをじっと眺めた。その表情には決意の念が現れている。

二人はきつぱりと言い放った。

「そのようなことはできない」

「そんなことはできません!!」

クワイⅡガンは微笑み、オビⅡワンは顔を明るくした。

だが、そんな二人とは対照的に、一転して彼らを取りまく民衆の感情は悪しき方へ、憎悪渦巻く流れとなり漂い始めた。

ジェダイが役に立たないのなら俺達の手で。ついでにジェダイをも。

刹那、一発のブラスター光線が空間を切り裂き飛んでくる。

すかさずライトセーバーを起動し地面へ跳ね返すクワイⅡガンだったが、それを合図としたかのように、ついに恐れていたことが起きた。

先住民オレベフと後住民テラフの前面戦争が。

あらゆる所で小競り合いが始まり、ブラスターの光線が飛び交い、バイプロフレード振動ナイフのぶつかり合う音が聞こえる。

騒ぎを聞いて掛けつけてきたP・D達は巻き添えをくらって爆発を繰り返した。

クワイⅡガンは争いの場を移動しつつ、ベレルガの元へと向かう。

彼女はバイクに乗ったままブラスターをかわしつつ、何とか争いを収めようと必死になっていた。

「ベレルガ、頼みがあるのだが」

飛びかかってくる男をひよいとかわしながらベレルガが答えた。

「何だいっ?」

「君の間を一人借りたい」

「いいよ。ロイツ!!」

少し離れた所にいるセニス家の長男がバイクを駆って近寄ってきた。

クワイ||ガンが彼に指示をする。

「すまないが、向こうにいる・・・そう、あの小男。彼を捕まえてくれないか。逃げる前に」

その小男は奥にいて、この争いを避けるかのように闘いの輪から離れようとしている。

「了解しました、ジエダイ殿」

彼はニヤツと笑ってお辞儀をすると、噴煙を撒きながら駆けていった。

それを見届け、クワイ||ガンは傍で争っている者達を片っ端から、ある者には鳩尾に当て身をくらわし、ある者には後頭部の延髄に手刀を入れて気絶させていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

一方、オビ||ワンはと言うと、リアと無事合流できたが、争いを止めたくても、マスターのような体術を使いこなせるまでには至っておらず。

そこで、ライトセーバーで、相手が持つ武器を目についた物から切り落としていった。

武器がなくなっても懲りずに素手で殴り合う者もでてきたが、一対多でなければ直ぐには死に至ることもないだろう。

また、武器をなくすことで戦意を喪失させる効果もあつた。

ライトセーバーを縦横無尽に振るっていた彼は、目の前を転がってくる物にふと目を停めた。

瞬間、心臓がキュツと締めつけられる。オビ||ワンは息を吐き出し心を静めようとした。

だが、足が微かに震える。

転がってきたものは、赤く明滅を繰り返す熱爆弾^{サーマル・デトネーター}だった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

相手を倒す度に周りで動いている人影も少なくなり、うまくいけばこのまま争いは終息に向かうかもしれないと思われ始めた。

しかも、あの鎌^{シールド}ドロイドも現れていない。

彼らが現れないことで、クワイ||ガンの推測はいつそう確実なもの

となった。

しかし、その時。フォースの乱れを感じた。

クワイ||ガンの心に、オビ||ワンの微かな恐怖が反映される。

(オビ||ワンっ!?)

クワイ||ガンは弟子の元へと駆け出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(はね返そうか? いや、だめだ。他の人が巻き込まれるかもしれない。では、セーバーで切る? 切った瞬間、爆発するかもしれない。どうする...? 最後に一つだけ方法があるけど... ためらっている場合じゃない)

ついに決意を固めた。決断したら早かった。

オビ||ワンは集められるだけのフォースを集め身に纏うと、

サーマル・デトネーター
熱爆 弾の上に身を投じた。

自分自身を盾として皆を守るために。

惑星バンドミニアの時にも、他者を助けるために自分の命を投げだそうとしたことがある。

その時と何の違いがある? オビ||ワンは夢げに微笑んだ。

クワイ||ガンの叫ぶ声が聞こえ

刹那、サーマル・デトネーター 熱爆 弾が爆発した

第9話 悲しみの犠牲

眩しい閃光が辺りを照らし、視界を真っ白に染め上げた。続いて爆風が吹き寄せる。

クワイⅡガンは呆然と立ちすくんだ。

争っていた人々も余りの衝撃に固まったように争いを止め、爆破した方向を見つめている。

そこには爆発でうがかれた窪地があるのみ。そして、点々と地面に飛び散る赤い染み。ちらばる細かい肉片。

サーマル・デトネーター
熱爆弾が普通に爆発したのなら、もっとひどい惨状になっていただろう。

この付近にいた、何十人という人々も一緒に吹き飛ばされていたに違いない。

その被害を最小限度に留めたのは、たった一人の——
うつと呻いてオビⅡワンは身を起こした。爆発跡から10mほど

離れた場所で。

何が起きたのか一瞬わからなかった。

自分は確かに爆弾の上に身を投げた。それなのに何故、無事なんだ？
確かに掠り傷はある。だが、それだけだ。何故？

「大丈夫か？」

その声にハツと振り向いた。

彼のマスターは心から安堵の微笑を見せて、急ぎ足で近寄ってきた。
オビⅡワンは急に何かを思い出した。慌てて辺りを見まわす。

ない。

それは彼を絶望の淵に落とし入れた。

ない。ないっ。

クワイⅡガンはパダワンの肩を抱いてゆっくりと立たせた。

「怪我はないか？」

若きパダワンは心ここにあらずといった風に頷くと、よろよろと歩き始めた。

「どうした？」

しかし、それには応えず、オビⅡワンは爆発の跡へと近づくとガクツと膝をついて座り込む。

「どうして……こんなことに……」

涙が零れ落ちそうになった。

信じられなかった。信じたくなかった。

”ない”なんて。リアのフォースが全く感じられ”ない”なんて

爆発の一瞬。

激しい勢いで突き飛ばされた感覚がある。フォースの塊に。あれがリアだったのか……。

フォースとフォースがぶつかった衝撃で気を失いかけた。その時に彼女の声が聞こえたような気がする……。

／／死なないで、オビⅡワン —— ／／

「何故……僕を……」

悔し涙が込みあげる。

食いしばる歯の間から嗚咽が漏れ、悔しさが不甲斐なさが胸につかえ、激しい怒りが言葉として溢れた。

「リアは一生懸命、生きてきただけなのに……どうして、彼女が死ななきゃならないんだっ!!」

オビⅡワンの声だけが辺りの空気を震わせる。

今まで争っていた民衆は、一人の少女が自分たちの命を救ってくれたことに気づき、先ほどとは打って変わって静かな面持ちで眺めていた。

少年の怒りの声は続く。

「どうして、同じ人間なのに争うんだっ。同じ生きている者達なのに……どうして、争うんだっ!!争いからは何も生まれないじゃないか……何も……」

吐露された少年の言葉は、争いを行っていた人々の胸に深く染み込んだ。

オビⅡワンは自分を責めた。争いを憎んだ。

そして、その怒りと憎悪は彼の胸を冷たく支配し始めた。

怒りの冷たい炎が体の隅々を駆け巡り、今までに感じたこともないような強い力がみなぎってくる。

(争いを起こした奴等をこの世から消してしまえばいい・・・)

そんな考えさえ浮かび、オビⅡワンはそう思っている自分に戦慄した。心の奥底にある安寧たるフォースに手を伸ばそうとするが、荒れ狂っている怒りと悲しみに翻弄され、うまくいかない。

オビⅡワンは嵐のような中で、しがみつくようにフォースを求めた。ただひたすら。

悲しまないで、オビⅡワン ——

(リア・・・!?)

心の奥底に声が響いたような気がして、オビⅡワンは徐々に冷静な心を取り戻し始めた。

(僕は何を考えていたんだ？あれほど怒りにとらわれるなど戒めていたのに)

唇を噛み締め、心を凧いだ海のように穏やかにさせる。

邪悪なフォースが消え失せていくのを感じるとともに、体の周りに暖かさが取り巻いているような錯覚を覚えた。

彼は不意に目を開け ——

驚いた。

「リ、リシータさん・・・」

体が弱く滅多に家から外出しないリシータが、街の空気は体に良くないと言っていた彼女が優しくオビⅡワンを抱き締めていたのだ。

リシータは涙に濡れる顔を上げ、オビⅡワンの視線に気づくと穏やかに言った。

「悲しまないで、オビⅡワン。あの子はあなたを助けたかったの。あなたが無事であの子、たぶん喜んでるわ」

言い終わりゴゴゴと咳込む。ここまで走ってきたのだろう。なんて無茶な。オビⅡワンは急いでその体を支えた。

「リシータさんっ！」

肩を激しく上下しつつ彼女は儂げに微笑む。

「大丈夫、私なら」

そう言つて立ち上がると、成り行きを静観していた民衆に対して言葉を発した。

「皆さん、争いは終わりにしてください。どうか、あの子で最後にして。もうこれ以上、犠牲を出さないで……」

言い終わると、気が緩んだのか崩れ落ちるように倒れた。

オビⅡワンが手を差し伸べるより早く、がっしりとした腕が彼女を支えた。

驚いたオビⅡワンが顔を向けると、いつのまに近くに来ていたのか、茶色い粗末な服を纏った彫りの深い整った顔立ちの男性が、リシータを支えながら哀しげな青い瞳で彼を見つめている。

男性は口を開いた。

「君は勇敢な子だ。そして、優しい心の持ち主だね」

「貴方は……？」

一瞬、穏やかに目を細め、しかし、直ぐに厳しい顔つきになると、彼は気を失っているリシータを優しくオビⅡワンに預け、立ち上がった。

そして、良く通る声で言った。

「こんな無益な争いは止めるんだ。停戦が無理なら、先住民側^{オレベフ}としては休戦を申し込む」

双方からどつとどよめきの声が上がった。特に後住民側^{テラフ}から怒声が飛んだ。

「そんな偉そうなこと言つて、あんた誰なんだっ？」

「そう言つて俺達を丸め込むつもりだろっ」

群集を掻き分け、ベレルガがつかつかと歩いてくると彼の前で跪いた。

頭を下げたまま言葉を述べる。

「アジエス王、お久しぶりでございます」

「そちも元気そうで何よりだ」

王と聞いて再び後住民側^{テラフ}からどよめきが沸き上がった。

先ほどとは異なる感情で発せられたものではあったが。後住民^{テラフ}の中で先住民^{オレバフ}の王を見たことがある者はそうそういなかったからだ。

「我々の要求は伝えた。あとは君達の出方次第だが。いかがかな？」

朗々たる声でアジエス王は弁を述べる。その姿は威風堂々とし、爽やかな感じさえ与えた。

だが、後住民^{テラフ}側からは何ら意見を出す者もない。

「アジエス王よ、ご無事で何よりでございます」

突然声が聞こえ、人々の間を縫って執事ザアレーが姿を現した。後ろに城の警備兵も付き従っている。

「王のお姿が見えず、街では暴動が起こりそうだと聞いて王の身を案じていた所です」

「ちようど良かった、ザアレーよ。あの女性を城に運び手当てしてもらえぬか」

「承知しました」

忠実な執事は警備兵を手伝わせながら、まだ目を覚まさぬリシータをそつと運んでいった。

しばらくの沈黙の後、王は言葉を継いだ。

「特に意見もないようであればこの争いは終わらせる。先ほど、あの後住民^{テラフ}の女性が言った通りに」

「だが、さつき死んだのは後住民^{テラフ}の子だ。余りにも不公平じゃないか？」

それまで無言でやり取りを聞いていたオビワンがポツリと漏らした。

「でも……先住民^{オレバフ}がやったという証拠があるの？」

「お前、悲しくないのか？復讐したいとは思わないのか!？」

少年は静かな眼差しを声の主に向けた。その瞳には哀しみはあれど怒りなどなかった。

「僕だって悲しいよ。でもこれ以上、悲しむ人を増やしたくないんだ。そんなのリアだって望んでない」

今までじつと腕を組み静かな眼ざしを周囲に配っていたジェダイ・マスターが、ついに口を開いた。

「その少年の言う通りだ。これ以上の争いは全くの無意味だ。それにお互い相手のせいにして今まで争ってきたが、誰かその証拠を掴んだ者はいるのか？」

「そんなの・・・」

「あいつらがやったに決まってるっ。他に誰がやったってんだ？」

クワイⅡガンは再び言葉を発した。

「第三者がいる可能性は考えたことがないということか」

「まさか・・・っ」

「マスター・ジエダイ、続けてください」

次々と叫び声を発する民衆を制し、アジエス王は穏やかに先を促した。

クワイⅡガンは深々とお辞儀を返し、王に相對すると、言葉滑らかに話し始めた。

「今まで私はこの争いを調停するため、様々な情報を得てきました。しかし、唯一手に入らないものがありました。それは行われてきた爆破や殺戮の犯人のデータです。犯人を挙げるための機関は争いが始まって早々に破壊されたと聞きました。それは何故か？実行犯が特定されれば困る人物がいるに違いないと」

一旦口を閉じ、皆の反応を窺う。

固唾を飲んで、息さえもひそめ聞いている民衆の姿を確認しながら、彼はまた言葉を紡いだ。

「そして、また、私はある点に思い当たりました。この街は排他的で、同じヒューマノイドでさえ排除したがる傾向があると。ましてや他の人種・・・エイリアンに対しては、よりいっそう排他的になると。しかし、私はこの街に着いた夜、ローディアン達に襲われた。これは何を意味するのか」

クワイⅡガンは息を継ぎ、効果を狙ったかの如く、少し声を大きくして言葉を続ける。

「いないはずのエイリアンがいて、実行犯がこの星の住民か否かを調べることでできる機関が真っ先に破壊された。これらを考えると、人知れず潜む第三の勢力がいると思われ^{オレバフ}ます。その勢力が先住民と

後住民の争いを扇動していたとしたら」

この言葉の意味を考え、民衆は驚き、有り得ないことだと信じ込もうとした。もしそうなら自分たちが争ってきたのは何のためなんだ？

にわかに信じがたいジェダイ・マスターの話に、王は訊ねた。いささか半信半疑の面持ちで。

「証拠はありますか？」

偉大なるマスターは微笑んだ。この問いを待っていたかの如く。

そして、後ろを振り向いて声をかけた。

「今お目にかけてみましょう —— ロイ」

呼ばれてセニス家の長男ロイは、縛られた小男をずるずる引きずってきた。

先ほど争いの最中、クワイーガンがロイに捕まえて欲しいといったあの男だ。

一目見るなりアジエス王は驚いた。

「これは城の召し使いではありませんか」

「この者は召し使いとしてあなたの城に潜り込み、スパイ行為を働いていました」

「どこにそんな証拠があるっ？」

召し使いは喚いた。なんとか手首を縛る紐を切ろうともがきながら。

クワイーガンは再び微笑んだ。

「この声です。先ほど、私とあの少年を闘わせようとしたのが彼です。ただの召し使いがそんなことをしますか？しかも彼は先ほど、私達ジェダイを狙って熱爆弾サーマル・デトネーターを投げつけたり、その前には私が泊っていた家を爆破させた」

「家の爆破は俺じゃねえ、そこまでは・・・あつ」

しまった、語るに落ちたと青ざめる召し使いに、クワイーガンが顔を近づけ蒼色の瞳で見つめる。

「では、君がしたことを言ってくれるかな？」

「な、何もしてねえ」

「そうか」

クワイールガンはフツと微笑むと突然ライトセーバーを抜き放った。淡い緑色に輝くそれは美しい光とともにその持ち主を際立たせている。

「ライトセーバーはこう見えても結構な熱を放出しているのだ。なかなか慣れないと扱いにくいのだが」

と手首を返した途端、彼の手からセーバーが落ちた。

それは召し使いの顔を掠めるようにストーンと突き刺さり地面を穿つ。

「あ、危ないじゃないか」

高熱が放出され、召し使いの顔を緑色に照らす。彼の額には恐怖と熱さによる汗が浮かんだ。

それを知ってか知らずか、クワイールガンは片頬を歪めニヤツと笑う。

「ああ、すまない。今後は気をつけよう」

「わ、わ、わかった。言うからこれをどけてくれっ!!」

ジェダイは素早くライトセーバーを引き抜くと、目にも止まらぬ早さでスイツチを切り、腰に差した。

「お、俺はただ命令されてやっただけなんだ。召し使いになって城に潜り込むのも、何かあったら報告するのも全部」

「誰に命令されたのだ？」

「ト、トレデイスだよ、イースト・クテラでドロイド工場を経営している」

「トレデイス？」

聞き返すクワイールガンに王が説明した。

「巷ではマッドサイエンティストと呼ばれている男です。では、母君・・・女王が街へお忍びで出かけたということもトレデイスに報告していたと？」

「ああ。し、知らなかったんだよ、あんなことになるなんて」

王は天を仰ぎ、唇を噛み締めた。無言のまま沈痛な表情を浮かべている。

代わりにクワイーガンが問いただした。

「実際に女王を襲ったのは誰だ？正直に言った方がいいぞ」

「・・・トレデイスが雇った用心棒どもさ」

「では、後住民^{テラフ}ではないのだな？」

「あ、ああ。ほとんどの爆破や殺戮は、俺達がトレデイスから指示されてやったんだ」

道理で、女王殺害の犯人を差し出せと詰め寄っても、後住民^{テラフ}の人々は知らないと言い張ったわけだ。

周りを囲む民衆から悲鳴のようなささやきが漏れる。

「昼間の爆破は主にヒューマノイド、夜はエイリアン達がやったのだろう。夜に多くの爆破を起こしたのは人々の外出を避けさせ、いないはずのエイリアン達が行っていることを知らしめなためだな」

「・・・その通りだ」

赤い髪が視界を横切ったのを見取ると、クワイーガンは素早く彼女の手首を握った。

手は召し使いの顔、僅か手前でかろうじて止まった。

ベレルガは怒りに震え、今にもこの召し使いに殴らんばかりである。

「あんたの・・・あんた達のせいで、何十、何百人という罪のない人達が死んだんだっ!!あんた達のせいで・・・」

彼女の肩は震えていた。怒りのせいかもしれない。泣いていたのかもしれない。

「どうして、こんな争いを起こしたのだ？」

「お、俺もそこまでは知らない」

これ以上尋問しても時間の無駄だと感じたクワイーガンは、この召し使いを王の裁断に任せようと判断した。

「・・・わかった。全てトレデイスに聞けばいいのだな？」

「クワイーガン、あんた行くんだろ？あたしも行くよ。お前達も行くだろ？」

セニス四兄弟は揃って頷いた。

少し離れた所からも声が飛んだ。

「僕も、・・・僕も行きますっ」

オビⅡワンに視線が集中する。こんな少年を連れて行っても大丈夫だろうかといった雰囲気の中、彼のマスターだけは僅かに微笑を見せていた。

どうする？といった風にベレルガがクワイⅡガンを見やる。

「いいだろう。一緒に来なさい」

代わりに少年に声をかけた。

オビⅡワンは顔を明るくさせ、ベレルガは肩をすくめた。

クワイⅡガンはベレルガのバイクの後ろに、オビⅡワンは末っ子のジョンの後部座席に落ちつくど、激しい爆音とともに走り去って行った。

マッドサイエンティストの元へと。

第10話 工場での戦い1

砂塵を撒き散らし、スピーダーバイクは次々と急停車した。

余りの運転の荒さに振り落とされそうになり、オビィワンは慌ててジョンにしがみつく。

イースト・クテーラの北側にその工場はあった。

工場を約20m向こうに眺めつつ、斥候として先に行かせたデイルとクーンの帰りをしばし待つ。

ほどなく二人は走って戻ってきた。

「どうだ?」

ベレルガが低い声で問いかける。

「いつものように製造は続けられているようだ」

「トレデイスは?」

「・・・わからない。気配はないが」

曖昧な答えに不安を押さえきれないベレルガは、ジェダイに顔を向けた。

「どうする?クワイィガン」

ジェダイ・マスターは目を閉じ、何かをうかがうようにしばらく瞑想していたが、ややあつて蒼色の瞳を見せた。

「トレデイスは多分いるだろう。我々は何があつてもこの工場を閉鎖に追い込み、トレデイスを捕まえなくてはならない」

「そうだな。亡くなった人達のためにも」

「あの建物の造りはどうなっている?また入り口は?」

「一階が製造工場で二階が事務所だ。入り口は表の一カ所しかない」

「では、トレデイスがいるとすれば事務所だな?」

「ああ。しかし、鎌シクル・ドロイドドロイドがいるかもしれない」

クワイィガンはフツと笑った。

「それは私とあの少年に任せてくれ」

「あの少年?大丈夫なのか?」

「彼もジェダイだ。大丈夫だ」

(マスターは僕との関係を皆に隠そうとしている・・・?もしかして

怒ってるのかな、僕が勝手にこの星に来た事を)

オビⅡワンは、マスターの余所余所しさを内心訝しげに思った。テレスト通りにいた時からそうだった。

頷くとベレルガは号令をかける。

「では、行こうっ!!」

「作戦は?」

「前進あるのみさっ」

言い放ちアクセルをふかした。

5台のバイクは猛スピードで工場の入り口に向かい、キャノン砲が発射されたかと思うと入り口に巨大な穴を穿つ。

バイクは次々とその穴を通り抜けた。

途端、ブラスターの光線が工場内のあちこちから放たれ、バイクを掠める。工場攻撃は読まれていたらしい。

「散れっ!!」

ベレルガの一声でバイクは四方八方に散った。すかさずバイクを駆りながらブラスターで応戦する。

クワイⅡガンは走り回るバイクから軽やかに飛び降りた。

ライトセーバーを起動しつつ声を出す。

「私と少年はこの工場の動力を止める。君たちはここを頼む」

「クワイⅡガン、動力機はシクル・ドロイドと同じ金属でできているかもしれないぞっ」

「だから、私達が行くのだ」

彼はニヤツと微笑み、工場の奥に向かって駆け出した。

オビⅡワンもジョンの後ろから宙返りして飛び降り、走り出そうとしてふと思いつき、ベレルガに訊ねる。

「僕達が動力を壊したら、ここは真っ暗になってしまいます。大丈夫ですか?」

「任せとけ」

彼女は親指を立ててウインクする。

微笑み、オビⅡワンもセーバーを起動させ駆けていった。すぐさま改造キャノン砲が炸裂した。

激しく熱せられた光の固まりが、製造途中のドロイドをふっ飛ばしながら天井近くの壁に、轟音とともに巨大な穴を穿つ。

動力を切られても光が射し込み中が見えるように。併せてドロイドを破壊する意味も含めて。

続けて1発。もう1発。

キャノン砲の音に紛れバイクで近づき、ブラスターを乱射していた豚のような顔のガモーリアンに振動ナイフを突き刺したロイが上から叫ぶ。

「ベレルガっ!!もうそのくらいで止めとけ。これ以上撃ったらバイクが使い物にならなくなるぞっ!!」

彼女はバイクをこまめに動かしながら叫び返した。

「上等じゃないかつ。未来のための戦いだ。バイクなんかに構っている場合じゃないよっ!!」

(お前が命の次に大切にしているバイクじゃないか・・・)

とロイは思ったが口には出さず、発した言葉は

「もし、バイクが動けなくなったらどうするんだ?」

すかさずベレルガはニヤリと笑って言った。

「あんたが乗せてくれるんだろ?」

「まあな」

ロイもニヤツと笑い返すと、次の獲物を探すためにアクセルを勢いよくふかした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

走りながら前方左上に何者かの気配を感じると、素早くフォースに身を委ね左に身をかわし、右下段からセーバーを振りあげる。

撥ね返った光線は狙い変わらず、狙撃したローディアンの胸元に吸い込まれた。

すかさず身を翻して別の光線を避けると、手首を返しセーバーを左横から薙ぎ払う。

飛んできた光線は前方右めがけて撥ね返され、その影にいたガモーリアンの眉間を捉えた。

クワイ||ガンは再び走り出した。

後ろからは、若きパダワンの同じく駆けてくる微かな足音が聞こえる。

と不意にジエダイ・マスターは歩を止めた。

ライトセーバーを右横に構える。

「ここから先には行かせん」

声とともに柱の影から現れたのは、巨大なトゴリアンだった。

一瞬、＜モニュメント号＞で闘った宇宙海賊のことが、クワイⅡガンの頭をよぎる。トゴリアン・・・悔りがたい敵だ。

クワイⅡガンの背後では緊張するオビⅡワンのフォースが感じられる。

ちらつと後ろを振り向くと、パダワンはこちらに背中を見せて新たな敵と対峙していた。その向こうには、幾分小柄なトゴリアンが同じく立ちはだかっている。

(挟み撃ちか・・・)

クワイⅡガンは苦々しげに思った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「あと何人いるんだ？」

すれ違いざま発せられたクーンの問いにデイルは答えた。

「20人ほどだ。今まで5、6人倒したからな」

「まあだ、そんなにいるの？」

右下から聞こえる末っ子の嘆きにデイルは思わず苦笑した。

が、一瞬のちには厳しい表情を浮かべる。

「だが、このままではまずい。今、我々は素早く動き回っているから相手の攻撃を防いでいられるが、燃料がなくなったら苦しい立場になる」

二人は沈黙した。

「ま、何とかなるだろう」

クーンが長い前髪をなびかせつつ素早く体を捻りブラスターを発射すると、奥からエイリアンが転げ落ちた。

「そうだね、だってジエダイもいるし」

明るい声でジョンも言い、バイクを急上昇させた。

しかし、皆の心には一抹の不安がよぎっていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

爛々たる眼。巨大な口から見え隠れする長い鋭い牙。しなやかな体つき。美しいビロードのような毛並み。そして、何もかも突き刺さるばかりの前肢の鍵爪。その上、右手に振動ナイフを逆手に握っている。
バイブロード

トゴリアンと実際には闘ったことがない。宇宙海賊に襲われた時だって、直に闘いはしなかった。

この生っ粋の狩人の攻撃を防ぐことはできるだろうか？

オビⅡワンは心を落ちつかせ、集中力を高めるとフォースを纏った。

いつも彼を助け、癒してくれたそれは、今も強さを与えてくれる。彼はライトセーバーを右に構えると、トゴリアンを見つめた。

(来るっ!!)

と同時にオビⅡワンは前に飛び出した。

すぐ後ろにはマスターがいる。闘いのスペースを取るために。

セーバーを横薙ぎに払う。が、その瞬間にはトゴリアンの体は宙を舞っていた。

背後に回れこまれたと見るや、すぐさま体を沈めたまま反転させ、その勢いで再び足を薙ぎ払う。

これも空を切り、オビⅡワンが横に飛びずさると何時の間にか横に迫っていたトゴリアンのナイフが、彼の胸を掠めた。切っ先がローブを切り裂く。

オビⅡワンは後ろに宙返りして体勢を整えた。

トゴリアンは彼と行く手の間を遮り、前に行かせない構えである。

(マスターは大丈夫だろうか?)

ふと師に思いを馳せると、その一瞬の隙を狙って、トゴリアンがナイフを振りかざしてきた。

ライトセーバーはある程度間合が必要とされる。逆に懐に飛び込まれるとセーバーを扱いづらくなるのだ。

トゴリアンはそれを承知しているらしく、至近距離に近づいてはナ

イフをかざしてくる。

その激しい攻撃に、隙あらば攻撃に転じようとするものの、右に左に避けることで精一杯である。じりじりと後退し、マスターとは離れてしまった。

(彼の目的はマスターから僕を離すことだ)

と頭では理解しつつ、しかし、押されていく。

その時、ようやくトゴリアンに隙ができた。思いつきりナイフを大振りしたのである。

(今だっ！)

彼はトゴリアンに向かってセーバーを横に振るう。

視線の片隅に影が走ったような気がして

(まさかっ?)

と思った時は遅かった。

腹に強烈な打撃を受け吹っ飛び、壁にしたたか背を打ちつけ滑り落ちる。

トゴリアンはわざと隙を見せ彼の攻撃を誘い、今まで使っていなかった膝蹴りを食らわしたのであった。正にこれこそ狩人の本領発揮である。

壁に激しくぶつかった衝撃で、一瞬、息が詰まった。

咽込んで呼吸ができるようになると背中と腹が猛烈に痛み、頭がくらくらする。

その霞んだ瞳には、ナイフを振り上げたトゴリアンが勝ち誇った雄叫びとともに向かってくる姿が映っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

一方、クワイ||ガンは。

彼に向かい合うトゴリアンは装甲服を着込み、両手に振動ナイフバイブローレードを握っている。

クワイ||ガンは静かにフォースを呼び寄せた。

「たあっ」

掛け声とともに右のナイフを振りかざし、トゴリアンが突っ込んでくる。

クワイールガンは右に体を翻し、回転させて遠心力を使いセーバーを奮う。

その攻撃は左のナイフに阻まれトゴリアンまで届かない。

しかも、このナイフは何という固い金属でできているのであろう。セーバーで切り落とす事もできないのだ。

一瞬、驚きの表情を浮かべたクワイールガンだったが、気を取り直し、すかさず手首を返すとセーバーを下から切り上げた。

しかし、既にトゴリアンは後ろに飛びずさっている。

敵もさる者、セーバーの間合いには入らないようにしているのだ。

巨大な体を持つトゴリアンはそれだけに手も足も長く、セーバーの間合いの外から攻撃が可能なのだ。その攻撃を止めるには、自ら間合いを詰める攻撃をするか、武器を切り落とし間合いを縮めるか。

しかし、そのどちらもできない今、どのように闘うべきだろうか？

クワイールガンは目を閉じた。集中しているのが感じられる。

不意に複数の何かがトゴリアン目がけて飛んできた。

ドロイドのパーツと思われるそれは縦横無人に飛び回ると、トゴリアンに攻撃をしかける。

敵がそれを避け、又は撥ね返しているその隙に、クワイールガンはすかさず前に駆け出し、セーバーを振りかざすと右上段から切り落とし

た。かに見えたが、右のナイフががっしりと食い止める。すかさず、トゴリアンは手首を返した。

力と力のぶつかりあいナイフとセーバーの間に蒸気が立ち上った。

セーバーの熱によってナイフが溶け始めているのだ。

が、トゴリアンの力は強く、徐々にセーバーは下に押し込まれる。

逆にならセーバーを圧迫されることにより、クワイールガンの方が身動きがとれなくなり始めた。

その時、トゴリアンの左のナイフが煌いた。

まるで、この時を待っていたかのように。

☆☆☆☆☆☆☆☆

エンジンが空回りし始める。
バイクのスピードが落ち、反重力装置リパルサーリフトも効かなくなってきた。
「ちっ」

舌打ちするとベレルガはバイクから飛び降り、放たれる光線を避けつつ壁の隅にある物陰に転がり込んだ。

素早く立ち上がりブラスターを構える。

失速したバイクは狙いどおり製造中のドロイド群に向かって突っ込み、爆発炎上した。

彼女はその様子を複雑な想いで見つめていた。

しかし、すぐに感傷を振り切り、冷静に状況を判断する。

この工場は二階建てと言っても、一階は製造を行っているため、天井が通常の三倍ほど高い。

そして、天井に近い方では多くのベルトコンベアーが並び、ドロイドのパーツを乗せたまま動いている。

床の方では、組立ドロイドによる組立作業が行われていた。

それら製造場所を囲むように1mほどの壁が連なり、入口から向かって右横にまで続くと、工場と通路を隔てる高い壁に繋がっている。

その通路に向かって、あの二人のジエダイは走っていったのだ。

(あいつら、大丈夫かな?)

不意にそんな思いにとらわれ慌てて頭を振ると、ベレルガは敵を見つけ次第ブラスターで応戦し、戦いに専念し始めた。

彼女の目前では、セニス四兄弟がバイクを自由自在に操り、ブラスターを連射しながら宙を駆け巡っている。

そんな矢先、彼女の傍に何か固い物が落ちてきて転がった。

視線を向けハツとする。彼女は一呼吸すると叫んだ。

「皆、逃げろっ!! 熱爆弾だっ!!」
サーマル・デトネーター

聞くや否や、四兄弟はバイクを駆って、爆発から逃れようとアクセスルをふかした。

このままでは巻き込まれる。しかし、バイクがない今、逃げ出してもそんな遠くまで行けない。

葛藤している彼女の元に

「ベレルガ!! つかまれっ!」

轟音とともに空中から逞しい腕が伸ばされた。

「ロイツ!!」

急いでそれに手を伸ばす。

サーマル・デトネーター
熱爆弾は閃光を放ち爆発した。

第11話 工場での戦い2

遠くで爆発音が聞こえ、地鳴りがその後からやってきた。頭を一振りする。意識がはつきりしてくる。

オビⅡワンはフォースを引き寄せ塊にすると、迫り来るトゴリアンに思いつきりぶつけた。

見えない力に勢いよく飛ばされ、製造側の壁に激突する。

呻き声をあげつつそれでも向かってくるトゴリアンに、そんなに大きなダメージを与えていないと見るや、オビⅡワンは痛みを堪え素早く立ちあがる。そのままローブを脱ぐと、敵に投げつけ視界を覆った。

と同時に、頭から被ったローブを取ろうとしているトゴリアンに、セーバーを真つすぐ構えると突進した。

オビⅡワンの気配に気づいたのか、ローブを裂いて振動ナイフが突き出される。

ナイフはオビⅡワンの左頬に赤い糸を引き、セーバーはトゴリアンの心臓を貫いた。

敵の体から力が抜ける。

オビⅡワンはセーバーを引き抜き、少しの間荒い息をしていたが、呼吸を整えフォースを使って痛みを無理矢理押え込むと、再びマスタアの元へ走り始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

爆風が吹き寄せる。壁や周囲にあつた鉄屑などが吹き飛ばされ、ビックバンのように宙に広がっていく。

「危機一髪だったな」

「全くだ」

ロイのバイクの後部座席に座りながら、ベレルガは相槌をうった。

爆発する寸前なんとかバイクに跨ると、今までにしたこともないほどの急発進でその場を逃れたのだ。

そのせいでバイクのエンジンが、変な音でがなり立てているのも致し方のないことかもしれない。

「全く見境のない奴等だ」

「だが、これのおかげで少しは助かった」

不思議そうな顔をして後ろを振り向くロイに、彼女はウィンクして言った。

「壁に大きな穴が開いた。動力が止まっても中は充分明るいぜ」

（だが、それはジェダイ殿たちが動力を止めればの話だ。彼らが向かってから、かなりの時間が経つが・・・）

内心、ロイは不安に思うのだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

クワイーガンは慣性に逆らわない方法をとった。

上に持ち上げようとしていたセーバーを、逆に力を抜いて下に落としたのである。

渾身の力を振り絞りセーバーを押え込んでいたトゴリアンは意表を突かれ、バランスを崩す。

間髪入れず、クワイーガンはセーバーを突き刺した。

しかし、抜群の敏捷性を持つトゴリアンは辛うじてそれをかわす。装甲服から焦げた臭いが漂う。

すかさず後ろに下がった敵は、今度は充分注意を払いクワイーガンと対峙した。

獲物を狙う猫のように忍びやかな動きでジェダイの隙を窺う。

今度はクワイーガンから仕かけた。

突進し、右から薙ぎ払うと見せかけ、体を回転させ左から切り込んだ。

だが、それは右のナイフによって遮られる。

と、目にも止まらぬ早さで一步踏み込まれた途端、左手のナイフが振り下ろされ、避けたもののセーバーを持つ右腕を切られ、血が吹き出た。

思わずクワイーガンは後退する。

図に乗った敵は続けざま右のナイフを振り下ろした。

フォースを一心に集めると、クワイーガンはそれをセーバーに込めナイフを防いだ。

いや、防ぐだけではない。それを持って攻撃と転じた。
セーバーに熱がこもる。

そして、ついにその熱は、今までの闘いで弱くなっていたナイフを溶かしきり、真つ二つに切断する。その勢いのまま、驚愕の表情を浮かべるトゴリアンの首を切り落とした。

ゆっくり倒れるトゴリアンを尻目に、クワイⅡガンは呼吸を整えつつ思った。

(武器に頼りすぎるからだ)

そこへ、オビⅡワンが駆けてくる。

彼も無事だったようだ。

クワイⅡガンは安堵の溜め息を漏らすとパダワンの顔を見つめ微笑み、それから走り出した。

動力機へと。

二人の目の前に、巨大な四角い黒い箱のような物がそびえていた。箱の外側には色とりどりのケーブルが這い、データパネルや無数のスイッチやが組み込まれている。

「これが動力か」

一階の奥まった場所。そこにそれは在った。

クワイⅡガンはおもむろにライトセーバーを握り締めると、オビⅡワンを下がらせてからその黒い箱に切りつけた。

シューウウ・・・という音を上げて、金属が溶ける臭いが辺りに立ち込めた。

セーバーが通用することがわかると、今度は垂直に構え突き刺した。たちまちセーバーの周囲が高熱により溶け出し、赤い溶岩のように沸き上がる。

しばらくして引き抜くと、途端、動力機を囲んで火花が飛び散り、次第に激しさを増し、ついに爆発をした。

闇の帳が下りたように辺りが真っ暗になる。

動力がストップされ、今動いているのは、生きている者と組立ドroidのみ。

左奥に光りが見えるのは、あちら側が入口だろうか。

クワイ||ガンとオビ||ワンは顔を見合せて肯くと、すぐ横にあった二階に繋がる階段を駆け登り始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

何の前触れもなく電気が消えた。しかし、壁に開いた穴のおかげで、さほど不便には感じない。

「やった、ジェダイがやってくれたね」

末っ子の喜びの声に次男が応えた。

「これで、ここを復旧するとしても時間がかかるだろう」

「復旧なんてさせやしない。破壊し尽くすのみだ」

クーンが言い放ち、三人は燃料の心もとないバイクを走らせられるだけ走らせようとスロットルを絞った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

階段を上ると、踊り場の向こうに扉が見えた。電力が止まっても非常用ライトが点灯しているため、漆黒の闇という訳ではない。

二人は扉の左右に分かれると、向こうの気配を窺う。

突然、扉を突き破って鋭い鎌が飛び出し、二人は飛びのく。

(シクル・ドロイド
鎌ドロイドだな)

と思った瞬間、クワイ||ガンは扉ごとドロイドを切り裂かんとセーバーを薙ぎ払った。

真つ二つになった扉は、同じく胴体が分かれたドロイドとともに部屋の内側に音を立てて倒れこみ、二人はその中に飛び込んだ。

部屋は会議室のようだった。そして、その左奥に扉が見える。

「多分、あの部屋にトレイイスがいるのだろう」

「はい」

しかし、さして大きいとは思えないこの会議室から、隣りの部屋に行くのはなかなか骨が折れる作業のようだ。何せシクル・ドロイドが15体ほど待ち構えているのだから。

だが、間髪入れずクワイ||ガンは前に進み出る。

ドロイドの姿を一目見て、オビ||ワンは驚きを禁じ得なかった。

(こんなドロイド見たことない。これがリアが言ってた、人を殺すドロイド……)

見回すと、何かが微妙に違うドロイドが数体はいるような気がする。

しかし、何が違うのか見極められぬまま、彼もクワイールガンの後を追ってドロイドの群れに向かった。

クワイールガンは腰をかがめ走り出て、高々と跳躍してくるドロイドの胴体をすれ違いざま左から薙ぎ払う。

右から繰り出される鋭い鎌を紙一重でかわし体を回転させると、右からセーバーを叩きつけた。ドロイドが数体、火花を散らし吹っ飛ぶ。

右腕に痛みが走るが気にせず、クワイールガンは前に飛び出た。

会議室の真中に置いてある丸い巨大なテーブルの上から、ドロイド達が鎌を振りかざし攻撃してくる。

すかさず彼もテーブルの上に軽々と跳躍すると、体を捻りつつ、鎌や首を次々と切り落とした。

周りに残骸しかなくなったと見るや、クワイールガンは若き弟子を探して視線を走らせる。

と、その時。

1体のドロイドが彼めがけて飛びかかってきた。

クワイールガンはその曲線を描く鎌をセーバーで切り落とそうとし
(!?)

思わず驚愕の表情を浮かべる。

切り落とせない。鎌が。

どうやらトレデイスは前回に懲りて、改良を加えた新種のシクル・ドロイドを造りあげたらしい。あのトゴリアンのナイフと同じ、セーバーが通用しにくい金属で。

しかも、このシクル・ドロイドは今までとは違い、鎌が二つに折りたためるようになっていた。

クワイールガンのセーバーはこのドロイドの鎌にがっしり挟まれ、身動きがとれなくなってしまった。振り払おうとするものの、このネオ・シクル・ドロイドは重さにも重点を置いているらしく、びくともしない。

鎌は白煙を上げ溶けつつあるが、これを切り捨てるには時間がかかるだろう。

クワイールガンは内心焦りを感じた。

彼の背後からは、ドロイドがうごめいている気配がひしひしと感じられる。

と、1体のドロイドがテーブルの上に飛び乗ると、クワイールガンの無防備な背中めがけて鎌を勢いよく振りおろした。

第12話 工場での戦い3

青い光がドロイドの鎌を一閃する。

オビⅡワンは手首を捻りセーバーを返すと、左下から切りあげた。鎌と首を切られたドロイドが崩れ落ちる。

セーバーをくるつと一回転させ右上段から振るうと、今度は体を深々と切り裂いた。

荒い呼吸を鎮めつつ彼はフォースに身を委ね、ドロイド達に対峙していく。ドロイドは次第に輪を狭めつつオビⅡワンに迫り、隙あらば鎌を繰り出そうとしている。

後ろからの攻撃の気配に、身を低く回転しセーバーを薙ぎ払った彼が見たものは。

テーブルの上で身動きがままならないマスター。

そして、その背後で鎌を振りかざすシクル・ドロイド――

あの嫌な予感が頭を過ぎる。言い知れようも無い不安が巨大に膨れあがる。

「マスターっ!!」

オビⅡワンは叫び、自分が行っても間に合わないを見るや、ライトセーバーを右手に持つと反動を加えて横向きに投げつけた。

青い光は激しく横の回転度を上げ、クワイⅡガンの背後にいたドロイドの胴体をスパツと切り裂く。

ドロイドの上半身が後ろに落ちかけると同時に、オビⅡワンは高く跳躍し、宙返りして空中でセーバーを手元に引き寄せると、テーブルの上に着地した。着地の振動が腹や背中に響き、膝から崩れそうになるのをどうにか堪える。

そして、歯を食いしばると、クワイⅡガンを狙っていたドロイドの群れを上から一閃した。

不意を衝かれたドロイドは首や鎌を切り落とされ、行動不能に陥る。

突然、高々と跳躍し飛び込んできたドロイドが、全体重を預けたままオビⅡワンに鎌を振り下ろした。

ずしつと重い手応えに思わず膝を折る。

頭上で辛うじて鎌を防いでいるが、セーバーを挟み込んでいる鎌がじりじりと下がってくるのがわかった。目が霞んで力が抜けてくる。

瞬間、彼の横から碧色に輝く光が走り、ネオ・シクル・ドロイドの胴体を貫いた。

火花が散りドロイドから力が失われると、ゆっくり後ろに倒れて行く。

「大丈夫か？」

オビⅡワンは両手をテーブルにつき喘いでいたが、後ろを振り向くと微笑んだ。

碧色のセーバーを右手に持ち佇むクワイⅡガンの後ろには、鎌を真つ二つに切られ胴体から白い煙を上げて転がっているネオ・シクル・ドロイドの姿がある。

「手強い奴だったが・・・」

とマスターは視線を走らせ

「どうやらあの改良型シクル・ドロイドは2体しかいなかったようだ。不幸中の幸いだな」

「改良型シクル・・・？」

クワイⅡガンは微笑むと

「ここですばらく休んでいなさい」

と言い置き、残り少なくなったドロイドの群れに飛び込んだ。

オビⅡワンもしばらく呼吸を落ち着かせていたが、すぐに後に続く。

そして、間もなく、この部屋で動いているものは彼ら二人だけとなった。

一通り気配を探った後、クワイⅡガンは扉を開けた。

その部屋の奥、ベマール石で出来たテーブルの向こうに人影が座っていた。両側にしか残っていない、かなり薄い白髪を生やした、初老の小柄な人物が。

「お前がトレデイスか？」

男は、テーブルの上に置いてある何かの部品から視線を上げた。丸

い眼鏡の向こうから鋭い眼光がきらめく。

「遅かったな、ジェダイ。かなり苦戦したようだが？おや、子供もいるのか。俺もなめられたもんだ」

彼はそう言っつて頬のこけた顔を歪ませて、引きつった笑いを浮かべた。

オビⅡワンは一瞬ムツとするが、あくまでも感情を冷静に保ちながら彼を見つめる。

意に介さず、クワイⅡガンは穏やかに聞いた。

「聞きたいことがある」

「そう言われて素直に応えるところか？」

凄みのある笑みでクワイⅡガンを見あげた。

全く臆することなく、ジェダイも堂々と弁を述べた。

「応えてもらわねばなるまい。死にたくなかったらな」

「死？そんなもの怖くも何ともない。さあ、どうする？ジェダイ」

目をギョロリと見開き面白そうに問う。

死のやり取りでさえ、この男にかかれば単なるゲームになってしまいかねない。

内心の怒りを必死に堪えながら、今まで沈黙していたオビⅡワンが口を開いた。

「どうして、こんな争いを起こしたんですか？」

「どうしてかな？どうしてだと思おう？坊主」

含み笑いを見せるトレデイス。

だが、挑発にのらず少年はじつと彼を見すえる。

トレデイスは面白くもないといった表情で鼻を鳴らし、忌々しげに吐き捨てた。

「コルサントに近いからさ」

すかさずクワイⅡガンが口を挟んだ。

「それだけではないだろう？」

「それだけじゃない？ああ、それだけじゃないさ。ここは良質の金属が採れるんだ。ブラスターを撥ね返すほどのな」

「そんな金属がとれるって聞いたこともないけど」

オビⅡワンは不思議そうな顔をする。

「そりやそうさ。俺とルサムしか知らないからな」

「ルサム？」

聞き返すオビⅡワンにトレデイスはちよつと顔をしかめた。

静かにクワイⅡガンが言った。

「隕石の影響か」

「ご名答。隕石が落ちた時にそれに含まれていた金属が、衝突の衝撃で圧縮され、より良い金属になったって訳さ。俺は元々それを調べにここに来た」

「だが、今は陰謀に加担し、この街の争いをけしかけたということか」

「さあ、どうだろうな？」

「そんなことのために争いを起こしたんですか!？」

義憤さえ含まれるオビⅡワンの問いかけに、トレデイスは吐き捨てるように言った。

「全て金さ。金がないと実験もできん。いいか？綺麗事を言っても、全てこの世は金で回っているんだ。金金金さ。住民どもが争いでドロイドを使えば、金が入る。住民どもがこの街からいなくなれば、この金属は採掘し放題さ」

「哀れだな」

「何とでも言うがいい」

口の端に笑みを浮かべた。

そんな彼に委細構わず、クワイⅡガンは淡々と訊ねた。

「他のドロイドはどうした？」

「製造したのは全部お前達に壊された」

「これだけではあるまい。他にも製造していたはずだ。それはどこにある？」

「売っちゃまった。気が向いたら探してみるがいい」

「どこに売ったのだ？」

「さあな、忘れた。さて、俺もそろそろ話し飽きた。実験に戻りたいんだが、いいか？」

あくまでもマイペースで会話を進めるトレデイスに、ジエダイ・マ

スターは溜め息をつくと言いつつ放った。

「お前にはもう、実験を続ける時間はない」

「俺を捕まえようってのか？こんな無抵抗の俺を」

「無抵抗とは言えないが？」

「まあね」

その勝ち誇ったような言葉の響きに、不安を感じたオビワンは周囲を見渡し――

凍りつく。

何時の間に現れたレーザーガンが部屋の四隅、天井の角から黒光りする四つの銃口で、二人のジェダイに狙いを付けていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ブラスターの光線が右腕を掠り、ジョンはもんどりうってバイクから転げ落ちた。

燃料がなくなりつつあり、バイクも上昇ができない状態での出来事だった。

「つつ……」

低空飛行だったため、さほどの高さからではなかったが、さすがに腰を打ったらしく痛がっている。

その彼の横に軽やかに飛び降りた者がいた。

苦笑を見せていたジョンの顔が強張った。首に振動ナイフバイブプロブレードが当てられている。

ナイフを持ったままローディアンが声高に叫んだ。

「おい、お前等、全員降りてここに来い。武器は捨てな、こいつの命が惜しかったら」

ベレルガを始めとするセニス兄弟は、半ば苦々しく半ば怒りを噛み締めながらバイクを止め、ブラスターを放り出すと素直にジョンの周りに集まった。

「よし、それでいい。手を挙げる。おっと妙な真似はするなよ」

と言いつつ、ジョンの首筋をナイフで触れる。

ベレルガ達は激しい怒りを堪えて無言のまま立ちすくんだ。

ローディアンは見あげると声をかけた。

「おい、あれを出せ」

ベルトコンベアー付近から一人のクラトウイナンが姿を現す。それとともに二人、もう三人。残っている敵は七人だったようだ。

(ちっ。もうちよつとだったな)

ベレルガは密かに舌打ちした。

上から一人が降りてきて、彼女たちの手首を紐で縛り始めた。

最初に現れたクラトウイナンが手に持っている物を宙にかざした。

「これは何かわかるか？ タイマー付の超スーパー・サーマル・デトネーター熱爆弾だ。これ一つあ

れば、ここは完璧に吹っ飛ぶ。勿論、お前達も一緒に」

敵は五人を数珠つなぎに縛った後、その紐の先を、傍にある重そうなコンテナの取っ手に括りつけた。

それを上で見届けたクラトウイナンは、嬉しそうに爆弾を持った手を掲げた。

「これでお前達も終わりだ」

第13話 黄昏時の決着

瞬間、部屋の入口まで飛びずさったクワイⅡガンはセーバーを起動させ、オビⅡワンを自分の背後に引き寄せると盾となった。

レーザーガンが続けざまに火を吹く。

ジェダイ・マスターはフォースと一体となった素早い動きでレーザーを撥ね返し、狙い違わずレーザーガンを破壊していく。

4台全て壊したと思ったその時、ブラスタアの光線が放たれクワイⅡガンの左肩を掠めた。

「よく今のをかわしたな。さすが、ジェダイ」

かわしていなかったら首を貫通していただろう。本当に殺人も辞さない男だ。

トレデイスはブラスタアを構えたままゆっくり歩いてきた。しかし、彼も馬鹿ではない。ライトセーバーの間合の外で立ち止まる。

「さあ、命乞いでもするか？」

ニヤニヤ笑いながら話しかける。だが、その目は笑っていない。

クワイⅡガンは表情を変えずトレデイスを見つめている。その瞳にあるものは恐怖か憐れみか。

トレデイスはブラスタアの照準をクワイⅡガンの眉間に合わせた。

「死ねっ!!」

ピュンツと光線が発射され

トレデイスの胸を射抜いた。

「ば、ばかな・・・」

どうしてという表情で後ろを振り向く。

その先には、部屋の隅に取りつけられていたレーザーガン。

「1台だけ壊さず残しておいたのだ。お前が何か仕かけてくるというのは容易に想像できたからな」

「く、くそ・・・っ」

口から血の塊をゴボツと吐き出すと、トレデイスは床に倒れ、そのまま動かなくなつた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

その時、どこからともなく雄叫びが沸きあがった。

「うわあああつ——!!」

ベレルガ達もエイリアン達もぎよつとして振り返る。

壁に開いた穴から見えるのは、手に武器を携え武装した民衆の姿。

老若男女を問わずその数、何百人か。

そこには先住民オレバフも後住民テラフもなかった。

今、この街の人々の心が一つになったのだ。争いを止めるために。最後の戦いを行うべく。

余りの事に浮き足立つエイリアン達を見て、素早い速さでベレルガは体を捻ると、腰に差してあったナイフを抜き取り手首の戒めをほどく。

そのまま手首を捻って、ナイフを宙に飛ばした。

ナイフは狙い違わずクラトウイナンの腕を貫く。

その手から超スパー・サーマル・デトネーター熱爆弾が転げ落ちるのを、すかさず下で受け止めた。

「ま、待て、こいつがどうなつても・・・」

とジョンにナイフを付きつけていたローディアンは、全部言い終えることはできなかった。

ベレルガの鋭い回し蹴りが延髄に決まったからである。

「ベレルガ、号令を」

ロイの言葉に頷き、彼女は民衆に叫んだ。

「やっちまえっ!!」

「おおおお——!!」

怒涛の如く雪崩れ込んだ民衆は、飛び交うブラスターを物ともせず突き進みエイリアン達に飛びかかる。

「生け捕りにしろっ!!殺すんじゃない」

心外なという顔を見せる群集に、ベレルガは凄みのある笑みを浮かべて言った。

「こいつらには聞きたいことが山ほどある。後から、今ここで死んでおけば良かったと思うことになるだろうよ」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「終わった・・・」

ほっと吐息が漏れた。

気が緩んだ瞬間、背中やら腹やら体のあちこちが悲鳴を上げ、痛みを再発する。

緊張がほぐれると、目の前がぐるぐると回り始めた。

体がぐらりと傾き、オビⅡワンの意識はふわりと闇に吸い込まれ

と不意に背中を軽く押えられた感触に、慌てて意識を取り戻した。

「大丈夫か？オビⅡワン」

マスターが彼を手で支えながら心配そうに見つめている。

「だ、大丈夫です」

オビⅡワンは無理に微笑み、痛さに顔をしかめた。

「かなり酷い怪我だな」

「僕は大丈夫です。それよりマスターの方が・・・」

「かすり傷に過ぎん」

いつものような穏やかな微笑みを浮かべクワイⅡガンが言う。

「ようやく終わったな」

「はい」

「さて、皆の元へ戻ろうか・・・ん？どうした？」

言いかけて、ふと哀しげな表情で自分を見つめているパダワンに気づいた。

「・・・すみません。さっきまでマスターが僕を避けている気がしたから・・・」

「気にしていたのか？」

「はい」

仕方がないなといった風にクワイⅡガンは微笑んだ。

「別に避けてはいないぞ。ただ、先住民オレベフと後住民テラフの気持ちを考えて、争いの最中に我々が師弟だとわかれば、元々、示し合せて二つに分かれ、うまく丸め込もうとしたと勘繰るかもしれない。となると、良い印象を持たないだろう。だから自然、他人行儀にならざるを得なかったのだ」

言葉を切る。

そして、優しい眼ざしをオビⅡワンに向けた。

「だが、もう争いは終わった。私は皆に胸を張って、お前が私のパダワ
ンだと言うことができる」

途端、少年は嬉しそうに顔を輝かせた。

クワイⅡガンはフツと笑うと

「さあ、行こう」

と促し、二人は痛む体を引きずりながら戻り始めた。

ふとクワイⅡガンは思い浮かんだ考えに心をとらわれる。

（二介の科学者にこんな立派な工場が造れるだろうか、いくら金の亡
者といっても。実はこの争いの本当の黒幕はトレデイスではないの
かもしれない。別に裏から金を回したものがいたとしたら？ルサム
といったな。一体何者だ・・・？）

だが、彼はこの考えを独り胸のうちにしまい込んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「終わったな」

「何か清々しい気分だぜ」

外に出たベレルガ達は赤く染まりつつある工場を見上げた。もう
夕暮れ時になろうとしている。

残ったエイリアン達はこれ以上にはないほどにぐるぐる巻きにされ、
周りを屈強な男達に見張られ転がっていた。

幸い民衆にもこの戦いで死者はいない。怪我人は数十人いるも
のの重傷ではなかった。

「あいつら、遅いな・・・」

ポツリとベレルガが呟いた。聞き咎めてロイが訊ねる。

「ジェダイ殿達か？」

「何かあったのかな」

工場が静けさを取り戻してから、幾ばくかの時間が経っていた。
ジェダイ達が向かった二階も何故か静かである。

不安に襲われ

「ちよつと見てくる」

とベレルガが歩き出したその時。

「戻ってきたっ!!」

ジョンの声に目を凝らせば、工場の方から二つの影が、お互い支えあうように歩いてくる。

「やった——っ!!」

大歓声が二人を優しく包み込んだ。

駆け寄ったベレルガが開口一番

「ごっちは無事片づいた。トレデイスは?」

「彼は死んだ。もうこれで、この街が二度と争いの場になることはないだろう」

疲れを滲ませながらクワイ||ガンが言った。

現に二人のジェダイは満身創痍だった。

だが、暖かく迎えてくれた民衆の感謝の心が二人を癒してくれた。

「よくがんばったな、ちびジェダイ」

笑いながらベレルガがオビ||ワンの背中をバシバシ叩く。

「つつ……」

痛みを必死に堪える姿を見て、慌ててベレルガが問いかけた。

「ごめん、痛かったか?悪い悪い」

「……大丈夫……です。少し休めば」

「ああ。今日はゆっくり休んでくれ。それにしてもあんた達、師弟だろ?」

「ど、どうしてそれを?」

「隠していたみたいだけど、わかるんだ。お互い信頼感が溢れてるからさ。別に気にしてないよ、今はともかく平和になったんだから」

ベレルガはウインクすると、その場を離れていった。

その姿を目で追うと、思わぬ者の存在に気づいた。

(彼だ。テレスト通りで、リアに電気棒で殴りかかろうとした……。彼も争いを止めるために来てくれたんだ)

視線に気づいたのか、その男はオビ||ワンに向かって歩いてきた。

「大丈夫か?」

打って変わって優しい声である。争いがああも人を変えるものな

のか。

「はい」

「あの子にはすまないことをしたと思ってる。・・・君があの子だったら許してくれるかな・・・？」

「リアがその言葉を聞いたら、きつと喜んだでしょう・・・」

「そうか・・・ありがとよ」

彼はオビⅡワンの頭を撫でると静かに去って行った。

代わりにクワイⅡガンが近寄ってきた。

「大丈夫か？オビⅡワン」

「はい。マスターこそ大丈夫ですか？」

「私は大丈夫だ。少し座った方がいいのではないか？」

「そうですね・・・」

オビⅡワンはくらくらする頭を振ると草の上に腰を下ろし、フォー
スを集め体を癒し始めた。隣りに座ったクワイⅡガンも瞑想を始
める。

そんな中、ベレルガの声が飛んだ。

「もう争いは終わったつ。これから祝いの花火を上げる。皆、盛り上
がろうぜっ!!」

歓声が沸き起こる中、彼女はおもむろに超スーパー・サーマル・デトネーター熱爆弾を取り出す

と、工場に向けて投げつけた。

爆弾は弧を描き、工場に吸い込まれる。

と、激しい閃光と轟音を撒き散らして、大爆発が起こり工場は吹っ

飛んだ。

最初は歓声を上げていた民衆だったが、次第に悲喜こもごも表情
を浮かべ、無言で紅蓮の炎を上げる工場を見つめている。

彼らの胸に去来する物は何であろう？

ややあつて安堵の溜め息が漏れると、それが津波のように広がり再
び歓声が巻き起こった。

それをジェダイ二人は優しい眼ざしで眺めていた。

第14話 復興への一歩

復興への第一歩が始まった。

この街が美しい景観を取り戻すには、かなり長い時間がかかるであろうが、どの人々をとってみても顔が喜びで満ちあふれていた。

廃虚の解体、建物の建築など大変なことではあるが、長い間続いた争いの悲惨さを思えば明るい未来が待っているだけに、自然笑顔が零れ、作業にも精が出るのであろう。

そこにはもう先住民オレベフも後住民テラフもない。

そんな様子を眺めながらオビⅡワンは微笑みを浮かべた。

彼自身、気持ちがあすつかり晴れている訳ではなかったが、人々の復興にかける意気込みを見るにつれ嬉しさが込みあげてきた。

(平和っていいな……)

肩をポンと叩かれ顔を向けると、同じく穏やかな日差しを浴びて微笑みかける彼のマスターがいた。

「任務終了だな」

「はい。でも、すみません、マスター。勝手な行動をとってしまった……」

「お前にも勝手な行動をとった訳があるのだろう？ 後で聞かせてもらうつもりだ。それより、コルサントと連絡がついた。迎えの船があると標準時間ほどで着くだろう。その間に行きたい所があれば言うてみるがいい」

「……すみません。では、二カ所ほどいいですか？」

しばらくのち、彼らは元ウエスト・クテラにいた。

昨日の急転直下の争い停止により、街は以前使われていたクテラとしての名前を取り戻しつつあるのだ。

この元先住民側にはクワイⅡガンも頻りに足を運んではいたのだが、細い路地が縦横無尽に入り組んでいるこの裏道では、どこを歩いているのかわからなくなること多かった。

しかし、今、オビⅡワンは確かな足取りで細い路地を歩いていく。目的地が明確にわかっているからであろう。

ようやく歩を止めた。

クワイⅡガンが眺めるに、崩れ落ちたる廃虚である。ここに何が？

「ここは僕とリアが初めて会った場所です」

俯きつつ言葉を続けた。

「そして、ここはリアのお母さんのお墓でもあるそうです。彼女のお母さんはここで殺されたから……。リアはもうここに来られません。だから、僕が代わりに……」

口ごもる。

泣いているかと思っただが必死に堪えているようだ。クワイⅡガンは優しい眼ざしを向けた。

少年は不意に頭を上げ、廃虚を目に焼きつけるようにじっと見つめた後、ゆっくりと頭を垂れ黙禱を捧げた。クワイⅡガンもそれに倣う。

それから俯いたまま、

「もう一つの方に行きましょう」

と消え入りそうな声で言った。

主がない家は、しかし、今までと変わらず静かに佇んでいた。

畑に植わっている青々とした野菜も、世話をする者もない今、徐々に枯れていくのだろう。

リシートも手当てを受けるため城に運ばれたまま、まだ戻ってはいないようだ。

「ここはあの少女の家か？」

「はい。僕が少しの間、お世話になった家です」

昨日と全く変わらぬ家。畑。

今でも家のドアからリアが飛び出してきそうな気がする。

そして、ニツコリ笑いかけて

それなのに……。

オビⅡワンは歯を食いしばった。

必死に泣くまいとしているパダワンを見るに見かねて、クワイⅡガンは彼の頭を撫でようとしたが、反って悲しみを増す結果になりそうな気がして、ただ無言でその傍に立っている。

ややあつて深く大きい吐息を漏らすと、少年は踵を返し畑に向かった。

畑の隅で何やら動いていたかと思えば、手に数本の花を持って帰ってくる。

薄い青紫色の花弁をつけた可憐な花であった。

「行くか？」

静かにマスターが声をかける。

「はい……」

小さな声で応えた。

彼らは再び歩き始めた。

テレスト通りを南下する。宇宙港へ向かつて。

クワイⅡガンは、先ほどオビⅡワンはできるだけこの通りを避けて、通るとしても横切る程度に歩いていたことに内心思い至っていた。

(このまま行けば、どうしてもあの場所を通ることになるが……)

ちらりと横を見る。彼の弟子は相変わらず俯き、地面を見つめたまま歩いている。

ジェダイ・マスターはふうと溜め息を漏らした。

そこへ

「おお、クワイ —— ではない、マスター！ジェダイ!! どうやら間に合ったようですな」

声とともに執事ザアレが走りよってきた。

後ろには警備兵がいつもの如く従っている。

振り向いた二人にようやく追いつくと、ザアレは息を弾ませた。

「王から……貴方がたに……伝言です……」

呼吸を整えると伝言を述べ始めた。

「王は雑務に追われ、貴方がたの見送りができないことを非常に残念に思っておられます。貴方がたには口では言い表せないほど、感謝しています。またこの街に来るようなことがあれば、是非お立ちよりくださいと。それから」

オビⅡワンに向き直り続ける。

「君の勇氣には本当に感謝している。今後は争いなど絶対起させない、あの少女のためにも、とおっしゃっていました」

「ありがとうございます」

オビⅡワンが礼を述べると、クワイⅡガンも付け加える。

「お心づかい感謝致します。また、お会いする日を楽しみにしています、とアジェス王にお伝えください」

不意にオビⅡワンが意を決したように口を開いた。

「僕からも伝言があるのですが、いいですか」

「何なりどうぞ」

微笑む執事。しかし、何故かオビⅡワンは一瞬、言いよどむ。ややあって、思いつめた表情でゆっくりと話し始めた。

「・・・リシータさんにお伝えください。・・・リアのことは申し訳ありません。僕がついていながら・・・本当に申し訳なく・・・なんと言ったらいいか・・・」

「パダワン・ケノービ」

絞りだされるような辛い言葉は、不意に執事の柔らかい声によって止められた。

不思議そうな顔で見つめる少年に、ザアーレは優しげな眼ざしで話しかける。

「もうお詫びは充分ですよ、パダワン・ケノービ。本当にあの方が言っていた通りですね。リシータ様から聞いていたのですよ、リアのことでああなたが気に病んでいのではないかと。そして、気に病む必要はないと」

「しかし、でもっ」

「リシータ様はこうも言っておられました。『あなたを助けると決めただのはリアです。無理強いされたわけでもなく、自らの意思で決めたのです。あなたは、リアの決めたことに異論を唱えるのですか?』」

「そんなつもりではっ」

『では、あの子がしたことを受け入れてください。それがどんなことでも』と」

「・・・はい」

俯きがちに少年は言葉を漏らした。

ザアーレは微笑み、それから、二人に視線を向けると

「王と同じく、リシータ様もあなた方には感謝しております。そして、まだ体調がかんばしくないため、見送りができないことを申し訳なく思っておられました」

と言い添える。

クワイⅡガンが口を挟んだ。

「どうやらその女性には、オビⅡワンが世話になったようですね。こちらこそ感謝しています、本当にありがとうございます、とお伝えいただけますか？」

執事は頷いたあと、最後の挨拶を送る。

「では、道中どうかご無事で。フォースと共にあらんことを」

「フォースと共にあらんことを」

一礼を返し、ザアーレは再び警備兵とともに駆けていった。

「忙しそうな人ですね」

「ああ、だが、これからもっと忙しくなるだろう、彼は」

フツと笑うと振り向きクワイⅡガンは歩を進め始めた。オビⅡワンも後に続いた。

スピーダーの爆音が響いてきた。

さすがにこの音で、振り向かなくても誰が近づいてきているのか判断は可能である。

二人は顔を見合せると微笑み、声をかけられる前に振り向いた。

「よっー！」

走り寄ってきたベレルガが片手を上げて挨拶した。

「行っちゃもうんだってな」

「争いが治まったからな」

「ちよつとは寂しくなるけど・・・ま、いいさ。やることはいっぱいある。悲しがつてはいられないほどにね」

ニヤツと彼女は笑い、不意に思いついたように話題を変えた。

「そうだ。ニユースが二つある。この街の統治機関が定まった。アジェス王が最高責任者で、その下に元テラフの政府がつくそうだ」

「二つの人民が融合しつつあるということか。良いことだな」

「そうそう。それに加えてもう一つ。いいニュースだ。アジェス王は婚約を発表するらしい。まあ、まだ心の傷が癒えてないとかで、結婚は先のことになりそうだけど」

そんなこと、先ほど会ったザアーレは言っていないなかったのに。オビⅡワンは急に現れたおめでたい話に不思議そうな問いを投げかけた。「え？お相手は？」

「君の知っている人さ。リシータだよ。いや、これからはリシータ様と言うべきかな。王の一目ボレだつて話さ。しかも彼女、大人しく見えて、実は情熱的ときた。王の母君の性格そっくりだ」

そう言つて、目を丸くして驚いている少年を尻目に、ベレルガは豪快に笑つた。

正式発表前に話してしまうのは、執事としてはばかられたのだろうとザアーレの気持ちを内心汲みつつ、微笑みながらクワイⅡガンが言った。

「素晴らしいニュースだな。これで、この街に争いが起こることは二度とないだろう」

「ああ、あたしもそう思うね」

「ところでいいのか？君は。それで」

一瞬、驚き、頬に赤みがさしたベレルガだったが、再び目を見開いているオビⅡワンの視線を感じながら慌てて応える。

「え？…あ、あたしか？べ、別に王のことは何とも思つてないさ…。それにあんたも知ってるだろう？あたしが城の中で大人しくしてるなんて、天地がひっくり返つてもないつてことをさ」

クワイⅡガンは微笑みつつ、何事かを納得したかのように軽く頷いた。

「そうだな」

「そういうこと。じゃ、あたしはそろそろ行くから。元気だな」

ベレルガは踵を返し去っていった。

彼女の向かう先では4台のバイクが止まっていて、男達がこちらに向かつて手を振つたりお辞儀をしていた。

バイクが見えなくなると、二人はまた歩き出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

広いテスト通りの一角。そこだけ何かが積まれ、盛りあがっている箇所がある。

昨日のあの・・・場所だ。

ふと前方に視線を走らせ、そう確認すると、オビⅡワンは小さく呻くような声を上げた。

その声は本当に小さく、彼の行動に気を配っていなかったら全く気づかない程度のものだった。

クワイⅡガンは少年の中に哀しみと恐れが混ざり合った感情をとらえた。

(無理もない)

と思う。

(オビⅡワンはまだ子供だ。目の前で人が死ぬ光景など、そう見たことがある訳ではないだろう。しかも親しい者の)

だが、そんなマスターの思いとは裏腹に、オビⅡワンはそれでも歩みを緩めることはなかった。まるでそこに行くこと自体が目的であつたかのように。

徐々に近づくにつれ、その盛りあがっている正体がはっきりしてきた。

無数の色とりどりの花々。

通りを行く者達が皆、花を持ち、そこに哀悼の意を示すかのようにそつと置いていく。数人は近づいてくるジェダイ達に気づき、寂しげな笑顔とともにお辞儀をした。

オビⅡワンはその花々の前に近寄り、静かに跪く。

少し見つめた後、手にしていた薄紫色をしたあの小さな花を取り出し、一番上に乗せた。

しばし頭を垂れ黙祷をする。クワイⅡガンも礼を尽すが如く静かに頭を下げた。

ようやく顔をあげると少年は言った。

「行きましょよう」

だが、その声がわずかに震えていると感じたのは気のせいだろうか。

沈黙を纏い二人は歩き始めた。

クワイⅡガンには、制御しようとはしているものの、それでも溢れてくる哀しみを、必死に押えようとするオビⅡワンの心の動きが手に取るようにわかった。

わかるが掛けるべき言葉もなかった。

／／オビⅡワン／／

呼ばれた気がして驚いて少年は振り向いた。聞き覚えのある声に。

「リ・・・ア・・・」

少女は立っていた。通りに積まれたあの花々の横に。

美しく煌く青い光を纏いながら。

彼女はニツコリ笑った。

／／悲しまないで、オビⅡワン。リアは後悔してないよ。だってオビⅡワンが無事なんだもん。オビⅡワンに会えてリアも楽しかった。だから・・・／／

頭の中にリアの声が流れ込んでくる。リアは再び微笑んだ。

「でも、そんなのっ・・・哀しいじゃないか・・・」

／／いいの。これで争いは終わったから。リアみたいな子でも生まれてきて良かったんだなって思えたから。それに今は気持ちがいいよ。空気と一つになれたみたいで／／

彼女はふわっと宙に浮きゆっくりと着地した。この状態を楽しむかのように。

／／じゃ、そろそろ行かなきゃ。ママが待ってる。またね、オビⅡワン／／

「あ、待ってっ!!」

リアは軽く手を振り、後ろを振り返ると、髪をなびかせ宙に溶けるように消えていく。青い光が少しの間、瞬いて消えた。

永遠の別れとも思えない別れ方だった。

差し出した手をゆっくりとしまいオビⅡワンは佇んだ。無言で彼女が消えた方向を見つめている。

「いい子だったな」

静かにクワイⅡガンが言った。

ハツと驚いてマスターを見上げ、彼にもリアが見えていたことを察し、併せてその言葉の意味を十分噛み締めると、もう堪えきれなくなった。

きつく閉じた瞳から涙があふれ頬を伝っていく。

（もう泣かないって決めたのに……。強くなるってフレールにも言ったのに……）

そう思う傍から涙がこぼれ落ちる。自分の弱さに情けなくなつて、余計にそれが悲しさを募らせた。

急に辺りが真つ暗になつて、不思議に思ったオビⅡワンは濡れた目を開けた。

焦げ茶色をしたポンチョが頭からくるむように彼を覆っていた。マスターが羽織っていたその。

必死に涙を見せまいとしていた弟子に敬意を表して。

その心づかいがオビⅡワンにとつて何よりもありがたいものとなった。

クワイⅡガンはポンチョの上からオビⅡワンを支えると

「とりあえず行こう。宇宙港はもう目の前だ」

と穏やかに声をかけた。

歩きながらクワイⅡガンは諭すように言う。

「泣きたい時には泣けばいい。親しい者が亡くなったのだから、哀しいと思う感情は当たり前のことだ。何ら咎められるものでもない。いくら感情を制御しなくてはならないジェダイといえど、その前に人であることを忘れてはならない。優しさは時として弱点だが、大いなる長所にもなり得る。私はお前にはその長所を伸ばしてもらいたいと思つている」

「……はい、マスター」

くぐもつた声が微かに聞こえる。ジェダイ・マスターは苦笑をし視線を上げた。

宇宙港が目の前にそびえていた。

第15話 逆らった理由

宇宙港の荷物置き場で、他の惑星に売りに出すか処分してもらおうか未だ揺れている武器類が詰まったコンテナの上に、二人は腰をかけていた。

クワイⅡガンはさりげなく視線を左に走らせた。

横に居るパダワンは、クワイⅡガンが先ほど脱いだポンチョをまだ頭から被っていたが、そこから覗く顔にはもう涙はない。

(落ちついたようだな)

その視線に気づいたのかオビⅡワンは被っていたポンチョを取ると、軽く折りたたみクワイⅡガンにおずおずと差し出した。

「ありがとうございます」

クワイⅡガンは無言のうちにも笑みを浮かべ、パダワンの頭をポンと軽く叩くとポンチョを受け取った。

しばらくしてオビⅡワンがそつと訊ねた。

「マスター、怒っていますか？」

「ん？」

「・・・僕が勝手にこの星に来たことを、です」

「もう怒ってはいない。お前の無鉄砲は今に始まったことではないからな。だが」

言葉を切り、彼は真剣な眼差しを向けた。

「どのような理由の上での行動なのか、説明を聞かねばなるまい」

「はい・・・」

俯いてた顔を上げクワイⅡガンの方に向き直ると、オビⅡワンは話し始めた。

「5日前、キャッシュークから戻ってもう1日余分にマスターから休日をもらったあの日、僕はジェダイ聖堂で、久しぶりにバント達と会って話をしていました。その後、星の勉強をしようとする^{スターマップ・ルーム}室に行っただんです。そうしたら部屋の奥から声がして、しかも、マスターの名前が聞こえたので、思わずこっそり聞いてしまっただけです」

一旦、言葉を切ると、少年は続けた。

「話していたのはマスター・ヨーダとマスター・ウィンドウで、『クワイガンはもう発ったかの?』『今日発つと言っていました』などが話していました。僕は任務だと思い、急いでマスターの部屋に行ったら……」

「私はもう出発した後だったと?」

「そうです。机の上に置いてあった『一標準週間ほど出かける。その間のことについてはマスター・ヨーダに指示を仰ぐように』との置き手紙を発見しました」

不意にオビワンは顔を曇らせた。そして、その時のことを振り返りながら言葉を紡ぐ。

「紙を読んだ時、急に嫌な予感がしたんです。マスターの身に何か大変なことが起こりそうなの……。マスターが危険にさらされているよな……」

トレデイスの工場で、シクル・ドロイドに対して無防備な背中をさらしていた師の姿が脳裏によみがえる。オビワンは知らず知らず身震いした。

「だから、僕は慌ててマスター・ヨーダの所に行き、マスターが行った場所を聞いたんです」

「マスター・ヨーダはすぐに応えたか?」

「いえ。『評議会で話し合いの結果、クワイガンだけ行くことに決まったのじゃ。クワイガンも承知しておる。辛抱せよ』とのみ。だけど、気になったので食いさがったんです」

マスターは深い深い溜め息をついた。

(コルサントに戻ったら、きつとヨーダの叱責が待っているだろう。まあ、それだけオビワンも私のことを心配してくれていたというところか)

悪い気はしない。

「それで?」

と促す。

パダワンは言葉を続けた。

「根負けしたのか、マスター・ヨーダはついに教えてくれました。それ

と、この任務の危険性も十分に」

一瞬、口をつぐみ、オビⅡワンは続けた。

「僕はマスター・ヨーダの了解をもらい、マスターの後を追ってこの星に来たんです。でも、マスターを見つけても、会った時に危険だからと帰らされるかもしれないし、僕ができる方法でこの街の争いを終わらせよう、早く終われば、マスターをあんな嫌な予感から遠ざけることになるだろうと考えたんです……」

吐息を漏らしクワイⅡガンは聞いた。

「船はどうした？」

「船は、コルサントの宇宙港に行ったら、ちようど着いたばかりの宇宙船がいて、無理を言って乗せてもらいました」

「お前は……本当に無茶をする」

苦笑いを浮かべざるを得なかった。とはいえ、少年がいたことで、どれほどこの難しい任務がやりやすいものになったかは考えるまでもない。

「だが、お前のおかげで助かった。来てくれて良かったよ」

「！　ありがとうございますっ」

「しかし、命令違反は命令違反だ。私からの説教を免れるとは思うな。そのうえ、コルサントに戻ったら、マスター・ヨーダからも厳しいお叱りがあるかもしれんぞ」

「覚悟の上です」

言ってニツコリ笑う。

そんな表情を見て

(全く懲りてないというか……)

と苦笑するやら愛おしさが込みあげてくるやらで、クワイⅡガンは自然、頬が緩むのを感じた。

エピソード

「あ、マスター。来ました」

空を見上げると、澄み切った青い空に白い小さな点が浮かんでいる。

それは見る見るうちに、真っ白な、しかも、優雅さも兼ね備えた宇宙船となり、今や再建設に取りかかるばかりになっていく宇宙港に辿り着くと、リバルサーリフト反重力装置を起動させゆつくりとその機体を横たえた。

<Winged House>と書かれた機体の横のハッチが開き、タラップが降りてくる。

パイロットが歩いてきて、二人の前に歩み寄り丁寧に辞儀をした。

顔を上げるとニッコリと微笑んだ。

「ご無事で何よりです、マスター・ジン。さすがですね。あの混乱を収めてしまうとは」

それから、傍らに目を転じ

「おや、この少年は？」

と声ほどには驚いていない表情で聞いた。

「私のパダワン、オビⅡワン・ケノービだ」

クワイⅡガンは紹介したが、すぐに顔をしかめて

「君だな。パグエス。オビⅡワンをここに運んだのは」

と気難しい顔で追求する。

パグエスと呼ばれた青年はオビⅡワンとちらつと目を合わせ、クワイⅡガンに視線を戻すと悪戯つ子のように微笑んだ。

「やはりバレましたか。さすがマスター・ジエダイですね」

クワイⅡガンは苦笑し溜め息をついた。

「全く仕方がないな」

「でも、マスター・ジン？彼は役に立ったのでしょう？」

「ああ」

「なら、いいではありませんか。終わり良ければ全てよし、ですよ」

「本当に君は・・・」

と一旦止め、適切な言葉を模索したが思いつかなかつたらしく、溜め息とともに口を開いた。

「おかしな男だな」

しかし、顔は笑っている。

「光栄です」

パグエスは敬礼をし、微笑んで言った。

それから、青年はオビⅡワンに緑色の瞳を向ける。

涙の跡を見とめたはずだったが、彼は一言もそれについて言及せず、一人前の男に相對する姿勢を見せた。

「ちゃんとした自己紹介がまだだったね。私はパグエス。パグエス・ハルシヨンだ。君の噂はいろいろと聞いているよ」

「いろいろと?」

「そう、いろいろと。訳があつてジエダイ達に関心を持っているからね」

不思議そうに見つめるオビⅡワンに笑みを返すと、パグエスはクワイⅡガンの方を向いて切り出した。

「さあ、名残惜しいかもしれませんが、そろそろ出発しましょうか。先に船でお待ちしています」

「またもや丁寧にお辞儀をし、彼は颯爽と船に戻っていった。」

パグエスが去つた後、二人は静かに街並みを見つめていた。いろいろな事があつた、この忘れ難いクテーラを。

「ややあつてオビⅡワンが口を開いた。」

「マスター、さつきから気になつていたんですが」

「何だ?」

「その・・・大事そうに肩からさげているその袋って、何が入っているんですか?」

途端、何故かクワイⅡガンは慌てた様子を見せる。

「あ、いや、何でもない」

その行動に不審なものを抱いたオビⅡワンは余計に気になった。

「見せて下さい、よっ」

袋を半ば強引に奪い取る。

「これは・・・」

中を目にしたオビⅡワンは驚いた。

しかし、一転して嬉しそうに弾んだ声をあげる。

「ジェネヴァーが買った薬の瓶ですね。マスター、持っていてくれたんだ」

「ああ。まあな。折角だから使おうかと・・・」

照れたようにポツリと言いつつ、クワイⅡガンに、心底から嬉しくなったオビⅡワンは明るく感謝の言葉を述べた。

「ありがとうございますっ!!」

そして、心の中で付け加えた。

(ジェネヴァーの気持ち大切にしてくれて)

オビⅡワンは久しぶりに気持ちが晴れるのを感じた。

ふうと溜め息を漏らし苦笑すると、ジェダイ・マスターは踵を返し船に向かった。

「コルサントに戻るぞ、オビⅡワン」

「はいっ、マスター」

返事を聞きながらクワイⅡガンは人知れず微笑んだ。

(ようやく元気になったな。こうして人は、様々な想いを糧に成長していくのかもしれない)

マスターの後ろを追いかけいきながら、オビⅡワンはふと立ち止まる。

街を振り向き、寂しそうな表情を浮かべ、本当に本当に小さい声で呟いた。

「願わくば、この街に・・・常に平和が訪れますように。リアのために」

そして、走り去っていった。

風も無いのに、空気がそこだけ微かに青い光をともなつて揺れたような気がした

End

(2000年頃執筆)

「JEDI APPRENTICE」の紹介

「JEDI APPRENTICE」について

冒険譚の途中ではありますが、話のベースにしている以上、ご紹介した方がいいかと思いましたが（なるべくネタバレなしで）。

「JEDI APPRENTICE」（ジェダイ・アプレンティス／略してJA）シリーズ

1999年から2002年までアメリカで発売された、少年オビワンのケノービを主人公としたアドベンチャー。全18巻まであるみたいです（原作を持っているはずなのに、しまい込んでしまっただけが取れない／汗）

著者は、1巻だけDave Wolverton、2巻以降はJude Watson。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

FanFicの後書きに書いた話と絡めつつ、簡単な紹介を。

話はオビワンの12歳のとき、場所はジェダイ聖堂から始まりません。

友人のガレン・ムルン（種族は掲載されていないのでわからず。そこで、私のFanFicでは勝手にヒューマノイドにしてしまいました）、バント（カラマリ안의女の子）、リーフト（ドレッセリアン）とジェダイの修行に励むオビワンの。

いじめっ子のブルック（ジェダイにもいるんですねえ）にからかわれながらも、頑張っています。

しかし、間もなく13歳になるオビワンは焦っていました。どうやら、ジェダイは13歳になるまでにパダワンにならないと、農夫としての道を歩むしかないみたいなんです。

そんな時に聖堂を訪れたのが、今は弟子のいないクワイガン・ジン。オビワンは猛アピールをしますが、クワイガンには弟子にする気は一切なし。半ば自暴自棄になったオビワンは13歳になる前に、農夫として生きていくため、惑星バンドミニアに赴きます。

ところが、クワイⅡガンも別任務で惑星バンドミニアに行くことになります。同じ船、〈モニユメント号〉に乗ったことにより両者は図らずも関わり合いますが、惑星に着いたら、やはり別々の道を歩むことに。

ところがところが、運命は二人を結びつけるんですね。

いろいろあって、結局、クワイⅡガンはオビⅡワンを弟子として迎え入れるんです。

☆☆☆☆☆☆☆☆

惑星メリダ／ダーンの話も。

師弟になった後のこと。

師弟は、囚われの身となったクワイⅡガンの友人のジェダイ、タールを助ける任務のためにこの戦争真っ只中の惑星、メリダ／ダーンを訪れました。盲目とはなりましたが、無事に見つかったタールをクワイⅡガンはコルサントへ連れて帰ろうとします。

しかし、子供たちでさえ戦いに加わっているこの星の現状を見たオビⅡワンは何とかしたいと思ひ惑星に残り、ついに師弟は袂を分かつのです。

のちにオビⅡワンはクワイⅡガンの元に戻りますが、裏切られたという思いが強いクワイⅡガンは弟子を信用できません。二人のギクシヤクした関係はしばらく続きます。

なにセクワイⅡガンには前の弟子、ザナトスがダークサイドに墮ちてしまったことに対する負い目と、裏切られたという心の傷があります。さらにオビⅡワンにも裏切られたことにより、全くオビⅡワンを信用できなくなってしまうんですね……。いやはや、大変です。

ザナトス〈Xanatos〉の説明もした方がいいでしょか。

惑星テロス出身の、黒髪、濃紺色（というのかな？）した目のヒューマノイドです。右頬に、燃えさかる暖炉（確か）から拾い上げた父親の指輪を、自ら押しあててできた、壊れた円環の形をした火傷の跡があります。火傷をつけたのは、父親を殺したクワイⅡガンへの当てつけで、この直後、師の元から去ります。

その後、姿を現しては結構、執拗にクワイⅡガンやオビⅡワンを狙

います・・・。

それにしても、ふと思ったんですけど、ヨーダの元弟子のドゥークーも、クワイ・ガンの元弟子のザナトスも、オビ・ワンの弟子のアナキンも皆、ダークサイドに堕ちている・・・。この主要キャラ達に關するダークサイド率、多くないですか？（苦笑）

☆☆☆☆☆☆☆☆

13歳の誕生日プレゼントの話も。

13歳の誕生日はパダワンにとって特別なものようです。師もその日には特別なプレゼントをあげるのが習わしみたいです。

ところが、クワイ・ガンがオビ・ワンにあげたのは、彼がオビ・ワンの年の頃に河原で拾ったという石（笑） さすが、型破りマスター（笑）

でも、その石、実はフォースを感じ取る石で、日に透かすと綺麗に光る優れものでした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

私のFanFicに絡んだ部分での、JAの紹介はこのぐらいでしようか？

ちなみにオビ・ワンとアナキン師弟を描いた冒険シリーズ「JEDI QUEST」（ジエダイ・クエスト／略してJQ）もあります。こちらはほとんど読んでいません（汗） 邦訳版が出ているので、日本語で読んでみるのもいいかもしれませんね。

☆☆☆☆☆☆☆☆

最後に。

また何かこのページに書きたいことができましたら、追加で記入するかもしれないことを、あらかじめ伝えておきます（わかるような形で追記します）。

★★★★★★★★

2017年4月28日追記。

・オビ・ワンの友達のガレン、ガレン・マルンが本当の名前のようですね。邦訳されている「JEDI QUEST」に登場するみたいです。

X a n a t o s (ザナトス)等の読み方は、英語の堪能な共同管理人が直接、著者のジュード・ワトソン女史に確認したからわかっていたが、ガレンの苗字は私が勝手に訳してF a n F i cに登場させた経緯があって・・・(汗汗) だって、M u l i nですもん。ムルンと訳したくなりますよね?・・・F a n F i cを訂正しないと(汗)

4. 黒耀の光 | Kokuyono Hikar

i | (宇宙海賊編)

第1話 海賊船の襲撃

ゴオオ・・・ン

物を叩くような鈍い音がして、少年はハッと顔を上げた。

手にしたデータパットの上では、美しい惑星がホログラムとなり浮かびあがっている。

(何の音だろうか?)

警戒心を強めた矢先に彼のコムリンクが鳴り出した。

すかさず応える。

「はい、オビIIワン・ケノービです」

☆☆☆☆☆☆☆☆

毛の長いダークグリーン絨毯が敷きつめられた廊下を静かに歩き、ジェダイ・マスター、クワイIIガン・ジンは夕食後の散歩をしていた。

とりたてて当てはない。

ただ、このような豪華客船に乗ることは滅多になかったし、そう言った意味では彼も人並みに好奇心が沸いたということか。

<Elegant Castle>は、コルサントから出航し、銀河の主な惑星に立ち寄る旅客船だ。次の任務地にも寄る。

任務はかなり楽なものとなるだろう。表敬訪問をするだけなのだ。

マスター・ヨーダは、先だつてのクテララの街の争いを、短期間に無事收拾したことについて深く感銘を覚えたようで、今度は簡単な任務をクワイIIガンとオビIIワンに与えたのだ。いや、任務と言うよりは褒美を兼ねているかもしれない。

クワイIIガンは思わず苦笑を漏らした。

あの争いだって彼の弟子がいなかったら、どんなに困難な状態になつていたか・・・。

その若きパダワンは部屋で次の任務地の勉強をしているはずだ。

好奇心旺盛な弟子はすぐにもこの客船の中を探検してみたいだろうが、さすがに任務先のことを頭に入れてからでないと気が引けるのだろう。

彼も彼なりに努力している。

クワイⅡガンは弟子のことを考えると思わず頬が緩んでしまうのであった。

絨毯を踏みしめ辺りを見渡す。そこは大広間だった。

この客船は本当に豪華な造りになっており、高い天井にシャンデリアが煌き、その下には紳士淑女達が歓談し話に花を咲かせていた。

躰の行き届いたクルー達が飲み物の載ったトレイを運び、かいがいしく乗客の間を回っている。

広間の隅にはバンドがいて様々な惑星の曲を奏でていた。

その時、何か鈍い音がしたような気がした。常人では気づかないかもしれない音。

だが、クワイⅡガンはすかさず急ぎ足で歩き出した。船尾に向かって。

風が轟々と渦巻いている。

船の空気が、船尾に突如空いた穴から外に吸い込まれているようだ。空気と一緒に備品やら小物も巻き上がり、船の外へと消えていく。

クワイⅡガンは自身も吸い込まれないよう近くの壁から出ている出っ張りに指をかけ、様子を窺う。

しばらくして鈍い衝撃が走ると風は収まった。

どこぞの船が、この客船に穴を開けて乗り込むためにドッキングしてきたらしい。

ジェダイ・マスターは苦虫を噛み潰したような顔をした。

と、今度はかなり離れた所から再び鈍い音が響いた。船首の方だ。コクピットを支配するつもりかもしれない。あそこを押さえれば船は航行できなくなる。

(二カ所から乗り込むつもりだ)

彼はすかさずコムリンクを鳴らした。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「マスター、何があったんですか？」

ただならぬ雰囲気を感じ、オビⅡワンは問いかけた。

『緊急事態が起こっている。お前はただちにコクピットに向かって欲しい』

「はい、マスター。しかし、緊急事態とは？」

ところが、通信はそこで切れた。

オビⅡワンは素早くローブを羽織りライトセイバーを確認すると、部屋から出てコクピットに向かって走り出した。

マスターの所に向かいたい心を押さえながら。

☆☆☆☆☆☆☆☆

コムリンクを切らざるを得なかった。

ブラスターの光線が次々とクワイⅡガン目がけて発射されたからだ。彼はライトセイバーを起動させると、それを全て撥ね返した。

ブラスターが効かないとみるや、斧を持ったガモーリアンが突進してきた。ジェダイ・マスターは腰をかがめ、体を一回転して反動をつけると、セイバーを薙ぎ払う。

真つ二つになるガモーリアンを余所に前に飛び出ると、ブラスターを構えていたローディアンにセイバーを振るい切り落とす。

隣り合った船から、接続した通路越しに続々と乗り込もうとしている者達を見るや、彼は周囲に視線を走らせた。

目当てのコントロール・パネルは少し離れた壁際に埋め込まれていた。

確認するやクワイⅡガンはおもむろにセイバーを振りかざすと、
Elegant Castleと船を繋いでいる仮の通路目がけて振るった。

いくら頑丈な通路と言えども、セイバーの前では高熱により鉛のように溶けて曲がっていく。

放たれる光線をことごとくかわしながら、クワイⅡガンは通路に切れ目を入れ続けた。

やがて脆くなった通路は乗っている人数に耐えきれなくなり、床が

歪むと激しい音を立ててひしゃげ、乗っていた者もろともゆつくりと宇宙空間を落ち始める。

クワイⅡガンは複雑な気持ちで眺めつつ、自身も真空空間に飛ばされないよう壁を伝いコントロール・パネルに向かうや、スイッチを押した。

緊急用のシャッターが素早く落ち、船は元通りの静けさを取り戻した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ふと足を止めた。

壁に背をつけ、こつそりと部屋の中を窺う。

そこは緩やかな曲線を描く階段が二階へと続く、美しく豪華な雰囲気を持つ大広間であった。

その一角に着飾った人々が集められ、物々しい武器を抱えた荒くれ者達が人々を囲んでいる。

広間とその横から通じる通路とを隔てる扉には、無理にこじ開けた跡があり、ブラスターなどの応戦の跡だろう、所々焼け焦げていた。

その様子からオビⅡワンは察した。

(宇宙海賊だ・・・)

海賊は多いと聞いていたが、まさか自分達の船が襲われるとは。宇宙を航行する船にとって一番会いたくない者達だ。

確かにこの船は煌びやかな外装から豪華そうなイメージを醸しており、狙いたくなる獲物なのかもしれない。現に、彼ら海賊達の足元には、乗客からかき集めたと思しき宝石や金目の物が高く積み上げられていた。

彼らは手っ取り早く仕事を済ませるために、この大広間に通じる通路を破壊して侵入してきたらしい。かなり手慣れた連中だ。

「そろそろ潮時だ。行くぞ」

この海賊の頭と思しきデヴァロニアン —— 惑星デヴァロン出身のこのエイリアンは、男性のみ頭部に大きな悪魔のような2本の角を持つ —— が声を発した。

ブラスターの銃口を乗客に向けつつ、海賊どもは宝とともに通路の

奥へと消えていった。

最後に一人残ったデヴァロニアンが、じつと周囲を眺め渡したあとポツリと声を出した。

「もう救難信号^{セイジ}を発したかもしれない。共和国艦隊が向かってくるとなると、やっかいだな——おい、その子供!!」

と身近にいた母娘の方を睨みつける。

声をかけられ、今まで震えていた親子は更に身を寄せ合って縮こまった。

デヴァニロンは構わず近づくと、母親から子供を引つたかった。

「何をするんですっ」

恐怖の面持ちで、しかし、気丈にも母親は声を荒げた。

「人質にするのさ。攻撃できないようにな」

ニヤツと不敵な笑いを見せるとデヴァロニアンは、その嫌がる髪の毛長い少女を無理矢理引きずっていく。

「やめてください、やめてっ」

「おっと、大人しくしてろよ」

行かせまいとする母親にブラスターの銃口を突きつけた。恐怖に立ち竦む母親。

周りにいた乗客も隙さえあればと身構えるが、そんな彼らにも銃口を向けつつ海賊は後ろ向きに下がっていく。

あまりのことに、声すらも発せない幼き少女。

オビⅡワンは沈痛な表情で、しばし目をつぶった。

ややあつて目を見開き、そつと辺りを見回す。だが、マスターの姿はどこにも見えなかった。

彼は意を決し唾を飲みこむと、大広間に足を踏み入れて声を投げかけた。

「その子を放してください。僕が代わりに人質になります」

第2話 孤軍奮闘の末

クワイⅡガンは大広間に向けて、急ぎ早やに歩いてきた。

高い天井にシャンデリアがぶら下がる、その広間のあちこちでは、宇宙海賊から無事生き延びた人々が安堵と恐怖の声を漏らしていた。

ダークグリーン絨毯を踏みしめ、彼は周囲を見渡した。

てつきりコクピットにいますかと思っていた。が、その姿は見当たらない。

彼のパダワンはどこに行ったのか。

面には出さないようにしているが、そんな心配そうな表情がつい見え隠れするのだろう。

一人の女性が立ち上がり、静かに彼の方に近づいてきた。

「誰かをお探しでしょうか？」

その声に振り向き、クワイⅡガンはまだうら若き女性を見とめた。

光の屈折により青や紫色に変わる輝くようなイブニングドレスを纏い、黒い髪を上品にまとめている。

「ええ。何かご存知ですか？」

「もしかして、あの少年でしょうか。貴方と同じような格好をしていますか？」

「そうです。彼がどこに行ったのか知っていますか？」

女性はうつむき、哀しげな表情を湛えたまま静かに応えた。

「あの子は・・・海賊の人質となりました。他の子供の身代わりに。自ら進んで人質になったんです」

クワイⅡガンは驚愕の表情を隠せなかった。海賊船はとうの昔にこの船から離れている。

「ありがとう」

言い終えるのももどかしく、クワイⅡガンはコクピットへと走り出した。

コクピットでは船のクルー達が修理作業に追われ、忙しく駆け回っていた。

宇宙海賊達はコントロールパネルを思いっきり破壊していったの

である。

今だ火花が散るそのパネルの様子を横目で見ながら、クワイⅡガンは声をかけた。

「船は動きそうか？」

せわしげに動くクルーに代わってチーフクルーと思われる者が応えた。

「動く事はできません。しかし、速度はあまり出ません」

「レーザー砲やプロトン魚雷は使えるのか？あの海賊船を何としてでも止めなくてはならない」

「申し訳ありません。プロトン魚雷は元々装備しておりませんし、備えつけのレーザー砲は全く使い物になりません」

　　畳みかけるようにクワイⅡガンは訊ねた。

「小型船は積み込んでいないのか？」

「備えつけの船はいにく一艘もないのです」

　　チーフクルーは言葉を切った後、言いくそうに付け加えた。

「それに・・・ハイパードライブも壊れています。救難信号は発信しましたので、近くに船がいれば救助してもらうことはできますが」

　　クワイⅡガンは愕然とした。

　　ハイパースペースに逃げ込まれでもしたら、オビⅡワンを助け出せるかわからない。

　　航路を辿ればなんとかなるかもしれないが、相手は海賊だ。

　　跡を辿られ、行先がばれることを恐れて中継地点を設け、別の進路を設定しジャンプするかもしれないし、それより何より恐れることは・・・

　　無事逃げおおせれば、途中でオビⅡワンを宇宙に放り出すかもしれないということだ。

（何か手はないのか、何か）

　　焦りを押えつつ思案を繰り返すクワイⅡガンを余所に、コントロールパネルの修理はなかなかはかどらない。

　　一人のクルーが叫んだ。

「そうだ。彼らを連れてこい。手先が器用だから役立つはずだ」

指示を受け、他のクルーが走り去っていく。

その姿を目で追っていくと、窓の向こうに小さくなりかけた海賊船が見えた。

(オビⅡワン・・・)

コムリンクを鳴らそうかと思ひ、考え直す。

敵に取られているかもしれないし、彼らにオビⅡワンの正体を知らせる訳にはいかない。それにこの距離だ。もう届かないだろう。

拳を強く握り、唇を噛み締め、押えようもない遣り切れなさを纏い佇んでいたクワイⅡガンに

「マスター・ジエダイ！」

突然声がかげられ、彼は後ろを振り向いた。

「君は・・・」

☆☆☆☆☆☆☆☆

オビⅡワンは周囲を見渡した。

海賊船のハッチから歩いた距離を思えば船の底近くかもしれない。もしくは船倉か。

目隠したままここまで連れてこられたせいで、自分が船のどの辺りにいるのかさっぱりわからなかった。

今いるこの場所は、何も無いがらんとした部屋だとわかるだけで。彼は視線を入りに走らせた。

この部屋から出るとなればこの入り口のみ。だが、鍵が掛けられていた。

幸い手は動く。

少年と侮ったのだろうか。特に手枷もないことが彼に一縷の望みをもたせた。

この部屋から出て、ドックに格納されているかもしれない小型船か脱出ポットを見つければ、あるいは。

操縦はできるかわからないが、ここから逃げ出せば何とかなるかもしれない。

食料は？ 水は？

今は否定的なことを頭から追いやった。とりあえず、ここから出な

ければ先に進めない。

そつとドアに近づくと外側の様子を窺った。微かな足音が聞こえる。

複数の見張りがいるようだ。この状況で無事にここから逃げられるのか？

その時、今まで規則正しい響きをもって聞こえていたエンジン音が、突然低く唸るような音に代わり始めた。

(ハイパードライブを起動したんだ……)

心臓が早鐘のようになり、鼓動が激しくなった。

このままハイペースに突入され、他の見知らぬ星系システムに行ったら、自分は今後どうなるのだろうか？ 奴隷として他の惑星に売り飛ばされるか —— それだったらまだいい。宇宙に放り出されたら……？

考えられる状況は悲惨なものだったし、考えたくもなかった。

だが、それが現実となるのも時間の問題だった。

危険なことは充分承知していたはずだ。もしかしてハイペースに逃げ込むかもしれないということも。

しかし、実際そんな状態になったら、果たして自分は平然としていられるのだろうか？

オビIIワンは懐から石を取り出した。

13 標準歳の誕生日に師から贈られた、その漆黒の美しき滑らかな石は、明かりに透かせば深紅の光を醸し出し、それは、まるで宇宙の闇に浮かぶ、輝く細長い星雲を思い出させた。

彼の宝物であり、クワイIIガンと繋がる唯一の物。

その石の暖かさを感じ取ると彼は無性にマスターと話したくなかった。たった一言でもいい。マスターの声が聞けたら……。

コムリンクを鳴らす。

だが、無情にも呼び出し音が鳴り続けるだけであった。

「マスター……」

ポツリと口から言葉が漏れた。

だが、彼はジェダイだった。

決意の眼ざしとともに顔を上げる。

(もし、ハイパースペースに逃げ込むことにでもなれば、この船を爆破させよう。それしか僕にできることはない)

船ごと海賊を消滅させれば。

今後、この海賊達に襲われる人々はいなくなるだろう。他の人々のためにも。

石を懐にしまうと、オビⅡワンはライトセーバーを起動させた。

海賊船に乗り込む際、武器検査は受けた。

だが、ライトセーバーもコムリンクも敵に見つからなかった。検査しようとした海賊の意識をフォースで操ったからだ。

セーバーがあれば何とかかなりそうな気がした。握る両手に力がこもる。

と突然、部屋の電気が消えた。電気だけではない。エンジン音も停止したようだ。

急いでハイパードライブを起動したせいで動電力に負荷がかかり、ショートしたのかもしれない。

静かにドアに近づき足音の有無を確認する。

突然の停電に慌てふためく乗組員達の動きが手に取るようになっていったが、その後、静かになった。

今がチャンスだ。

オビⅡワンはセーバーを右上段に振りかざした。

スライド式のドアだ。多分鍵を焼き切っても電力が止まっている以上、開きはしないだろう。少々荒いが致し方ない。

左下に向かって切り落とすと、すかさずセーバーを左上に掲げ右方向に切り下げる。そして、最後に横に薙ぎ払った。

ドアは切り口鮮やかに三角形の口を開ける。オビⅡワンは切り落とされたドアの一部をフォースによって静かに床に落とした。

そこから顔を出しセーバーの光により周囲を窺う。

長い通路が伸びており、その両端の先には上に登る階段がついていた。どちらの階段を使えば機関室に通じているのだろうか？

勘に従いオビⅡワンは部屋から抜け出ると、左側へと駆け出した。

ハイパードライブが使えないとなれば、船の動力を停止させ続けければここから逃げ出すことも可能である。僅かだが希望が見えてきた。けれど、彼一人がこの船から脱出するという考えはたった20mほど通路を進んだだけで、改めなくてはならなくなった。

通路左側の一面に張られた強化ガラスの向こうを見た時に。

かなり広い部屋になっていてそこには、セーバーの光に照らされ十数人という子供達がうずくまっていたからだ。

ガラスはマジックミラーの役目を果たしているのだろう。向こうからこちらは見えないらしい。

汚れた服を着た様々な人種が混じっている彼らからは、諦めの感情が漂っている。

オビIIワンと同じくあちこちから人質として連れて来られた子供達だろう。

一瞬にして見て取ると、彼は脱出方法を考え直した。

(一人じゃだめだ。皆でここから逃げ出さないと)

そうなるのと攻撃の仕方も変わってくる。機関室に行つてそこを破壊する。ここまではいい。

だが、その後格納庫に行つて大勢乗れる船がなかったら? そうなればこの海賊船を乗っ取るしかない。たった一人で。できるだろうか?

オビIIワンは眉をひそめた。

とりあえず、なるべく敵に見つからないようにコクピットに行くしかない。敵に見つかれば見つかるほど、この船を支配することが難しくなるからだ。

覚悟を決めると、彼は通路の隅にある階段を上り始めた。

階段の突き当たりには扉があった。

耳をあててみる。機械の音は全くしなかったが、人々が叫び走り回っている雰囲気は感じ取れた。それから金属の擦れ合う音も。

(機関室だ)

確証はなかったが確信はあった。

オビIIワンはライトセーバーを構えると深呼吸一つして、おもむろ

に振り下ろす。扉に先ほどと同じように入り口を造ると、素早く中に滑り込んだ。

右手に全く停止している動力炉が見え、その周りを技術者と思しき者達が囲んでいる。なんとか動かそうとしているようだが、原因がわからないのかお手上げ状態なのか、それほど真剣そうに見えない。

左側には配電盤が窺え、その前にいるトランドーシャン——惑星トランドーシャン出身の蜥蜴の姿をしたエイリアン——もケーブルを繋ぎ変えてはいるが、電力が戻る気配もない。

そして、オビⅡワンのちようど真向かい、反対側には、通路から漏れる灯りに照らされ、ようやくそれとわかるほどの入り口が黒い闇を見せていた。機関室には両端に扉があり、通常使う方が向こうなのだろう。電力が使えない今、無理矢理扉をこじ開けたらしい。

ライトセーバーを構えたまま静かにオビⅡワンは歩を進めた。

予備電力の灯りが細々と照らす中、彼の持つ蒼い美しい光は否が応でも目についた。

技術者達は驚愕の色を浮かべて振り向き、思い思いの行動をとり始めた。つまり襲いかかって来る者と逃げる者と。

バイプロブレド振動ナイフを振りかざしてきたローディアンの右腕を切り落とす。

と痛がる敵に目もくれず、高く跳躍、宙返りし着地する。

セイバーを左手に持ち変え手首を返し同時に腰を低くして、ブラスタールを構えていたトランドーシャンの鳩尾にセイバーの柄を突き刺した。

崩れ落ちるトランドーシャンの横を駆け、前を逃げて行く二人のエイリアンの足元目がけてセイバーを横薙ぎに飛ばす。

回転する蒼く輝く光は、彼らの足をきれいに切断すると引き寄せられるようにオビⅡワンの手元に戻った。

(もう一人いたはず。いや、逃げられるはずはない。この部屋のどこかにいる)

オビⅡワンはすかさず反対側に向かうと、入り口の横の壁に背中をつけた。

これで後ろから襲われる心配はない。

気配を探る。だが、フォースを伸ばしてもなかなか掴めない。

一瞬、視界に影が走ったと思った時は遅かった。

オビⅡワンの首は巨大な手に掴まれていた。宙に浮いた足をばたつかせるが如何ともし難い。

目の前に赤い光が二つ爛々と輝いている。

(シ、シスタ・・・ヴァネン・・・?)

ウヴェエナⅢ出身の赤い目をした狼男のようなこの種族は、影に姿を潜める事もでき、ウーキー並みの腕力を誇る。

シスタヴァネンは左手でオビⅡワンの首を押さえると、右手にバイプロフレッド振動ナイフをかざした。

必死で頭を動かそうとするが、がっちり固定されて身動きできない。

少年に焦りが生じる。

しかし、心を平静に保ち、ナイフが突き刺さる瞬間、セーバーを立てると回転させた。

目の前を蒼い光が横切り、シスタヴァネンの両腕を切り落とす。

勢いがついたナイフは顔のすぐ横に突き刺さり、彼は解放されて床に落ちた。

咳き込みつつ素早く立ちあがる。

呻き、のた打ち回っている敵を尻目に、オビⅡワンは動力炉と配電盤に向かい、蒼い光を突き刺した。

外の様子を窺う。

通路は真っ直ぐ伸び広い部屋へと通じているようだ。その部屋ではガモーリアンやローディアン達が動き回っているのが見て取れる。

ここから少し行った先に左へ曲がる通路もあった。

オビⅡワンは気配をなるべく消し、足音立てずにその左へ曲がる通路まで辿りつく。

左側の通路の先は暗くどこに繋がっているか定かではない。

(コクピットは広い部屋の先かもしれない)

彼は通路に身を潜め壁に体をつけて、広い部屋の様子を探る。

と突然、毛むくじやらの手にもものすごい力で後ろから口を塞がれ

(!? もしかして、シスタヴァ — ?)
思う間もなく、オビワンは物陰に引きずり込まれた。

第3話 宇宙での戦い

心臓がドキドキ音を立て、恐怖の余り顔が引きつる。

オビⅡワンは、口を塞ぐ手と体を押さえつける腕を何とか振り払おうともがき、不意に気づいた。

(あれ?)

決して乱暴に扱っている訳ではない、相手の態度。そして、この暖かい感じは――

振り向いてオビⅡワンは驚愕の表情を浮かべる。

(フ、フレール?!?)

茶褐色の毛並みをしたそのウーキーはニヤツと笑い、静かにといった風に自分の口に指を当てると、ようやくオビⅡワンの体を自由にした。

余りのことに声も出ない。パクパクと口を動かしているうちに、かろうじて言葉が出た。でも、まだ心臓は早鐘を打っている。

「ど、どうして、(なに)に?」

フレールはオビⅡワンを引き寄せるときゅつと優しく抱きしめた。

「僕を助けに来てくれたの?」

オビⅡワンの問いに頭上からフルル・・・と肯定の返事が返ってくる。

孤立無援で闘っていた少年にとって、フレールの存在は何よりも嬉しく有り難いものだった。彼は心から安堵の吐息を漏らした。

聞きたいことは山ほどあったが、今はそれどころではない。

しばらくして体を離すとオビⅡワンは見あげて言った。

「この船を支配するためにコクピットに向かわなきゃならない。船にはまだ、僕と同じように人質にとられた子供達がいっぱいいるんだ。彼らを助けないと」

唸り何かを考えていた風に見えたフレールが、突然、決心したように顔を上げると自分の後ろを指差した。

「え? あつちがコクピット? フレール、コクピットの方向から来たの?」

ニヤツと笑みを浮かべてフレールは少年の肩をパンパンと叩くと、
ついてこいと言わんばかりに走り出す。

慌ててオビⅡワンもその後が続いた。

巨大な体に似合わずウーキーは足音立てずに駆けていく。

遅れまいとついていくオビⅡワンは、急に声をかけた。

「右、気をつけて！」

フレールが左に身をかわすと同時に、右からブラスターの光線が走り彼の脇腹を掠める。

「フレール！」

一瞬、呻き声を上げたが意に介さず、ウーキーはドアの開かれた右の部屋の中に逞しい腕を突き入れると、ブラスターを構えているガモーリアンを引きずり出した。

ガモーリアンは首をつかまれ宙に浮いた足をばたつかせている。

その手に握られているブラスターの銃口は折れ曲がっていた。

オビⅡワンがハツと息を飲む間もあらばこそ、ガモーリアンの分厚い首から嫌な音が響き、頭がだらりとぶら下がった。

ウーキーの腕力の凄まじさを垣間見たオビⅡワンはしばし足がすくんだが、唾を飲み込むと、転がっているガモーリアンを見ないようにしてフレールの元へ駆け寄った。

「大丈夫？」

平気という風に牙をむき出して笑う。

少年は火傷に軽く手をあてると、意識を集中させた。

完治とまではいかなかったが痛みが薄れるとフレールは嬉しそうに笑い、オビⅡワンの頭をくしゃくしゃにして感謝の意を表した。

照れくさそうに肩をすくめていたが、ややあつて

「急ごう」

というオビⅡワンの言葉にフレールも頷くと、二人は走つていった。

オビⅡワンは驚いた。

「こいつって格納庫じゃ・・・？」

思わず問いが口から漏れる。

てつきりコクピットに向かっているかと思っていた。

それなのに小型の、しかも、改造された船々が収納されているドックを見下ろしていたのだ。

大型の船があればまだいい。他の子供達を乗せられる規模の船があれば。だが小型ばかり。これでは子供達を助けられない。

疑問の眼ざしを向けるオビⅡワンに、首を傾げどうした？といった表情を見せ、それから理解したのかフレールはドックの一角を指差した。

視線を移し、オビⅡワンは驚きで目を見張った。

「Winged House?・・・どうして・・・?」

だが、それより何より、その白い優雅なクルーザーの周囲で海賊達と闘っている二人の姿。

長身な体躯ながら最低限度の動きでライトセイバーを振るい、海賊達にブラスターの光線を撥ね返しているジェダイ・マスター。

そして、その少し離れた場所には。

亜麻色のサラサラした髪をなびかせ、突進してきた海賊の上を軽やかに飛び越し、宙返りして着地すると、振り向きざまセイバーを薙ぎ払い倒していく。紫がかった青色の光を放つライトセイバーに、黒いパイロットスーツを纏った少年。

その姿を目にし、オビⅡワンは信じられないといった顔をし、しばらくして嬉しさに顔をほころばせた。

張りつめていた気持ちが緩み、涙さえ溢れそうになる。

しかし、オビⅡワンはもどかしい気持ちに突き動かされるが如く、ドックへと通じる階段を急ぎ足で駆け下りていった。

「マスターっ!!ガレンっ!!」

叫び声に二人は同時に振り向き、走ってくる少年の姿を見とめて異口同音に叫んだ。

「オビⅡワン!!」

クワイⅡガンは安堵の溜め息とともに頬を緩ませ、ジェダイ見習い、ガレン・マルンは顔を輝かせて友を迎えた。

オビⅡワンはマスターの元へと駆け寄った。

「フレールと無事出会ったのだな？」

「はい。ところで、どうしてここに？しかも、フレールとガレンまで」
「話は後だ。今は早く船から離れよう」

一番声を聞きたかった相手なのに、オビⅡワンの頭の中はそれどころではなかった。

「しかし、この船にはまだ囚われている子供達がいいます。彼らを助けないと」

ジエダイ・マスターは眉をひそめて考え込んだが、飛んできたブラスター光線に邪魔をされた。

「とりあえず船に乗りなさい。子供達のことは考えがある」
「・・・わかりました」

不承不承といった感じで応える。クワイⅡガンは苦笑するとガレンにも声をかけた。

「ガレン、私がここを抑えるから先に乗りなさい」

ライトセーバーを払ってブラスターの光線を撥ね返し、それが海賊の胸を貫くのを目の隅にとらえると

「わかりました。マスター・ジン」

ガレンは頷き、まだ渋っているオビⅡワンの手をつかむとタラップを駆け上った。

その後をフレール、クワイⅡガンが続く。

<Winged House>はすぐさま^{リバルサーリフト}反重力装置を起動させ宙に浮くと加速し、漆黒の宇宙へと飛び出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

船は滑らかな動きでみるみる海賊船から遠ざかる。

「何故、止まっているんだろう？」

<Winged House>のコクピットに駆け寄ってくるなり、オビⅡワンは不思議そうに呟いた。

横の窓から眺めると海賊船はまるで死んでいるかのように、一切の灯りを消して宙を漂っていたのだ。

「イオン砲だ。備えつけのイオン砲を撃って、あの船の全電力を停止させたんだよ」

操縦桿を握って前方を見据えたまま、船のパイロットが応えた。

確かにイオン砲なら相手の船を行動不能に追いやり、しかし、中の乗員にはなんら被害を与えない攻撃ができる。

オビⅡワンはパイロットの方を振り向き

「パグエスさん……」

と驚きの声を出した。

船は〈Winged House〉である。彼が操縦していても全くおかしくはない。だが、どうして皆ここに集まっているんだろう？ フレールもガレンもパグエスも。

「驚いただろう？」

ガレンが近寄ってきた。

「僕だって驚いたからね。君と同じ客船に乗っているなんてさ」

微笑みを浮かべる友に、まだ訳がわからず眉をひそめるオビⅡワン。

だが、そんな穏やかな会話も途中で遮られた。

コクピットに入るなり、フレールが唸り声を上げたからである。

「どうやら来たようだな」

ジェダイ・マスターの言葉にセンサーを食い入るように見つめていたパグエスは頷き、推進装置のバーを上げ速度を加速させ、同時にシールドを作動させた。

「改造機アグリーですね。マスター・ジェダイ、迎え撃ちますか？」

不敵な笑みを浮かべて問いかけるパグエスに、クワイⅡガンは同じく微笑んで頷いた。

それを受けて、パグエスは後ろに声をかけた。

「ガレン、砲塔を頼むよ。撃ち方はわかるね？」

「はい、キャプテン」

彼は走りだし、ふと立ち止まるとオビⅡワンを見つめた。

「君も撃ってみる？ 覚えると簡単だよ。この船には両端に砲塔があるんだ。もう一方を君に任せれば漏れなく撃ち落せる」

「僕が？ でも……」

オビⅡワンはマスターに視線を向けた。クワイⅡガンはしばしばし

ダウンを見つめていたが静かに頷いた。

ガレンはニツコリ笑い、不安そうなオビⅡワンを引き連れるとコクピットから出て行った。

「フレール、君もウーキーだけに手先は器用なんだろう？ 副操縦士をお願いしたいんだが」

パグエスの言葉にフレールはニヤツと笑って吼えた。

すかさずパグエスの隣に――いささか狭そうだったが――腰を下ろすと計器を確認する。

「私にできることはあるか？」

クワイⅡガンの問いに、前を見つめたまま船長は微笑んで言った。「貴方は座っていてください。しっかりベルトを締めたまま。少し揺れますから」

その言葉通りくWinged Houseは急激に針路変更すると、海賊船から放たれた改造機^{アグリ}を迎え撃つべく準備を進めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「改造機^{アグリ}って？」

走りながらオビⅡワンがガレンに聞いた。友はすぐに応える。

「いろいろな船の部品を組み合わせて、作った船のことなんだ。例えばインコム社製軽貨物船とYウイングの良い所を取り出して、くつつけたりしてね。よく海賊や密輸を行う奴らがこの改造機^{アグリ}を飛ばすんだよ」

「良く知ってるね」

「オビⅡワンも聞いただろ？ 僕がパイロットの勉強をしてるってこと」

「知ってたけど・・・驚いた」

ガレンはニツコリ笑うと左を指差した。

「こつちだ。こつちに砲塔がある」

砲塔はくWinged Houseの翼の両端に突き出るように作られており、270度は見渡せる強化ガラスで覆われていた。

そこに設えた座席にガレンは滑り込むと

「僕が手本を見せるから、君は手順を覚えてくれ」

と言いつつ。

「まず操縦桿を握り、左手の所にあるスイッチを押す。これが照準調整装置なんだ。操縦桿を自由自在に動かすと、前方にあるレーザーの砲身も同じように動く。この座席は左右には動くけど上下には動かないから、上下に動かしたい時は操縦桿で狙いをつけるしかない。照準を調整して敵機に狙いをつけると、前にあるディスプレイに、黄色い箱型の枠が敵機を囲むように出る。そして、敵機に十字線が重なりと枠の色が赤色に変わる。ほら、こんな風に。で、これで相手をロックしたことになるから、ここでこれを押すと」

彼は一旦言葉を切り、操縦桿の右手、親指辺りにあるボタンを立て続けに押した。

砲身から赤い光が続けざまに発射され改造機アグリに襲いかかると、二発目がエンジンを直撃したらしく、引火するとともに爆発炎上した。

「こうなるんだ。わかった？このレーザー砲は連射が可能だから扱いやすいと思うよ」

呆然と見ていたオビⅡワンは慌てて

「多分わかった」

と応える。

ガレンは素早く立ちあがると、微笑みながらオビⅡワンの肩を叩き「じゃ、任せたまよ、オビⅡワン。フォースと共にあらんことを」

そして、もう一方の砲塔に向かって駆け出していた。

オビⅡワンは少し不安な面ざしで座席に腰を下ろした。

目の前には複雑な計器が並び、しかも、どんな意味があるかわからないため、余計に不安にさせる。

彼は頭を振ってそんな感情を振り払うとベルトを固定し、操縦桿を握った。

(重い……)

ガレンは軽々と操っていたのに、自分が持つとずっしりとした重みが手に伝わりうまく動かせるか心配になる。

もう一度頭を振り、照準調整装置を作動させた。

敵機が見え、急いで操縦桿を動かす。だが、急激に進路を変更する

敵機の動きに全くついていけない。

固定された目標だったら簡単だったかもしれない。

だが、相手は急激な飛行を行う戦闘機のプロだ。しかも、こちらも回避行動をとっているため照準を合わせにくい。気も焦り、ロックもせずにレーザー砲を発射させても敵機を掠めるばかりか、全く検討違いの闇を切り裂く始末。

余計に慌てふためくオビⅡワンの視界右隅に、赤く点灯するランプが突然見えた。

(な、何だろう、これ)

何かやってはいけないことをやってしまったんだろうかという強烈な不安が募る中、恐る恐るランプの下のスイッチを押してみる。

『オビⅡワンっ？右の砲塔にいるのはオビⅡワンかっ？』

通信機だったらしい。パグエスの切羽つまった声がいきなり飛んできた。

どうやって応えればいいのかわからなかったが、とりあえずスイッチは押された状態になっているのでそのまま返事をする。

「そうですっ」

しばらく後、パグエスの妙に低いゆっくりとした声が聞こえてきた。

『いいか、オビⅡワン。落ちついて聞いて欲しい。奴らは左側からは攻撃しにくいと見たらしく、右側へ集まり始めている』

「右側って・・・？」

『そうだ、君の方だ。心を落ちつかせてこの危機を乗り越えて欲しい。君なら大丈夫だ。信じているよ』

通信は切れた。

オビⅡワンが緊迫した事態を呑み込む前に、改造機アグリから発射されたレーザーが砲塔目がけて飛んできた。

第4話 宇宙戦の果て

シールドがレーザーを辛うじて撥ね返す。

今は持ちこたえているが、いかにシールドとはいえ相当のダメージを受ければ消滅を免れない。

そしてシールドのない船など裸同然、これほど料理しやすいものもないのだ。

オビⅡワンの心臓は今にも飛び出るかと思った。二、三回深呼吸を行い、気持ちを落ち着かせる。

(これは僕だけの問題じゃない。僕が失敗することによって皆が死ぬかもしれない。それだけは避けなければ)

彼は静かに目を閉じた。フォースを集め身に纏う。

暖かい力が、流れが体の底から湧きあがりオビⅡワンを動かす。

操縦桿を動かし敵機をロックすると、レーザー砲のボタンを押した。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「ガレン、そっちはどうだ？」

『敵機は全く来ません。多分・・・』

通信機から左の砲塔にいるガレンの声が聞こえる。

そのやり取りを聞きながらクワイⅡガンの心臓は高鳴っていた。

(パダワンなら大丈夫だ)

しかし、彼はそう信じた。

「大丈夫ですよ、マスター・ジエダイ。こちらにも負けてはいられません。加速します」

パグエスは言葉とともに加速装置のバーを上げた。＜Winged House＞はエンジンを噴射させると加速し、一転、船を傾けた。

その時、レーザーが闇を貫き走ると前方にいた改造機アグリに吸い込まれた。一瞬遅れて機は爆発する。

「右の砲塔からですよ、マスター・ジエダイ」

嬉しそうなパグエスの声に、クワイⅡガンも微笑を湛えホツとした

表情を見せる。

船長の隣りではフレールが喜びの声を上げた。

その気持ちが緩んだ一瞬。

激しい衝撃に船が揺れた。

コントロール・パネルを覗き込んでいたフレールが吼えた。

「後ろから攻撃を受けた？後部シールドが消滅しかかっているって？」

「フルル」

コクピットに赤いランプが点灯し警報が鳴り響く。

「よし、フレール。エネルギーを後部シールドに振り分けるんだ」

ウーキーは唸り、逞しい腕にも関わらず器用な手先を動かしながらスイッチやボタンを触った。ようやく警報が止まる。だが。

再びフレールは唸るとパグエスの方を向いた。

「もう一回でも後ろに着弾したらシールドが消滅するんだね？わかった、気をつけよう」

言い終わりが、船長は操縦桿を右に切った。

船は右は急展開しそのまま上昇する。そして、急激に船体を180度転じると、左に向きを変え下降した。

後ろからレーザーを撃っていた改造機アグリの真正面に飛び出る。

右と左の砲塔から同時にレーザーが飛び、敵機を粉々に吹き飛ばした。

＜Winged House＞が再び左舷に舵を切ると、次々とレーザーが船を掠めていく。それを振りきると船は上昇を続けた。

と突如、船のエンジンが止まった。ピタリと空間に停止する船に驚きながらも、加速していた二機の敵機は船の横を通り過ぎていく。

追われていた船が今度は追う側に回ったのだ。

クルーザーからレーザーが飛び交うと改造機アグリの後部に命中。火花を散らして爆発を繰り返した。

ホツとする間もなく船が大きく揺れ衝撃が走った。

警報とともにコクピット内が赤いランプに照らされる。

フレールの吼え声を聞かずともわかった。

パグエスが静かに言った。

「シールドが消滅した」

☆☆☆☆☆☆☆☆

その声は通信機をオンにしていたガレンとオビワンの耳にも飛び込んだ。

(シールドは修理すれば戻る。しかし、今は修理する者がいない。となれば攻撃あるのみだな。間もなく共和国艦隊が到着するだろう。それまでの辛抱だ)

ガレンは落ちついて状況判断すると操縦桿を握り直した。

船は相変わらず回避行動を続けている。

そんな中で敵機に照準を合わせるのは難しかったが、パイロット訓練を受けているガレンにとって、飛行機を操縦してみたかった彼にとってみれば、全く苦にならなかった。どちらかと言えば、こんな困難な状況に陥るほど高揚感が溢れわくわくする。

少年は微笑みすら浮かべて操縦桿を操った。ロックしレーザー砲を放つ。

レーザーは線を描いて闇に美しき光を引き、二機の敵機に命中、破片を宙にばらまけた。

ふと彼は思った。

(オビワンは大丈夫だろうか)

☆☆☆☆☆☆☆☆

ようやく慣れたとは言え、オビワンは歯を食いしばって操縦桿を握っていた。

握力がだんだんなくなってきたはいるが、それでも必死に操縦桿を動かし敵機に照準を合わせる。

フォースに導かれるまま親指のボタンを押すと、敵機の翼を吹き飛ばした。

安定を無くした機は急激に進路を変え、付近を飛んでいた別の機に当たり、二機とも爆発した。

オビワンは溜め息を漏らし額から落ちる汗を拭うと、前方に視線を向けた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

フレールが突如立ちあがり唸った。

「シールドを復活させてくれるのか？わかった、頼むよ。配電盤はコクピットから真っ直ぐ行って左奥にある」

ニヤツと笑ってウーキーは通路の奥に消えた。

「共和国艦隊は遅いな」

ポツリと呟いたクワイ||ガンにパグエスは応える。

「この船を出す際、救助信号^{ビーコン}は発信しました。それにコルサントから遠い距離にいる訳ではありません。間もなく到着するはずなのですが」

「とりあえず、シールドが復活するまで待つしかないということだな」

パグエスはセンサーに視線を走らせながら言った。

「マスター・ジエダイ、貴方は慌てるということがないのですね」

「そう思うか？」

クワイ||ガンは苦笑して聞いた。

「ええ。見てみたい気もしますが、やめておきましょう。そんなことになるのは、この世の終わりに立ち会った時だけかもしれませんからね」

いや、オビ||ワンに関しては慌てることが多いかもしれないと思
い、ジエダイ・マスターは苦笑するのであった。

そんな穏やかな会話と裏腹に、船は右へ左へと回避を続けていく。
敵機から発せられたレーザーが船を掠め、機体を大きく揺らした。

食い入るようにセンサーを見つめて操縦桿を握るパグエスもさす
がに疲労の色が濃いらしく、額に汗が滲み出ている。

と敵機から浴びせられた一筋のレーザー光線が正面に迫ってきた。

この距離では回避はできない。

パグエスの顔は青ざめ、心臓が飛び出そうになる。

彼は覚悟して目を瞑った。

が、いくら待っても衝撃は来ない。

恐る恐る目を開くと、パグエスの視界に鈍く輝くシールドが飛び込
んできた。

「やった・・・」

吐息とともに言葉を漏らすと同時に目を見はった。

「艦隊だ。共和国艦隊が来たっ!!」

コクピットの強化ガラス越しに、4隻の艦が悠然たる姿を見せてこちらに向かってくるのが確認できた。

逃げ惑う改造機^{アグリ}。

<Winged House>内に一際大きい歓声がこだました。

☆☆☆☆☆☆☆☆

共和国艦隊の1隻<Dignity>に牽引ビームで曳航されながら、旅客船<Elegant Castle>はコルサントへと戻る手はずとなった。次の寄港地とコルサント、どちらがより近いかと言えはコルサントの方だったからである。

そして、海賊船に閉じ込められていた子供達も無事艦隊に収容され、共和国の名の元にそれぞれ責任を持って親元に返されることになった。

それを聞き、オビワンは心から安堵したのだった。

<Elegant Castle>が出発するまでまだ間があるため、<Winged House>は再び客船の格納庫に収納され修理を受けていた。

その様子を眺めているオビワンの元にフレールが近寄ってきた。

「また、君に助けられたね」

「フルル・・・」

ウーキーは牙を剥き出して笑う。

そこへ、ゆつくりと歩いてきたジェダイ・マスターが彼の言葉を通訳した。

「大したことはないそうだ。それより、また会えて嬉しかったと言っているが」

「僕も会えて嬉しかったよ。でも、どうしてこの船に？」

代わりにクワイガンが応えた。

「実は、シヨランとチューバツカというウーキー達と一緒に、この客船の機関室で働いていたそうだ。手先が器用で宇宙船に詳しい。し

かも、いざという時には用心棒にもなるということ、彼らはかなり
重宝していたらしい」

「何故、働いているんですか?」

「お金のためだ」

「お金のため?」

怪訝そうな顔をするオビⅡワンに、クワイⅡガンは目を細めて言っ
た。

「彼らは交通費を稼いでいたのだ。コルサントまでの往復の旅費を
な」

「?」

相変わらず不思議そうにフレールを見つめるパダワンに、クワイⅡ
ガンは苦笑する。

「まだわからんのか。お前に会うためだ」

「えっ!? 本当に?」

フレールは唸り笑顔を見せた。

オビⅡワンは思わず彼に抱きついた。柔らかい毛が頬をくすぐる。
感極まって何も言葉にできなかったが、ぎゅつと彼を抱き締めること
によって嬉しさを表現しようとした。

わかってるといふ風にフレールは声を出すと、少年の頭をぐしゃぐ
しゃと撫でる。

オビⅡワンはややあつて見あげると口を開いた。

「待ってるよ、遊びに来てくれるのを。僕も飛びまわっているから会
える時は限られてるけど・・・でも、来るときは連絡してね。絶対だ
よ」

「フルル」

楽しそうにフレールも言葉を返した。

そして、少年からそつと体から放すと肩をポンポンと叩き、名残惜
しそうに見つめた後、その場を離れていった。まだ、船での仕事が
残っている。それにショーランとチューバツカが修理を行うために
＜Elegant Castle＞のコクピットにいるはずだ。

ここで別れるのは寂しかったが、きつとまた会える。

オビⅡワンは彼の背に向かって声をかけた。

「今度会う時まで、君の言葉を勉強しておくからつ。また、会おうねつ!!」

振り向かずフレールは片手を振ると、通路へと消えていった。

「いい友達がいるんだね、オビⅡワン」

＜Winged House＞のタラップから飛び降りた少年が、亜麻色の髪を靡かせ近寄ってきた。

二人の少年は微笑むと抱擁を交わした。

「ガレン。うん、すごく頼りになる友達だよ。君もだけどね」

「ははは」

「しかし、どうしてここにいるの?」

「前にも言ったけど、僕はジェダイになるための修行以外に、パイロットの訓練も受けているんだ。で、いつもは戦闘機模倣飛行で腕を磨いているんだけど、たまには本当に宇宙船を飛ばしてみなさいという話になって、キャプテン……いや、パグエスさんの船で指導を受けることになったんだ」

「パグエスさんの船で? どうして?」

「パグエス、でいいよ」

後からタラップを降りてきた長身の青年が言葉を挟んだ。

「私はジェダイ評議会のお抱え——つまり、元老院の正式な使者として赴く時以外は共和国クルーザーは使えないし、隠密裏で動く際は目立つ船は使えないということから——お抱えに近い形で動いているんだ。だから、結構ジェダイを運ぶことは多いんだよ。君も知っていて、この前、乗せてくれって言ったと思っただが?」

「……知りませんでした」

焦って俯くオビⅡワンの姿にガレンは笑いを誘われた。

「あはは、オビⅡワンらしいや」

「そんなに笑わなくても……」

「ごめん、ごめん」

微笑みつつパグエスは言葉を継いだ。

「ジェダイ評議会からガレンをしばらく預かってくれとの要請を受け

た私は、ちょうど船で使っていたドロイドが壊れてしまったこともあって、次の寄港地までこの〈Elegant Castle〉で行き、ドロイドを仕入れて飛行しやすくなってから、コルサントまでの帰り道、ガレンに〈Winged House〉を任せようと思っていたんだ。で、たまたまこの客船に乗り合わせていたって訳さ」

「でも、カツコ良かったよ、オビⅡワン。君が人質に名乗り出た時」

「あ、あの場にいたの？」

「まあね。隙あらば何とかしようとキャプテンと身構えていたんだけど、全く海賊に隙がなくなつて。君が連れ去られた時どうしようかと思つたよ」

「君がいるならマスター・ジンも多分一緒だろうと思つてね。コクピットでマスター・ジンを見つけて、急いで格納庫にあつた〈Winged House〉を発進させたんだ」

とパグエス。

ようやく話が見えてきた。

ほうとオビⅡワンは溜め息をつく。そんな少年の様子を少し離れた所から見守っているクワイⅡガンにパグエスが話しかけた。

「では、マスター・ジェダイ。貴方がたには任務があるのでしょう？私達がお送りしますよ。この〈Elegant Castle〉はコルサントへ逆戻りですからね。きつとガレンもオビⅡワンと積もる話があるでしょうし」

「そうだな。そうしてもらおうか」

「了解しました、マスター・ジェダイ」

ニツコリ敬礼を返すとパグエスは船に戻っていった。

「よし、僕らも行こう、オビⅡワン」

「うん」

明るく顔を輝かせながら船に向かう少年二人を見つめるクワイⅡガンの瞳は、限りなく優しくかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「オビⅡワン、入るぞ」

声をかけて部屋のドアを開けた。

ベッドの上で横たわっていたのだろう。慌てて起きあがる気配がする。

「マスター」

驚いて立ちあがる所を制し、ベッドに座らせるとクワイーガンは自分も向き合う形でもう一方のベッドに腰を下ろした。

こじんまりとしたこの部屋には二つのベッドとテーブルがあり、長距離の旅にも快適に過ごせるような造りになっている。はなはだシンプルではあったが。

「しばらく休んでいるがいい。ただし、そう長くはかからんが」

「大丈夫です。ちよつと疲れただけですから」

船に乗り込んでからしばらくはオビーンワンとガレンは話に花を咲かせていたが、オビーンワンに疲れが見えたため、唯一ある部屋で休ませていたのだった。

「お前は全く・・・」

「無茶をする、でしょ？」

ニッコリと笑う。そんなパダワンに苦笑しつつクワイーガンは口を開く。

「その通りだ。しかし、またお前と会えて良かった。もう二度と会えないかと思ったぞ」

「僕もそうです。海賊船に連れて行かれた後、マスターの声がどうしても聞きたくなりました。コムリンクを鳴らしたけど繋がらなくて」
「距離があつたからな。ま、とにかくお前が無事でホツとした」

オビーンワンは懐からあの黒い輝きを放つ石を大事そうに取り出した。それは澄んだ光を帯びている。

「この石を見て、例えばマスターが傍にいらなくても、僕を守ってくれていると感じました」

ジェダイ・マスターは目を細め、優しげな眼ざしを若きパダワンに向けた。

「子供達も無事で良かった・・・」

ポツリとオビーンワンが呟く。

「マスターはわかつてたんですね？イオン砲で撃たれた海賊船は動く

こともできないし、そんな状態になったら海賊は船を捨てるはずだから、後から海賊船を回収すればいいと」

「そうだ。あの時点ではお前には悪かったが、私達が海賊船から離れて困にならないと、海賊船を回収しにくいのは確かだからな」

「フレールもそう判断したんでしょうね」

「そうだな」

クワイーガンは少年に近づくと優しく頭を撫でた。

「さあ、寝ていなさい。着いたら起こしてあげよう」

「はい、マスター」

オビーワンは安心したように静かにベットに横たわると目を閉じた。

彼の師は寝息が聞こえるまで傍で穏やかに見守り、そして、そっと部屋を立ち去った。

それから約1標準時間後、〈Winged House〉は眼下に目的地を見下ろしていた。

漆黒の闇に美しく輝く、光のような惑星オルデランを ——

End

(2000年頃執筆)

5. 流過の都 — Ryukano Miyako
— (オルデラン編)

第1話 表敬訪問にて

まるで絵の具で色を塗ったようなきれいな紺碧の空が広がっている。そして、僅かに細くたなびく白い雲。時間が経つのを忘れさせる光景だ。

しかも、この首都の外観。何とも表現できないほど美しく、心を和ませる。

頬杖についてそんな風景に視線を走らせつつ窓辺に佇んでいたジエダイ見習い、ガレン・マルンは、右隅から走ってくる人影に気づき、思わずくすくすと笑いをこぼした。

(やつと起きたな)

人影は、宇宙港に存在する巨大な、かつ白亜でできたメイン・ビルの自動ドアを通り抜けると、ガレンの元に駆け寄ってきた。

開口一番。

「ひどいじゃないか、ガレン」

「何が？」

笑いを噛み殺しながらガレンは友の方を向いた。

起きてから慌てて身支度して走ってきたのだろう。息せき切っている様子にまた笑いを誘われる。

「目が覚めたら誰もいないなんて。起してくれば良かったのに」

「疲れているみたいだから起すなってマスター・ジンに言われたんだ」

「マスターが？」

溜め息一つつくと、オビIIワン・ケノービは横の椅子に腰を下ろした。

「確かに任務が続いたけど、これぐらいで疲れたなんて思っていないのに」

「いや、マスター・ジンは正しかったと思うよ。だって現にこんな時間まで君は寝ていたじゃないか」

「え？今何時？」

「もう1100時だよ。何か言い訳できる？」

「そんな時間なのっ!?!…………できないね」

ふうと再び溜め息をつき両手を組んで顎を乗せた。横から窺える青緑の瞳にはショックの色とやりきれ無さが浮かんでいる。

(オビⅡワンはすぐ悩むからな…………)

苦笑するとガレンは、彼を悩みから解き放つべく話を戻した。

「で、マスター・ジンに、君が起きるまで、ここで待っていてほしいって頼まれたのさ」

物思いに耽っていたオビⅡワンはハツとしたように顔を上げた。

「え？ああ、そうなんだ。それでマスターはもしかしたら王宮に？」

「うん。王宮から迎えのシャトルが来て、表敬訪問だから私一人で充分だつて。オビⅡワンにはゆっくり休むように伝えてくれ、気が向いたら観光でもしてみると良いだろうってね」

「…………」

先ほどよりもつと落ち込んだ表情で俯く。

そんなオビⅡワンの姿に、ガレンは内心焦りつつ元気づけるべく言葉かけた。

「そんなに落ち込まなくても。表敬訪問だし。マスター・ジンも休むようにって言ったんだから」

「…………僕ってパダワン失格なのかな…………」

「そ、そんなことないよ。君はがんばってるさ。僕なんかよりずっとね。…………ほんとと言うと君が羨ましくなることだつてあるんだ」

思いもかけない言葉にオビⅡワンは不思議そうに訊ねる。

「ガレンが？」

「まあね。ところで気晴らしに観光にでも行かないか？折角オルデラに来たんだから。ね？」

「…………うん。わかった」

しびしび承知したオビⅡワンの手を引っ張ると

「よし、行こう」

ガレンは元気良く駆け出した。

「わあ・・・」

溜め息とも歓声ともとれる声がオビⅡワンから漏れた。メイン・ビルから外に出て、先ほどには気づかなかったこの素晴らしい景色を目にしたからだろう。

この宇宙港 —— 奥にはつい先刻、オビⅡワンが降りてきた<Winged House>が白く美しい姿を横たえている —— は高台にあり周りが見渡せた。

惑星オルデランの首都オルデラは湖の真ん中にある島にあった。

湖は隕石孔で湧き出る地下水によって満たされている。隕石孔は一連の低い不ぞろいな峰の丘のように湖を囲み、なだらかな丘陵には緑色の草原と森が広がっていた。

それが眼下に一望できるのである。

オビⅡワンならずとも感嘆の声上がるのも無理はない。

「さ、早く行こうよ」

ガレンの言葉に促されて、オビⅡワンはハッと我に返ると急かされるが如く走り出した。

前方にはシャトルの発着所がある。

ちようどそこには、今にも出発せんばかりにシャトルが待機していた。

二人は慌ててそれに乗り込む。

ドアが閉まり発車するとオビⅡワンはすかさず聞いた。

「このシャトルってどこに行くの？ お金は？」クレジット

「これはオルデラを周遊しているんだ。だから観光名所と呼ばれる所には停まるよ。それに無料なんだって、とキャプテンが言ってた」

「そういえば、パグエスさんは？」

「キャプテンはドロイドを買いにいったよ。船で使うドロイドが必要なんだ」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「いらっしやい」

ドアを開けて入って来た客に、店の主人は愛想の良い顔で声をかけた。

パグエス・ハルシヨンは一通り店に展示してあるドロイドに視線を移した。

儀礼ドロイドに始まりいろいろなドロイドが置いてあるが、どれが自分の欲しい物か今一つわからない。

そんな彼に主人は訊ねた。

「どんなドロイドをお探しですか？ここには様々な種類のドロイドがいますよ」

「そうだな。多国語を通訳してくれるドロイドで、しかも、宇宙船に詳しく、操縦や修理もできてしまうドロイドを探しているんだ。いるかな？」

「2体お求めで？」

「いや、1体だ。1体でそんな器用なことができるドロイドが欲しいんだが」

「それは難しい注文ですね、旦那」

主人は考え込んだ。

今まで考え込まれた末に「やはりないですね」と散々言われてきたのだ。今度も無理かもしれない。さすがにそんな都合の良いドロイドがいる訳はないかとパグエスが踵を返そうとした時。

「そうだ。ご注文に添える奴が1体いますよ。ただ儀礼ドロイドほど多国語に精通している訳ではなく、宇宙船乗組用ドロイドほど器用ではありませんが、ちようどその二つを合わせて、二で割ったようなドロイドが」

主人が嬉しそうに言った。

初めての好感触にパグエスも安堵する。

「見せてもらえるかな」

「なかなか希なドロイドでしてね、ちようどお値段は高いですが」

「値段は関係ない」

しかし、何故か主人はちようど困ったような顔をして言葉を続けた。

「・・・ちようど癖もありますか・・・」

「癖？」

パグエスは怪訝そうな顔つきをして、店の主人をまじまじと見つめた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

その男性は赤い絨毯が敷きつめられた通路に立っていた。

煌びやかな服装をした男女と歓談に興じている。

男性はジェダイ・マスター、クワイ・ガンに気づき、男女に向かつて何ごとかを言いお辞儀をすると、こちらに向かつて歩いてきた。

その後ろを、流れるように白い輝く服を纏った、褐色の髪の女性がついてくる。

笑顔を満面に湛え、クワイ・ガンの背より少し低めのその男性は声をかけた。

「これはこれは、マスター・ジン。ようこそおいでになりました」

クワイ・ガンもゆったりとお辞儀を返す。

「お久しぶりです、総督。お元気そうだなによりです。ところで先ほどの方々は、よろしかったのでしょうか？」

総督と呼ばれた男は後ろを振り返った。男女が通路の奥に消えていく。

「彼らは施政10周年記念式典へお招きした来賓です。また、後で会えますからね」

「マスター・ジン、お久しぶりですね」

声とともに、総督の後ろから優雅な足取りで女性が現れた。

「総督夫人もお代わりなく。全く喜ばしいことです」

柔らかに微笑みつつ言葉を返す。夫人も美しい笑顔を見せた。

クワイ・ガンは再び静かに総督に向き直り、言葉を続けた。

「共和国元老院議長やジェダイ評議会に代わり、ご挨拶させていただけます。施政10周年、おめでとうございます。この星がここまで美しく平和な星になったのも貴方のおかげでしょう」

総督は豪快に笑い

「いえいえ。私一人の力ではありません。この星に住む人々の力で」

とクワイⅡガンの肩を軽く叩くと歩き出した。

オルデランの総督は民主主義により選出され、この惑星を統治している。

そして、彼はその平和的かつ文化的な性格から、オルデランを銀河有数の美しく、人々が安心して暮らせるような惑星に変えていった。それは犯罪がほとんどなく、公害もないといった現状を見ても一目瞭然である。

また、彼は共和国議員の一員としても類希なる手腕を發揮していた。

この度、施政10周年の記念式典が開催されるにあたって、多忙な元老院議長からジェダイ評議会に要請が入り、こうして先の任務を無事終えたばかりのクワイⅡガンとオビⅡワンに、表敬訪問の指示が下されたのであった。

それにはクワイⅡガンとオルデラン総督が旧知の間柄ということも、少なからず影響を及ぼしていたであろう。

「それはそうとマスター・ジン。貴方のパダワンはどちらに？」

総督夫人が歩きながら、悪戯っぽい笑みを向ける。

クワイⅡガンは思わず苦笑した。

「ご存知だったのですね、私が新しくパダワンを持ったことを。彼は少し疲れているようなので宇宙港で休ませております」

「まあ、それはいけませんわ。この街には立派な医療センターメディがあります。診てもらったらいかが？」

「いえ、大丈夫でしょう。すぐに元気になると思いますよ」

「そうですね・・・？折角お会いしたいと思っておりましたのに」

残念そうな表情を浮かべる夫人に、総督は優しく言った。

「サレファイ、無理を言っではいけないよ」

それから言葉を続ける。

「私はマスター・ジンと話がある。君は部屋に戻っていてくれないか？」

「かしこまりました」

総督夫人は二人に向かって優雅にお辞儀をすると

「失礼させていただきます」

と微笑みつつ去っていった。

総督は深い溜め息を漏らすと、急に夫人を下げたことに対して不思議そうな顔つきで自分を見つめるクワイⅡガンに向かって、苦笑しながら口を開いた。

「私はもうすぐ45標準歳になります。彼女も40標準歳を過ぎました。しかし、まだ子供がおりません。彼女は年頃の子供を見ると羨ましそうな顔をするのです。仕方がないことなのですが。だから、もし貴方がパダワンを連れてきたら、彼女は自分の息子のように可愛がったかもしれません。しかし、それではジェダイとしての務めに支障を生じるでしょう？だから、これ以上、無理を言わせないようにサレフィを下がらせたのですよ」

決して夫人に怒っている訳ではなく夫人の気持ちを理解しつつ、かつジェダイとしての役割にも心を配るその態度にクワイⅡガンは賞賛の念を禁じえなかった。

「お心づかい感謝します」

ジェダイ・マスターは心からの謝辞を述べ、深々とお辞儀をした。

「気になさらないでください」

総督は笑顔を見せる。

「貴方が施政10周年を祝いに来てくれたことだけでも、本当に嬉しいのですよ」

「でも、それだけではありませんね？元老院議長を使ってまで私を呼び出した訳は」

「さすが鋭いですね。実は一つお願いが・・・」

総督は苦笑いを浮かべながら言葉を出した。しかし、その瞳は真剣そのものだった。

第2話 狙われる少年

「やっぱり気になってるんだね」

「え？」

ガレンの声にオビⅡワンは振り向いた。

「だって、ほら。もうすぐ王宮だよ」

オルデラのメイン・ストリートまで無料シャトルで来た後、二人はストリート沿いに立ち並ぶ博物館、塀に囲まれた巨大な画廊、オフィス、官公庁、また、モダンなタワーやドーム、美しく輝く白いビル等を物珍しそうに眺めつつ歩いていた。

そして、今、街の中心に近づくにつれ、明るい陽射しに白と金色に輝く、王宮の高い尖塔と低いドームが見えてきていたのだ。

「あれが、王宮か・・・綺麗だね。もうちょっと近づいてみようよ」

オビⅡワンが嬉しそうに王宮に向かって歩き出したあとを、ガレンは苦笑しながらついていく。

王宮に向かって歩いていくことに全く気づいていなかったようだ。本当に悩むととことん回りが見えなくなるタイプらしい。

王宮の正面には警備兵がいて、内部の様子を窺うことはできない。

オビⅡワンは見て諦めたらしく城の外を囲む広場に足を向けた。

大きな噴水があり、その周囲には樹木が陰をつくっている。広場には他にも憩う人々で賑わっていた。

綺麗に手入れされた噴水。広場を覆う若葉色の草々。そして、青々と茂った葉を風に揺らす木々。汚れなど全くなく、落ちているゴミさえもない。

それだけ見ても、この広場が人々に愛され大事にされていることがわかった。そして、その広場の真ん中にそびえる王宮への深い愛情、信頼も。

オビⅡワンは陽光に煌く水飛沫を眺めていたかと思うと、ガレンの元へ走ってきた。

ガレンはこの辺りで一番大きな木の下で、寝転びながら涼をとっていたのだ。

隣りにオビⅡワンも寝転ぶ。

木漏れ日がキラキラと輝き、葉と葉の間から真つ青な空が見えた。

オビⅡワンが静かに言った。

「ねえ、ガレン。何か悩みでもあるの?」

「どうして?」

「何となく、そんな気がして」

「いや、ちよつとね」

ガレンは言いきった。それ以上詮索しないで欲しいという意味も含めて。

オビⅡワンはそれきり黙り込んだ。彼には、友に無理矢理、話をさせるなんてことはできないだろう。

しばし沈黙が訪れた。

「そうだ、この星に着く時、面白い物を見たんだ」

自分の作り出した沈黙に気まずくなったのだろう。ガレンが話し始めた。

「面白い物って?」

グラス・ペインティング

「草 画さ」

グラス・ペインティング

「草 画?・・・そう言えばオルデランには草画家がいて、銀河でも指折りの芸術家だって聞いたことがあるけど」

「そう。それが宇宙港に通じる滑走路の途中に描かれていたんだ。1 kmぐらいの大きさはあったかな。広い草原に様々な色の花でね。すごくきれいだったよ」

「・・・起こしてくれば良かったのに」

悔しそうに呟くオビⅡワンに、ガレンは意地悪そうニヤツと笑って応えた。

「気持ち良さそうに寝てたし。それに・・・」

「お前達は誰だ」

突然、声が割り込み、二人はびっくりして体を起こした。

「お前達は誰だ?ここで何をしている?ここは僕のお気に入り場所なんだぞ」

再度荒々しい声が響く。

二人は後ろを振り返った。

樹木の横には、褐色の髪に彫りの深い、オビⅡワン達とそう対して歳が変わらない少年が立っていた。

「坊ちやま。そんなにきついことをおっしやらなくても・・・」

隣りにかしくよくように立っていた痩せた男性がおろおろと言う。

「お前は黙つてろ。ここは僕の場所だ。さっさと立ち去れ」

相手の口調にムツとしたガレンだったが、オビⅡワンが目配せして静かに制した。

「わかった。ごめんね、邪魔しちゃって」

微笑みつつオビⅡワンは立ちあがると、まだ怒りの収まらないといった風のガレンを伴いその場を離れていった。

二人が視界から消えると少年は

「ふん」

と鼻を鳴らし木陰に寝そべった。

そして、男性に命令した。

「パロ、喉が乾いた。オルデラニアン・エールを買ってこい」

「しかし・・・」

「執事のくせに口答えするの catt? 早く買ってこい」

「・・・わかりました」

執事は慌てふためいて走っていく。

王宮近くのメイン・ストリート、ここはビジネスの中心地だ。なかなかオルデラニアン・エールは売っていないかもしれない。

困り果てる執事の様子が目に浮かんで少年は忍び笑いを漏らした。

だが、その笑いもすぐに消えた。

「つまらないな。毎日毎日と同じことの繰り返しでうんざりだ。何か

面白いことないかな？」

「面白いことだったらあるぜ」

少年は体を起こした。

少し離れた所に、突如現れた男性が立っている。

怪訝そうな顔つきをする少年に、男性は不敵な笑みを浮かべるとブラスターを構えた。その後ろには、数人の男がやはりブラスターを構

えている。

少年は慌てて辺りを見渡した。

しかし、幸か不幸か、近くには今、全く人影は見当たらなかった。

この時を待っていたのだ、彼らは。少年の傍に人がいなくなるその一瞬を。

「ク、クレジット金だったらやるよ」

「金なんていらぬのさ。欲しいのはお前の命だ」

ビュン・・・

彼は身をすくめたまま恐怖の余り目をつぶった。

その時、左から風が吹いたような気がして彼は何故かふわりと浮きあがると、軽やかに一回転して静かに着地した。

「ガレン」

「OK」

そんな声が交わされると同時にブラスターの発射音が響いて、彼は思わず目を開ける。

目の前には髪の毛の短い、そして、三つ編を垂らした少年が厳しい眼ざしで、彼に横顔を見せていた。

その視線を追うとそこには、もう一人の少年が立ってブラスターを撃っている。その光線は狙い変わらず襲撃者のブラスターに当たり、銃を弾き飛ばした。

全てのブラスターを撃ち落とすと少年はニヤツと笑って言った。

「狙いをつけるのは得意なんだ。次はどこを狙って欲しい？」

突如として現れた少年達に、襲撃者どもは驚いたように呆然とし、「引け、引けっ」

と蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていった。

ブラスターを撃っていた少年がこちらを振り向き、ウインクする。

彼を抱えていた少年はニッコリ笑って視線を戻し、手を離すと優しく訊ねてきた。

「大丈夫？ けがはない？」

何時の間にか先ほどいた場所から10mほど横に動いている。元いた草地にはブラスターの焦げ跡がついていた。

だが、彼は言った。

「助けてなんて言つてない」

少年はびっくりしたような顔をして見つめている。

彼は再び口を開いた。

「助けてほしいなんて言つてない」

少年は瞬時に悲しそうな顔つきになり、それから寂しそうに微笑むと言った。

「無事で良かった。・・・じゃ、これで」

立ち上がり、もう一人の少年に近づくと二人は静かに立ち去った。

彼は一人眩いた。

「さっきの二人だよな。あいつら何者なんだ？僕とそう対して変わらない歳だと思うけど」

「元気だせよ、オビⅡワン」

「あ、ああ。うん・・・」

オビⅡワンは悲しそうな表情で何かを考え込みながら歩いている。

溜め息をつくとかレンは励ますように言った。

「ま、人それぞれだし。元気だしていこうぜ」

オビⅡワンは視線を向けると寂しそうに笑った。

「君は強いんだね」

「いや、オビⅡワン。君が繊細すぎるんだ」

「そうかなあ・・・」

「だって、君つていろいろと考え込む方だろ？」

「・・・うん」

鋭いと内心思いながら相槌を打つ。

「やっぱりね。繊細というか優しいんだな」

「君みたいにさっぱりとした性格が羨ましいよ」

「ははは。ね、次どこ行く？」

「博物館とか美術館かな」

オビⅡワンの答えに驚いてガレンが顔を向けた。

「・・・本気？」

「だってジェダイは、その星の文化や歴史をよく知った方がいいって

聞いているし」

「それはそうだけど……。たまには気晴らしもいいと思うけどね」
「・・・そうだね。君に任せるよ」

相変わらず気になるのか、憂いの表情で微笑むオビⅡワンだった。
(僕から見れば、君の方が本当に羨ましいけどな。マスター・ジンのパ
ダワンなんて、皆がなりたがっていた。ただ彼は選んでくれなかった
けど。そんな彼に認められるなんて、本当に羨ましいよ)

つい常々思っていたことが顔に出たのだろう。

「どうかした？ガレン」

「いや、何でも」

ガレンは思わず顔を背けた。そんな負の感情を悟られるのも嫌
だったし、そんな感情を抱えている自分も嫌だった。

「？」

不思議そうな顔をしたが、ややあってオビⅡワンは空を見上げた。
「本当にいい所だね、この星は。何もかもきれいで。都会的だけど自
然も多くて。ずっとこの星がこのままでいてくれたらいいな」

どうやら彼は先ほどのもやもやした気持ちから吹っ切れたよう
だった。澄んだ蒼い瞳には青い空が映っている。

ガレンも天を眺めた。ちっほけな感情なんか吹き飛ばすかのよう
なスカイブルーに彼の心も和んだ。

「そうだね、いい所だね」

ガレンはオビⅡワンに向けてニッコリ笑った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「お願いとは何でしょうか？」

クワイⅡガンは総督の言葉に真剣なものを感じ取ったらしく、真摯
な眼ざしを向けた。

「お恥ずかしい話、どうやら私の命を狙う者がいるらしいのです。こ
こまで続けて総督を勤めますと敵も多くなります。私としては胸を
張り、正々堂々と統治しておりますが、それが気に食わない輩もいる
ようで」

「つまり、このオルデランを平和な星より、もっと物騒な星にしたいと

考えている者がいるということですね」

「オルデランは豊かな星です。鉱物資源もいっぱいあるはずですよ。魅力的な星に見えるでしょう。しかし、私は自然を守るために敢えて採掘などは行っていません。そんな輩から見れば、私のやっていることは宝の持ち腐れに思えるのです」

全て納得したという風にクワイⅡガンは頷くと口を開いた。

「今日の記念式典が危険だと思いいいのですね？だから、私を呼ばれたと」

「記念式典は絶好の場所となります。多くの人を訪れ、警備も行き届かないでしょう。でも、お願いは私を守ることではないのです」

「どうということですか？」

「私には妹がおり、オルデランの旧家に嫁いだことは貴方もご存知だと思いますが、その妹に、12標準歳になる息子がおります。彼を守って欲しいのです」

「何故ですか？」

不思議そうに訊ねるクワイⅡガンに、総督は溜め息をつくと言った。

「先ほども言いましたが、私達夫婦には子供がおりません。ですから、妹の子供を実の息子のように可愛がっているのです。もし、あの子に何かあれば妻は耐えられないでしょう」

「つまり貴方を失脚、もしくは、総督から引きずりおろすには、貴方がたを攻撃するよりもその少年を攻撃した方がたやすいし、ダメージも大きいということですね。それには今日の式典、もしくは、その直前に行動を起こした方がよりインパクトがあると」

「そういうことなのです」

総督は沈痛な表情を見せた。自分の大切な者が危険にさらされることは、自分の命を危険にさらすより辛いことなのだろう。

ややあつてクワイⅡガンは訊ねた。

「その少年は今、どちらに？」

「この王宮にいますはずですよ。厳重に守られている王宮内にいけば比較的安心ではありますが、しかし、何か予想外のことが起きないとも限

らない。貴方には彼をさりげなく、目立たないように守っていたきたいのです」

「目立たないように・・・ですか？」

少し驚きの表情を見せたクワイⅡガンに、総督は困ったような口調で述べた。

「そうです。表立って警備をつけてしまうと、息苦しいと反発する子なんですよ。今までも、良かれと思いがつめた警備の者を、高飛車に追い払ってしまったことが多々あります。そんなこともあって、今回、本人には身に危険が迫っているかもしれないことを伝えてはいたのですが」

なかなか一筋縄ではないかな少年のようだ。

「目立たないようにするととなると、年の近い、私のパダワンの方が適任だったかもしれませんね・・・」

しばしクワイⅡガンは考え込む。

そこへ、制服を着た青年が慌ただしく走り寄ってきて一礼すると、総督の耳に何ごとか囁いた。

「何だっつてっ!?! 一つの間に外に出たのだ!?!」

「どうしました?」

ただならぬ気配にクワイⅡガンはすかさず言葉を出した。

総督は彼の方を振り向くと、顔をしかめたままポツリと言った。

「先ほど言った妹の息子、あの子が外に出たらしく、王宮前の広場で行方不明になったそうです」

第3話 カーチエイズ

北にある宇宙港から王宮を経て、メイン・ストリートを真つすぐ南に下っていく。

このまま南に行くと、両端を延々と続く崖の合間に存在する、オルデラ有数の美しき浜辺がある。少年二人は店先で軽くお昼をつまんだ後、海—— 厳密に言えば湖だが—— を眺めようとそこに向かっていた。

ただでさえ観光地として名高い首都オルデラであったが、その周囲を囲む湖は常に水が湧き出ているため澄んでいること限りない。底まで見えるといった噂もあるぐらいなのだ。

瀟洒でモダンな邸宅が道沿いに並んでいる。家々の庭には樹木が茂り、それがまた建物とうまく調和して見目麗しい景観の一環を担っていた。

また、お洒落なショップも多く、若者達が店を冷やかしていたり、買い物していたりとおおいに賑わっていた。

オビⅡワンとガレンはそんな様子を物珍しそうに見ながら歩いている。

二人の横を着飾った若い少女達がすれ違っていた。

彼らは急に足を止めた。お互い顔を見合わせる。

先に口を開いたのはガレンだった。

「オビⅡワン、君が声をかけてみてよ」

慌ててオビⅡワンが応える。

「どうして？君の方が適任だと思っけど」

「いや、君の方こそ、こういうの慣れているだろう？」

「そんなことないよ」

「ほら、早く」

ニッコリと微笑むガレンに急かされるように、オビⅡワンは溜め息をつくと踵を返し、元来た方へと足を向けた。後ろからニヤニヤしながらガレンがついてくる。

オビⅡワンはしばらく歩き足を止めると、口を開いた。

「ねえ、君・・・」

溜め息をも一つつき、それから街路樹の影に視線を走らせる。

「どうして、僕達のあとをついてくるの?」

街路樹の影に隠れていた少年がムツとした顔を覗かせた。

「べ、別にあとをつけてた訳じゃない」

先ほどの少年である。

この焦げ茶色の髪を持つ彼は、オビⅡワンとガレンの後を延々とここまでついてきたのだ。それに気づいていた二人が、ようやくこちらから声をかけたという訳である。

オビⅡワンは後ろを振り返り、ガレンに向け肩をすくめた。友も苦笑を返す。

とその時、オビⅡワンのコムリンクが鳴った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ドアがトントんとノックされた。

「入りなさい」

声がかげられるとゆつくりとドアが開き、おずおずと痩せた男性が入ってきた。

総督は威圧感を与えないよう、優しい口調を心がけて訊ねる。

「パロ、一体何があったのか?」

「申し訳ございません。私が目を離したばかりに・・・」

「そのことはもうよい。それより何が起きたのだ?」

パロは手短かに詳細を説明した。

「——で何とか探しまして、オルデラニアン・エールを買って戻ってきましたら、坊ちやまのお姿が見えなかつたのでございます」

総督は天を仰ぎしばし目を瞑ったが、顔を戻すと言った。

「パロ。お前には話していなかつたが、あの子の命を狙う者がいるかもしれないのだ」

「そんな・・・っ。申し訳ございません、申し訳ございません」

可愛そうなぐらいに青ざめて執事はただ平謝りを繰り返すばかり。

総督は溜め息を漏らした。

「いいのだ。お前は知らなかつたことなのだから。マスター・ジン、ど

うすればいいでしょう?」

傍らに立つ長身の男を見上げた。

クワイⅡガンは執事に向かうと口を開いた。

「その少年と別れる前に変わったことはありませんでしたか? 不審な人物を見かけたとか、不審な車を見かけたとか」

「・・・そう言えば、少年を二人見かけました」

「少年?」

「はい。そうです、一人は貴方と同じような格好をしております。坊ちやまお氣に入りの場所にいた、その少年達を、後から来た坊ちやまが追い払ってしまったのです・・・」

ジェダイ・マスターは思案した。

少年二人 —— あの二人かもしれない。

クワイⅡガンの沈黙した理由を別の意味にとった総督が口を挟んだ。

「実はあの子には何不自由なく過ごさせているため、性格に多少強情な所がありました。全く困ったものです。自分の思い通りにならないことはないと思っているふしがあるのです。あのよう育ててしまった妹夫妻や私達にも原因はあるのでしようが・・・。マスター・ジン?」

余りにも反応を示さないクワイⅡガンに、総督は不思議そうな顔をした。

「ちよつと、コムリンクを使ってもよろしいでしょうか?」

突然の申し出に怪訝な表情を浮かべたものの総督は快く了承した。
すかさずコムリンクを鳴らす。

「・・・私だ」

「先ほど王宮近くの広場で少年に出会ったか? 背の高い痩せた男性と一緒にいた」

「そうだ。それで、その少年が今どこにいるかわかるか? 彼は命を狙われている可能性があるのだ」

「その後、彼はどうした?」

「オビⅡワン?」

「どうした?」

「何!? そのシャトルはどこに向かっている!？」

「待て、オビⅡワン。—— オビⅡワン!？」

コムリンクは既に切れていた。

クワイⅡガンは振り返ると総督に沈痛な面持ちで、しかし、急いた口調を滲ませながら言った。

「その少年がたった今、シャトルで誘拐されたそうです。メイン・ストリートを下下しているようですが。すぐに追いかけてみましょう」

☆☆☆☆☆☆☆☆

「はい、オビⅡワンです。—— マスター?」

「ええ、出会いました。僕と同じぐらいの歳の子ですね?」

「やはり……。僕達がその場を離れた後、彼は5人ぐらいの男達に襲われたんです。僕達が助けたら男達は逃げていきました」

「彼とはその時別れましたが、今は何故か僕達のあとを……。あれ? いない」

「さっきまで僕と話していたんですが、姿が見えなくなり—— あ、いました。……。あっ!!」

「しまった……。っ。マスター、彼が誘拐されましたっ!! 黒塗りのシャトルにっ!!」

「メイン・ストリートを南に向かって走っていきます。あれを追いかけますっ!!」

すかさずコムリンクを切るとオビⅡワンはあとを追って走り出した。

ガレンが驚いた顔で、しかし、一緒に追走する。

「どうした? 何があったんだ?」

「彼が……。さっきの少年が誘拐されたんだ。マスターとコムリンクで話している最中」

ガレンは背後に視線を走らせた。確かにあの少年の姿はない。

オビⅡワンが続ける。

「急にシャトルが現れて彼に近づいて、いきなり中に連れ込んだ。彼は命を狙われているみたいなんだ」

「そうだろうね。さつきも狙われていたし」

「助けないと」

真摯な表情でオビⅡワンはきっぱり言いきった。ガレンは苦笑し、だが、友に暖かな眼ざしを向ける。

「君の性格じや見捨てておけないもんね」

「ガレンだって見捨てておけないでしょ？」

「まあね。だけど、このまま走っていくつもり？」

オビⅡワンは周囲を見まわした。何か足になりそうなものは……。

「あれを借りよう」

言うが早くガレンがそれに向かって駆け出す。

「ちよ、ちよつと、ガレン。それ……」

ガレンは無言で道端に停めてあったスピードダー・バイクにまたがった。

すると、持ち主だろうか。ちょうど家から出てきた男が、不意に血相を変えて叫んだ。

「お、おい。それは俺のバイクだぞっ!!」

オビⅡワンは思わず天を仰ぎ一呼吸置くと、持ち主を静かに見つめ手をさりげなくかざす。

「少しの間、貸して欲しい」

「少しの間、貸してあげよう」

虚ろな表情で応える持ち主に、オビⅡワンはこんなことにジエダイの技を使っているのだろうか？いくら緊急事態といっても。

と内心忸怩たる思いを抱きつつ

「すぐ返します。すみませんっ」

ペコリとお辞儀をし、すぐさまスピードダー・バイクの後部座席に飛び乗った。

スピードダー・バイクは轟音立ててシャトルを追い始めた。

バイクは他のエア・スピードダーやホバーカーを避け、流れるような動きで走っていく。

「ガレン、バイクの運転もできるんだ」

余りのスピードに必死にガレンにしがみつinaながら、オビⅡワンが

問う。

涼しい顔でガレンは応えた。

「いや。だけど操縦は得意だから。多分大丈夫だよ」

「う……」

一瞬顔をしかめたオビⅡワンだったが、すぐに真剣な表情に戻った。

「ガレン……」

「ああ。やつら、気づいたみたいだ。すっかり掴まって。行くよっ！」
言い終わるか終わらないうちに、アクセルをふかし加速する。バイクは今までにないスピードでシャトルに追いつがった。

顔を叩きつける強風に目を凝らしながらオビⅡワンが叫ぶ。

「右に避けるんだっ！」

すかさずハンドルを右に切ると、光線がバイクの左を掠めて行った。

「どうやら、本気で僕達を殺す気みたいだ」

ブラスタアの真っ黒い銃口がシャトルの窓から覗いているのを視界に収めつつ、ガレンが信じられないといった風に半ば呆然としてポツリと言った。

「多分そうだろうね」

いつになく強い友の口調にガレンがえ？と視線を後ろに走らせた時、オビⅡワンが再び怒鳴るように叫んだ。

「ガレン、前！前っ!!」

ガレンが前方に注意を向けた時には、反対から直進してきたエア・スピーダーが目前に迫っていた。

咄嗟のことでガレンは思わず硬直する。

ハンドルに手を伸ばしても届かないと見るやオビⅡワンは瞳を閉じると、引き寄せたフォースを使ってバイクを操った。

すかさずエンジンを切る。

急激な停車に二人は前に体を投げ出されそうになる。

しかし、オビⅡワンは必死にハンドル左にあるバーをフォースで押し上げた。

バイクは瞬間、リパルサーリフト反重力装置を起動して上昇する。

そのすぐ下を、エア・スपीダーが擦るようにすれ違っていった。安心する間もなく後ろから激しいクラクションが響くと、今度は一転、リパルサーリフト反重力装置を切り、エンジンを点火させると加速する。

下降しながらバイクは再び車の流れに乗り、シャトルを追いかけ始めた。

「……ありがとう……」

青ざめた顔で、ガレンが止めていた息とともに言葉を吐き出す。

オビⅡワンも心臓の鼓動が激しかったが、ようやくそれを落ちつかせるとニヤツと笑い口を開いた。

「見直した？これでも一応、ジェダイのパダワンだからね」

友の軽口にガレンも思わず微笑み落ちつきを取り戻す。

「よし、ここからは僕に任せてくれ。もう大丈夫だ」

ハンドルを握り直す。

黒塗りシャトルはかなり前を走っていた。まさしく逃げるように追いつけるだろうか？いや、追いつかねばならない。

バイクは加速を繰り返す。

シャトルに近づいたと見るや、またもや車からブラスタアの光線が放たれた。

右や左、上下にかわしながら差をつめる。

突然始まったカーチェイスに、通りを行く人々は興奮と恐怖の混じった声を放った。

平和なオルデラにおいて、このような出来事は滅多にないのだろう。

「いい感じに注目を浴びているよ」

横に視線を走らせながら、ガレンが笑って言った。

「そうだね。これで彼らもここでは目立つ動きはできないだろうし、ね。しかも、この騒ぎがマスター達に伝われば」

オビⅡワンも相槌を返す。

「……ね、オビⅡワン？」

「何？」

ガレンは前方を見すえた。周囲に木々が多くなり、間もなくストリートとの終点が見えてくる。両端を生い茂った森に挟まれるようにして窺える、その向こうは海だ。

「やつら、海を越えて行こうとしたら、どうする？ バイクの燃料はシャトルより少ないし、そこまで追いかけるのは無理だ」

聞いてオビⅡワンは沈黙した。目まぐるしく何かを考えているのがわかる。

ガレンは左に少し舵を切った。ブラスター光線が右横を飛び去っていく。

「・・・ガレン。君のブラスターを借りていい？」

「ブラスター？ いいよ。右のベルトに挟んである」

オビⅡワンはブラスターを抜き放った。

叩きつける強風をもとめせず彼はブラスターを構えた。

狙った所が外れたら —— などとは考えないことにした。もし、そんなことが起きればシャトルは少年もろとも爆発し、周辺の建物にも被害が及ぶ。

フォースを纏い集中力を高め、オビⅡワンはブラスターを発射した。

輝く光線は前行くシャトルのエンジン部分を貫通した。エンジンから黒い煙が噴き出す。

シャトルは途端に減速した。急に左側へ通じる道へ舵を切り、生い茂る木々の間に消えていった。

オビⅡワンが促す。

「ガレン？」

「OK」

ガレンも言い放ち、一瞬後にはバイクの進路を左に向けた。

途端、待ち構えるように宙に停止していたシャトルからブラスターの一斉射撃が起こり、バイクを貫く。破壊されたバイクは地面に墜落すると、炎を巻き上げ爆発した。

第4話 腹黒い襲撃者

「これであいつらも終わりだ」

隣に座っている男が頬を歪めながら、そう吐き捨てた。

少年はブラスタアの銃口をつきつけられながらも、思わず後ろを振り返った。

シャトルの窓越しに、赤く燃え上がる火とたなびく煙が見える。

悲しくなつて涙が溢れそうになるのを、ぐつと堪えた。

彼らは死んでしまった。一生懸命、僕を助けようとしてくれていた彼らが。あんなにきついことを言ってしまったけど、素直になれなかっただけなんだ。

身近に同じ年頃の者はおらず、また、周りの人間も自分をちやほやしてくれる。

どうしても凶に乗りやすく、高飛車な態度をとりがちだった。

だが、そんな少年に対して彼らは気にせず、それどころか助けようとさえしてくれた。

彼らとは友達になれそうな気がしていた。それなのに……。

少年は涙を拭くと隣の男を睨みつけた。

（こいつは僕を殺して、伯父さんを失脚させるつもりだ。そんなことは絶対させやしない。しかし、この男、どこかで見たことがある。それもつい最近……）

少年は考え込む。恐怖はあった。が、それより先にこの現状を打開させる方が先だった。

（こんなやつらにこの星は任せられない……）

シャトルはしばらく走行した後、一旦停止し、一人の男が降りると、それからまた走り始め、すぐにゆっくりと停まった。

開いたドアから降りる男に続くように、少年も背中を銃口で小突かれながら地面に足を下ろした。

途端、冷ややかな空気が辺りを満たし轟音が耳をつんざく。

そこには滝があった。

島である首都オルデラの中腹の山脈から南へと向けて流れてきた

であろう幅10mほどの川が、左手の下方で瀑布となって海に注いでいる。滝の両横は水に穿たれたかなり大きい崖となり、黒く濡れた地肌を光らせていた。

少年は気づかれないように逃げ道を探した。

前には絶えず水飛沫を上げる滝が口を開け、その滝の向こう岸には樹木が、そして、その右向こうには細い道が続いている。おそらくその道を辿ればメイン・ストリートが横たわっているであろうが、その前に一人の見張りと思しき男が立っていた。

逃げにくいように、滝の反対側へわざわざシャツルを停めて、少年を下ろしたのだろう。

また後ろには苔が生い茂り、蔓が絡みつく鬱蒼とした樹木の波が続き、その樹木を通りぬけたとしても、高さから考えれば海に面した断崖絶壁があるに違いない。

左にも同じく断崖絶壁がそびえている。だが、右は？

右へ川沿いに行けば何とか川を渡る橋があるかもしれない。しかし、銃を構えた男達とシャツルが逃げ道を塞いでいた。

(無理だ……)

少年は絶望した。でも、簡単には諦めたくなかった。

(時間稼ぎをすれば、さっきの騒ぎを聞いた伯父さん達が駆けつけてくるかもしれない)

淡い望みだったが、一途にそれにすがった。

先ほどまで銃口をつきつけていた男がブラスター片手に歩いてきた。

「どうして僕を殺そうとするんだ？」

少年は訊ねた。怯えている様子を見せないように気をつけたつもりだったが、声に幾分かの震えが混じったことは否めない。

恰幅の良い口髭を蓄えたその男は、鼻を鳴らすと軽蔑した目つきで少年を眺めた。

「そんなこと聞いてどうする？」

「どうって……僕にも聞く権利はある」

男は無言を保った。

(このままじゃ、殺されるっ)

少年に焦りが生じたその時、男が口を開いた。

「現総督を引きずり下ろし、俺が総督になるためさ」

「どうして僕を殺すことで、伯父さんが引きずり下ろされるんだ？」

答えはわかっていたが敢えて聞くことによつて時間を稼ごうとした。

男は馬鹿にしたように再び鼻を鳴らす。

「そんなこともわからんのか？総督はお前を可愛がっている。お前が死ねばシヨックの余り職を退くだろうよ。なんせ、お前をいずれ総督にと考えているほどだからな」

(僕が総督に？)

総督の件。それは初耳だった。

民意で選ばれる総督だが、人気の高い現総督が推せば、それは人々に多大なる影響を与えるに違いない。

(伯父さんがそんなにも僕を気にかけてくれたなんて……。それなのに僕は全く気にせず、勝手気ままなことばかりやってた……。もし、僕が生きてここから帰れたら、伯父さんの言うことをしっかりと聞いて勉強するよ。ごめんね、伯父さん……。)

命の瀬戸際に立ったが故か。少年の気持ちに変化が生じた。今までの傲慢さは影をひそめ、真摯な態度を見せ始める。顔つきにも内面の想いがにじみ出てきた。

だが、そんな少年の変化に気づくことなく、男は言い捨てた。

「さあて、もうそろそろいいだろう？」

「まだまだ、もう一つっ!!……。もう一つ。聞きたいことがある」

男は辺りを見渡した。追っ手がかかっている様子もない。先ほどのジエダイも今はいない。

「わかった、一つだけだぞ」

「何故、僕をこんな所で殺すんだ？もっと大勢の人がいる所で殺した方がインパクトがあるんじゃないか？」

「そう思っていたが気が変わった。お前を滝壺へ落とせば、すぐには死体は発見されまい。となると総督はお前が生きているか死んでい

るかわからず、相当苦しむだろう。また、犯人の目処もつきにくい」
男はニヤツと笑った。

「総督の嘆き悲しむ顔が目には浮かぶぜ」

（絶対こんな奴を総督になんかさせるもんかっ。絶対）

その時、不意にひらめいた。この男の正体。

「お前はラルメードだな。伯父さんの秘書の」

男の顔がみるみる変わった。今までの卑屈な笑みを浮かべていた
それから、殺気のこもった凄みのある顔に。

「ますます生かしてはおけんな」

ブラスタ―をゆっくりと構えた。

「滝壺に落ちて死ねっ!!」

「やめろ。その少年を放すんだ」

不意に静寂を破り解き放たれた言葉に、少年は驚いて顔を上げた。
隣りにいるラルメードからも驚愕した気配を感じる。

滝を隔てて向こう側に崖の上に人影を認めた。二つの小柄な。

見張りの姿はどうに影形もない。

一人は、羽織っていたローブを何時の間に脱いだのか、髪は短く右
側に三つ編を垂らしている少年。もう一人は亜麻色の髪をした黒い
服を纏った少年。

（彼らだっ。無事だったんだ・・・）

少年は安堵し、ホツとした表情を浮かべた。

「ちっ。ジエダイめ」

ラルメードは鋭く舌打ちする。

急にシャトルがエンジン部分から煙を吐き出しながらも宙に浮く
と、開け放たれた窓からブラスタ―の乱射が少年二人を襲う。

少年達は素早く筒状の物を取り出すと美しく輝く光を放出した。

蒼く光るそれと、時折紫色の輝きさえ見せる蒼い光は、優雅とも思
える最小の動きで難なくブラスタ―の光線をシャトルに向けて弾き
返す。

その時、捕われの身である少年が突如として叫んだ。

「抵抗をやめるんだっ!!早く!今すぐに・・・」

少年は密かに唇を噛み締めた。こんなことを言いたくなかった。何があっても。絶対に。でも……。

「よし、それでいい。いい子だ。これで彼らを死なせずに済むだろうよ」

ラルメードが耳元でほくそえむように囁いた。銃口を彼の脇腹に突きつけたまま。

怒りで腸が煮え繰り返りそうだった。死にたくはない。だが、こんな奴の言うことを聞くくらいだったら死んだ方がましだと思いはじめる。

彼は恐る恐る視線を移した。あの二人の少年の方へ。

さぞかしショックを受け愕然としているだろうと思った。折角助けに来てくれたのに、その僕がこんなことを言ったら。だが。

ブラスターの乱射が止まった今、依然として二人とも光る武器を構えてはいるが、抵抗はせず平然と落ち着き払っている。

そして、彼と三つ編を垂らした少年と目が合った途端、その少年は微笑みさえ見せた。

まるで心配はいらないよ、大丈夫だからと言っているが如く。

彼は鼻の奥がツンとし、あふれそうになる涙を堪えた。

そして—— 体の底から勇気が湧いてくるのを感じた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「やめろ。その少年を放すんだ」

不意に隠れていた木陰から姿を現すと、良く通る声でオビIIワンが言葉を放った。

その今までとは明らかに違う口調にガレンは思わず友を見やる。

横顔には先ほどまで悩んでいた影など一切見せず、逆に精悍さを醸し出していた。

ジェダイとしての成長した姿を垣間見た気がして、ガレンは眩しそうにオビIIワンを見つめた。

滝の向こう、崖の上で今にも少年を滝壺に落そうとしていた男も、そして、あの少年も驚いてこちらに視線を向けた。

(不思議に思っているだろうな。死んだと思っていた僕達が現れて) ガレンは思わず笑いそうになった。

二人はあの時、危険を察知し、バイクの舵を左に切った直後、バイクから飛び降りたのだ。オビⅡワンのロープをカモフラージュに乗せたまま。案の定、男達はその一瞬だけ見た、フォースで膨らんだロープを二人と思いこみ、ブラスターで攻撃したという訳だ。

足元には、見張りがぐったりと横たわっている。

目にも止まらぬ早さで、オビⅡワンがセイバーの柄を鳩尾に叩き込んだその者が。

ガレンはオビⅡワンを見直し始めた。

急にシャトルがエンジン部分から煙を吐き出しながらも宙に浮くと、開け放たれた窓からブラスターの乱射が二人に襲いかかった。

二人は素早くライトセーバーを構えると美しく輝く光を起動した。

蒼く光るそれと、時折紫色の輝きさえ見せる蒼い光は、優雅とも思える最小の動きで難なくブラスターの光線をシャトルに向けて弾き返す。

その時、捕われの身である少年が突如として叫んだ。

「抵抗をやめるんだっ!!早く!今すぐに・・・」

一瞬オビⅡワンとガレンは啞然とし、しかし、すぐにその理由を悟った。

多分あの男が少年に言わせたのだろう。そんな姑息な手段が、逆に彼ら二人の闘志に火をつけるとも知らずに。

少年が悔しそうな表情を浮かべている。オビⅡワンは彼の心中を思うと辛かった。

言葉により抵抗はやめたため、観念したと思っただらしくブラスターの攻撃は止まっていた。

しかし、いざ何が起きても良いようにセイバーを構えたまま二人は立っている。

オビⅡワンは少年を気づかかってそっと視線を彼に移した。

途端、目と目が合う。

オビⅡワンは柔らかに微笑んだ。

まるで心配はいらないよ、大丈夫だからと言っているが如くに。少年は驚き、だが、微かに頷いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

シャトルがゆっくりと近づいた。

こちら側の崖の上に着地すると中から男達が二人降りてくる。

依然としてブラスターを構えたまま慎重に歩いてきた。やはりジエダイの力を恐れているのだろう。

向こう岸からあの男が叫んだ。

「サイセタム、パレル、武器を残らず奪えっ!!・・・そして、こっちに持ってこい」

男達は無言でブラスターを突きつける。

オビIIワンとガレンはセーバーの刃を収めると、しぶしぶ男達に渡した。

「それもよこせ」

隠していたはずなのにバレていた。ガレンは仕方なくブラスターも手渡した。

何があつてもいいようにとキャプテンから借りた物だった。

(本当にこんな平和な惑星で、何かあるとは・・・)

ガレンは争いの絶えないこの世界を平和にすべく、自らも貢献したいと心の底から思った。

男の一人 —— 多分サイセタムと呼ばれた方だろう —— が

奪ったセイバーとブラスターを抱えるとシャトルに乗り込んだ。も

う一人 —— 体のがつしりとしたパレルがブラスターを構えたま

ま、二人を交互に監視する。

向こう側についたシャトルから現れたサイセタムは、少年の傍らに立つ恰幅の良い男に武器を手渡した。

「これがライトセーバーか・・・。貴重な物だな。是非、私の展示品に加えたい」

さも珍しそうに男は眺め回す。そして、ニヤツと不気味な笑みを浮かべた。

「こいつを使ってこの子供を殺すのもいいな。ジエダイが殺ったこと

にし、しかも、その現場を目撃しジエダイを殺して仇討ちしたことにすれば、俺達に容疑はかからない。ジエダイ鼻肩のあいつの権威も地に落ちるといふものだ」

男は受け取ったオビⅡワンのセイバーを構えた。

オビⅡワンは観念したように目を閉じる。

男は少年に向けてセイバーを突きつけ、そして、おもむろにスイッチを押した。

恐怖の余り目を瞑る少年。

しかし。

何も起こらない。輝く蒼い光刃が出るはずの先端は沈黙したままだった。

男は舌打ちすると、今度はガレンのセイバーを取り出し起動させようとする。

だが、やはり同じように刃が出るどころかハム音さえ聞こえない。

怒り心頭に達した男はセイバーを地面に叩きつけようとしたが、思い直したらしく懐にしまい込むと、最後にブラスターを構えた。

ガレンにはオビⅡワンが一層集中するのが感じられた。

途端に、後ろの木立から木に絡みついていた蔓が音もなく伸びてくると、男のブラスターを持つ手、両足に勢いよく巻きついた。

「逃げるんだっ!!早くっ!!」

オビⅡワンが突如叫ぶ。

その声に弾かれたように少年は彼をしばし見つめ、それから意を決して、蔓に巻かれて身動きできぬ男に体当たりを食らわせ地面に倒す。

転がって喚いている男を尻目に脱兎の如く駆け出した。川沿いを北に向かつて。

それを見てパレルがブラスターを構えた。

すかさずフォースを纏うとオビⅡワンはパレルに体当たりする。

放たれた光線が少年の足元を穿ち、少年は慌てて樹木の影へ姿を消した。

激しい勢いで吹っ飛び呻いているパレルの右腕に、オビⅡワンは両

手拳を叩きつけると零れたブラスターを拾い上げ――

ようとしたその右手を、ブラスターの光線が掠める。

「動くな。手を挙げてこっちに顔を向けるんだ」

ゆっくりと体を起しながらそつと背後を探る。立ちすくむガレンの傍に人の気配が感じられた。

オビⅡワンは両手を挙げたまま振り向いた。

ガレンの後ろにサイセタムが立っている。多分、背中に銃口を突きつけているのだろう。その向こうにシヤトルの姿が見えた。

友は唇を噛みしめ、すまないといった表情を浮かべている。オビⅡワンはそんな彼を安心させるべく微笑んだ。

と突然、倒れていたパレルが立ちあがり、怒りの表情もあらわにブラスターを発射すると、それは背後からオビⅡワンを貫いた。

第5話 崖端での攻防

まるでスローモーションのようにゆっくりと倒れるオビⅡワンを見つめながら、しかし、ガレンは一言も声が出せなかった。感覚が麻痺したようだった。心は必死に声を放とうとしているのに、体がそれに追いつかない。

ようやく呻き声とともに言葉が漏れた。

「・・・オビⅡワンっ・・・」

ガレンは怒りで我を忘れそうになったが、拳を握りしめ、全ての力をもって心を落ち着かせる。何とか冷静さを取り戻すと、この場を対処すべく考えを巡らせ始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

向こう岸にいたラルメードは突然、巻きついていていた蔓から解放された。

何があつたかわからないといった風な表情を浮かべながら男は立ちあがると、すぐさま少年を追って走り去っていった。

「そいつらを殺せっ!!」

捨て台詞を残しながら。

☆☆☆☆☆☆☆☆

パレルはゆっくりとオビⅡワンに近づき、足で彼を転がし仰向けにさせた。

死んでいるか確認していたその瞳が、不意に驚愕に彩られる。

オビⅡワンのニヤツと笑う視線にぶつかったのだ。

「!?」

事態を把握する前に、オビⅡワンの蹴りがブラスターを持つ右手に決まり、銃は手から放れ弧を描いたかと思うと滝壺に吸い込まれていった。

だが、パレルにはその顛末を悠長に眺めている暇はなかった。

少年が顔横の地面に両手を置き、反動をつけ両足で地面を蹴り手を軸にして後ろに飛んだかと思うと、ふわりと着地し彼に向き直ったからだ。

「パレルっ!?!」

ガレンの背後にいたサイセタムが叫んだ。

二人の鬨いに気を取られブラスターの銃口が僅かにずれる。

その機を逃さず、ガレンは両手を互いに組み反動をつけると、サイセタムの鳩尾に右肘鉄を食らわせた。

「う……」

崩れ落ちる男からブラスターを奪い取るとガレンはそれを構えた。

オビⅡワンとパレルは対峙している。男は何時の間にか
バイプロブレッド
振動ナイフを手にしていた。

渾身の力を込めてパレルがナイフを振りかざす。

向かってくる相手の力を利用するのだ、若きパダワンよ ——

つい先頃、クワイⅡガンから教わった体術の記憶が蘇る。

オビⅡワンはナイフを半身に躲し、男の突き出された右腕を掴み体を横回転させると、向かってきた勢いを利用し投げ飛ばした。

鈍い音を立てて地面に激突する。

「オビⅡワン、離れろっ」

オビⅡワンが後ろに飛びずさるとガレンはブラスターを放った。

青白い光に攻撃されパレルは静かになった。

「失神モード……だね?」
スタン

呼吸を整えながらオビⅡワンが微笑む。

「ああ。それにしても驚いたよ。君が本当に撃たれたかと思った」

「思わせたただけさ。辛うじて避けたんだよ」

ニッコリ笑う。

ガレンは友の思いもかけない強さに改めて驚かされた。

その瞬間。

「ガレンっ!!」

声にガレンが後ろを振り向く。

驚きで見開かれた瞳には、鳩尾を押えて苦しがりながらもサイセタムが振動ナイフを振りかざしている姿が映った。

ナイフが閃き、鮮血が宙を舞った。

「オビⅡワン!?!」

突き飛ばされた衝撃で地面を転がりながら、ガレンは振り向きざま叫んだ。

彼をかばった友は右腕から激しいほどの鮮血を垂らしていた。必死に押える左手から血があふれ、チュニツクをみるみるうちに赤く染めていく。激痛の余りオビⅡワンは思わず膝をつき顔をしかめた。

サイセタムは勝ち誇ったようにゆっくりとオビⅡワンに近づくと、血が滴るナイフを振り上げた。

歯を食い縛りながらも彼はその様子を悲痛な思いで見上げる。

まさに振り下ろされんとしたその刹那、ガレンがサイセタムに体当たりした。

男とガレンはもつれ合うようによろけ、サイセタムの足が崖つ淵にかかったと見るや崖が大きく崩れた。と同時にガレンの足元も。

二人は宙に浮き

「うわああっ・・・」

「ガレンっ!!」

オビⅡワンの必死の叫びも空しく、落下していった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「捕まえた。俺から逃げられると本気で思っていたのか?」

少年はラルメイドに組み伏せられていた。

(せつかく彼が逃がしてくれたのに・・・)

悔しきでいっぱいになる。不慣れな場所で迷った拳句、結局見つかってしまったのだ。

「あのジェダイどもをちゃんと始末したか気になるな。それを確認するまで生かしておいてやろう」

ほくそえむラルメイドに少年は心底怒りが燃え上がったが、全く成す術もなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

土や石がパラパラと零れ落ちた。

ガレンは下を見て顔が青ざめるのを感じた。高さ30mぐらいはあるだろうか。轟音撒き散らし、何もかも呑み込むが如き滝壺が口を

開けている。紛々たる水飛沫がこの高さまで飛んできそうな激しさ。ひんやりとした空気が辺りを漂っている。

彼は見上げた。友の顔が見える。

オビⅡワンは崖から身を乗り出すように手を差し出し、ガレンの左手首をしっかりと掴んでいた。しかし

「オビⅡワン、手……っ！」

先ほど深い切り傷を負った右腕から赤い血がどくどくと流れ落ちる。それは徐々にガレンの手も濡らし始めた。

「こつちが利き腕だからね」

オビⅡワンは苦笑し、だが、血によって滑りやすくなり手が離れることを恐れ意識を集中させた。

「オビⅡワン、いいよっ。手を放すんだ。このままだと君まで……っ」

ガレンはそう言って諦めの混じった顔で友を見つめた。このままじゃ、二人とも……。

「ガレン」

思いもかけず落ち着いた冷静な声が響き、ガレンは驚いて見つめた。

「ガレン、落ちついて。フォースを使って……崖を蹴って飛び上がるんだ。フォースが助けてくれる。僕も……手伝うよ」

「でも……」

そう言いかけてガレンは、オビⅡワンがかなり疲労困憊していることを見て取った。

眉間に皺を寄せ集中し、右腕を襲う激痛に耐え、青ざめた顔でオビⅡワンは再び口を開いた。

「僕を……信じて欲しい」

既に血はガレンの右腕を伝い、纏っている黒いパイロットスーツさえ染め始めた。

こんなになっても自分を助けようとしてくれるオビⅡワンの姿に胸がいっぱいになり、ガレンは慌てて瞬きを繰り返すと静かに言った。

「わかった。君を信じる」

オビⅡワンは弱々しく微笑む。

「じゃ、行くよ。・・・3、2、1っ!!」

同時にガレンは崖を蹴った。同時にガレンは崖を蹴った。足元が少し緩み慌てるが、辛うじて勢いはつけられた。必死にフォースを纏い体を浮かせる。

途中で失速し落ちかけた瞬間、下から強い力が彼を押し上げ無事に崖の上に着地させた。

僅か5秒ぐらいの間のことだったが、ガレンにとって永遠とも思える長さだった。

心臓の鼓動が激しく、安堵から脱力感が生じ、しばし跪いたまま呼吸を落ち着かせる。

(そうだ、オビⅡワンっ!)

と左に視線を移した途端、ガレンの顔は凍りついた。

オビⅡワンはうつ伏せに倒れたまま、ぴくりともしない。崖へと差し出された右腕からは相変わらず血が滴り落ちている。

「オビⅡワン・・・?」

恐る恐る問いかけた。

しかし、少年は全く動く気配がない。動く気配がないどころか・・・(もしかして、まさか? オビⅡワン、死——)

気が動転し頭が真っ白になりパニックに陥りかける。

ガレンは慌てて立ち上がろうとして、でも、途中で断念せざるを得なかった。

ブラスターの冷たい銃口が、彼の右こめかみに当てられていたからだ。

「おっと動くなよ」

ブラスターを構えたまま男が言った。

どこにいたんだ?もしかして、シャトルの中に隠れていたのか? 気配に全く気づかなかった。それほど頭の中が真っ白になっていたということだろう。

(どうするっ?どうしようっ?)

ジェダイの訓練を受け、パイロットとしては類希なる才能を開花し

ているガレンとて、さすがに実践は少ししか行ったことがない。

こんな時、どうするんだ？こんな時、オビⅡワンだったら・・・。
ガレン、落ちついて

ふとオビⅡワンの声が聞こえた気がした。気のせいかもしれない。
だが、それによって急速にガレンは気持ちいが冷静になるのを感じた。
跪いていることをいいことに、ガレンはさり気なく左手を地面につ
けた。

そして、フォースを使って離れた所で微かな物音をさせる。

「!?」

男が気をとられたその一瞬。ガレンは行動を起した。

左手に重心をかけ素早く右足を伸ばしながら、左手足を軸として体
を沈めたまま回転させる。

その反動で右足を男の膝の裏側に叩き込んだ。

「うっ!?!」

男は余りの衝撃で膝から地面に崩れ落ちる。

ガレンは男の手から零れ落ちたブラスタをすくい上げ、失神モ
ードに素早く変えると光線を放った。青白い光が男を包み声もなく倒
れる。

「これで全員か・・・」

安堵の吐息を漏らした瞬間、足元の地面を光線が鋭くえぐった。

「!?」

緊張して身構えると、滝の反対側にあの男が立っていた。

割腹の良い口髭を生やしたその男は、少年を脇に引き寄せブラ
スターをこちらに向けていた。少年の瞳には恐怖の色が浮かんでいる。
逃げきれなかったようだ。

「動くな。そのブラスタを捨てろ」

だが、ガレンには自信があった。あの男が発射する前に、自分の
放った光線があつた男を貫くだろうという自信が。

意に介せずブラスタを構えた。少年が傍にいたが失神モードに
なっている。巻き添えをくらっても気を失うだけだ。冷たいかもし
れないが、この場を収めるにはこれが一番良いはずだ。

ひるむことなくブラスタターを構えたガレンに男は驚いた表情を見せると、今度は脇にいた少年の頭にブラスタターを突きつけた。

「これでもブラスタターを捨てないつもりかっ!? この子供がどうなってもいいのか」

先ほど地面を穿った光線から考えれば、あの男が使っているブラスタターのモードはどう見ても失神^{スタン}では有り得ない。

軽く舌打ちすると、ガレンはブラスタターを滝壺目がけて投げ捨てた。

銃は水煙上がる渦の中に消えていく。

「それでいい」

男はほくそ笑みながらガレンにブラスタターを向けた。

「そこまでだっ!!ラルメード!! 我々はオルデラン国家保安局。誘拐及び殺人未遂の疑いで逮捕する」

宙に浮く大型のシャトルから放たれた輝くライトが辺り一面を照らす。

突然の眩しい光に男が両手で視界を覆った瞬間、隣りにいた少年は影も形も消え失せていた。

何台かのシャトルが猛スピードで走ってきたかと思うと、次々と急停車する。

開け放たれたハッチから、何十人も暗赤色を基調とした制服を纏った軍兵が降りてきて、男を囲みブラスタターライフルを向けた。

男は周りを見渡し観念するとブラスタターを足元に放り投げ、しぶしぶ両手を挙げた。

ガレンはともかくにもオビワンに駆け寄った。

しかし、手を差し出すことに躊躇いを覚えた。どうしよう、もし……。

そこへクワイガンが走ってきた。

先ほどの一瞬で神業の如く少年を無事保護したジェダイ・マスターは、少年を執事に預けると、弟子達の様子が心配で駆けつけてきたのだ。

「マスター・ジンっ!!オビワンが、オビワンが……っ!!」

ガレンは安堵と今にも泣き出しそうな入り交ぜになった表情を見せる。

その顔とオビⅡワンの姿を視界に見とめると、クワイⅡガンは心臓が鷲掴みされたような気がした。

だが、あくまでも顔には出さず、彼は静かにオビⅡワンの傍に寄るとそつと抱え起した。

血の気の失った顔。固く閉じられた瞼。

クワイⅡガンは自分でも手が震えるのを感じながら、パダワンの首筋に指を当て脈を確認した。微かに脈打っている。彼はホツとした表情を浮かべた。

「大丈夫だ。オビⅡワンは生きている」

途端、ガレンがパツと顔を明るくさせた。

しかし、クワイⅡガンは樂觀してはいなかった。

「だが、危険な状態だ。早く血を止めなければならぬ」

すかさず右腕の傷に両手をかざすとジェダイ・マスターは目を閉じ、ただ一点に全神経を集中させた。傍らにいたガレンも真剣な眼ざしでそれに倣い、両手をかざした。

暖かい流れに乗って漂い、まるで空に浮かんでいるようだ。

体全体に感覚はないが、何故かその暖かさは感じられた。そして、それが彼を癒してくれているということも。

断続的に続いていた右腕の痛みもほどなく消え、体に温かみが戻ってくる。

オビⅡワンはゆっくりと目を開けた。全身を取り巻く流れに促されるように。

「オビⅡワンっ!!」

声の方に顔を向ける。そこに嬉しそうに微笑む友の姿を見とめた。

「・・・ガレン、無事だったんだ・・・」

心から安堵の声を漏らす。

「君のおかげさ。ありがとう、オビⅡワン」

真剣な響きを感じさせながらガレンが言った。

そんな友を安心させようとして上体を起こそうするが、力が入らず

もどかしそうにしている弟子に気づくと、クワイⅡガンは彼の背に手をあて優しく起こした。

「マスター……来てくれたんですね……」

途端、ガレンは抱きついた。一瞬、驚いた表情を浮かべるオビⅡワんに

「君が死んじゃったかと思ったよ……」

肩に顔を埋め低い声でガレンが呟く。その声に微かに震えが混じっていると感じるのは気のせいか。

少年は左手を優しくガレンの背に回し軽く叩いた。

「おおげさだな、ガレン。僕は大丈夫だよ」

苦笑しつつ応えるオビⅡワんに、ガレンはポツリと言った。

「君は……実は強いんだな」

オビⅡワンは笑うと言葉を返した。

「君も結構繊細なんだな。繊細というか優しいんだよ」

思わずガレンは顔を上げ呆気にとられたように友を眺める。先刻、自分が告げた言葉。そのまま、そっくり言い返されるとは。

二人はしばらく見つめ合った後、クスクスと笑い始めた。

笑い合う二人に、クワイⅡガンは溜め息を漏らしつつ苦笑するのであつた。

そんな時。

「あの……」

声がおずおずとかけられ三人は顔を上げた。

執事に連れられ、先ほどの少年がそこには立っていた。

何かを言いたそうにしているが言葉にならず、もじもじとしている。

「坊ちやま？」

執事の声に促されてついに少年は口を開いた。

「……ごめんなさい。助けてくれてありがとう」

オビⅡワンはニッコリ笑うと右手を差し出そうとしたが力が入らず、仕方なく左手を差し伸べた。

少年は一瞬驚いたが、引きつった笑顔を見せると彼も左手を差し出

した。

お互い握手を交わす。

「君も無事で・・・良かった・・・」

緊張の糸が切れたからだだろうか。

急にオビⅡワンの手が離れ地面に力なく落ちた。上体がゆらりと傾いだかと思うとクワイⅡガンは急いで抱きかかえた。

「早く、シャツルを!!」

ジェダイ・マスターの緊迫した声に急かされるように、執事が慌てふためいて待機しているシャツルを呼びに行く。

一人取り残された少年は不安な面持ちで、所在なさげに夕暮れの中で立ちすくんでいた。

第6話 一件落着の後

「マスター……」

「気づいたか？」

医療センターメデイの浮遊寝台フロート・ガーニに横たわっていたオビⅡワンは、左手でゆっくりと鼻と口を覆っている酸素マスクを取り外そうとした。

それをクワイⅡガンは優しく押し留める。

「まだつけていた方がいいだろう」

「僕は……？」

「出血による貧血状態だな。適切な処置は済んだから、寝ていれば直に良くなると医療ドロイドが言っていたぞ」

道理で頭がクラクラする訳だ。オビⅡワンは視界をはっきりさせるため目をぎゅつと強く瞑ると再び開いた。

「今は何時頃ですか？」

「もう昼近いと思うが」

聞いてオビⅡワンは弱々しく微笑んだ。

「また……寝過ぎしてしまいましたね」

クワイⅡガンは途端に破顔し、目を細めて言った。

「そんなことが言えるのなら大丈夫だろう」

「……ご心配をおかけしました」

「お前が倒れた時、最悪な状況が頭を過ぎって心臓が止まりそうだった。かなり慌てたぞ」

師は真剣な表情を浮かべ弟子をじつと眺める。

自分の大切な者が危険にさらされることは、自分の命を危険にさらすより辛いことだと言った、総督の気持ちが変わったのかもしれない。

オビⅡワンはえっ？といった顔で見つめ、それからそこまで心配してもらったことに心底から嬉しそうな笑みを浮かべた。

が、一瞬のちにクワイⅡガンは言葉を続けた。

「ガレンがな」

言って口の端をニヤツと歪める。その様子はまるで、くるくると変

わるパダワンの一挙手一投足を面白がっているようにも見えた。

聞いて、今まで沈黙したまま後ろから状況を窺っていたガレンが慌てて口を開いた。

「マスター・ジンっ！それはあなただっけと同じでしょう！」

さも心外など言った風な顔をして真剣に言い張っているガレンを見て、オビⅡワンは思わず吹き出した。そんな彼の様子にようやくホツとしたのか、クワイⅡガンとガレンは顔を見合わせて微笑む。

「何はともあれ元気になって良かった」

溜め息をつきクワイⅡガンは言った後、弟子をいつになく真摯な眼ざしで見つめ、再び言葉を紡いだ。

「だが、オビⅡワン？これからは無謀な行動は慎むのだ。いいか、勇気と無謀は違う。心から正しいと信じて思い切った行動を取ったとしても、周りの状況が良く見えていて、しかも心が平静な状態での行動は勇気と呼べるが、周りの状況が良く見えず不安を抱えたままの行動なら無謀となる。そして、無謀はいつも危険と隣り合わせだ。私はお前と別行動を取った時、いつも心配になる。別行動を取っていても私が安心してられるように、お前にはよくよく考えて行動をして欲しいのだ。わかるか？」

「・・・はい。すみません、今後は気をつけます」

「わかればよい。では、ゆっくり休むんだぞ」

クワイⅡガンは言い終わると部屋を出ようとした。

「マスター？」

訝しげに問うオビⅡワンに、彼の師は

「私は総督にお前の容体を伝えに行く。あの方も随分と心配しておられたからな。それにガレンがお前に話があるそうだ」

「ガレンが？」

それからガレンに向き直る。

「ガレン —— ほどほどに、な」

「はい」

そして、ジェダイ・マスターはそつと部屋から出ていった。

沈黙が訪れた。

「話って何？」

酸素マスクを取りながら、気まずい雰囲気にならずに耐えきれなくなつてオビⅡワンは訊ねた。

促されてガレンは言葉を発した。

「……ごめん。それからありがとう」

「僕こそ。君がいてくれて助かったよ」

ガレンは俯いていた視線を上げオビⅡワンを見つめると、意を決したように口を開いた。

「……実のこと言うと、ほんとに君が羨ましかったんだ。偉大なマスター・ジンのパダワンになつた君が」

聞いてオビⅡワンは寂しそうな顔をし、一瞬芽生えた内心の不安を押し殺しながら、あくまでもそれと見せぬよう明るく悪戯な笑みを浮かべて応えた。

「農夫になりそうだった僕がパダワンになつてしまったから？ マスターが気まぐれで僕を選んだんじゃないかって思ったでしょ？」

「いや……」

咄嗟に否定したが、ややあつて溜め息をつくると再びガレンは言った。

「うん。気まぐれというか、成り行き上で師弟の関係になつたのかなと思つてた。でも、実際は違つたんだね。君の闘いを見て思った。君はもう立派なジェダイだよ。マスター・ジンはそんな君の素質を見抜いていたんだ」

今度はオビⅡワンが溜め息をつき、顔を天井に向け消え入りそうな小さい声でポツリと言う。

「そうとも限らないよ……よくわからないんだ」

「え？」

そして、何事もなかつたかのように顔をガレンに戻すと微笑む。

「まだまだ僕だつて修業は足りないよ。学ぶべき所はいっぱいある」

ガレンは窓の外を眺めた。医療センター^{メディ}から見える景色はまた格別に美しかった。この街の至る所にある噴水がここでも正面に覗える。

「ガレンは重い口を開いた。」

「僕も来年には13標準歳になる。それまでにパダワンにならなくちゃいけない。だけど、マスターになつてくれそうな人はまだいないし、焦りばっか出てきて」

「君だつたら大丈夫だよ。フォー스だつて使いこなせているし、それに何よりパイロットとしての才能もある。直になれるよ、パダワンに」

「・・・だといいいんだけど」

「そうか、それで悩んでいたんだね」

「うん」

オビIIワンは悩める友に力強く微笑んで言った。

「ガレン。君は言つてくれたじゃないか、僕が農夫として送られる時に。僕は、『パダワンになるということが、誰にでも重要な意味を持つ訳ではない』と君が言つてくれたあの言葉に、すごく勇気づけられたんだ。まだ時間はある。ジェダイとして修行に励んでいれば、いつかきつと認めてくれる人が出てくるはず。それに・・・僕としては、君が何になつていようと、どこにいようと友達だよ。それだけは変わらない」

「何になつていようと?どこにいようと?」

「そうだよ」

表情に明るさが戻る。ガレンは感謝の言葉を述べた。

「うん・・・ありがとう」

オビIIワンは左手を伸ばすと差し出した。ガレンも左手を伸ばす。

二人は微笑み、固い握手を交わした。

暮れなずむ日の最後の煌めきが彼らを優しく包んでいた。

その後、しばらくしてガレンは病室を後にした。

自分の負の部分の友に話したことにより幾分吹っ切れた気持ちで。足取りも軽やかに。

(ありがとう、オビIIワン)

今はゆつくりと眠る友に心の中で呟いて、彼は静かに通路を歩いていった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

空が藍色に染まるころ、オビⅡワンは病室を離れた。

先ほどよりは若干顔色も良くなり、ふらふらせずとも歩けるようになったからだ。

心配げな医療ドロイドが隣りを歩きながら、苛立ち交じりの口調で呟く。

「本当だったらもう一日、二日ぐらい入院してほしい所なんですよ。それなのに貴方ときたら、すぐに退院するなんて……。血圧は安定してきましたが、まだ無理は禁物ですよ。無理は」

「わかっています」

苦笑を顔に滲ませながらオビⅡワンは応えた。

「全く無茶な人ですね、貴方は。もうちよつと出血がひどかったら危険だったんですよ。こんな平和な街で何をどうしたらあんな大怪我になるのか……。料理でもしていたんですか？それとも、工作でも？どちらにしても、今度、刃物を使うときは気をつけてくださいね。それから——」

総督が事件をあまり表沙汰にしなかったせいか、ドロイドは少年が怪我した理由を知らないらしい。かなり勝手なことを言っている。

オビⅡワンは笑いを堪えるのに必死になった。

どうしてこのドロイドは良くしゃべるんだろう？話し相手がいないのだろうか？

もし、マスターにこんなペラペラしゃべるドロイドがつきまತ್ತたら、あの人はどんな反応をするだろう？無視するかな？困惑するかな？

考えれば考えるほど、笑いが込み上げてくる。

「聞いているんですか？」

「聞いてます」

辛うじて声を出すか、笑いで震えているのは致し方ない。

医療ドロイドは呆れたといった顔つきで（ドロイドにそんな表情があればの話だが）

「仕方のない方ですね。では、お大事に、オビⅡワン・ケノービ」

と言い放つてステーションの方へ去っていった。
笑いを堪えるのに苦労しつつオビⅡワンは、ふと医療センターメデイの入り口の外で噴水を眺めている二つの人影を見つけた。

すぐさま真剣な顔に戻ると談笑している人影に近づく。

「マスター。ガレン」

呼びかけて

「ご心配をおかけました」

とはにかんで言った。

二人は噴水から目を離すと振り返った。ジェダイ・マスターが問いかける。

「もう大丈夫なのか？」

「はい」

クワイⅡガンは穏やかに目を細めた。

「マスター。あの・・・、シャトルを追っていた時、スピーダ・バイクを通りにいた方から借りました。そのバイク・・・」

「その件だったらガレンに聞いた。総督に申し出たら、すぐにその人物を探し出し、より性能の良いバイクを進呈するとおっしゃっていました。また、ブラスターのこともパグェスに伝えるつもりだ」

「ありがとうございます」

そこへ、彼方から背の高い男性と優雅な服を纏った女性が歩いてきた。

気づくとクワイⅡガンは彼らに道を譲る。

男性がオビⅡワンを見止めると開口一番聞いた。

「君がオビⅡワン・ケノービだね？」

「はい」

「あの子を助けてくれてありがとう。心から感謝したい」

「いいえ、当然のことをしたまです。あの・・・貴方は？」

「ああ、言い忘れていたな。私はこのオルデランの総督ノマデイ・オーガナ。そして、これが妻のサレフィだ」

女性が微笑みつつ静かにお辞儀をした。

オビⅡワンも慌ててお辞儀を返す。

「もう怪我は大丈夫なのか？」

「ええ、良くなりました。それより式典の方は？ここにおられても大丈夫なのでしょうか？」

「式典は無事滞りなく行われた。今は1標準時間後に行われるパーティの準備を行っている所なのだよ」

安堵し、総督はクワイールガンの方へ向き直る。

「マスター・ジン。貴方はいい弟子を持ちましたね。本当にありがとう」

「ただジェダイとしての務めを果たしたに過ぎません」

控えめにクワイールガンは言葉を返す。

総督は微笑みサレフィと顔を見合わせた後、きっぱりと決意を込めて言った。

「しかし、この件で私は心を決めました。もし、私達に子供ができなかったら、あの子を養子にし、成長したあかつきには総督に推薦しようと思います」

「それは、楽しみなことですね」

クワイールガンの言葉に総督も頷く。

「あの子も、我が俣など言わず、これからは素直に勉学に励むと言っています。これも貴方がたのおかげですよ」

オビールワンは、総督と夫人の向こうに佇むあの少年の姿を見つけた。

失礼にならないよう総督にお辞儀をすると、歩いて行って笑いかけた。

今度は堂々と少年は口を開いた。

「大丈夫？」

「うん。君こそ大丈夫だった？」

少年は心からの言葉を述べる。

「・・・本当にありがとう。君達と友達になりたかったんだ。近くに同じ年頃の子がいなくなっても、こんなことに巻き込まんじやっただ・・・」

「気にしてないよ。いい友達になれると思う」

ニツコリ笑うオビⅡワンに少年は顔を輝かせる。

「本当に？」

「本当に。君の名前を覚えてくれるかな？僕はオビⅡワン・ケノービ」
「僕はベイル。ベイル・アンティルス。よろしくね」

そんな二人の様子を横目で見ながら総督が嬉しそうな笑みを見せる。

「貴方がたにはなんて感謝して良いやら。本当にありがとうございました。どうですか？パーティにご一緒しませんか？」

「折角の申し出、誠にありがたいのですが、私達はこれにて失礼させていただきますよ。弟子の調子もまだ完全ではありませんから」

「そうでしたね。あの少年にも再度、お礼を伝えておいてください」

クワイⅡガンは微笑み深々とお辞儀をし、ガレンを連れてオビⅡワンの元へと向かった。

少し離れた王宮から施政10周年を祝う美しき花火が上がり、夜空を彩り始めた。

第7話 増えた同行者

一行がく Winged House に近づくと、船の最終チェックを行っていたパグエスが皆を出迎えた。

「ガレン、オビワン、お帰り。マスター・ジェダイ、お帰りなさい」
そこへ

「皆様お帰りなさい」

突然、別の声が響いた。

ガレンとオビワンは顔を見合わせ、それから揃ってパグエスの後ろを覗き込む。

「あ、ドロイド、買ったんですね」

ガレンの嬉しそうな声に呼応するようにドロイドがその滑車を使って前に進み出た。

高さは1m程。一見、形は宇宙船乗組用ドロイドに思える。

丸い胴体に滑車を使って移動するなんてそのものだ。

しかし、両脇には小さめの腕が伸び、胴体の上、細い首の先にお椀を伏せたような形をした頭が乗っている。頭の真中、ちょうど顔と思しき場所には、横に細長い四角をした黒いへこみがあり、その中を光学センサーが赤い光を放ちながら右へ左へ絶えず動いていた。

全体的にはメタリック・シルバーを基調とし、所々モス・グリーンで彩られている。

今までに見たこともないようなドロイドだった。

「これは何のドロイドなんですか？」

というオビワンの問いに

「店の主人は多目的ドロイドと言っていたが・・・」

「初めまして。私はJ-8RE。使える言葉は300万語に及び、宇宙船操縦の補助・修理もお手の物です。あと皆様のお世話もさせていただきます」

まじまじとドロイドの姿を見ながらガレンが口を挟んだ。

「別に世話はいいいけど、初めてこんなドロイドを見たよ」

「このドロイドを製造していた会社は、今は無くなってしまったから

ね。今では探しても見つかりにくいドロイドらしい。ただ、店の主人が癖があると言っていたが」

「癖？」

「人に近い行動を取るそうさ。だから、時々ドロイドに思えないことがあると。それから何でもそつなくこなすが、中途半端なこともあるらしい。それで型番のJから『Juvenile』若い・未熟なく』ドロイドとも呼ばれるそうさ。他にも何かいろいろと店主から聞いたが・・・忘れてしまったよ」

パグエスにはにかんだ。

ガレンがふと感想を漏らす。

「ふうん。なんか変なドロイドだね」

「ひどいです・・・」

J―8REは傷ついたように言葉を発した。

「でも、結構かわいいと思うけど」

オビⅡワンの慰めの言葉に、J―8REは瞬時に反応して彼の元へ向かった。

「恐れ入りますが、貴方様のお名前は？」

「え？僕？オビⅡワン・ケノービだけど・・・」

ドロイドはセンサーで彼の姿形、声紋を全てメモリーにインプットした。

「オビⅡワン様ですね。今後ともよろしくお願いします♪」

嬉しそうに話すドロイドに、オビⅡワンは困惑の表情を隠しきれない。

「僕の名前を覚えても・・・。そうさ、ガレン、君こそ名前を覚えてもらわないと。これからしばらくは一緒に飛ぶんだし」

「そうだね」

ガレンが近寄るとドロイドは急いでオビⅡワンの背後に隠れた。

「ちよ、ちよっど？」

慌てるオビⅡワンにJ―8REはきつぱりと応える。

「この方は先ほど私をいじめました」

「ガレン、謝った方がいいと思うよ。このドロイドがへそを曲げたら、

君が帰り、あの船を操縦できなくなるかもしれないからね」

悪戯っ子のように目を輝かせているオビⅡワンを見てガレンは苦笑すると、ドロイドに謝った。

「ごめんごめん。きつきは言い過ぎた。僕の名前はガレン・マルン。OK?」

ドロイドは機嫌を直したらしく前に出てきて、ガレンのデータをインプットした。

「オビⅡワン様の次にインプットしました」

「え〜っ? どうしてオビⅡワンの次? オビⅡワンは船のお客に過ぎないのに」

「それは僕の方が —— 性格がいいからだよ」

ニツコリ笑うオビⅡワン。

「言っただな?」

笑いながらガレンはオビⅡワンの頭を小突こうとする。

それをオビⅡワンはドロイドを盾にしながらかわてていく。

戯れる二人の間でドロイドが慌ててぐるぐると頭を回していた。

「帰りも賑やかになりそうだな」

両腕を組み苦笑いを浮かべつつクワイⅡガンは言葉を漏らした。

近寄ってきたパグエスが同じく微笑み応える。

「おかげさまで。賑やかなのは苦手ですか?」

「たまには良からう」

「そうですね」

二人は少年達を見つめた。慈愛の眼ざしで。

クワイⅡガンは弟子の活き活きとした表情を久しぶりに見たような気がした。オビⅡワンもまだ子供なのだと改めて思い起こされる。ガレンと出会ったことは、彼にとって良い気分転換になったことだろう。

クワイⅡガンは、今この瞬間だけは、オビⅡワンをジェダイではなく、ただ一人の少年 —— 其処彼処にいるごく普通の13標準歳の少年として解き放つことを、自分に許した。

「マスター、そろそろ出発しませんか?」

走ってくるなりオビⅡワンがそう言った。

クワイⅡガンはその頭を軽く叩く。

「そうだな。そろそろ行くとしようか」

「捕まえたっ!!」

ガレンがオビⅡワンに飛びつく。

「わっ」

「ここら、お前達。オビⅡワンはまだ本調子ではないんだぞ」

たしなめるように声を出すパグエス。しかし、その目は笑っている。

忍び笑いを漏らすとクワイⅡガンはオビⅡワン、ガレンの頭に手を乗せて

「気は済んだか? まだやるようなら置いていくぞ」

二人は口を揃えた。

「もう気は済みましたっ」

クワイⅡガンは目を細めると<Winged House>に向かって歩いていった。その後をオビⅡワン、ガレン、J-8REが慌てて続く。

「ね、オビⅡワン。J-8REって言いにくくない? 愛称を考えようか」

「そうだね・・・J E i g h t R Eだから・・・ジェリーってどう?」

「いいねっ、それ」

その時、無言で二人の会話に耳を傾けていたJ-8REがそつと声を出した。

「ジェリーですか?」

「気に入らない?」

「いえ、素敵な名前ですな♪ 気に入りました♪」
うつとりと応える。

ドロイドらしからぬその反応に二人は一瞬お互いの顔を見つめた後、腹を抱えて笑い出した。

二人の笑い声が、花火の彩る澄み切った夜空にいつまでも響いてい

た
—

E
n
d

(2000年頃執筆)

外伝「Dark Fear」（復讐編）
プロローグ

「時は来た」

発する傍から声は、凄まじい風に飛ばされ闇に消えていった。

眼下には、星を散りばめた如く眩い光が見渡す限り絨毯のように広がっている。それはまるで宙に浮き、銀河を足蹴にしているような錯覚を起こさせて、かの者は薄く笑い声を響かせた。

纏うローブが強風に煽られ、黒き翼と見まごう如く。その姿はまるで闇からの使者。

「今、恐怖の幕が上がる。一握りの観客に捧げる舞台だ。招かれたことを光栄に思うがいい——」

影は言い放つとクツクツと含み笑いを漏らした。徐々に激しくなるその笑い声は崩壊の序曲を思わせ、暗闇をも震撼させた——

☆☆☆☆☆☆☆☆

軽やかに跳躍しとんぼ返りをする。レーザービームが足元を穿つた。

着地しぎま手首を返すと、右横に止めたライトセーバーがレーザーを弾き飛した。

生き物や人物、ドロイドなどと相手をするより、目にも止まらぬ速さを持つ細い光線であるレーザーを、確実に見極め弾くことは難しい。

ただ弾くだけではなく、返したレーザーを相手に当てるとなると尚更だ。セーバーを止めた位置により弾かれた光弾の飛んでいく方向が変わるからだ。

フォースと一体になればより易しくなるとは言っても。

ジェダイ・パダワン、オビワン・ケノービは目隠しをしたまま訓練用リモートシーカーのレーザー攻撃をかわし、かつ撥ね返しながら、自らに闘いにおける緊張感を強いていた。

（何故、こんなにも必死になるんだろう・・・）

心中に湧き出る不安を封じ込めるかの如く少年は頭を強く振ると、後方にジャンプし体を捻りながら飛び降りる。

そのままセーバーを中段に構え、それから流れるような一連の動作で光刃を左上で止めた。弾かれた2発のレーザー弾がシーカーを掠めて後方へと消えていく。

シーカーが唸りを上げた。それにより20標準分が経ったとわかる。タイマー操作されたシーカーの攻撃がより強力となる頃だ。

オビIIワンは唾を飲み込み攻撃に備えた。表面は冷静を装っているが、何故か落ち着かない。

(今朝、また、あんな夢を見たからかな・・・)

彼は再び頭を振った。

(いや、今はこれに集中しないと)

不意に少年はシーカーがずつと沈黙していることに気づいた。

(壊れた・・・?)

様子を見ようと目隠しを外そうとした瞬間、突然、体が金縛りにでもあつたように動かなくなった。冷たい空気が纏わりつくように周囲に漂い、急激に恐怖の波が襲いかかる。

体を少しでも何とか動かそうとした、まさにその時。

シーカーから強力なレーザーが放たれ、真っ直ぐにオビIIワンを貫いた――

<前編>

第1話 ゆくえ知れず

／／マスター・・・ッ／／

瞬間、頭に響いた声は現れた時と同じく突如、消え去った。

長身のジェダイ・マスターは聖堂内の通路でピタリと歩みを止める。

言い知れようもない不安が鎌首をもたげた。

／／オビワゴン!?!／／

だが、パダワンのフォースを感じることはできなかった。微塵も。

——そこに広がるは恐ろしいほどの無。

ジェダイ・マスター、クワイガン・ジンは急ぎ訓練室に向かった。

彼の弟子はそこにいるはずだった。オビワゴンが単独のライトセイバー訓練を申し出たのだ。

たまに任務から解放されたのだ、久しぶりにのんびりするのも良かろう?と言ったのだが、オビワ gon は首を横に振って頑なに訓練を望んだ。今思えば何かがおかしかった。

クワイガンは訓練室に辿り着いた。

入り口に佇み、明かりの消えた真つ暗な室内を不審に思いつつ声をかける。

「オビワゴン?オビワゴン!?!」

返るは沈黙のみ。

彼は部屋に足を踏み入れ、内部に向かい歩き出した。その爪先が何かに当たる。

拾い上げて確認するや、クワイガンの表情はこわばった。

それはオビワゴンのライトセイバーだった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

足早やに通路を歩いていく。

その何時になく眉をしかめ、緊張した面持ちで歩を進めるジェダイ・マスターに、行き交う者達は声をかけるのもためらわれるほど

だった。

ちようど授業が終わり休み時間に入ったらしい。生徒達が賑やかに歓談しながらたむろっている。

その横を滑るようにクワイⅡガンは歩き去った。

何歩か進んだ辺りだろうか。彼の背中に向かって

「……マスター・ジン？」

との幾分ためらいを感じさせる声がかかった。

しかし、思案にふけるクワイⅡガンは気づかなかつたらしく、足をとめる気配もなく曲がり角に消えようとしている。

「マスター・ジン、マスター・ジン!!」

再び声が放たれ、ようやく耳に届いたらしく立ち止まるとジェダイ・マスターは後ろを振り返った。三つの小さな影が彼に走り寄る。

「マスター・ジン、どうかしたのですか？」

カラマリ안의少女が大きな目をくりくりとさせて、見上げながら心配そうに訊ねた。

「君は……バントか。それにガレンとリーフト……オビⅡワンの友達だな？」

バント、ガレン、それにドレッツセリアンのリーフトはコクンと頷いた。

クワイⅡガンは溜め息をついた。

感情を表に出しているつもりはなかったが、必然的に滲み出る心配と不安は隠せなかつたらしい。

じつと見つめる少年達の眼ざしに促されるように、ややあつてジェダイ・マスターは重い口を開いた。

「オビⅡワンを見かけなかったか？」

途端に不安が伝染したらしい。

彼らは眉間に皺を寄せ代わる代わる顔を見合わせて、それから一斉に首を横に振った。

「いいえ、マスター・ジン。見ていません。何かあったのですか？」

代表してガレンが問いかける。

「オビⅡワンの姿が見当たらないのだ。訓練室でライトセーバーの訓

練を独りで行っていたはずなのだが。・・・見に行ったら姿を消していた」

「食堂に行ったということはありませんか?」

バントの言葉にクスツと笑いを漏らしガレンが続ける。

「オビⅡワンって結構食いしん坊だし」

だが、そんな和やかな雰囲気吹き飛ばすかのように、クワイⅡガンは重々しい口調で言った。

「いや、それはないだろう」

刹那、三人は顔に浮かぶ笑いを消して、不安そうな眼ざしを交わす。

しばらくしてバントが恐る恐る口を開いた。

「どうしてですか?」

ジェダイ・マスターは再び溜め息をついた。まるで今から自分が言おうとしていることを否定したいが如くに。

「訓練室に彼のライトセーバーが落ちていた。しかも、訓練室の灯りが故意に壊されていた。それともう一つ」

一旦言葉を切り、認めたくないように彼は軽く頭を振って言葉を続けた。

「オビⅡワンの相手をしていただけと思われるシーカーが、爆破されたように粉々になって床に落ちていた」

「何があつたのでしょうか?」

「わからないが・・・とりあえず、何か気づいたことがあつたら教えて欲しい」

「はい、マスター・ジン」

クワイⅡガンは辛うじて微笑みを見せると、ローブを翻し足早やに去っていった。

「何かのトラブルに巻き込まれたのかしら」

「オビⅡワンって巻き込まれやすいからな・・・」

「そうね。でも、あのマスター・ジンがあんなに張りつめた表情をしているなんて・・・嫌な予感がするわ」

ガレンに同意しながら、バントはジェダイ・マスターが去った方向に視線を走らせた。

決意をみなぎらせてガレンが口を開く。

「よし、僕たちも訓練室に行ってみよう」

少女も顔を輝かせた。

「手がかりが見つかるかもしれないわね」

友達の会話に、リーフトは小さな声で口を挟む。

「次の授業は・・・？」

「緊急事態なのよ、あとで補習を受ければいいわ」

「お腹も減ったし・・・」

バントとガレンは異句同音に叫んだ。

「それもあつ!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆

一縷の望みを抱き、クワイⅡガンはオビⅡワンの部屋に立ち寄った。

「マスター、どうしたんですか？」

と笑みを浮かべた少年がいることを、半ば望みながら。

しかし、彼の望みは全く絶たれた。

少年の部屋はカーテンに覆われ暗く、しばらく人が立ち入った形跡さえもなかった。

クワイⅡガンは深い息を吐くと、目を瞑り集中した。

フォース。

全てのものどものを繋ぐ、彼らジェダイの命の源でもあるこの力。

そのフォースを集め

／／オビⅡワン？／／

静かに問いかけてみる。微かな反応でさえ祈るように期待して。

だが、彼の思いに応える声もない。

クワイⅡガンは、今度はフォースをジェダイ聖堂内全体に伸ばし弟子の痕跡を見つけ出そうとした。しばし集中していたが、蒼き双眸を開き、頭を悲しげに振ると部屋をあとにした。

全く手がかりもなく、沈痛な表情を浮かべクワイⅡガンは自らの部屋に足を踏み入れた。

不意に冷たい空気が彼を出迎え、一瞬、顔がこわばる。それはすぐ

さま消え去った。

(今の気配は・・・?)

知っているようでもあり、知らないようでもある。

彼は今日、何度ついたかわからぬ溜め息を漏らした。

突如、その視線が緊張の色を見せる。

彼の目は、ベッドの枕の上、バイプロブレード振動ナイフで留められた一枚の紙に釘づけになった。その紙を奪うように枕からむしり取ると、クワイ||ガンは大腿で歩調を速めつつ部屋から立ち去った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「クワイ||ガン様。お久しぶりです」

「タールはいるか?」

目の見えないタールの世話をする専用ドロイド、2Jは部屋の入口で彼を受けつけ、

「いらつしやいます。タール様、クワイ||ガン様がお見えになりました」

と部屋の奥へと声をかけると、トコトコと歩いてクワイ||ガンを案内した。

クワイ||ガンの長年の友人であり美しきジェダイ・ナイト、タールはソファアーに腰かけ、入れたばかりのティを味わっていた。

「どうしたの?クワイ||ガン。珍しいじゃないの」

「タール様、クワイ||ガン様にもルシテイをお入れしますか?」

「ああ、入れてあげて。それから2J、ちよつと買い物に行ってきた欲しいんだけど」

「かしこまりました」

ソファアーの前にあるテーブルの上にもう一つカップを置くと、2Jは買い物へと向かった。

おしやべりなドロイドが行ってしまったことを音で確認し、ようやくタールはホツとした表情を浮かべた。

しかし

「どうしたの?何かあった?ま、座りなさいよ」

無言で佇むクワイ||ガンの様子に、目が見えないながらも只ならぬ

ものを感じたタールは自分の前を指し示すと身を乗り出した。クワイガンはタールに向かい合うように座ると、ルシテイを口に運び喉を湿らせてから静かに言った。

「実はオビワンが行方不明なのだ」

「あの子が？で、何があつたのよ」

「それが、良くわからない」

彼は今までの経緯を事細かにタールに話した。

聞き終わるとタールはソファアーに背をもたせかけ、見えない目でクワイガンの心を見透かすように口を開いた。

「で、クワイガン。貴方はどう思ってるの？」

「私は・・・彼が誘拐されたと思っている」

「その根拠は、落ちていたライトセイバーと粉々になったシーカーね。それで、その紙には何て書いてあるの？」

「読むから聞いて欲しい」

峻厳なる心は天にそびえ

慈愛なる思いは地を潤す

硬き基盤に逆らうは

唯一の生なる証なり

「クワイガン、貴方はこれがオビワンの行方を指し示す手がかりになると思っているのね」

「そうだ」

「どういう意味なのかしら」

「それを君にも考えてもらおうと思ひ、ここに来たのだ」

タールは腕を組み天井を見上げ、クワイガンは紙を穴が空くかと思ふほど覗みつけた。

第2話 謎の手がかり

「壊れたシーカーなんて見あたらないわね……」

「片づけられちゃったかな」

バントとガレンは訓練室を見渡した。修理ドロイドにより直された灯りの下に照らされるは、広い茶色の床。そこにシーカーの欠片さえもない。

「ほら、何もないよ。授業に行こうよ。あ、食堂でもいいけど」

そんなリーフトの言葉も聞こえないが如く、バントとガレンは目を皿のようにして、くまなく訓練室を調査していた。

「シーカーって1個しかないの?」

しばらくしてバントが訊ねる。

「いや、他にもあったと思うけど」

ガレンが応えた。

「ねえ? もしシーカーに何らかの仕掛けがしてあって、爆発したのだとすれば……」

「オビIIワンが仕掛けをしてあるシーカーを選ぶとは限らないし、他のシーカーにも手が加えられているかもしれないってこと?」

二人は素早く道具置き場に向かった。その後をリーフトがあたふたとついていく。

道具置き場にはシーカーが3個置いてあった。

それに手を伸ばそうとしたバントに

「ちよつと待って。何かあるかわからないから、すぐに触らない方がいいよ」

ガレンがすかさず止める。

「でも、どうやって調べるの?」

疑問を投げかけられ、思わず少年は考え込んでしまった。

「大丈夫、外には仕掛けはないよ」

突然リーフトが言った。

「どうしてわかるんだ?」

不思議そうにガレンが訊ねる。

「フォースで見たんだ。外側にはフォースの乱れがないからね。でも内側には・・・何かあるかも」

唾を飲み込み意を決するとガレンが言った。

「解体してみよう」

「大丈夫？」

「任せておいて、こういうのは得意なんだ」

ガレンは丁寧にシーカーを柵から下ろすと二人から離れてしゃがみ込み、ドライバーを使ってゆっくりと中央にある結合部分をこじ開けた。

そして、開いたと思った途端、すかさずシーカーから飛びずさる。

30標準秒ほど待ってみて異変が起こらないことを確認すると、ホツと安堵の溜め息を漏らしてから恐々と中を覗き込んだ。

その視線が一点で止まる。

「あつ、見て、これ」

「何？」

「こんな所に爆弾が組み込まれている」

「ば、爆弾っ!!?」

バントとリーフトは恐怖で固まった。

「・・・うん、でも、大丈夫そうだな。この中にあるスイッチを押さない限り、爆発しない仕掛けになっているみたいだ」

その一言で肩の力を抜いたバントは、逆にそれによって生じた疑問を述べた。

「けど、どうやってシーカーの内部にあるスイッチを押すの？」

「それをやる方法は一つしかないね」

そう言っただけでガレンは溜め息を漏らす。

「フォース？」

「・・・そう」

しびしびといった感じでガレンは認めた。ジェダイがこんなことするなんて考えたくはないけど・・・。

「まさかオビワンが押すとは考えられないし、・・・ということは、これを仕掛けた人はフォースが使えるってことなのっ!？」

「うん、そうなるね……。きつと爆発させたのは証拠を隠滅させるためだろう……」

三人は無言になった。ことの重大さをひしひしと感じる。

そんな沈黙を破るようにリーフトがポツリと漏らした。

「でも、こうやって、僕たちみたいに調べたらわかるよ」

「バレても気にしないってことなんだろうね、その人は」

「何か怖いわ……」

持っていたシーカーから顔を上げ、ガレンは言い放った。

「よし、このことをマスター・ジンに報告しよう」

バントとリーフトは真剣な顔で頷いた。

「ええ、早く伝えた方が良さそうね」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

タールは視線を戻した。そして、真剣な眼ざしを向ける。

その緑の光が縦に走り黄金に輝く美しき瞳には、感情の動きなど全く見えない。しかし、その両目は活き活きとしているように思われた。

彼女の様子にクワイガンは問いかけた。

「何かわかったのか？」

「この文章って良く考えると、クワイガン、貴方のことを指しているんじゃない？」
”硬き基盤”がジェダイ評議会を意味しているのならば

「私か？しかし、私を指して何の意味がある？」

「貴方に対する復讐とか」

「それは私も考えた。だが、もし単純な復讐を望むのであれば、私の部屋で待ち伏せしていた方が得策だろうか？部屋には入っているのだからな」

「逆にオビワンをさらって彼を……いえ、彼に危害を加えることで、貴方に対する復讐をするということもあるんじゃない？」

最悪な状況を口にしかけて慌ててタールは言い直す。

目の前にいるこのジェダイ・マスターが、メリダ／ダーンの一件で壊れた師弟の関係が修復して以来、どんなに弟子を大切にしてきたか

熟知しているからだ。

(それが一番恐れていることだ……)

「しかし、それならば、この紙を残す意味があるまい?」

クワイⅡガンは苦々しい思いを唾とともに呑み込み、強い口調で応えた。知らず知らず否定したい心情が出たのかもしれない。

タールは彼の気持ちを慮った。だが、ここで判断を誤る訳にはいかない。緊急の時こそ冷静に落ち着いて決断を下さねば。故にタールはわざと否定的な言葉を投げつけた。一つの意見より多くの意見を聞くことによつて、真実が見えるはずだ。

「これは単なる犯行声明で、手がかりとは違うんじゃないの?」

「いや、これは手がかりだ」

「根拠は?」

深い溜め息をつくときクワイⅡガンは視線を落し静かに応えた。

「こればかりは、フォースが告げているとしか言いようもない。私に対する悪意を感じるのだ。私をも巻き込もうとする深き暗い心を。この紙によつて私をおびき出そうとしているのだろう」

「無論オビⅡワンをさらうことによつてもね」

タールは一旦言葉を切り溜め息を漏らし、凍りついた空気を和めようとするかの如く、わざと悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「・・・貴方つて結構好かれてるわね、誰彼問わず」

「光栄だと思うことにしよう」

口の端を上げニヤリと笑うときクワイⅡガンも応えた。

だが、その笑みは一瞬のうちに消え去り、二人のジエダイは眉をひそめて再び物思いに耽り始めた。

突然、部屋のインターフォンが鳴り響いた。

「2J?・・・あ、いないんだったわ。ドアを開けるリモコンはどこかしら?」

タールは琥珀色の腕を伸ばし、手探りで身の回りを調べ始めた。(もうっ。こんな肝心な時に2Jはいないんだから。全く役にたちやしないっ)

彼女は自分が追い出したことは柵に上げ、プロトコルドロイドへの

文句を内心呟いた。

「私が代わりに出よう」

クワイⅡガンは立ち上がると、部屋のドアを開けた。

目の前には三つの人影。

「やはり、ここにいたんですねっ」

バントの声が飛び込んでくる。

「僕たち、気になることを見つけたので、マスター・ジンに、伝えよう
と思っ」

「ここに来ました」

走ってきたことにより息が上がって言葉が切れたガレンの後を継いで、リーフトが締めくくった。

「まあ、中に入りなさい。しかし、どうしてここに私がいるとわかったのだ？」

三人は室内に足を踏み入れ呼吸を落ち着かせながらしばらく喘いでいたが、ようやく息が整い始めたガレンが口を開いた。

「マスター・ジンを探している途中で2Jに会ったんです。その2Jが、マスター・ジンはナイト・タールの部屋にいらつしやると教えてくれたものですから」

「そうか」

クワイⅡガンは腕を組んで頷くと、タールのいる部屋に少年達を案内した。

「こんにちは、ナイト・タール」

口々に声を揃えて言う彼らにタールは微笑むと

「賑やかなね。賑やかなのは好きだわ。おしゃべりは嫌いだけど」

と2Jが聞いたなら卒倒しそうな言葉を口にした。

「それで、見つけたものとは何かな？」

クワイⅡガンは元いた位置に腰を下ろすと、少年達を促した。3人は顔を見合わせ、思い切ったようにバントが口を開いた。

「私たち、訓練室に行ってみたんです」

との言葉から始まりガレンやリーフトの話も交え、これらのことから導き出される推測を彼らは述べた。

その間、クワイⅡガンは合いの手や同意の言葉を挟んだだけだった。

「それで君達は、フォースを使う者がこれを引き起こしたと言うのだな」

「認めたくはありませんが」

ジェダイ聖堂内でフォースを使う者は、すなわちジェダイを意味する。

場は重苦しい雰囲気にも包まれた。

その沈んだ空気を断ち切るように、突如タールが話題を変えた。

「この紙の意味がわかれば、もっとちゃんとした手がかりを得ることができるんでしょうけど」

「紙って何ですか？」

不思議そうにガレンが訊ねる。

悩む頭が多い方がこの謎が解けやすくなるのではないかと思い、クワイⅡガンは彼らに紙を渡した。しばらく顔をくつつけるようにして紙を覗き込んでいた少年達だったが、リーフトが思いつくままをポツリを漏らす。

「・・・」硬き基盤 ってクツキーよりも硬いのかな？」

途端にバントとガレンが噛みつかんばかりに声を荒げる。

「リーフトっ!!あなた、こんな時につ!!」

「硬いに決まってるよっ!!」

呆れたという風に溜め息をつくくと、ガレンが言葉を続けた。

「基盤だからね。きつとブロックやパーマクリートみたいに硬いんだよ」

それを聞いて不意にクワイⅡガンの頭に閃くものがあった。

彼は静かに呟いた。

「意味する場所がわかった。ありがとう、君達」

怪訝そうに見つめ合う三人に微笑むと、クワイⅡガンは瞬時に真剣な眼ざしを窓の外に向ける。日の光に照らされながら、林立する建物が果て無く広がっているように感じられた。

第3話 囚われの弟子

小さく四角い、暗黒漂う、一筋さえ光の射さぬ部屋。

少年は膝を抱え座っていた。どのくらい時間が移り変わったかわからないこの部屋で。

ふうと溜め息をつき顔を膝の間に埋めると、心の静寂を求めフォースに手を伸ばす。

その時、急に彼はフォースの乱れを感じ、素早く立ち上がった。

今いる部屋の闇よりも暗く、邪悪なフォースを纏った者が部屋へと近づいてきている。

気配の訪れとともに、彼を取り巻く周囲の空気が濃厚に密度を増し重くなるようだった。

少年はだんだん息苦しくなってきた。背筋がざわざわしてくる。

フォースが危険を告げていた。

気配がドアの前で立ち止まった時には、真っ直ぐに立っているのも辛いほどだった。

音もなくドアが開いた途端、部屋の空気が暗黒に支配された。

ドアから明かりが漏れてきているはずなのに、依然として暗闇に包まれたままだ。いや、逆に闇が更に濃く深くなったようだ。闇にも濃さがあるとすれば——だが。

突然、少年は喉を強く締めあげられた。振りほどこうと喉元に手をやったが、そこには何もなかった。

（誰かがフォースで締めつけているんだ！でも、誰が!?）

彼は浅い呼吸を繰り返しながら考えた。

（ダークサイドに陥ちた集団——シスなんて、授業で習ったことがあるだけだし・・・）

（ブルック——彼のフォースには暗い小波がたつことはあったけど、それだけだ。それに・・・もう死んでしまった。僕の目の前で・・・）
喉が更に締めつけられた。

少年は必死に酸素を求めて喘ぎ、見えない力に対抗するが如くフォースに手を伸ばす。

だが、フォースは彼の指の間をすり抜け消えてしまった。
絶望が彼を支配した。

全身の血管が音を立てて脈打ち、頭が朦朧としてくる。視界の周りが黒く滲み狭まってきた。

(強い・・・ダークサイドのフォース・・・太刀打ち・・・できない)
そう思った瞬間、突如、暗闇に白い顔が浮かびあがった。
その顔を認識しようとしても、すでに思考が働かない。

茫然と見つめる少年の前で顔はニヤリと笑い、不意に崩れ始めた。
皮膚がどろどろと溶け落ちて骨が見えるほどになったが、口元の笑みは消えず凄みを増して更に広がった。

その顔が急に目の前に迫ってくる。
恐怖の声が喉元で止まり、少年は霞む目を見開いた。

どろどろと溶けつつある両手で少年の顔を挟むと、ほとんど骸骨だけになった顔が嬉しそうに言った。

「次はお前の番だ」

少年の頬は蒸気を発し溶け始めた

「うわあああ・・・」

叫び声とともにオビⅡワンは目を覚ました。

肺は空気を求めて喘ぎ、冷汗が全身を濡らしていた。思わず両頬に手をやり何もないことを確認する。

(また、あの夢・・・)

耐え切れずに目を瞑る。

ここ数日彼を悩ます悪夢。体が溶けていくあの恐怖。

(夢だ、夢なんだ。現実じゃない・・・)

落ち着かせるため自分に言い聞かせる。次第に鼓動は大人しくなり汗はひき始めた。

深い呼吸を数回しようやく彼は目を開け、しかし、恐怖で喘いだ。
部屋の中は真つ暗で何も見えなかったからだ。

まるで先ほど見た夢の中の部屋のように。

(あの部屋みたいに暗い・・・?)

オビⅡワンは再びドキドキし始めた心臓をなだめようとした。

(これは夢だ、きつと僕はまだ夢を見てるんだ)

深い息を吸い込み額に手を当て汗をぬぐうと、次第に気分が落ち着いてきて、溜め息と共に彼は手を横に下ろした。その指先に冷たい感触が走る。

恐る恐る手を伸ばし調べてみた。それはごつごつとした手触りする。

これは —— 石? 石の床?

不意にそれに気づきガバツと体を起こすと、途端、激しい目眩と強烈な頭の痛みに襲われた。起きていられないほどの目眩に倒れそうになり、思わず右手を床に着いて

「ぐっ……」

オビIIワンは激痛にうめいた。

痛み感覚により、ようやく彼は現実を把握した。

(これは……夢じゃない)

(何故こんな所にいるんだろう?)

冷たい石の床に横たわりながら少年は考えた。目眩の酷さに今は体を休めるしかなかった。

(頭痛と脳しんとう、右の二の腕の火傷……一体、何が?)

彼の思いは過去を遡る ——

ついにオビIIワンは、シーカー相手にライトセイバー訓練を行っていたことを思い出した。

(そうだ、シーカーが止まって……突然、僕は何かの攻撃を受けたんだ。それで飛ばされて、床に頭を思いつきりぶつけたような気がする……)

薄れ行く意識の中で辛うじて、少年はフォースを通して心の中で叫んでいた。／＼マスター!／＼と。

彼の声は師に届いたのだろうか?ここはどこだろうか?誰が彼を攻撃したのだろうか?そして、誰が彼をこの部屋に閉じ込めたのだろうか?

わからない。何も。全く。

痛みは癒されていた。

彼を取り巻くフォースが温かく救いの手を差し伸べている。床に打ちつけた頭に、そして、レーザーで焼かれた右腕に。

細胞一つ一つに波のようなフォースが浸透し、それは彼の心にも穏やかな暖かさを与えてくれた。

少年はゆっくりと体を起こした。

頭痛は治まり——ま、こぶはできただろうが——目眩もそれほどでもなくなった。右腕の痛みもズキズキする痛みから鈍いものへと変化していた。

ここにおいてようやくオビIIワンの思考は、部屋の中を調べてみることに思い至った。

明り取りにライトセイバーを使おうと何気なくベルトに手を伸ばし、彼は思わず息を呑む。

(ない！)

左腰の辺りを慌てて触ってみたがセイバーはなかった。焦って近くの床の上をもう一度探してみたが、やはりどこにもなかった。

不意に記憶が蘇る。

(訓練室で落したんだ・・・)

それしか考えられない。

オビIIワンは天を仰ぎ溜め息を深くついた。

だが、ここで、このままずっと意気消沈している訳にもいかない。

また、焦っても何の解決にもならないことは充分にわかっている。

そして、この、何も見えない状況でむやみに動き回るのもかなり危険だ。

少年は一度ゆっくりと深呼吸した。

目を瞑ってからもう一度深く呼吸をすると、自分の中にある静寂を見つけた。集中力を保ったまま、それからフォースを呼び込んで感覚を部屋の隅々にまで広げる。

どうやらそれほど広くない四角い部屋にいるようだ。

彼は立ち上がり、フォースの導くままにこぼことしている石の床を蹴くことなく、壁際まで歩いていった。壁に手が触れると、今度は手探りで調べ始めた。

四方の壁を手の届く範囲で入念に調べたが、わかったことと言えば、この部屋には窓はなく、一カ所を除いて全て岩壁で囲まれているということだけだった。

その問題の一カ所には滑らかなスチール製のドアがあったが、手をかけるところもアクセスパネルもなく、向こう側からしか開けられないようになっていた。

ロック機構は単純な物のようだが起爆装置が併設されており、正規の手順を踏んで解除しなければ爆発する仕組みらしい。しかも、起爆装置に繋がる配線はドア全体に広がっており、これでは例え今、ライトセイバーが手元にあつたとしても、ドアを焼き切つて脱出することなど到底不可能だ。

オビIIワンはドアを開けるのをひとまず諦めて、また部屋の中央辺りまで戻ると座り込んだ。

誰に連れてこられたにせよ、生かして監禁しているということは、彼から何か聞き出すか何かさせるか、とにかく生かしておく必要があるということだ。

そのうちここに来るだろう。

(・・・以前にもこんなことがあつた?)

オビIIワンは軽く頭を振った。思い出すのは後でいい。

今に集中しなければ。今できることをやるんだ。

いつ何が起こつてもすぐに反応ができるように、オビIIワンは頭と右腕を癒すことに専念し始めた。

第4話 暗黒面の恐怖

(どのくらい経ったんだろう?)

小さく四角い、暗黒漂う、一筋さえ光の射さぬ部屋。

少年は膝を抱え座っていた。どのくらい時間が移り変わったかわからぬこの部屋で。昼なのか夜なのか、目覚めてから何標準時間経ったのか、感知できぬこの部屋で。

ただ、かなりの時間が経過していることだけはわかった。

お腹が猛烈にすいているのだ。

オビⅡワンは小さく溜め息をついた。

(全く。こんな状況でもお腹がすくなんて・・・)

ふうと再び溜め息をつき顔を膝の間に埋めると、心の静寂を求めフォースに手を伸ばす。

その時、急に彼はフォースの乱れを感じ、頭を気づかいながら立ち上がった。

今いる部屋の闇よりも暗く、邪悪なフォースを纏った者が部屋へと近づいて来ている。

気配の訪れとともに、彼を取り巻く周囲の空気が濃厚に密度を増し重くなるようだった。

少年はだんだん息苦しくなってきた。背筋がざわざわしてくる。

フォースが危険を告げていた。

気配がドアの前で立ち止まった時には、真っ直ぐに立っているのも辛いほどだった。

(夢だ、あの夢みたいだ・・・っ!!)

今にもドアが開き、闇が忍び込み、浮かぶ白い顔がどろどろに溶ける。そして、彼の顔も――

心が激しい悲鳴を上げた。

部屋の後ろに下がりがかった。暗い気配から少しでも遠ざかりたかった。しかし――膝ががくがく震え足が全く動かなかった。一歩たりとも。

――自分はジエダイだ。

何度も言い聞かせた。

周りに暗く冷たい空気が纏わりつく。

――恐れに囚われるな。平穏を求めよ。

必死にその言葉にしがみつこうとした。腕で自分の体を抱え込み、冷たい流れから遠ざけようとした。

悲しみ、怒り、恐怖、絶望。それら感情が渦を巻き急速に心の中に忍び寄ってくる。

――フォースに心を委ねよ。

オビⅡワンはかき集めるようにフォースを呼び寄せると、彼を守る盾にしようとした。

だがそれは弱く、邪悪で強大な力に対抗するには余りにも弱く、彼は声にならない悲鳴をあげ続けた。

それほど経っていないのかもしれない。

しかし、オビⅡワンにとっては永遠かと思われる時間が過ぎ去ったあと。ドアの向こうの気配はやがてゆつくりと去り始めた。それとともに暗い邪悪なフォースの存在も薄れていった。

少年は呪縛から解放されたように弱々しくよろめき壁にもたれかかる、ずるずると床に崩れ落ちた。

心が無に占領されたかのようにだった。

去りゆく邪悪なフォースの持ち主が、彼を嘲り笑っているのが感じられた。耳の奥に、実際は聞こえないはずの甲高い笑い声が響いているような気がする。

だが、それに気を払う余裕もなく、少年は別の思いに支配されていた。

今度またあの暗い渦巻くフォースに囚われたら――

オビⅡワンは恐怖に震えた。心から。そして、目を閉じると微かに

囁いた。

「マスター……」

☆☆☆☆☆☆☆☆

There is no emotion; there is
peace.

There is no ignorance; there is
knowledge.
There is no passion; there is
serenity.
There is no death; there is th
e Force.

セピア色の景色。過去の記憶。

少年は聖堂の千泉室で腰を下ろし泉を眺めていた。

ふと深い溜め息を漏らす。

彼は先ほど、他の生徒に対しちよつとした怒りを爆発させ、そして、怒りを抑えられない自分に対して自己嫌悪に陥っていた。

「オビⅡワン?」

「マスター!」

彼の師は突然現れた。その表情は怒っているようにも悲しんでいるようにも見える。

オビⅡワンは目をそらせた。師を落胆させてしまった・・・悲しみが胸をよぎる。

「感情を表すことを恐れてはいけない、パダワン」

クワイⅡガンは静かに言った。

思いかけぬ言葉に弟子は師を見上げるが、口から出てきた言葉は否定的なものだった。

「しかし、ジェダイは感情を表してはいけないと聞きました」

「感情に呑み込まれてはいけないだけなのだ。感情は時として力となる」

「力に?」

「そう、人を慈しみ愛する心。人を支え救いたいという思い。これらも紛れもなく感情の一つだ。だが、ジェダイがこの感情を持っていることは不思議ではないだろうか?」

「はい、マスター」

「感情の制御は大切だ。しかし、必要以上に恐れてはいけない。また、必要以上に頼ってもいけない。わかるか?」

「・・・よくわかりません」

「いつかわかる時が来る。感情を恐れず、心を平穏に保ち自分の本質を見極める。そうすれば自ずとフォースがお前を導いてくれる。その時、もし、暗く悪しき心がお前と向き合ったとしても、光は決して消されることはないだろう」

彼の師は優しく微笑んだ。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

There is no emotion; there is
peace.

There is no ignorance; there is
knowledge.

There is no passion; there is
serenity.

There is no death; there is th
e Force.

もし、暗く悪しき心がお前と向き合ったとしても、光は決して消されることはないだろう

心の空虚さが徐々に埋められていく。

今やフォースは此処彼処にあふれていた。それは彼を癒し心さえも癒し、暖かく包んでいた。

オビワンは深い息を吐き出し、それから目を開けた。

その青く緑色をした瞳には決意がみなぎり、輝かんばかりの光を取り戻していた。

(ここから抜け出そう。何とかして)

それから、どのくらい経ったのだろうか。

遠くから足音が響いてきた。誰かが部屋に近づいてきている。

ひたすら頭と右腕を癒していたオビワンは、緊張して顔を上げた。心臓の鼓動が早くなる。

しかし、暗く邪悪な気配は感じられなかった。それは彼を安堵させた。だが、警戒は怠らなかった。仲間がいることがわかった今は尚更に。

足音はドアの前で止まり、しばらくして滑るようにドアが開いた。携帯用照明棒グロー・ロッドの灯りに照らされて、一つの影が立っていた。

暗闇にすっかり慣れていたせいかな、いきなり眩しい光に照らされ、直視することは全くできない。

影は部屋に入ると

「ほら、食事だ。ありがたく食べ」

低い声で言った。その声質で男だとわかった。

平べったい物が石の床に下ろされる。置いたと同時に男は部屋を去ろうとした。

オビⅡワンは慌てて叫ぶ。

「ちよつと待って！こんな真つ暗な中で食事なんてできません」

一瞬、男はムツとしたようだった。だが

「仕方ねえな、いいか？早く食うんだぞ？」

凄みを利かせて言い返すと立ち止まり、照明棒グロー・ロッドをかざして料理が乗っているトレイを照らした。

オビⅡワンはトレイに近づく間、素早く男越しに窺えるドアの向こうを眺めすかした。

中からは開けられない仕組みになっているから、外側に仕掛けがあるのだろう、ドアは開いたままであったが、その向こうには何一つ見えぬ暗闇がひたすら広がっていた。

何ら慰めを見ることができず、溜め息をつく少年はトレイを見下ろした。

深い皿に水っぽいかゆのようなもの、及び浅い皿には肉のようなものがポツンと乗っていた。そして、スプーンとフォークがその横に転がっている。

とても食欲をそそるものではない。

しかし、食べないより食べた方がまだマシだろう。ジエダイたるもの、いざという時、力を発揮できないのでは困るからだ。

警告を発していないフォースを信じ、彼はトレイの前に跪くと食事を無理矢理、口に運んだ。

抗議の声を上げ続ける嗅覚と味覚を無視して食べながら、オビⅡワ

ンは容器に特徴がないか密かに確認した。例えば珍しい容器だったら——彼が今いる場所を特定できるかもしれない。

だが、現実はそのなに甘いものではなく、器、スプーン、フォーク全て特殊^{デユ}プラスチック^{ラプ}でできたありふれたもので、少年をがっかりさせた。

且つ、食事の量もこれでは全然足りない。

オビIIワンはイライラしている男に向かって声をかけた。

「次は夕食ですよね？いつ来るんですか？これじゃ足りません」

男は途端、激怒した。

「お前は立場というものをわかっていないようだなっ!!食事をもらえるだけでもありがたく思えっ!!それに今のが夕飯だ。わかったか!？」

「今のが夕食なんだ・・・」

少年は小さな声で呟き、笑みを浮かべて立ち上がった。

そして、男に向かい合うと静かに言った。

「聞きたいことがあるんですが」

第5話 予期せぬ再会

浮揚車ホバーカーは、門前から少し離れた所にライトで周囲を照らしたまま停車した。

気の焦りを封じ込め沈思していたクワイーガンは、顔を上げ閉じていた目を開いた。その蒼き双眸には揺るぎ無き決意があふれている。彼は車の操縦士に向かい、落ち着いた声を放った。

「頼みがあるのだが」

「はい、何でしょう？」

浮揚車ホバーカーの操縦士が後ろを振り向いた。まだ若そうだが、一癖も二癖もある面構えをしている。

「しばらくここで灯りを消したまま待機していてくれ。この通信機コムリンクを渡しておく。君の力を借りることがあるかもしれない、その時はその通信機コムリンクで連絡する。そして——もし、私が2標準時間経つても帰って来なかったならば、ジエダイ評議会に連絡して欲しいのだが？」

無理難題をふっかけられた形となった操縦士だが、ジエダイという言葉に興味をそそられたらしく、そんな様子はおくびにも出さずに愛想良くニヤリと笑って応えた。

「いいですよ。しかし、割増料金になりますよ」

その軽い受け答えにクワイーガンは微笑むと

「よろしく頼む」

通信機コムリンクを手渡し、車の外へと足を踏み出した。

ここは惑星コルサントの、元老院議事堂やジエダイ聖堂がある政治の中枢から南方。

パーマクリートに覆われ、且つ、その上にも建物が続々と進出し天に伸びていくコルサントにおいて、ただ一ヶ所、緑に覆われている場所。

切り立つ峰は天にそびえ、降る雨を吸い込み大地を潤す。覆われた硬き地表に逆らって、唯一生命を感じさせるこの一帯。

マナライ山脈。

マナライ山を含むこの峰々の山頂は、樹木が少なく、所々荒れ果てた岩肌が見えながらも絶えず雪に覆われている。ここからの眺めは素晴らしく、超高層ビルが立ち並ぶコルサントの街並みを眼下に見おろすことができる。

また、この山の麓には100階建ての尖塔状の建物があり、その最上階にある、それこそ山に敬意を表して付けられた『マナライ』というコルサント一の最高級レストランからは、山々の頂上を見ることが出来る。このレストランは、透明スチールトランスパリスチールを通して絶景を楽しむことと料理の美味しいことで知られ、非常に人気が高く、ここで食事をするには何標準ヶ月前から予約をしなければならぬほどだ。

クワイⅡガンは今、このマナライ山の頂上から800mほど標高の下がった場所にいた。

彼の目前には朽ち果てた門が辛うじて立っている。そして、その向こうには、針葉樹林に囲まれた邸宅と思いき広い屋敷が崖を背にし、夜の闇に溶け込んでいた。

(ここだ、間違いない)

ジェダイ・マスターは真剣な眼ざしで屋敷を見つめた。

あの手がかりがマナライ山脈を指すのではないかと察した時に、聖堂の端末でこの地について調べてみたのだ。

検索のポイントは、人を監禁するに当たって最適なのは家だろうとの判断から

- ・ マナライ山脈近辺で、人が住まなくなつて久しい家。
 - ・ それなのに、この頃、人のいる気配がある家。
- の二点。

そして、情報端末の画面には一軒の屋敷が表示された。

この館の主はコルサントに住む、さる大富豪だったが、事業に失敗しこの別荘を手放した。しかし、売価が高値であつたため買い手がつかず、そのまま朽ち果てるに任せられたのだつた。

だが、この頃、その家に灯りがついてるのがしばしば見受けられると言う。

クワイⅡガンはフォースを伸ばし館の様子を窺った。

暗い邪悪なフォースが禍々しく渦を巻いて館を覆っている。その圧倒的な強さ、激しい暗黒の力に彼は眉根をしかめた。

これほどまで強大なダークサイドのフォースを操る者とは――

クワイⅡガンは微かな溜め息を漏らすと、再び全神経を集中しフォースで探ってみる。そして、ややあつて安堵の表情を浮かべた。暗闇に包まれて微かにしかわからないが、小さな光を感じたからだ。彼の弟子の。

オビⅡワンは生きている。

この事実にはジェダイ・マスターはホッと笑みを漏らし

／／オビⅡワン？／／

静かに語りかけてみる。しかし、この強いダークサイドのフォースに阻まれ、その声が届いたかは定かでなかった。

彼は気持ちを引き締め決意を瞳に表すと、館に向かった。

門から小径を歩き、巨大な両開きの扉の前に立つ。

すると、まるで彼が来るのを待っていたかのように扉がゆつくりと両脇に開いた。

クワイⅡガンは真つ暗な館内に足を踏み入れた。

それを合図にしたように部屋の灯りがともり、彼の背後で扉が音を立てて閉まった。

彼が今いる所は、入り口から入ってすぐ左右に大きく広がっているロビーだった。正面には二階へと通じる広い階段が真つ直ぐ伸びている。

「ようやく来たな。あんまり遅いから、あんたがああの無器用な少年を見捨てたかと思っていたよ」

不意に上から声がかかった。

クワイⅡガンは視線を移し、階段の踊場の上に人影を見つけた。

黒いローブを纏い、邪悪な影を漂わせるその人物。

「またあんたに会えて嬉しいよ、クワイⅡガン」

クワイⅡガンは唇を噛み締め辛うじて声を漏らした。

「ザナトス・・・」

闇に溶けこむが如く漆黒の髪。憎しみに燃える深みを帯びた蒼き双眸。

そして、右頬に刻印された、永遠に繋がることのない円環。「せっかく手がかりまで残してやったのに、随分と時間がかかったもんだな。あんたの頭の硬さは昔時から全然変わってないね」

口元に薄ら笑いを浮かべ元弟子はククツと笑った。

その様子を階下から見つめるクワイⅡガンの心中や如何に？

ザナトスは死んだはずだ。惑星テロスで。濃硫酸のたぎる泉に自ら飛び込んで。クワイⅡガンやオビⅡワンに後味の悪さを残したまま。

それなのに何故？どうやって生きていたのだ？

しかし、クワイⅡガンは心を穏やかに保ち、動揺していたとしてもそれをうまく隠していた。

「驚かないんだな」

顔に笑いを貼りつけたままザナトスは楽しそうに言う。

このまま行くと、この元弟子のペースに呑み込まれかねない。クワイⅡガンは自ら問い質すことでそのペースを乱そうとした。眉間に皺を寄せたまま、しかし、クワイⅡガンは心を落ち着けると穏やかに訊ねた。

「この一件にお前が関わっているような気はしていたからな。――」

オビⅡワンはどこにいる？」

「この館にいるさ。だが、正気を保っているかどうかはわからないけどね」

「どういうことだ？」

ザナトスは嬉しそうに言った。

「真つ暗な小さな部屋に閉じ込めているからだよ。俺が何度も夢で見せてあげたような暗い部屋でね。可哀相に、さつき俺が行ったらすぐ脅えていた」

言い終わると、さも可笑しそうに含み笑いをする。

微かに眉をしかめた以外は表情を変えぬまま、ジェダイ・マスターは力強い声で述べた。

「彼は強い」

「彼は強い？」

聞き返してザナトスはクスクスと忍び笑いを漏らした。そして、嘲笑うかのよう続ける。

「ああ、でも、あいつは心の底にいつも怒りと恐怖を抱えている。他人に対する怒りと、あんたが見捨てて——」

「けれども、オビⅡワンは強い。私は彼を信じている」

突如、クワイⅡガンはその言葉を遮り、断固とした口調で言い放った。

見る見るザナトスの表情が不快感に彩られる。彼は怒りを抑えた低い声で言った。

「随分と大切にしているんだな。俺のことは信じてくれなかつたくせに」

「信じていた——だが」

「裏切られたって言うのか？裏切ったのはどっちだ？」

クワイⅡガンは静かな眼ざしで青年を見つめた。

ザナトスも瞳に激しい憎悪を燃やし見つめ返す。

先に視線をそらせたのはクワイⅡガンだった。

「こんな話をしている暇はない。オビⅡワンを返してもらおうか」「いいよ、物言わぬ死体でね。あんたが死んだあとにつ!!」

ザナトスは素早く腰からライトセーバーを抜き取り起動させる。

そして、赤く光を放つセーバーを振りかざして、踊り場から身を躍らせた。全体重と落下の勢いを攻撃に込めて。

だが、それを真っ向から受けるほどクワイⅡガンも馬鹿ではない。すかさず攻撃を半身にかわしつつ、緑色に輝くセーバーを起動させる。

そして、ザナトスが着地した瞬間。体を半回転させると力を込めて横薙ぎに切りつけた。

ビィィィィィィィィィィィ

赤く光るセーバーと激突する。

一瞬後、二人は後ろに飛びざさった。

攻撃が届かぬと見るや、クワイールガンは逆回転し今度は上段に打ち込む。

だが、それも強い邪悪な力によって阻まれた。

ザナトスの嘲笑うかのような笑みがセイバー越しに窺える。

光輝くセイバー同志が激しくしのぎ合う音が響き、稲妻が落ちたような臭いが辺りに漂った。

第6話 過去との闘い

平穩を求めよ。心の中の静寂を感じよ。

クワイⅡガンは集中するとフォースを呼び寄せた。それは彼に更なる力を与え、ザナトスを押さえつけるセーバーに力を注いだ。

余裕の笑みを浮かべていたザナトスの表情が徐々に怒りに彩られていく。

青年は怒りの力を取り込むと、一瞬にしてクワイⅡガンのセーバーを激しく弾いた。

そして、後方に宙返りして体勢を整えようとする。

しかし、ジエダイ・マスターは間髪入れずに飛び出した。

刹那、セーバーを振るい、着地しようとしたザナトスの足元を切り払う。

が、その瞬間には、ザナトスは素早く着地して上空に再び宙返りし、クワイⅡガンのセーバーは空を切った。

切った体勢から勢いを力に変え、クワイⅡガンはくるりと横回転すると右上段から振り下ろす。

攻撃を赤い光で撥ね返し、ザナトスは後ろに飛びずさった。

(おかしい。手応えがなさすぎる。何かを企んでいるに違いない)

クワイⅡガンに疑心が芽生えた。

彼はセーバーを右八双に構え心を落ち着かせると、元弟子の様子を窺う。

そんな彼の気持ちを嘲笑うかのように、ザナトスはニヤリと笑みを浮かべた。

「どうした？あんたの攻撃はこんなもんか？俺に対する怒りが足りないんじゃないか？」

「私はお前を怒ってはいない。ただ、お前の行動を止めたいだけだ」
(今までずっと右へ右へと闘いは進んでいる。ザナトスは私を何かから引き離そうとしているのではないか？)

ザナトスを越えて奥には、他の部屋に通じる入口がぽっかりと暗い口を開けている。

「相変わらずジエダイ・コードに縛られた考え方しかできないんだな。あんたが可哀相になってくるよ」

嘲るようにザナトスが言う。しかし、ジエダイ・マスターは視線を相手から外さず、思いだけ馳せた。

(確かロビーの左奥にも同じような入口があったはずだ。ザナトスは左側の入口に私を行かせたくはないらしい。ということは、そちら側にオビⅡワンがいる)

一瞬のうちにそこまで思考を巡らせると、クワイⅡガンは静かに言った。

「相変わらず、お前は自分の話す声が好きなのだな」

ザナトスは瞬時にして顔を赤らめ、だが、すぐさまニヤリと笑った。

「あんたの皮肉なんて通じないよ。俺はあんたのペースでは闘わない」

「どうかな?」

言い終わると、すかさずクワイⅡガンは間合をつめ上段から振り下ろした。

上からの攻撃に跳びあがることもできず、辛うじてザナトスはセーバーで攻撃を防ぐ。

その際にクワイⅡガンは後ろに回り込み、背後から切りつけた。

黒いローブが焼け焦げ、裂け目が走る。

間一髪かわしたザナトスは冷たい怒りのフォースに身を委ねると、クワイⅡガンに向き直った。

(これで攻勢に進めていきさえすれば、左方向に辿りつけるはずだ) そう思う傍から、ザナトスが突如、物凄い勢いで打ちかかってきた。その激しい抵抗により、逆に左に何かあるのではないかと確信させるに相応しいほどの。

クワイⅡガンは受け流すと、セーバーを左上から切り下ろす。

それをザナトスは防ぎ力を込めて押し返すと宙を跳んだ。

正面にそびえる階段の中ほどに降り立つと、階下にいるクワイⅡガン目がけて駆けおる。

今度はクワイⅡガンも迎え撃った。

階段を駆け登りざま、腹に狙いを定めてセーバーを横薙ぎに振るう。

空中で噛み合ったセーバーは激しく火花を散らした。

再び力と力のぶつかり合いになり、お互いの顔がセーバーの光に照らされる。

自然、セーバーを握る手に力がこもった。

突然、ザナトスはフツと薄笑いを浮かべ、次の瞬間、急にセーバーを引いて、軽やかに階段の左側へ跳ぶと手すりの上に着地した。

意表を突かれ体勢を崩しかけたクワイⅡガンに、凄みのある笑みを見せるとザナトスは階段の向こう側に消えた。

クワイⅡガンも急ぎ階段を飛び越え、着地すると周囲を素早く窺った。

ザナトスの姿は全く見当たらなかった。左奥に入口があるだけで、暗闇が窺えるのみで、何があるかわからないその向こう。

静かに呼吸を整えるとフォースを纏いながら、クワイⅡガンは暗黒に足を踏み出した。

ライトセーバーで周りを照らす。

緑色の光に浮かび上がり微かに見える様子から、何も無い小さな部屋だと見てとれた。

数歩歩いた所で不意に、右から赤い光が振り下ろされる。

危険を告げたフォースに従って身をひるがえし、その攻撃をがっちりを受け止めた。

ザナトスは赤い光に染まった顔を近づけると、嬉しそうに囁いた。

「あいつ、死にかけているってさ」

その一言はクワイⅡガンに動揺をもたらすには十分だった。

思わずセーバーを握る手が揺れ動き、そこをザナトスにつけ込まれた。

ザナトスのセーバーが横に一閃し、クワイⅡガンのセーバーを弾き飛ばす。

光刃の消えたセーバーは床の上を回転した。

機を逸せずザナトスは、ダークサイドのフォースを集めると勢い良

く手を前に突き出す。

強力なフォースがクワイールガンを打ち、彼は壁に激突し床に倒れ伏した。

それを見るや、ザナトスは壁に埋め込まれたアクセス・パネルを操作する。

床が横にスライドし、クワイールガンは床下に吸い込まれていった。

真つ暗な闇の中に。

「まんまと罠に飛び込んでくれて嬉しいよ。これで、さつき言ったことを実行できるからな。また、あとで会おう、クワイールガン」

ザナトスは口角を上げてほくそえみ、付け加えた。

「あんたが生きていたらね」

石畳の通路を足音が静かにこだまする。

グロー・ロッド
照明棒に照らされた影が暗い壁をゆらゆらと揺れ動く。通常よりも引き伸ばされた巨大な影は魔性の生き物の如く、うごめいて見えた。

(こんなに簡単にいくとはな)

ザナトスは忍び笑いを漏らした。

(これでようやく復讐が果たせる。だが、それだけでは終わらせない)
知らず知らず右頬を指でなぞる。

頬に焼きつけた指輪の跡 —— 決して繋がることのない円環は、彼の飽くなき復讐心をも永遠に満たされることのないものだと思ひ知らせてくれる。

(あいつ等を片づけた後は、ジエダイ評議会だ。きつと俺の力に恐れを抱き、泣いて許しを乞うだろう。その時が楽しみだ)

クスクスと笑い声を放ち、ザナトスは強大なダークサイドのフォースを発散させた。

悲しみ、怒り、恐怖、絶望。

それらを心ゆくまで体全体で感じ、彼は薄ら笑いを浮かべた。

(あいつも今ごろは震えているに違いない)

そう思うと自然に笑いが込みあげてくる。

目指す場所にはもう間もなく着くはずだった。少年を閉じ込めて

いるあの監房には。

館の地下は元々、多数の部屋に区切られた貯蔵庫だった。

時折りこの館を訪れる主人達に提供する、食糧や飲物を保管するための。そして、主人不在の時が多いため、嚴重な、また温度調整も自在にコントロールできるような管理体制が取られていた。

それをザナトスが幾つか監房に改造したのであった。

石畳を歩くその足が突如止まる。

ザナトスはニヤリと笑みを浮かべるとそのドアに向き直った。ドアのすぐ横にあるアクセス・パネルに手を伸ばしかけ、ふとその手を止める。ほくそえみ、益々より強いダークサイドのフォースを周囲に漂わせた。

(どんな顔をするか楽しみだ)

さも可笑しいといった風にククツと笑うと、アクセス・パネルにパスワードを入力した。そして、キーパットの下にある赤いボタンを2度押す。

スチール製のドアは滑るように開き、ザナトスは凄みのある笑顔で小さき暗い部屋の中へ入った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

クワイールガンは見あげた。真つ暗で何も見えない。

明かりとりライトセーバーをしようとして彼は眉をひそめた。彼のセーバーは先ほどのザナトスとの闘いで床——ここから見れば上の階の床だが——に落としてしまったのだ。

ザナトスにしてやられた。そんな思いが過ぎる。彼の行動を止めなければ。彼を教え導いた身としては。例えその指導が途中で断ち切られたものであっても。

だが、そんなことに気を払う余裕はなくなった。

オビールワンに危機が迫っている。それに——暗く重圧に押しつぶされそうな闇の向こうから、獣のうなり声と、土の上を何かが歩いてくるような音が響いてきたからだ。

何十頭はいるかもしれないと思われる、その。

フォースで素早く探してみると、体長1mはあろうかという四つ脚

の肉食獣達だった。彼らはクワイⅡガンの前で止まり、まるで狩りの獲物の様子を探っているように臭いを嗅ぎ、牙を鳴らした。獣達の中から狂暴な飢えと乾きが感じられる。

『あんたが生きていたらね』

ザナトスから放たれた言葉が耳の奥にこだました。

クワイⅡガンはフォースを纏い、心を穏やかに保つと彼らに対峙した。

瞬間、獣達が牙を剥き、激しい勢いで飛びかかってきた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

笑みは一瞬にして固まり、たちまち不機嫌な表情に変わった。

ザナトスは監房の中を足早やに歩くと、部屋の中央で横たわっている人影を蹴りつけた。

蹴られた者は寝ぼけ眼で何ごとかを呟き、体を起こす。

「おい、あいつはどこだ？」

ザナトスは男の胸座を掴み、憎悪に揺れる瞳で訊ねた。

「あいつって・・・？あれ？俺、いつの間に寝てたんだ？」

惚けたように男は呟いた。先ほど食事を持ってきた男だった。訳がわからんといった風に頻りに首を傾げている。

「バカが。マインド・トリックに引っ掛かりやがって。おい、お前、あいつに何を話したんだ？」

汚いものでも吐き捨てるように言い放つと、ザナトスは尚も男を問いつめた。

男はしばらく考え込み

「・・・わからない。覚えてない」

とポツリと言った。

「役立たずめっ」

ザナトスは男の腹に強烈な蹴りを見舞うと、体を二つに折って苦しむ男を尻目に頭を冷静にして考え込んだ。

(記憶を消したに違いない。まさかそこまでやるとはな。そして、そんな元気があるとは。どうやら俺はお前を見くびっていたらしい)

(だが、この屋敷からは逃げられやしない。必ず捕まえてやる。必ず

だ。——これでまた、楽しみが増えたというものさ()
ザナトスは含み笑いをし口角を上げた。だが、その蒼き瞳には憎悪
と冷酷な光が宿っていた。

<後編>

第7話 元弟子と弟子

微かな灯りが壁を照らし、それは少しずつ移動していった。

オビⅡワンは曲がり角で立ち止まり、壁に背をつけると体を乗り出し、前方の様子を静かに窺いつつフォースを伸ばした。

人の気配はない。

少年は灯りを一番小さく絞った照明棒グロウ・ロッドを通路の先に向けた。

暗い通路がしばらく真つすぐ続き、その先には同じく暗い入り口が開いている。

唾を呑みこみ呼吸を整えると、彼は歩行を開始した。

あの男が持ってきた夕飯。

それが彼に行動を起こさせるキツカケを作った。

夕食、つまり今が夜だということが重要だった。

夜ならば朝が来るまでに充分時間がある。そして、彼が逃げ出しても気づかれない可能性もある。

しかし、ダークサイドのフォースの使い手だ。いずれはバレるかもしれない。だが、もしかしたら逃げおおせることもできるかもしれない。

オビⅡワンはその僅かな可能性に賭けた。

何時までも相手の思い通りにはさせない ——

相手、そう相手。

男は自分を雇った相手の名前は知らないと言っていた。ただ若い男だ、とだけ。

ダークサイドのフォースを操る若い男。

少年の背筋に震えが走る。

(まさか、そんなはずはない。・・・まさか)

彼は思いつきり頭を横に振ると前方の闇を見つめた。

(今は、この一瞬に集中しよう)

彼がいた地下から1階に通じる階段を見つけた時は心が踊ったも

のだった。しかし、天井を塞ぐ扉を上を開け1階に顔を出した時には思わず落胆した。

何処も彼処も真つ暗な闇。照明棒グロー・ロッドを男から”借りて”きて正解だった。

そして、至る所に漂う怒りや恐怖の暗きフォース。オビIIワンは息を吐き出し気持ちを切り替えると、フォースを呼び起こし精神を保護した。

彼は脱出へ、光へと向かって歩み出した。

ややあつて暗き入り口に辿りつく。

中をおずおずと窺った。暗闇。この館はどうしてこう、暗黒に覆われているのだろうか。

オビIIワンは溜め息を漏らしフォースで内部を探る。人はいないようだ。

照明棒グロー・ロッドを強く握り締めると、少年は内部に踏み込んだ。

小さな部屋だった。彼が囚われていた部屋よりは大きい。

そして、全く何もない。何も——いや。

何かが床の上に光った。照明棒グロー・ロッドの灯りに照らされて。

彼は近づき驚愕の余り息を飲んだ。

ライトセーバー。

この持ち主は一人しかいなかった。彼の師。クワイIIガン・ジン。しばらく動けなかった。心臓までもが止まってしまったようだった。

(マスターのライトセーバーが何故ここに!? マスターは決してセーバーを手放す人じゃない。それなのにここにある・・・マスターはここに来た? そして・・・マスターの身に何かあった・・・?)

鼓動が激しく打つ。

少年はよろめくようにセーバーまで歩くと震える手で拾い上げた。彼のより大きい指に合うように造られた太いグリップ。

(マスター・・・)

目をぎゅつと瞑り内心呟く。ややあつてゆっくりと目を開いた。

深い深い溜め息を一つ大きく吐くと、彼は辺りを見渡した。何かマ

スターに通じる手がかりがあることを期待して。

しかし、彼の意に反し、何も見出すことができなかった。床にも壁にも。天井にも。うまく隠されているのかもしれない。スイッチやアクセス・パネルといった機器さえも見つけ出すことはできなかった。

オビⅡワンは諦めきれず長い間小部屋を探索していたが、唇を噛み締めると、この部屋から通じる、もう一つの入り口へやむなく向かった。

この入り口の向こうも闇だった。

気の焦りを表情に浮かべ精神の集中を欠いたまま中に入った途端、部屋の灯りが一斉についた。

突然、照らされて眩しさの余り両目を腕で覆う。

「思ったより元気そうじゃないか」

嘲るような声が辺りに響いた。

オビⅡワンはこの声の持ち主が誰かわかっていた。わかっていたが認めたくはなかった。絶対に。

しかし、口から言葉は出た。それは悲鳴に近かった。

「ザナトス……っ」

感情を恐れず心を平穏に保ち、自分の本質を見極める

口から飛び出そうな心臓を抑え、オビⅡワンは師の教えを繰り返した。

徐々に彼は心の奥底に静寂を見つ出す。

もし、暗く悪しき心がお前と向き合ったとしても、光は決して消されることがないだろう

その言葉は、彼に勇気を、そして、暖かさを与えるには十分なものだった。

オビⅡワンは力強く顔を上げ、澄んだ瞳で声の主を直視した。目が次第に灯りに慣れ、周囲の輪郭がはつきりし始める。

広い、大広間だったと思われる部屋に一人の人物が立っていた。

漆黒の髪。青白い顔。蒼き瞳。そして——忘れることもできぬ右頬の円環。

ザナトスはニヤツと笑みを漏らした。

「ふん、立ち直りが早くなつたな。あの悪夢が足りなかったと言うことか。まあ、いい。悪夢が現実になるまでだ」

ほくそえむザナトスの言葉を意にも介さず

「どうして生きているの?」

少年は静かに問うた。

ザナトスは嘲笑する。

「だから、お前達は詰めが甘いんだよ。実際に俺が死ぬ所を見たのか?俺の死体でも見たのか?」

「見てはいないけど。でも、あの蒸気を上げる、黒い<聖なる池>にお前は飛び降りたじゃないか。そして、お前の纏っていたローブは僕達の目の前に浮かび、溶けてなくなった・・・」

「それで俺も溶けたと思ってるのなら大きな間違いだぜ」

クスクスとザナトスは笑う。

目まぐるしく頭を働かせながらオビ＝ワンは考えた。

ザナトスの致命的な欠点は自慢せずにはいられないことだ

師はそう言っていた。

彼に自慢させることで何か馬脚を現すかもしれない。それによって活路が開けるかもしれない。

少年はザナトスの虚栄心を煽ろうと言葉を投げかけた。

「どうして?あの池の水に触れただけで、リュックの紐だって溶けたんだ。それなのに・・・」

ちらりと視線を走らせると、ザナトスは嬉しそうに口を開いた。

「教えてやろうか?頭の悪いお前でもわかるように丁寧に教えてやるよ。あのテロスで採掘に使っていたリヴトイルは確かに物を溶かす劇薬だが、加水分解を起こす薬品でもあったのさ。加水分解ってどういうことか知ってるか?」

「水が加わると起こる分解反応でしょ。それぐらい僕だって知ってる」

「そうか?」

ザナトスは鼻で笑うと続けた。

「池には常にリヴトイレが流れ込んでいたが、実はリヴトイレというのは水よりも比重がかなり軽かった。池のほりにあるく鏡の洞窟へ、あの地下には、大量の地下水が溜まっていて常に池の底から湧き出ていたから、余計にリヴトイレは表面に集まっていた」

少年にはだんだん、このからくりが読めてきた。静かに口を挟む。

「その表面に浮かぶりヴトイレは水とぶつかった所で加水分解を起こし、分解された薬品は・・・劇薬じゃなくなったってこと？」

おどけたようにザナトスは笑った。

「ご名答。正確に言えば、リヴトイレは加水分解を起こして熱を誘発し、吸い込んでも死なない程度の蒸気を撒き散らす一方、全くとまでは言えないが無害な液体になったのさ。加水分解を起こす前のリヴトイレが覆う表面以外はね」

口をつぐむとザナトスはゆったりと歩き始めた。オビⅡワンは緊張感を持続させたまま、その姿を目で追う。

昔は、招いた客をもてなす食事や団欒の場合、舞踏の会場として使われたのだろうか。今までにない大広間だ。しかし、盗まれたのか物はほとんどなく、壁に取りつけられた燭台とボロボロになったカーテンだけが、華やかし頃の面影を残していた。

青年は立ち止まりオビⅡワンを見つめる。口には笑みが広がった。

「俺は池に飛び込んだあと、動きにくいロープを脱ぎ捨て、素早く地下通路を通り洞窟に逃げ込んだ。そして、あとは溶けたロープを見たお前達が勝手に俺が死んだと思ってくれる。そして、6標準ヶ月ほど、辺境の地でなりを潜めていたって訳だ。俺が逃げ道を全然用意していなかったかと思っただのか？全く学習能力のない奴らだ」

オビⅡワンは沈黙した。
(全く気づかなかった。僕達はいいつの言う通り詰めが甘かったのかもしれない)

「どうした？何か手がかりを掴もうとしたのか？残念だったな。俺はそんなにお人好しじゃない」

すっかり見透かされ、オビⅡワンは唇を噛み締めた。

(ザナトスが生きていることを急いで評議会に伝えなければ。マスターにも・・・マスター、マスターはっ!?)

「マスターは・・・マスターがここに来たはず。どこにいるの?」

不意に芽生えた不安に、少年は心中の焦りを静め真剣な眼ざしを向けた。ザナトスは薄笑いを浮かべる。

「あいつなら、ヴォルンスクルーの部屋に落ちたぜ」

「ヴォルン・・・スクルー・・・?」

聞いたこともない名前にオビIIワンは戸惑いの表情を見せた。

「惑星マーカルに棲息する獰猛な獣さ。フォースに敏感に反応して襲う性質があるって聞いている。かなり手強そうだ。あいつ、生きてればいいがな」

言い終わるとザナトスはクスクスと笑った。

だが、オビIIワンは落ちついた口調で言った。

「マスターは強い。僕は信じてる」

途端ザナトスは顔をしかめ、

「あいつと同じことを言うんだな。つまらない奴らだ」

だが、それは一瞬で走りぬけ再びニヤリと笑った。

「まあ、いい。お前達をこの館に招待した主旨に戻ろう」

「主旨?」

「お前の死さ」

瞬間、オビIIワンの体が宙に浮いた。

何が起きたのか見極められぬ前に、急激な息苦しさが少年を襲う。

足をばたつかせながら思わず喉元に左手をやるが、そこには何も無かった。

霞む視界には、右手をこちらに突き出したまま嬉しそうに笑うザナトスの姿が浮かんでいる。

(強い・・・ダークサイドのフォース・・・)

オビIIワンは必死にフォースを求めた。

フォースは光り輝く力となり彼を取り巻く。一瞬、光に闇が打ち消され呼吸が楽になる。

その刹那。喉が更に締めつけられた。

少年は酸素を求めて激しく喘ぎ、見えない力に対抗するが如く再びフォースに手を伸ばす。

だが、フォースは彼の指の間をすり抜け消えてしまった。

全身の血管が音を立てて脈打ち、頭が朦朧としてくる。視界の周りが黒く滲み、狭まってきた。

(・・・マスター・・・)

ついにオビワンの両手がだらりと垂れ下がり、手から滑り落ちた師のセーバーが床を転がった。

「待て、ザナトスっ!!」

その声にザナトスはゆっくりと振り向いた。

集中が途切れたことにより、少年はダークサイドのフォースから解放され、床にドサツと落ちる。

二人が今いる所から遠い向こう、反対側にある、広間に通じるもう一方の入口。

そこに人影が立っていた。

長身。逞しき体。精悍なる顔つき。宇宙の深淵を思わせる蒼き双眸。

「遅かったな、クワイガン」

ザナトスは凄みのある笑顔で、過去に師と仰いでいた者を凝視した。

第8話 紙一重の攻防

青年の笑顔は不意に消え、見る見るうちに不機嫌な表情に変わる。

纏う焦げ茶色のローブやチュニックに獣が噛んだと見受けられる裂けた箇所はあり、頬や手に掠り傷はあるものの、思ったよりクワイⅡガンは深手を負っていなかったからだ。

(あの獰猛な肉食獣相手にどう闘ったんだ？セーバーもないのに)

そんなザナトスの思いを打ち破るかのようにクワイⅡガンの声が飛んだ。

「オビⅡワンっ!!」

だが、少年は床に倒れ伏したままピクリとも動かない。

気を失っているだけなのか？それとも、まさか――

「安心しろ、まだ死んじやいないさ」

冷笑を浮かべるとザナトスは、横たわるオビⅡワンを足の先で転がした。

「うっ……」

仰向けになった瞬間、少年の口元から声が漏れ

「ゴホッ、ゴホッ……グッ……ゴホッ……」

途端、激しく咳き込み、痛む肺を抑える様子が遠目にも見て取れた。

「オビⅡワンっ!!」

安堵の吐息とともに抑えきれぬ心配を込めて、再びクワイⅡガンが叫ぶ。

しかし、意識が朦朧として周りに気を払う余裕がないのか、彼が自分のマスターに気づいた様子はなかった。

クワイⅡガンはザナトスの注意が少年に向けられているのを感じ、その隙に駆け寄ろうとした。

刹那、フォースが危険を告げ、ジエダイ・マスターは立ち止まると体をすかさず半身にかわす。

彼の顔のすぐ横をナイフが音を立てて通り過ぎていった。

ザナトスにはその一瞬があれば十分だった。

青年は左手を壁に向け、埋め込まれているアクセス・パネルのス

イツチにフオースを叩きつけた。すぐに床が鳴動したかと思うと、床から透明スチールトランスパリスチールの壁が迫り上がり天井にまで達し、一瞬にして大広間を二つに隔ててしまった。

クワイⅡガンは不意を突かれた衝撃から立ち直ると、すぐさまその壁に駆け寄った。

「パダワンっ!!オビⅡワンっ!!!」

叫びながら透明スチールトランスパリスチールの壁を、骨も折れよとばかりに拳で叩く。相当の厚みがあるのか、壁はビクともしない。クワイⅡガンは急いで辺りを見回すが、こちら側にアクセス・パネルの類は全く無かった。拳から滴る血も気にせずクワイⅡガンは唇を強く噛み締め、壁の向こうを見つめた。

すると、薄ら笑いを浮かべるザナトスと視線が合う。

ザナトスは笑みを深くすると何ごとか、ゆっくりと言った。

壁に隔てられ声や音は全く聞こえない。

だが、ザナトスが言った言葉はその口の動きから理解できた。

『そこは特等席だ。お前の大事なパダワンが死ぬのを、無力感にさいまれながら見るがいい』

(そんなことはさせない。絶対に。私の命に代えても)

クワイⅡガンは決意を新たにすると、壁から1, 2歩下がって左腰に手をやる。

そして、ライトセーバーを取り出し起動スイッチを押した。

美しく輝く青い光が現れる。オビⅡワンのライトセーバー。

彼はそのセイバーを、透明スチールトランスパリスチールに深く突き刺した。蒸気を上げ、壁は飴のように溶け始める。

セーバーを握る手に益々力を込め、クワイⅡガンは目を瞑り静かに心の中で呟いた。

／／オビⅡワン？／／

ジェダイ・マスターの行動を見たザナトスの表情が驚きに変わる。彼はクワイⅡガンを甘く見ていたのだ。

が、一瞬でその顔は憎悪に歪み、彼は怒りを湛えた表情でオビⅡワンに向き直った。

(あいつが来る前に片づけてやる)

少年はよろめきながら何とか立ち上がっていた。

その震える手には師のセーバーがぎゅつと握られている。いつでも起動し攻撃できるように。

ザナトスはほくそ笑んだ。そして、笑みを浮かべたまま、小さな声でオビⅡワンに囁きかける。

オビⅡワンはまだ意識がはつきりしていなかった。

故にしばらくしてからその言葉を理解したらしく、急に愕然とザナトスを見上げる。それから視線を落とし呆然と手にあるセーバーを見つめ、ややあつて唇を噛み締めると自分のベルトにセーバーを掛けた。

ザナトスはニヤリと笑い、突然、力強く手を突き出すと、オビⅡワンにフォースをぶつけた。

立っていることもままならなかった少年は、成す術もなく吹き飛ばされ壁に激突し、倒れそうになる所を辛うじて留まり壁にもたれかかる。

口角を上げるとザナトスは自らのセーバーを起動し、少年に向かって走り出した。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「やめろっ!!」

聞こえないとわかっていてもクワイⅡガンは思わず叫んだ。

(このまま彼を失う訳にはいかない。そんなことにでもなれば、私は一生私を許せない)

ぐるりと円を描くように切っていたトランスパリスチール透明スチールは間もなく環となるはずだった。

(間に合って欲しい。どうか・・・)

知らず知らずクワイⅡガンは必死に祈っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

どうにか壁を支えに立っている状態のオビⅡワンの前に、ザナトスは素早く姿を現した。

彼は赤く光るセイバーを少年に向け垂直にし、自分の傍らに引きつ

ける。

少年は動いて何とか逃れようとしたが、体が言うことをきかなかった。

オビⅡワンは諦めの表情を浮かべ黒き死神を見る。

そして—— 勢い良く出されたセーバーが深々と突き刺さった。

「オビⅡワン——!!!」

クワイⅡガンの悲痛な声が部屋に響き渡った。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

オビⅡワンは諦めの表情を浮かべ黒き死神を見る——

死。消滅。永遠なる忘却への旅。

彼は死を覚悟した。

There is no death; there is the Force.

フォース。

全銀河に存在する、ものともを繋ぐ命の源。力の根元。

(もし、僕が死んだらフォースと一緒にいるのだろうか……。昔のジェダイ達と同じように)

ジェダイらしく生き、ジェダイらしく死ぬ——

(最後までジェダイらしく闘って死んだのなら、マスターを失望させずにすむかもしれない)

その考えは少年を微笑ませた。

そして、その笑みは心に穏やかさをもたらし、彼の周りにフォースを呼び込んだ。

不意にオビⅡワンは、良く知られた存在を感じた。力強く、暖かなフォース。

今までフォースと一体になる気力も体力もなかったのだ。でも、この存在に全く気づかなかったなんて!!

彼は自分に向かって毒づきたくなかった。

霞む目を瞬かせ視界をはっきりさせると、目の前には赤きセーバーが迫っていた。

「オビⅡワン——!!!」

クワイⅡガンの悲痛な声が部屋に響き渡った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

深々と突き刺さるセーバーの傍から蒸気が上がる。

ザナトスの表情は怒りから次第に薄笑いに変わっていった。

「ふん、よく避けたじゃないか」

その声には若干驚いたような口調も混じっている。

「諦めが・・・悪いんだ。お前よりも・・・ね」

左腕に走る火傷の痛みに顔をしかめながら、オビⅡワンは呼吸を整えつつニヤリと笑った。

あのまま右に動かなかつたら心臓を串刺しにされていただろう。一瞬でもフォースを取り込んだおかげで、辛うじて動くことに成功していたのだ。

今、ザナトスのセーバーは、少年の左腕を掠め壁に突き刺さっていた。

「だが、これで終わりだ。この至近距離からじゃ逃げられないだろう」
凄みを帯びた笑みを浮かべザナトスはセーバーを引き抜くと、勢いよく振り下ろした。

瞬間、少年は動いた。

まさかこんなにも素早く動くことができるとは思ってもいなかったのだろう。自分を過信しすぎるが故に余計に。

オビⅡワンは半歩右斜め前に飛び出ると、ヒュンという音を立てて落ちてくるセーバーを紙一重で躲す。そのままユニツクの懐から何かを取り出すと、ザナトスの振り下ろされた右手の甲にそれを突き刺した。

「ぐっ!!」

痛みの余り、セーバーを取り落とし右手を押えるザナトス。

その横をすり抜けると、痛がる彼の背に、少年は激しい蹴りを入れる。

衝撃に吹っ飛び壁にぶつかるザナトスを尻目に、オビⅡワンは離れるように二、三度前転して、相手との距離を保って向き直ると片膝をついた。

素早く呼吸を落ち着かせようとするものの、今までの一連の攻撃でかなりダメージがぶりかえしたらしい。頭の鈍痛は激しくなり、へたすると脳しんとうの後遺症で目眩に襲われる。

右腕の痛みに加え左腕の火傷。気管も痛いし、呼吸も荒い。

少年は思わず苦笑し、しかし、鋭い双眸で前方を凝視した。

ザナトスは攻撃から立ち直り、いや、逆にいつそう暗き力を漂わせ、憎悪のまなじりで少年を睨みつけていた。

強いダークサイドのフォースが体から発散され、辺りの空気を重く感じさせる。

オビⅡワンは不意に体が動かないことに気づいた。ピクリとも。

きつと、先ほどまで少年を軽んじていたことに思い至ったに違いはない。今度は確実に仕留めに来るつもりなのだろう。暗きフォースで押さえつけることによつて。

ザナトスは、起動したセーバーを横に垂らしたままゆっくりと向かって来た。その右手から鮮血が滴っている。

「こんなもので俺を倒そうと思ったのか？」

彼はそう言い放ち、手にしていた物を忌々しそうに投げ捨てた。

それは床を滑りくるくる回って止まる。特殊^{デュラ}プラスチック^トでできたフォークだった。オビⅡワンが監房から抜け出す際、唯一武器になる物を持つて持ってきていたのだ。

「倒そうとは・・・思っていないよ」

少年はフォークから視線を戻すと静かに言った。そして、言葉を続けた。

「ただ、時間稼ぎがしたかった・・・だけなんだ」

「そう、お前の相手は私がする」

決意の秘められた低い声が傍から聞こえ、ザナトスは悔しさに顔を歪めた。

彼の目の前の床には、丸く切り取られた透明^{トランス}スチール^{パリスチール}。

そして、青きライトセーバーを構えた威風堂々たるジェダイ・マスタアが立っていた。

「くそつ、お前たちは・・・随分と俺を楽しませてくれるよ」

吐き捨てるように言い放つと、ザナトスは突然、踵を返し後方へ駆け出した。

一瞬、緊張の度合いを高める二人の前で、彼は「このまま俺を逃がすつもりか？」

との高笑いを残し、大広間から通路への入り口へ向かうと、暗闇の中に消え去っていった。

クワイⅡガンは追おうと一步踏み出したが、唇を噛み締めると振り返り、弟子の傍に跪いた。優しくオビⅡワンを抱え起こす。

「大丈夫か？オビⅡワン」

それに答えず、ぼんやりした頭を振るとオビⅡワンは声を出した。

「マスター、彼を追ってください。．．．逃がさないで」

「しかし、お前を置いて行く訳にはいかない」

「今逃がしたら．．．何をするかわかりません。僕は．．．大丈夫です、後から追いかけますから」

クワイⅡガンは澄みきった蒼き瞳で弟子を見つめた。オビⅡワンは静かに微笑む。

師は素早く弟子に癒しのフォースを送ると、決意も新たに頷いた。

「わかった。しばらく休んでいるがいい」

「彼はきつと．．．罨を張って待っているでしょう。．．．気をつけて」

ジェダイ・マスターは立ち上がり弟子に暖かな、しかし、心配そうな眼差しを与えると、素早くザナトスを追って駆け出した。

オビⅡワンは這うように壁に近づくともたれかかり、そのまま目を瞑ると耐えきれず床に崩れ落ちた。

第9話 待ち受ける罠1

通路の向こうは闇だった。漆黒の。

足音立わずに曲がり角まで走り、壁に背をつけ先を窺う。

気配はない。いや、逆に邪悪な力に満ち満ちていて、本当の気配を探ることができないと言った方が正しいか。

クワイ||ガンはそれでもフォースを伸ばし、元弟子の痕跡を辿る。微かに感じられるその跡。

彼は走りだし、突如として足を止めた。

そのままライトセーバーを起動させると、頭を屈め飛んで来るレーザーを躲す。

フォースの導くまま体を横に一回転させ、その反動で再び向かってきたレーザーを弾き返した。

撥ね返された光弾は放った持ち主を貫いたらしく、攻撃は突然止んだ。

しばらくして何かが崩れる音が通路に響く。

耳を澄まし危険がないのを察知するや、クワイ||ガンは音の元へと向かった。

通路の突き当たり。セーバーの青き光に照らされるは、胸を射抜かれ壊れた一体のドロイド。

(アサシンドロイド暗殺ドロイドか……)

2足歩行をし、ブラスターを構えるこのドロイドはリモート・コントロールによって操作されている。ここに来る者を襲えとの指示を受けていたのだろう。

(一体だけか。しかし、油断はならない。まだどこかに潜んでいるかもしれない)

クワイ||ガンは目を右に転じた。

二階へと通じる階段が続いていた。道はここしかない。ならばこの階段に行くしかないだろう。何が待ちうけているとしても。

彼はセーバーのスイッチを切った。光を発してわざわざナトスに位置を知らせるつもりはない。

不意に彼は手元のセーバーを見つめた。

少し細めのグリップ。だが、造りは師のセーバーを踏襲しているせいか、さほど違いはない。

(オビⅡワン・・・)

彼の意識は過去を溯った。

惑星バントミリアでのザナトスとの闘い。

あの時、他人のために自らの命を捨てようとした少年の姿を見て、パダワンにしようかと心に決めたのだ。二度と取るつもりはないと誓ったはずの。

しかし、その後、あのメリダ／ダーンの悪夢が訪れた。

オビⅡワンにライトセーバーを向けられ、彼を置いてコルサントに戻った時にはもう少年を信用することはできないだろうと思っていた。ザナトスに裏切られ、再びオビⅡワンから同じ仕打ちを受け、クワイⅡガンの心は大きく傷ついていたのだ。

だが —— タールに説き伏せられた。

彼女が持つ、透けて見えるほど美しいガラスのカップを例えに。

一度壊れたものでも、その上から新たに作り直すことで、より強固なものにすることができる —— と。

そして、今。

あの少年はクワイⅡガンの中でかなりの比重を占めるに至っている。

(いつから、このように彼の存在が大きくなったのか)

オビⅡワンの何ごとにも素直な性格。時折り頑固で —— 師に似たという噂もあるが。そして、無鉄砲で —— 本人は否定するだろうが ——

取りとめもなく考え、ジエダイ・マスターは自然に笑みをこぼした。少年に思いを馳せることは、クワイⅡガンの大いなる痛手を癒してくれるようでもあった。

そう、痛手。彼のかつての弟子、ザナトスをダークサイドに向けてしまったこと。

(ザナトスは過去だ。しかし、オビⅡワンは未来だ。今こそ過去を断

ち切らなくてはならない)

そして、壊れた円環を一つの円に繋げる時だ。

一瞬にして緊張の面持ちを取り戻し、クワイールガンは階段に向き直った。

(時間はない。急がねば)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

二階に向けて、かなりのスピードで駆け上ってくる気配がある。

壁際に立ち闇に溶け込みながら、ザナトスはニヤリと笑みを浮かべた。

(用心して注意を払いながら上がる訳ではなく、スピードをつけることで俺からの攻撃をかわそうという狙いか。意表を突いたつもりだろうが、全く読みやすい奴だ)

彼は懐からコントローラーを取り出しスイッチを押した。

通路に待機していた暗殺ドroid^{アサシンドロイド}3体が、音も立てずに静かに体勢を調べ階段に近寄る。

そのブラスターは真つ直ぐ階段の、のぼり口目がけて固定された。瞬間、闇に慣れたザナトスの目に、下から現れ出た長身の影が映る。

翻るローブの音が微かに響いた。

「殺れ」

ザナトスの命令にドroid達は一齐にブラスターを連射する。

階段をのぼりきったばかりで迎撃態勢が取れぬその者を、レーザー光線が次々と貫いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

長身の影は崩れ落ちた。

ガシャという床にぶつかる音が響くと共に、その後ろから跳躍しつつもう一つの影が現れる。

その者は、ローブを纏い転がっているドroidの上を飛び越えようと、軽やかに着地した。

刹那、青い光が横薙ぎに一閃する。

身構えていた暗殺ドroid^{アサシンドロイド}達は、それぞれ胸や首を切断され倒れ落ちた。

クワイ||ガンはセイバーを右に構えたまま、しばらく辺りを窺う。もう攻撃はないと見るや、セイバーを前方にかざした。青き光は、ここが踊り場で、そのすぐ先には部屋に通じる暗い入口があることのみを示した。

(ザナトスはあの先にいるはずだ)

セイバーのスイッチを切ると、クワイ||ガンはフォースを研ぎ澄ましそこへ足早に向かった。

漆黒の闇に足を踏み入れた。

全神経を張りつめ、周囲の様子を探る。

ここも何もない部屋らしい。ガランとしている。一体何に使われていたのか。

窓からの明かりでもあれば見通しも利くだろうが。しかし、その窓は暗く、しかも厚いカーテンで覆われていた。

突然、右前方の暗闇で、微かにカタツという音が鳴った。

瞬間、クワイ||ガンは腰を低くし体を横回転させる。素早くセイバーを起動させ自分の左側面へ切り上げた。

赤い光が頭上を旋回し、急激に軌道を変えるとクワイ||ガンのセイバーを迎え撃つ。

青と赤の光が噛み合い、ジェダイ・マスターと元パダワンは顔を近づけた。

ザナトスは赤く照らされた顔に薄ら笑いを浮かべる。

不意に勢い良くセイバーを弾くと、青年は後方に飛びずさり、床を蹴って前に突進した。

切りかかってくる所を返し、逆にクワイ||ガンは相手の腹めがけてセイバーを横薙ぎに振るう。

ザナトスは跳躍し回転するとクワイ||ガンを飛び越し、彼の背後に着地した。

振り返りざま、元師の背に向けてセイバーを切り下ろす。だが、それは空を切った。

前に2回転し攻撃をかわしたクワイ||ガンは、ふと手に触れた床に落ちていた物を掴むと、ザナトスに向かって投げつける。

飛んでいったデータカードが真つ二つにされる、その隙に、クワイ
Ⅱガンは彼の懐に飛び込んだ。

突き出されたセーバーを辛うじて半身にかわし体を返すと、ザナト
スは鋭い膝蹴りを入れる。

蹴りはジエダイ・マスターのチュニツクを掠め、クワイⅡガンは後
方に間合を取った。

ザナトスは息つく暇も与えず前に踏み出すと、セーバーを右上段か
ら切り下ろす。

振り上げられた青きセーバーがそれを阻む。

火花が散り、激しくぶつかり合う音が部屋に響き渡った。

組み合ったセーバーはしばらく均衡状態を保っていたが、クワイⅡ
ガンが手首を返し始めるとそれは崩れた。

青い光刃が徐々に赤き刃を制し始める。

ザナトスのセーバーは上から押さえつけられる格好となった。

反撃しようにもジエダイ・マスターの力は強く、セーバーを外すこ
とさえできない。

クワイⅡガンはよりいっそう力を込め、急にグリップを握り締める
と下方に叩きつけた。

弾かれたセーバーは勢いに押され、先端が床に突き刺さる。

その一瞬を逃さず、クワイⅡガンは下から切り上げた。

惜しくもそれは相手の影を切ったに留まる。

しかし、辺りに肉の焼け焦げる臭いが漂った。

後方に辛うじてとんぼ返りをし逃げていたザナトスは、憎悪の表情
もあらわに元師を睨みつけた。

その胸には、黒いローブを引き裂いてセーバーの焼き傷が斜めに
走っている。

彼は痛みに顔を歪め、傷口に左手をやり胸を抑えつけた。

クワイⅡガンはセーバーを右八双に構え、この機を逃さぬとばかり
に前に駆け出す。

突如、その足元を後ろからブラスターのレーザーが穿つ。

一瞬、クワイⅡガンの足が止まった。

その隙にザナトスは高く飛び上がり回転すると、クワイ||ガンの背後に降り立った。

痛みに唇を噛み締めるザナトスは、一旦闘いの間をあけるため、再び左手にあるコントローラーを操作する。壁際に立つ青年の斜め後ろ、隣りの部屋に通じる入り口から再びレーザーが放たれた。

(また、^{アサシンドロイド}暗殺ドロイドか)

クワイ||ガンは横に転がりレーザーを避ける。

ガシャガシャとドロイドの歩いてくる音が響く。全部で何体いるのだろうか。

ジェダイ・マスターを抹殺するため遠くから包囲している。セーバーの光も届かぬ暗闇だけにドロイドの姿は全く見えない。ただ発射される光弾だけが見えるのみ。

そんな中でレーザーをかわしきれなのだろうか。

ザナトスはニヤリと笑みを浮かべると右手を動かした。床に刺さったセーバーが宙を飛び手に収まる。スイッチを切ると、彼は闇に溶け込むように消えた。

心の静寂。

クワイ||ガンはフォースを自らの回りに張り巡らせた。

そして――右前方に駆け出した。

顔を掠めるレーザーをもともせず右上からセーバーを薙ぎ払うと、体を横に一回転させ下から切り上げる。

高々と跳躍すると上からセーバーを振るい、ドロイドを切断しながら床に着地した。

手首を返すと左から切り裂く。

ガシャガシャと崩れる音がし、辺りはあつという間に静まり返った。

クワイ||ガンはまだ周囲を警戒しゆつくりと立ち上がる。

攻撃者はいないと感じるや、彼は隣の部屋の入り口に走り出した。ザナトスが消えた部屋へ。

第10話 待ち受ける罟2

危険が渦を巻いている。

部屋に足を踏み入れた途端、クワイⅡガンはそんな言いしれようもない気配を体全体で感じた。

研ぎ澄まされた五感が、フォースが告げている。充分注意すべきだ、と。

ゆつくりと辺りに視線を配りながら足を運ぶ。

不意にカチツと音が鳴り前方の床が薄明るく光ると、そこから青い映像が出現し揺らめいた。クワイⅡガンは緊張の面持ちで身構えると凝視する。

(・・・ザナトス?)

床に据えつけられた小型プロジェクターから投影されたホロは二、三度揺れ動くと、少し縮小された人間の姿を映し出した。黒きローブを纏った、恐れを司る使者の姿を。

青年はニヤリと笑った。

『やあ、クワイⅡガン』

クワイⅡガンは油断なく周囲を見渡す。

このホロが今の状態を映し出しているにしろ、過去に撮られた物にしろ、このプロジェクターの操作をしているのはザナトス本人に間違いない。そして、クワイⅡガンがこの部屋に入ってきてから映像を映し出したことから考えるに、彼はすぐ近くにおいてクワイⅡガンの様子を窺っているはずだ。

左手の方向。そこには先ほどの部屋と同じく、厚いカーテンで覆われた窓と思しき空間。だが、人の隠れる隙間はなさそうだ。

前方。ホロのザナトスを超えて見えるは、やはり壁。左前方奥には次の間の入口が見える。

そして、右。サーバーの青き光をそこに向けクワイⅡガンは独りごちた。

(元は書斎だったのだろうか?)

右の壁際には、高さ2.5mほどのどっしりと構えた棚がずらりと

並んでいたからだ。

光の反射具合からデユラスチール製の棚だろう。今は全くの空だが、データカードを収納するのに使っていたようだ。隣りの部屋に落ちていたデータカードもこれで納得がいく。しかし、こちら側も棚と棚が隣接しているため、隠れることはできないだろう。

瞬時のうちにそう見て取ると、クワイⅡガンはホロに視線を戻した。

『俺を探しているんだったら無駄だぜ。俺はあんたから見える所にはいないからな』

ザナトスは嘲った。まるで彼自身がそこにいて笑っているかのよう。

ジェダイ・マスターは沈黙した。ザナトスがどこにいるかわからないが、自分の考えを述べて手の内を明らかにするつもりは毛頭ない。『今度はだんまりか？相変わらずわかりやすい性格だ』

その言葉も無視すると、クワイⅡガンは静寂を求めフォースを纏い部屋中に伸ばした。

何時、如何なる危険があっても対処できるように。

『まあ、いいだろう』

言い放ち、含み笑いを漏らすとザナトスは続けた。

『しかし、あんたも老いぼれたもんだな。まだ俺を倒せないなんてさ』
クワイⅡガンはホロを静かに見つめる。これだけは、はつきりしたかった。今の気持ちだけは。

彼は重々しく口を開いた。

『倒そうとは思っていない。先ほども言った通り、ただお前を止めただけだ』

『まだジェダイ・オーダーとやらに縛りつけられているみたいだな』
「お前とは違い、私には守るべきものがあるからな」

一瞬、静寂が舞い下りた。それから、ややあつてザナトスが言葉を続ける。

『それにしても、あんたの鈍感さには敬意を払うよ』

その奇妙な間により、クワイⅡガンはこのホロが録画されたものだ

と見破った。ならば、ザナトスは今この瞬間にも元師を陥れる画策をしているかもしれない。

しかし、その考えは次のザナトスの言葉によって意識の隅に追いやられた。

『自分の目の前で弟子がさらわれたつてのに、全く気づかないんだからな』

(私の目の前で、とはどういうことだ?)

さも可笑しそうにザナトスは言う。

『あんたが訓練室に到着した時には、俺もあいつもまだあの部屋にいたのさ。明かりを破壊して部屋が真っ暗だったから、あんたは気づきもしなかったけどな』

思わずクワイⅡガンは眉根をひそめ唇を噛み締めた。

(ダークサイドは見えにくい。ヨーダはそう言っていた。しかし、迂闊だった。私はあの時、落ちていたオビⅡワンのライトセーバーに気を取られ過ぎていたのかもしれない。ザナトスのフォースに気づかなかったとは。もし、私があの場合でオビⅡワンを救い出してさえいれば・・・)

返す返すも悔やまれる思い。しかし、今はこの一瞬に集中しなくてはならない。

『あんたのことだ。さぞ悔しい思いをしているだろうよ。そうだ、もう一つ教えてやろうか』

危険を警告するフォースがチリチリと体を感じられる。クワイⅡガンは油断なきよう攻撃及び防御体勢を保った。

『この館から出るにはパスワードが必要なんだ。玄関の扉には、正しいパスワードを入力しないと爆発する仕掛けがついているからさ。館の壁を切って脱出しようと考えても無駄だぜ。館の裏手は崖だからな。あんた一人だったら何とかできるかもしれないが、あいつには厳しいだろうな』

クスクスとザナトスは笑みを深くする。

『さて、あんたに敬意を表してパスワードを教えてやるよ』

急にホ口の画像が乱れ始めた。ザナトスの声が不意に小さくなる。

自然、クワイ||ガンは前方へ身を乗り出した。

『パスワードは——』

ドツカ——ン!!

突如、ホロが爆発し、辺りを震撼させ家を鳴動させた。

壁際に並んでいたデュラスチールの棚が一斉に倒れてくる。天井が抜けブロックの塊が一瞬のうちに落下してきた。見る間に部屋は巨大なガレキで埋もれ、塵や埃で真っ白に覆われる。

ややあつて揺れが止まると、そこにはただ残骸だけが残っていた。

ぽつかりと開いた天井を通し、コルサントの月明かりが部屋を青白く照らす。

しかし、ブロックに埋もれたのか、ジエダイ・マスターの姿は影形もなかった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

(マスター?)

少年は目を開けた。酷い揺れと轟音が彼を襲ったような気がしたのだ。

ぼんやりとした視界が徐々に晴れ、大広間の天井を形作る。それと共に置かれている状況も記憶として戻り始めた。

(どのくらい経ったんだろう?)

彼は傷を癒すべく、催眠状態に自らを置いていたのだ。

おかげで本調子とまではいかないが痛みは引き、力も湧いてきたように感じられる。

(マスターを助けにいかない)

ゆつくりと傷を気づかしながらオビ||ワンは体を起こし始めた。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

静かに隣りの通路から歩を運ぶ。

青年の目の前には、崩れ落ちた天井に覆われた部屋、そして、6体のドロイドがブラスターを構え、油断無く動くものはないか見張っている姿がある。

この暗殺ドロイドは、アサシンドロイドデュラスチール製の棚をカモフラージュにして、その後ろに配置されていたものだ。

ザナトスはほくそ笑んだ。

(どこに隠れているかが、このガレキから姿を現した時がお前の最後だ)

刹那、フォースを感じた。クワイ||ガンの。

真中に近い一角、そこでガレキが突然盛り上がる。

「そこだ、殺れっ!!」

ドロイドは一斉に光弾を発射した。瞬時にしてブロックの塊は焼け焦げ粉々に破壊される。

ブラスターの連射が止み埃が舞い下りると、辺りは沈黙に包まれた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ピタリと足を止めた。不安げに天井を見上げる。

二階からだろう。ブラスターの激しい攻撃音が聞こえてきたからだ。

勿論クワイ||ガンのものではない。となると、ザナトスのものということになる。

オビ||ワンは大広間から通路に至る入り口で立ち止まっていた。心を静かに保ち、思いを飛ばしてみる。

／／マスタート？／／

返事はない。この暗闇とも言えるダークサイドのフォースに覆われているのだ。彼の声が届かない可能性もある。また、彼が弱っているせいもあるかもしれない。

軽く頭を振り溜め息を漏らすと、少年は再び歩行を開始した。出きる限り速く。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ザナトスはじつと見つめた。この部屋に生きている者のいる気配は微塵も無い。

クツクツクツという忍び笑いが徐々に高笑いに変わった。

「こんなに簡単にいくとはな。お前の死にざまがこの目で見れなかったのが残念だが、まあ、いいだろう。次はあいつの番だ」

ザナトスは踵を返すと、柵がそびえていた場所におもむき壁を触

る。するとその部分がスライドし暗い口を開けた。足を踏み入れようとする。

その時。

「安心するのはまだ早いと思うが？」

静かで落ちついた声が聞こえ、ザナトスはギクリとして振り返った。

「どこだ、どこにいるっ!？」

周囲を見渡すが声の主は見つからない。

「大地にばかり縛りつけられることはない。たまには天空を見上げるのも良いものだぞ」

若干笑いを含めた言葉に、ザナトスは急いで視線を上に向けた。

天井にぽっかり開いたその巨大な穴。

その縁に片足をかけコルサントの月の光を背に、浮かび上がる人影があった。

茶褐色の髪が夜風にそよぎ、宇宙の深遠、海をも思わせる澄んだ双眸が煌き、精悍なる顔つきに微笑みが浮かぶ。

「クワイールガン!!何時の間にも!？」

驚愕の表情を向けるザナトスに、偉大なるジェダイ・マスターは微笑を保ち腕を組んだまま口を開いた。

「この部屋に入った時から何か仕掛けはあるとわかっていたからな。爆発が起きた瞬間、ブロックの塊を避けながら天井に跳躍したという訳だ。都合よく埃が目くらましになってくれたが」

歯軋りをするとザナトスは言い放った。

「今度こそ殺れっ!!」

ドロイドがその指令により動き出すのを認めた後、

「また後で会おう、クワイールガン」

凄みを帯びた笑みを見せ、青年は壁に出来た暗闇の中に身を躍らせた。

跳んでくる光弾を、クワイールガンは瞬時に起動させたセーバーで弾き返す。

返されたレーザーがドロイドを貫く。

ジエダイ・マスターは跳躍すると青き光を一閃し、ドロイドを縦に真つ二つに切り裂いた。

軽やかに着地し腰を捻ると右横から薙ぎ払い、返す刃で左下から切り上げる。

体を一回転させるとドロイドの胴に横から叩きつけた。

残り1体を視界の隅に見とめ、右手を突き出す。

ドロイドは吹っ飛び壁に激突すると、ガレキの山の上に転がった。しばし周囲に視線を向け次の攻撃に備えていたが、ようやく緊張を解くとクワイガンはザナトスが飛び込んだ壁の入口に近寄った。

全くの暗闇。何も見えない。どこに繋がっているのだろうか。

しかし、躊躇いもせずクワイガンは飛び降りた。

跳躍時間は長くはなかった。すぐに彼の足は固い物の上に着地した。

ライトセーバーの明かりを頼りに周囲を窺う。

(この部屋は見たことがあるような気がする)

何もないこじんまりとした暗き部屋。

(もしかしたら ——)

不意にその思考は遮られた。赤い光に。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

フォースを伸ばしながらゆっくりと慎重に、しかし、内心酷く焦りながら階段を上る。

思う通りに動かない体がもどかしい。気持ちだけが先行しそうだ。

(落ちつくんだ、マスターだったら大丈夫)

オビワンは自分に言い聞かせ、階段を上りきる。

すると足元にはもつれ合うように重なり倒れているドロイド達。

1体はローブを、多分クワイガンの物だろう、被っている。

彼のマスターは策を弄するザナトスの罠を無事に潜り抜けているようだ。

ひとまず安心し、しかし、先ほどの轟音が気になり、再び表情を引きしめる。

少年は通路を歩き、最初の部屋を覗き込んだ。

前方を見た瞬間、オビIIワンの顔がこわばる。
彼にブラスターの狙いを定めて、暗殺ドロイドが3体立っていたか
らだ。

オビIIワンは唾を飲み込み、右手に持ったセーバーを見つめる。マ
スターのライトセーバー。

彼は意を決すると素早くスイッチを押した。

第11話 手負いの反撃

ドカンッ!!

再び館を振動が襲う。

ザナトスの刃を辛うじて躲したクワイ||ガンは、不安な面持ちで音のした方を見あげた。

二階からだ。何が原因で爆発が起こったのだ？

不意に傍らからクスクスと笑う声が聞こえる。

「あいつも馬鹿だよな」

聞き捨てならない言葉に、クワイ||ガンは真剣な表情をして元弟子に視線を移す。

「どういうことだ？」

「ライトセーバーさ。あんたがセーバーを落した後、俺はあのセーバーに細工をしたんだ。スイッチを押すと爆発するようにね」

「何だど？」

「さつきあいつがスイッチを押そうとした時、忠告してやったのに、それでも押すとはね。これで俺の復讐の一つは適えられたということだな」

(まさか、そんな・・・)

クワイ||ガンは無理矢理、心を静めるとフォースを通じて呼びかけた。

／／オビ||ワン。オビ||ワン？／／

答えはない。

唇を強く噛み締めると、クワイ||ガンはそれと知られぬよう部屋から出る道を模索し始めた。

その視界を不意に影が過ぎり、ジェダイ・マスターは起動したセーバーで攻撃を受け止める。

赤いセーバーに力を込めながらザナトスは嘲笑った。

「どうした？集中力を欠いているようだが？」

クワイ||ガンはその言葉に顔をしかめると、グリップを力強く握りセーバーを弾き飛ばした。

そして、後ろに飛びずさり間合を取る。

瞬間、二階からブラスターの連射が聞こえてきた。

「どうやら、とどめを刺しているみたいだ」

ザナトスの含み笑いにクワイⅡガンの不安は増大した。

彼は突然、攻撃に転じ、右八双にセーバーを構えると、元弟子に青きセーバーを打ち込む。

セーバーを振り払うと、体勢が崩れたザナトスに向けてフォースを叩きつけた。

壁に向かって飛ばされたザナトスを尻目に、先ほど見つけた入口へと駆け出す。

気がせいていたために、突如、襲ってきた危険に気づいて身を避けるも間に合わず。

回転して飛んできた赤い光刃がクワイⅡガンの右肩を掠める。

激痛が走り、ジエダイ・マスターは苦痛に顔を歪めると傷口を押えた。

思わず片膝をつくも、その眼ざしだけは光を失わず元パダワンをじっと見つめる。

セーバーを手元に呼び寄せると、ザナトスは薄ら笑いを浮かべた。

「この館があんたと弟子の墓場になりそうだな」

素早くフォースを注ぎ激痛を中和させる。それでも痛みのみあまり右手が震えていたが、グリップを握り締めるとクワイⅡガンは静かに立ち上がった。

そして、青年に向き直る。

「あいつのことなんか心配している暇があったら、自分の心配でもするんだな」

ザナトスは言い捨てると真正面から向かってきた。

その姿が不意に消える。

彼は一瞬のうちに跳躍し宙返りすると、落下の勢いを含めてクワイⅡガンに切りかかった。

ジエダイ・マスターは両手で防ぐも、右肩に走る激痛に体勢を崩しかける。

それでも背後に回ったザナトスにセーバーを振り払った。
青年は軽々とその攻撃を受け流し、逆に赤き光刃を叩きつける。
辛うじてそれをかわすとクワイⅡガンは後退した。

(痛みには囚われるな。この一瞬に集中するのだ)

心を落ちつかせるとフォースに身を任せた。暖かな流れが自分を
取り巻くのがわかる。そして、傷を癒し始めていることも。

ジェダイ・マスターは知らず知らず閉じていた瞳を開けた。

視界に映る範囲にザナトスの姿はない。

しかし、クワイⅡガンは慌てず後方に跳ぶと、突如現れた赤きセー
バーの切っ先を紙一重で躲す。

そのまま体を横回転させセーバーを叩き込んだ。

怪我をしていると思われぬその力強さに、ザナトスの受け止めた
手が痺れる。

ここぞとばかりにセーバーを切り下ろすクワイⅡガンに向け、元弟
子はニヤリと笑った。

右手を突き出しフォースを叩きつける。

吹き飛ばされはしなかったものの、クワイⅡガンは壁際まで後退を
余儀なくされた。

青年の笑みが深まった。

その瞬間、クワイⅡガンの脳裏を考えが過ぎった。

(この部屋はあの時の)

ヴォルンスクルーの部屋に落とされたときの記憶が蘇る。

ザナトスが壁に埋め込まれたアクセス・パネルをフォースで操作し
た。

すかさず床が横にスライドする。

だが、クワイⅡガンはそこにいなかった。

驚き見渡すザナトスの視線が壁に吸い寄せられる。

ジェダイ・マスターは高々と跳躍し、壁にセーバーを突き立て落下
を防いでいた。

セーバーを引き抜きつつ壁を思いつき蹴って身を躍らせる。

そして、空中で回転するとザナトスに向けて切りかかった。

だが、ザナトスは笑みを浮かべて待ち受ける。

このままいくと相打ち。もしくはは体勢を変えられないクワイⅡガンが不利——

刹那。

ザナトスは危険を感じ体を反らせた。

鼻先を別のセーバーが回転しながら飛び去っていく。

青年の目が驚きにより大きく見開かれた。

その隙をクワイⅡガンは見逃さなかった。渾身の力を込めて青きセーバーを振り下ろす。

受け損ねたザナトスの右手に激痛が走った。

「ぐっ……」

痛みに顔をしかめ左手で火傷を押える青年に、着地しぎまクワイⅡガンは体を捻るともう一撃を加える。辛うじて受け止めたもののザナトスは、その勢いに押され気味になっていた。

ジェダイ・マスターは握る手に力を込めるとセーバーを振り切る。ザナトスは飛ばされると壁にぶつかり、そのまま床の穴に落ちていった。

クワイⅡガンは壁のアクセス・パネルに素早く近づき、しかし、操作方法がわからず一瞬首を傾げる。が、すぐに悪戯っぽい笑みを浮かべると、1, 2歩下がってセーバーを振りおろした。アクセス・パネルは途端に火を噴き、ついでに床のスライドも口を閉じた。

「ヴォルンスクルーに遊んでもらうと良い。但し、命懸けだがな」

ニヤリと笑みを浮かべると、クワイⅡガンはすぐに視線を部屋の入口に向けた。

「よく……無事だったな、オビⅡワン」

感慨深げに言葉が放たれる。

舞い戻った緑色に光るセーバーを手にし、入口にもたれ掛かっていた少年は視線を返した。そして、荒い呼吸の中で微笑む。

「マスターこそ……無事で安心しました」

しかし、すぐに眉をしかめた。

「……右肩に火傷を……」

クワイⅡガンは、焼け焦げたチュニツクの間隙から見える傷口に視線をちらりと走らせると、苦笑を漏らした。

「ちよつとした怪我だ。これぐらいは何でもない」

とてもそうは見えなかったが、この件について師と争うつもりはオビⅡワンにも無かった。

もともと頑固な人だし。と思うに留めて。

そんな弟子の気持ちを知ってから知らずか、クワイⅡガンは真剣な面持ちで口を開いた。

「さて、ザナトスがここから脱出する前に、この館から抜け出すとしよう」

「しかし、ザナトスを止めないとっ!!」

「いや、オビⅡワン。お前の手当てが先だ。これだけは譲るつもりはない。いいな?」

「・・・はい、マスター」

不承不承頷いたパダワンに苦笑しつつ、師は弟子に近づくと愛情のこもった仕草で軽く肩を叩いた。それから少年を促し、二人は心持ち急ぎながらその場を離れた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

爛々と輝く赤い眼が獲物を狙っている。時々唸り声さえも発しながら、ぐるぐると徘徊していた。ヴォルンスクルーの群れは、今やこの部屋に落ちた哀れな犠牲者に飛びかかろうと身構えていた。

赤いセイバーで周囲を照らしザナトスは鼻で笑った。

「全部殺していったかと思ったら、必要最低限度の攻撃しかないとは。骨の髄までジェダイ・オーダーに染まっているらしい」

5, 6匹、痛むのかうずくまっている獣達はある。しかし、皆、生きていた。

そして、その怪我をした獣達の共通点。

(あいつ、弱点を知っていたのか)

夜行性で頭部が犬に似た狂暴な生物ヴォルンスクルーは、フォースを持つ者を異常に嫌い、襲う性質がある。また、その鞭のような尾には弱いながらも毒があり、触った者を痺れさせる効果があった。だ

が、その尾は弱点にもなり得た。尾を切ってしまうえば、激しいほどの狂暴性が損なわれるのだ。損なわれると言っても前に比べたら、との意味合いだが。

故に、地面に横たわってじっとしているヴォルンスクルーには尾がなかった。

クワイーガンが尾を切断し、ここを通り抜けていったことは明白だった。

(俺はそんなまどろっこしい方法は取らない)

フツと笑みを浮かべると、ザナトスはダークサイドのフォースを体から強烈に発散させた。途端、今まで虎視眈々と狙っていた獣達は尻込みし、避けるように部屋奥へと逃げていく。

含み笑いを漏らし、ザナトスは悠々と肉食獣の間を縫って歩いていった。

時折り恐怖に駆られる余り攻撃してくる獣もいたが、血飛沫を撒き散らしたに過ぎなかった。

ヴォルンスクルーの群れを抜けると、彼は憎悪に彩られた顔をいつそう濃くし駆け出した。暗闇に向けて。

第12話 砕かれた希望

「こっちです」

オビIIワンの指示で入口を抜けるとそこはロビーだった。

この館に到着して最初に足を踏み入れた場所。そこに二人は戻ってきていた。暗闇から出てきた身には、ロビーの明るさが人心地をつかせてくれる気がする。

「そうか、私は二階から直接壁の間を通りぬけて、あの部屋に行ったのだが」

その言葉を継いで、疲れた息の下から少年が続けた。

「僕は二階からロビーの階段を降りて・・・あの部屋まで・・・辿り着いたんです」

師は弟子に心配そうな眼ざしを向けた。

弟子はそれに気づきながらも、逆に微笑み返して両手をそっと差し出した。その手の平には光刃を消した師のライトセイバーが乗っている。クワイIIガンは柔らかな笑みを浮かべて受け取ると、逆に弟子のライトセイバーをオビIIワンに返した。

そして、ジェダイ・マスターは不思議そうに自分の聖なる武器を見つめる。

「私のセイバーに爆弾が仕掛けられていると聞いたが。あれは嘘だったのか？」

オビIIワンは軽く頭を振って応えた。

「いいえ、本当でした。・・・大広間で傷を癒した後、セイバーを分解したんです。・・・そうしたらスイッチと連動して爆弾が・・・仕掛けてありました。爆弾だけ何とか取り外し、・・・でも、一応持っていたんです。何かに使えるかもしれないと思って」

「それを使ったのが、あの二度目の爆発の時ということか」

少年は頷きニヤツと笑った。

「・・・ドロイドが待ち構えていたので・・・フォースで起爆装置を押して爆発させました。その後は・・・ブラスターの光弾を残ったドロイドに打ち返して・・・何とかここまで来たんです」

言い終わり少年は、不意に思いついたことに気を取られ床に視線を落とした。

今朝見たあの悪夢が原因で、シーカー相手にレーザーを打ち返す訓練をしたことがこんな所で役に立つとは。しかし、訓練室に行かなかつたらザナトスにさらわれるなんてこともなかったかもしれない。何とも言えず皮肉なものだ。

一方、クワイⅡガンは感心したといった風な表情を浮かべ弟子を見ていた。彼も知らないうちに少年はどんどん強くなっている。

だが、今はそんな感傷に浸っている場合ではない。

ジエダイ・マスターは館の玄関に視線を移し、ややあつて眉間に皺を寄せた。

フォースで探るまでも無い。

玄関の扉は内側からは絶対開けようもない構造になっていたのだ。

「僕が閉じ込められていた・・・あの監房と全く同じですね」

溜め息を漏らしつつオビⅡワンが呟く。

内側には手をかける場所の類は全く無い。外側から、もしくはコントローラーがないと開かないのだろう。且つ、ちゃんとした手続きを踏まないと爆発する仕組みになっているらしい。道理でクワイⅡガンが訪れた時、自動的に扉が開いた訳だ。こういった仕組みになっていることをその時は悟られなくなかったと思われる。

クワイⅡガンは青年の言葉を思い出した。

「玄関の扉には正しいパスワードを入力しないと爆発する仕掛けがついている

——あんたに敬意を表してパスワードを教えてやるよ

(中から開けられないのなら、元々ザナトスは、私にパスワードを教えなくても意味がないと知っていたということになる。それなのに、パスワードを教えるそぶりをするとは・・・)

ジエダイ・マスターは沈痛な表情をした。

(彼が悔い改めればと思っていたが、もう無理なのかもしれない)

「マスター？」

心配そうなオビⅡワンの声でふと我に返ると、クワイⅡガンは苦笑

し溜め息をついた。

過去に縛られるな。未来に目を向けよ。

気持ちを切り替えるとクワイールガンは静かに言った。

「他に脱出方法を考えよう」

「マスター、僕はパスワードなら・・・知っていますが」

師は驚いた。

「どうして知っているのだ？」

「僕がいた監房に・・・食事を届けてくれた人から”聞いた”んです。・・・この館にあるアクセス・パネルのパスワードは・・・全て統一されているということも。しかし・・・」

少年の顔は見る見る曇った。

「外にアクセス・パネルがあるんだったら無理ですね・・・」

「それだったら解決策がある」

クワイールガンはニヤリと笑った。

☆☆☆☆☆☆☆☆

突然、電子音が鳴り響く。

ただでさえ静寂しか支配しないこの中で、この電子音は心臓に悪かった。

浮揚車ホバーカーの操縦士はビックリと飛び起き、慌てて通信機コムリンクを掴む。バクバクする鼓動を押えつつ何とか返事をした。

「は、はい、レンダーです—— おお、マスター・ジェダイ、無事だったんですね!!心配して—— はい?あ、はい。—— わかりました。館の扉まで行けばいいんですね。着いたらまた連絡します」

レンダーと名乗った青年は車から出ると思いつきり伸びをし、照明棒グロウ・ロッドを掴むと颯爽と館に向かった。

☆☆☆☆☆☆☆☆

クワイールガンの通信機コムリンクが不意に鳴った。

「ジンだ」

「レンダーです。ただ今、着きました」

浮揚車ホバーカーの操縦士の声が返ってきた。

「扉の近くにアクセス・パネルがあると思うが？」

『アクセス・パネルですか？え——と、あ、ありますね』

「そこに今から言うパスワードを入力して欲しい」

クワイⅡガンはオビⅡワンに通信機コムリンクを手渡した。

少年は頷くと、一語一語区切るようにゆつくりと言った。

「D・A・R・K・N・E・S・S。Darknessくらやみです」

しばらく扉の向こうで何やら操作するような音が聞こえた。

緊張の一瞬が過ぎ去る。もし、パスワードが違っていたら——

オビⅡワンはゴクリと唾を飲み込んだ。

アクセス・パネルが操作しにくい状況になっているのだろうか。それともパスワードを入力する前に別のパスワードを聞かれるのか？それとも、それとも？

レンダーからの連絡も無く、やや緊張感を強いられた状態に陥っていた二人は、両開きの扉がゆつくり左右に開き始めたのを見て、顔を見合わせて安堵の余り微笑んだ。

しかし、その笑みはすぐさま固まった。

二人の視線の先には、燃え上がる浮揚車ホバーカー。

そして、その炎に彩られるように、憎悪の瞳を持ち不敵に微笑むザナトスの姿があった。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「残念だったな。これでお前達の生き残る術は絶たれたという訳だ」

愕然とする少年と眉根をひそめている元師に向かい、ザナトスは館に足を踏み入れながらクスクスと笑った。

凍りついたような空気が漂う。

それを破ったのはクワイⅡガンだった。

「レンダーはどうした？」

「さあ？フオースで突き飛ばしたからな。運が良ければ生きてるよ」

薄ら笑いを浮かべザナトスはロビーを歩く。そして、嬉しそうに言葉が続けた。

「いいことを教えてやろう。この館はあと20標準分ほどで全てが爆発する」

ハッと息を飲むオビⅡワン、それから表情の変わらぬクワイⅡガン

に順を追って視線を移動させると、ザナトスは含み笑いをしていた。

「それからもう一つ。パスワードは変えた」

言葉が与えた衝撃の余韻を楽しみながら、ザナトスは懐からコントローラーを取り出す。

そして、それを思いつき握り潰した。

「これで内からも外からも扉を開けるのはもう無理だ。絶対絶命だな」

破片が床に零れ落ち、それと共に師弟の希望も粉々になっていくように思われた。

館の扉は今、ゆっくりと閉まり始めていた。

クワイⅡガンは元パダワンを悲しみの表情で見つめ、オビⅡワンは扉を開けたままにできないか周囲を模索し始める。

ついにジェダイ・マスターは決断した。

すかさずセイバーを起動するとザナトスに打ちかかる。ザナトスに攻撃を阻まれた所で右手を差し出し、フォースを叩きつけた。

オビⅡワンに向けて。

不意を突かれた少年はその勢いのまま宙を飛び地面に転がった。そこは館の外。

マスターの意図に気づき慌てて体を起こすと、必死の思いで立ち上がり扉に向かって駆け出した。

一瞬、師と弟子の眼ざしが交差し——しかし、その目前で分厚き扉は音を立てて閉まった。

「マスター、マスターっ!!!」

少年の悲痛な叫びと、扉を空しく叩く音だけが辺りを震わせた。

There is no emotion; there is peace.

残り20標準分

第13話 残り20分・・・

「随分と優しいんだな」

クスクスと笑う青年を意にも介さず、クワイⅡガンは扉に釘づけになつていた愛情と寂しさが混じった瞳をゆっくりと転じ、ようやくザナトスを視界に捕えた。

「大切な者を、未来を守ろうとしただけだ」

「あんたが死んだら、その未来とやらも消え失せるだろうよ。俺が手を下すまでもない、自らね」

鋭い指摘を受けクワイⅡガンの表情に影が過ぎった。だが、しばらくして静かな声で応える。

「それはどうかな？彼を甘く見ない方がいい」

「俺も甘く見ない方がいいぜ。あんたに教わっていた時よりいろいろと学んだんだ。覚悟するがいい」

ザナトスはセーバーを起動した。憎しみの眼ざしとともに赤く禍禍しい光が輝く。

(どこをどう間違えたのか。私は師としては失格なのかもしれないな)

幾分自虐的な笑みを見せ、すぐに真剣な表情に変えると

「お前を止めてみせる。例え刺し違えてでも」

手に持つ感触を少し懐かしみながら、クワイⅡガンはセーバーのスイッチを入れた。緑色の輝きが現れる。

瞬間、二つのセーバーは噛み合っていた。

☆☆☆☆☆☆☆☆

ずるずると扉を伝って地面に崩れ落ちる。

涙が溢れそうになる所をぐつと堪え、両手両膝をパーマクリートの地面につけると少年は悔しさに体を震わせた。

(マスター・・・)

ザナトスの言葉が頭の中を巡る。

「この館はあと20標準分ほどで全てが爆発する

内からも外からも扉を開けるのはもう無理だ

(いや、諦めるな。何とかしてマスターを助ける方法を考えるんだ)
オビⅡワンは拳で涙を拭い、傷の痛みを押えて立ち上がる。不意に彼は思い出した。

(そうだ、通信機……っ)

通信機は地面に転がっていた。フォースで飛ばされた拍子に手から離れたのだろう。

すかさずそれを拾い上げると、急いで少年は周波数を設定した。

『はい?』

声が聞こえた瞬間、居たたまれない思いが込み上げてきて、オビⅡワンは矢継ぎ早やに言葉を発した。

「僕だ、お願いがある。……助けが必要なんだ、無理なことはわかってる、でも、マスターが……マスターが、あと20標準分で爆発する家に閉じ込められて……。それまでに助けてくれそうなジェダイ・マスターを見つけて……。武器も……壁を破壊できる武器も……。どうか、お願いだ、マスターを……」

あとは感情が高ぶって言葉にならず、ひたすら通信機を握るしかない少年の耳に、ややつて声が聞こえた。

『……貴方……オビⅡワンね?』

その落ち着いた声にオビⅡワンは一瞬にして顔が赤くなった。

(バントじゃないっ!?)

動揺を抑え切れない彼は、通信機から聞こえる声にしばらく気づかなかった。

『——Ⅱワン?オビⅡワン?』

「あ、はい」

『落ちつきなさい。貴方が落ちつかないでどうするの?』

「……す、すみません」

『いい?今から言うことに落ちついて応えなさい。まず貴方はどこにいるの?それから、どういう状況なの?』

一種の興奮状態から醒めてくると気が緩んだのか、急激に頭が朦朧としてきた。ドロイドとの闘いで精も根も尽き果てた気がする。

途切れそうになる思考を何とか纏め、オビⅡワンは声を出した。

「僕達はマナライ山脈の頂上から下った・・・荒れ果てた館にいます」
(玄関の扉が開くまでの間、マスターが現在地を教えてくれた。確かそう・・・言っていた)

心は焦りながらも思うように言葉が続かない。

「そして、ザナトスが・・・マスターを館に閉じ込めてしまいました。・・・内からも外からも開けることができません・・・それで・・・」
言葉が不意に途切れ、心配そうな声が沈黙を破る。

『—— オビⅡワン？どうしたの？オビⅡワン？』

「大丈夫です。それで・・・あと20標準分ほどで館が・・・」
言いかけた言葉を相手が素早く遮った。

『爆発する訳ね。わかったわ。マスター・ヨードに伝えている暇はないし、いいわ、全て私に任せなさい。すぐにそこに行くわ。今すぐ出れば超高速シャトルだったら15標準分もかからずに行けるでしょう。ところで、オビⅡワン、貴方、本当に大丈夫？怪我をしているの？』

「だ、大丈夫です。それより早く・・・」

コムリンク
通信機の向こうで軽い溜め息が聞こえた気がした。そして、幾分優しさが混じった声が返ってきた。

『オビⅡワン、できるだけ早く行くけど、貴方もできる限りのことをしなさい、ジェダイとしてね。フォースと共にあらんことを』

言い方は厳しかったが、気を張らせることにより意識を保たせる狙いがあったのかもしれない。そして、それは十分に効果を発揮していた。

「あ、あの、貴方は一体・・・？」

問いかけた時には、コムリンク
通信機は既に切れていた。

オビⅡワンはしばらく荒い呼吸を整えていたが、先ほどの相手の言葉が耳から離れなかった。

—— ジェダイとしてできる限りのことをしなさい

(助けが間に合うかわからない。なら、僕が何とかするしかない)

無理矢理、気力を振り絞り絞り扉を見つめる。

(できることはただ一つ・・・正しいパスワードを見つけ出すことだけ

だ。でも、どうやって・・・?)

There is no ignorance; there is
knowledge.

残り15標準分 |

第14話 残り15分・・・

ザナトスがセーバーを弾き返す。

一旦分かれると、両者床を蹴り前方に飛び出した。

出会いざまクワイⅡガンは緑色に光るセーバーを切り下ろす。

と見せかけ手首を捻ると右横から薙ぎ払った。

青年は跳躍してそれをかわすと、凄みを帯びた笑みを見せつつ落下の勢いを込めて振り下ろす。

ジェダイ・マスターは片膝について両手で攻撃を受け止めた。

クスクスと笑いを漏らしザナトスはセーバーを再び叩きつけ、後方に跳び退く。そのまま走り去った。

ゆつくりと立ち上がりクワイⅡガンはセーバーを構えると、あとを追う。

過去を断ち切るべく。ここに過去を封印しようと。自らの命をもつてしても。

いつの間にか、二人の鬪いの方は大広間へと戻っていた。

左右を隔てる透明スチールトランスパリスチールの壁さえも生々しいその部屋に。

赤い光が一閃する。

クワイⅡガンはそれを半身にかわした。

すぐさま回転しザナトスの突き出された右手に、左の手刀を叩き込む。

流れるような動作で青年の懐に入ると、肘を相手の鳩尾目がけて突き出した。

傷めていた手が痺れセーバーを落したザナトスは、辛うじて肘を避けたに過ぎず。

体を返しながらい飛んできた足蹴りには対応できずに、両膝を床についた。

クワイⅡガンは見下ろした。かつて弟子だったその者を。ややあつて静かに問う。

「まだ鬪うつもりか？」

ザナトスはキツとまなじりを決し睨みつけた。そして、言い放つ。

「俺は絶対あんたには従わない。弟子だった頃からあんたの融通が利かない性格には辟易していたものさ。・・・何故小さい頃、俺を父親から引き離れたんだ？あんたが俺を見つけて出してさえないなければ、父親の持っていた莫大な富は俺のものになったのに」

不意にザナトスは、どうしようもできないことを吹っかけてきた。ジエダイ・マスターにだって過去を変えることなどできる訳はないというのに。

彼が饒舌になる時は疲れてきた時だ、と経験からクワイ||ガンは知っていた。

内心でも

(ジエダイとして修行させることはお前の父親も了承したことだ、その時は)

と沈痛な思いを巡らせたがそれについて口には出さず、宥めるように、昔、師弟として会話をしていた時のように、ジエダイ・マスターは穏やかに応えた。

「お前のミディ||クロリアン値が高く、その上、賢く優秀だったからだ。未来のジエダイを担うようなナイトになるだろうと信じていた」「ハッ、あの緑のチビだって俺の本質を見抜いていた。あんたは最後の最後までお人好しだったんだよ」

最後の最後までという言葉が心に引つかかったが、構わずクワイ||ガンは本音を漏らした。

「お前を信頼していたのだ。真実に気づかなかった。いや——— 気づきたくなかったのかもしれない」

「だから甘いって言うんだよ。こうして俺に対して説教しようとしていることもさ」

冷笑を浮かべザナトスは手にセイバーを呼び戻し、素早く手首を捻ると起動した。

肉の焼ける臭いが漂う。

呻き声がクワイ||ガンの口から漏れ、彼は耐え切れず片膝をつき傷口を押えると激痛に震えた。

出現した赤きセイバーはかすめ、肉と筋に激しい損傷をもたらして

いた。クワイⅡガンの右肩に。再び。

「よく避けたな。避けていなければ貫いていたところだ」

体を起こすとザナトスはニヤリと笑った。

「相当きつきまで痛かったんだろう？右手が上がらないくらいに」

隠していたが見破られたようだ。クワイⅡガンは歯を食い縛った。痛みはズキズキと広がり右手の握力は全くなくなっている。それでも蒼き双眸は光を失ってなかった。

ザナトスはセーバーを振りかざした。

「これで終わりだな」

☆☆☆☆☆☆☆☆

（よく考えるんだ。チャンスは一度きり。間違える訳にはいかない）

扉に寄りかかり玄関先に座り込むと、オビⅡワンは焦りに苛まれながら必死に考えた。

目の前にはひたすら枯れ果てた樹木と深い闇が広がっている。茫然と視線を上げると、無数の星々が吸い込まれそうな暗闇を背景に瞬いていた。

（最初のパスワードはDarknessだった・・・）

それは今のこの状況を表していた。館の周囲も、館内も、そして、監房の中も暗闇だった。

全てに捻りを利かせるザナトスのこと。パスワードと引つけていたに違いない。

オビⅡワンは思考をはっきりさせようと努力した。これにはマスターの命が懸つている、そう考えると集中力が増してくる。

（でも、今は？・・・彼はパスワードが変わるかもしれないなんて考えたことがあった？）

もし、考えていたら、もうそれはオビⅡワンには思いもつかない言葉のはずだ。

しかし、考えていなかったら？——不意にパスワードを変えざるを得なかったら？

ザナトスは、オビⅡワンがクワイⅡガンの助太刀に現れるとは思っていないはず。そして、彼にとってあの穴に落ち、どこをどう

通ったかは知らないが、外から館に舞い戻ることになるなんて考えもしなかっただろう。

しかも、オビⅡワンがパスワードを知っているなんて思いも寄らなかったはずだ。自意識過剰な彼としては。オビⅡワンを見下していたあの青年としては。となると彼は、急にパスワードを変えるしかなかったことになる。

これまでの仮説が合っていることを祈りつつ、オビⅡワンは再び深く考えた。

(それなら変えられたパスワードは？その時の状況を反映していた？)

オビⅡワンは扉に手を当て支えにしながら、ゆっくりと立ち上がった。

(一つだけ今の状況にぴったりの言葉がある)

彼はアクセス・パネルに近づいた。監房のアクセス・パネルを操作した時のように軽く押すと、パネルを覆っていた蓋が持ち上がりディスプレイとキーパッドが現れる。

少年は入力ミスが無いように確認しつつ言葉を打ち込んだ。

(もし、これが間違っていてこの扉が爆発したとしても、マスターの逃げ道は確保される)

悲観的な中での唯一の希望に、オビⅡワンの顔にも自然笑みが浮かんだ。

(まるで惑星バンドミニアの時みたいだ)

彼は入力し終わると、躊躇いもせず『実行キー』を押した。

There is no passion; there is serenity.

残り10標準分

第15話 残り10分……

ドカンッ!!

数秒後にも。

ドカ——ンッ!!

あちこちで爆音が鳴り響き、天井がガラガラと崩れ始めた。

「この館が爆発するには……まだ早くないか？」

脂汗をかき苦痛に堪えながらも、青年の計算違いにクワイⅡガンはニヤリと笑みを浮かべる。

しかし、ザナトスはそれを嘲った。

「最後の爆発が起きるのが20標準分後と言ったんだ。連鎖して爆発が起きるようになってきているのさ。ま、今すぐここで死ぬあんたには関係ないだろうが」

荒々しく言い捨て、憎悪に取りつかれた男はセーバーを勢い良く振り下ろした。

ビィィィ——ン

火花が散り、その攻撃は阻まれる。

クワイⅡガンはセーバーを持つ左手に力を込めると、徐々に押し上げつつには立ち上がった。

急激に相手のセーバーを弾き、体勢の崩れたザナトスの腹に足蹴りを入れる。

青年は吹っ飛ばされ、体を折り曲げながらも辛うじて立っていた。

素早く走り寄ると、クワイⅡガンは右肩が悲鳴を上げるのも構わずザナトスの顔に裏拳を叩きつける。

今度こそザナトスは宙を飛び壁に激突した。

痛みに顔を歪めながら見上げるその視線の先に、緑色のセーバーの切っ先が浮かんでいる。

喉元にセーバーの先を近づけてクワイⅡガンは静かに再び問うた。

「まだ……闘うつもりか？」

瞬間、ザナトスの憎悪が爆発した。

暗き力が巻き起こり辺りを覆い尽くす。深い激怒、強き憎悪。これ

ら感情が荒れ狂い、周囲に落ちていたブロックや壁の塊を吹き飛ばす。

立ち上がり、ザナトスは唇から流れた血を拭いさると、怒りに肩を震わせながら吐き捨てた。

「これで俺に勝ったと思っただけ大間違いだ。俺はあんたにだけは負けない。あんただけは許せない。俺の大切なものを壊し、何もかも奪い去ったあんただけは……っ」

ジェダイ・マスターの顔は沈痛な面持ちに包まれた。そして、彼は静かに問う。

「……父親を殺したことを恨んでいるのか？」

不意にザナトスは怒りに彩られながらも冷笑を浮かべた。

「父親？ そんなことはどうでもいい。本来、俺が持つべき富が奪われたことが悔しいんだ。惑星から採掘した父親の莫大な富。あれだけの財産があれば全てを俺の意のままに、銀河さえも操れたのに。聖堂に引き取ったことで、ジェダイがその機会を奪った。俺をジェダイ・ナイトとして認めなかった緑のチビも、それにあんたも含めて、ジェダイは許せない」

その言葉はクワイーガンの心臓をナイフのようにえぐった。

（私は彼を弟子として育てていた時、何を見ていたというのだ？ 私は彼を心から信頼していた。しかし、彼は私に心を開いていなかったということか？）

だが、そんな思考に埋没している暇はなかった。

ドカンッ!!

また爆発音が響く。

大広間は崩れ落ちる天井や、ダークサイドのフォースにより飛び回るブロックの塊で壊滅状態に陥っていた。

埃や塵で白く覆われた部屋の中で、フォースを頼りに落ちてくる物体を避け、クワイーガンは相手の姿を頻りに探した。

黒い影を視界に捕えたと思った時には遅かった。

背中に蹴りをくらい、その反動で飛ばされる。床にぶつかつた際、右肩を強打し痛みでうめいた。手から離れたライトセーバーが転が

る。

何とか仰向けになった途端、クワイⅡガンは辛うじて左に回転した。

右横の床に赤いセーバーが突き刺さっている。

もうこれ以上、左に避けることはできない。巨大なブロックの塊が邪魔をしているからだ。

右肩が焼けるように痛い。痛みをフォースで中和させようとしても集中力が保てない。

ぼんやりとした視界に、勝ち誇った笑みを浮かべセーバーを構えるザナトスの姿が映る。

(すまない、オビⅡワン・・・)

ジェダイ・マスターはゆっくりと瞳を閉じた。

赤きセーバーが振りおろされた。

顔に熱さを感じる。

クワイⅡガンは熱を感じたことに驚いた。まだ生きているのか？

双眸を開けると、すぐそこには赤きライトセーバー。

それを阻むかのように噛み合わされた青いライトセーバー。

青いライトセーバー？まさかオビⅡワン!?

濁った意識が急速に晴れていく。クワイⅡガンは視界をはつきりさせ、そのまま目を大きく見開いた。

そこに立っていたのは、紛う事なき彼のパダワンだった。

オビⅡワンは有らん限りの力を振り絞りセーバーを振り上げた。

弾かれてザナトスはよろよろと後退する。

二人はしばし睨み合った。

「どうやってここまで来たか知らないが、よくやったと誉めてやるべきなんだろうな」

疲れを顔に貼りつけたままザナトスが嘲った。

「パズワードがわかったんだ・・・。絶対わからないと思っていた・・・だらうけど」

肩で大きく呼吸をしながらオビⅡワンが応える。

鼻で笑うとザナトスは少年を目を細めて見た。

「あのまま逃げれば良かったものを。師と一緒に死にたいという訳か？いいだろう。その望み、適えてやる」

「そうはしません」

クワイⅡガンは痛みを堪えゆつくりと立ち上がった。すぐ左手にセーバーを呼び戻す。

「マスター!!」

安堵が混じった嬉しそうな少年の声が響く。

師は弟子の傍らに立ち、ザナトスに向かい合った。

青年は鼻を鳴らすと、オビⅡワン目がけて飛びかかる。

と見せかけクワイⅡガンの右肩を狙った。

半身にかわし左手のセーバーで受けとめると、ジェダイ・マスターはセーバーを横に振り払う。

低くかがめながら体を一回転させると、ザナトスの足元狙って薙ぎつけた。

ザナトスは宙返りし着地しざま、セーバーを正面に突き出す。

執拗に彼の右を狙って攻撃してくる元弟子に顔をしかめながらも、クワイⅡガンは辛うじてそれを弾き、後ろに退いた。

そして、ちらりと視線を横に走らせる。

(オビⅡワン?)

弟子は隙あらば攻撃に転じようとはしているものの、集中力が途切れかかっているのは傍目にもわかった。

(このままでは危険だ。ザナトスは彼を倒しにかかるだろう)

力を振り絞るとクワイⅡガンは気合を込めザナトスに撃ちかかった。パダワンから離れるべく。

ライトセーバーを握る手が極度の疲労から震えている。

だが、彼はこれを黙って見ている訳にはいかなかった。

必死に意識を繋ぎとめると心の奥底に静寂を見つけた。

オビⅡワンはフォースを求めた。ただひたすら。

突如、クワイⅡガンは体が癒され力がみなぎるのを感じた。暖かく、優しきフォースが取り巻いているのも。そして、彼もその瞬間、集中した。力強く、気高いフォースが流れ、渦巻き漂う。

お互い相手を思いやる心、気持ちが架け橋となり、今、クワイⅡガンとオビⅡワンの意思は一つになった。

緑色のセーバーが左下段から切り上がると、赤きセーバーは上からそれを封じ込める。

押えつける手に力を込め薄ら笑いを浮かべるザナトス。

刹那、師の背後からオビⅡガンが跳躍し、宙返りをして青年に切りかかる。

すぐさま表情を怒りに変え、ザナトスはセーバーを横に払った。

弾かれクワイⅡガンは体勢を崩す。

それを尻目に素早く青年は上空にセーバーを構え、攻撃を受け止めた。

阻まれたオビⅡガンは再び跳躍、とんぼ返りをしてザナトスの後方に着地する。

それに向き直ろうとするや危険を察知し飛び退くと、青年のローブを緑色の光が貫いた。

クワイⅡガンは続けざまザナトスの足を狙い、セーバーを薙ぎ払う。

彼の元師はフットワークに弱点があることを覚えていた。

「ちっ」

舌打ちするとザナトスはそれかわしつつ、クワイⅡガンに向けてフォースを叩きつけた。

「マスターっ!!」

ジェダイ・マスターは飛ばされはしなかったものの、後退を余儀なくされ疲れの余り片膝をついた。

ザナトスは、しかし、それを悠長に眺めている暇もなかった。

鋭い一閃が打ち込んだからだ。

オビⅡワンの攻撃は最初ザナトスを凌ぐかと思われた。

だが、青年は冷笑を浮かべ徐々にセーバーを押し返していく。

痛みを堪え唇を噛み締めると、少年は目を閉じた。

―もし暗く悪しき心がお前と向き合ったとしても、光は決して消されることはないだろう

(はい、マスター)

微笑みながら心うちで眩き、気持ちを鎮め心を落ち着かせ、彼はフォースを呼び集めた。全てを繋ぐ命の源である力を。

—— 光は輝いた。

勢いを得て少年はセーバーを振り払う。

ザナトスは攻撃を防ぎきることができなかった。

光のフォースに弾かれるように闇を司る青年は飛ばされ転がる。

オビⅡワンは静かに瞼を開けた。

少し離れた所でザナトスが両手両膝を床につけ喘いでいる。その傍にはセーバーが転がっていた。

だが、そんな彼から視線を外すと、弟子は急いで師の元へと駆け寄った。

「大丈夫ですか?・・・マスター」

自身も荒い息をつきながらオビⅡワンが問う。

クワイⅡガンは体を気づかいゆっくり立ちあがると、微笑みながら頷いた。

「マスター・・・時間が・・・ありません。急が・・・ないと」

緊張の糸が解れたのか崩れ落ちそうになるオビⅡワンを左手で抱き止めると、ジエダイ・マスターは真剣な眼ざしをザナトスに向けた。

「ザナトス、時間がない。早くここから逃げるんだ」

言って静かに右手を差し伸べる。

ザナトスは驚いたような表情をし、ややあつてクスクスと笑い始めた。

「あんたはどこまでお人好しなんだ。言っただはずだ、俺は絶対あんたには従わないと」

ジエダイ・マスターは沈痛な面持ちで元弟子を見やった。

「逃げないのか?俺のためにその大事な弟子を殺すのか?」

嘲笑う声が追い打ちをかける。

一つ溜め息を漏らすとクワイⅡガンはザナトスに背を向けた。過去に決別するように。

そして、足元のおぼつかないオビⅡワンを支えながら走り出した。

未来へ向けて。

There is no death;
there is th
e Force.

残り 0秒

ドカ——ンッ

大音響を立てて館は爆発した。

第16話 全て終わって

爆風がおさまり土煙や埃が静まった後。

館の玄関先から僅かに離れた地面に、倒れている人影があった。ブロックの塊がもう落ちてこないと判断するや、クワイⅡガンは伏せていた体をようやく起こした。そして、彼が爆発から庇っていた少年に目を向ける。

「オビⅡワン？」

呼ばれて弟子はゆっくりと瞼を開き、弱々しく微笑んだ。

師は深い安堵の吐息を漏らし体を起こすと立ち上がった。それから、同じく立ち上がるうとしてるオビⅡワンに手を貸す。

少年は少しよろめいたが、しっかりと自分の足で地面を踏み締めるのと、館の跡を見つめた。青緑の瞳には悲しみの色が漂っている。そんな弟子の様子からクワイⅡガンも視線を廃虚に向けた。跡形も無い。

ここに館が存在していたこと自体疑えるほどの、残骸の積み重ねと化していた。

オビⅡワンは何かを探すように視線を彷徨わせていたが、不意に「マスター、あれ……っ」

と言ったきり、その方向を指し示しながら絶句した。

クワイⅡガンもその先を辿り顔を強張らせた。

残骸の山から飛び出ているもの。ボロボロの黒いローブを纏った青白い右手。何かを掴むように虚空に向けて伸びているその指先。

「まさかザナトス……」

オビⅡワンの言葉に、クワイⅡガンが急いで廃虚に向けて駆け出そうとした瞬間。

ドカンッ！

爆発が起きた。

まだ点火し損ねていた爆弾があったらしい。

それは先ほどよりは弱めだが、そこに存在していたものを全て粉々にするほどの威力は充分にあった。埃や塵が舞い下りると二人は素

早く双眸を向けたが、生きているものを見出すことは不可能だった。ややあつてオビⅡワンがポツリと言った。

「ザナトスは・・・死んだのでしょうか？」

クワイⅡガンは瞳を閉じた。ジェダイ・マスターの顔は悲しそうな表情に彩られている。永遠かと思われる沈黙の後、ようやく口を開いた。

「そうかもしれん。暗きフォースが全く感じられない今」

「そうですね・・・」

奥歯に物が挟まったような物言いにクワイⅡガンは問う。

「何か気になるのか？」

「いえ。ただ・・・彼が死んだことが・・・信じられないのかもしれないかもしれません」

少年はゆっくり頭を横に振った。

そして、静寂が訪れた。二人はそれぞれ物思いに耽っていた。

サラサラと木の葉を揺らす風の音だけが辺りに流れる。

「マスター？」

突然オビⅡワンが声をかけた。

ジェダイ・マスターは視線を移し少年を見やる。

「どうした？」

「マスターは僕に・・・多くの大切なものをくれました。・・・僕の宝物になっていてあの石も含めて、・・・人を信頼する心、他人を思いやる気持ち、・・・そして、かけがえのない肉親とも呼べる人を。だから・・・」

師は小首を傾げ、言い淀む弟子を不思議そうに眺める。何故、彼は突然こんなことを言い始めたのだろうか？

不意に思い当たりクワイⅡガンは口を開いた。

「ザナトスの言葉を聞いたのか？」

オビⅡワンは俯きながらコクリと頷く。

軽く苦笑を漏らして師は思わず目を細めた。弟子に慰められるとは。

「だから、気を落さないでください、とでも？」

悪戯な瞳を向けると、少年は恥ずかしそうに再び頷いた。

師に意見するつもりはなかったのだろう。ただ、自分の考えを伝えなかっただけで。

クワイⅡガンは頬を緩め

「彼の言ったことを気にしていないと言ったら嘘になるだろう。だが、過去を振り返ってばかりもいられないのだ。未来に目を向けねばなるまい。さし当たってやることはあるのだから」

と言うと、少年の頭を愛情を込めてぐしゃぐしゃと撫でた。

「やること……ですか？」

怪訝そうに訊ねるオビⅡワンに

「お前がジェダイ・ナイトになれるよう導くことだ。まさかこの館の後片付けをやると思ったのではあるまい？」

含み笑いをしつつ悪戯っぽい表情を向ける。

「そ、そんなこと思っても……いませんが」

と弟子は慌てつつ、師の口調からようやくやく死闘と悲哀の呪縛から解き放たれたように、ニヤリと笑って言葉を続けた。

「……しかし、随分と壊しましたね……評議会に請求が来たら……どうするんですか？」

「私のせいではないぞ？降りかかる火の粉を払っていたまでだ」

他人事のように言うクワイⅡガンに、オビⅡワンはこんな時でも込み上げる笑いを押さえ切れなかった。

クスクス笑いを漏らしながら少年は続ける。

「でもこの前……マスター・ウインドウのドロイドを……壊してしまいましたよね。……あれも降りかかる火の粉ですか？」

「そうだ。だからメイスの頭は焼け焦げて髪が———— オビⅡワン？」

腹を抱えて笑い始める弟子に、思わず話に乗ってしまったクワイⅡガンは強い口調で窘めるも、自分も笑っているため迫力が無い。溜め息をつくジェダイ・マスターはオビⅡワンに近寄った。

「だが、本当に無事で良かった」

涙を流しながら笑っていたオビⅡワンは不意に引つ張られ、そし

て、驚いた。

クワイ||ガンが自分を抱き締めていたからだ。

師から暖かい癒しのフォースが送られてくる。それとともに穏やかで安らぎを与える感情も。言葉はなくとも、師の自分を案じる想いがひしひしと感じられた。

しかし――

「マスター……」

「何だ？」

「……苦しい……」

クワイ||ガンは苦笑すると弟子を解放し、その頭を再びぐしゃぐしゃと撫でた。

夜空を見上げ、突然、思いついたようにクワイ||ガンが訊ねる。

「ところで、変えられたパスワードとは何だったのだ？」

「ぜDespairぼです。……あの時の状況そのままに」

「――絶望はない、希望がある」

ジェダイ・マスターは静かに声を発した。

暗闇の天空から、光を照らしながら一台のシャトルが二人に向かって近づいてくるのが遠目にも見えた。

エピソード

シャトルは反重力装置リバルサーリフトを起動させると、風を巻き上げながらふわりと着地した。

ハッチが開き、降りてきた人物を凝視した途端、クワイⅡガンは驚いた表情を見せ、オビⅡワンは込み上げてくる笑いを抑えるのに必死になった。

その様子をちらりと視界に捉え、彼の人物は言った。

「折角救出に来たのに、余りにもひどい出迎えではないか？」

「メイス。何故ここへ？」

驚いた面持ちのままクワイⅡガンは問いかけた。

「・・・彼女に捕まったからだ」

渋い口調で言い、肌黒いジェダイ・マスターは手首をくいと捻ると後方を親指で指した。

シャトルの内側から何やら言い争う声が聞こえてくる。

「—— 全く、全然役に立ちやしないじゃないの」

「そんなことを言いましたも、私としてもベストを尽して・・・」

「もう、いいわ。そこにいなさい」

言い捨て、師弟の眼ざしを引きつけてシャトルから降りてきた者に

「タール!？」

「ナイト・タールっ!？」

異句同音の声がかかる。

タールは地面に降り立ち艶然と微笑んだ。そして、見えぬ双眸をオビⅡワンの方に向ける。

「どうやら大丈夫だったようね、オビⅡワン」

瞬時に少年の顔は真っ赤になった。

「・・・あの・・・コムリンクの・・・」

ようやくそれだけを言葉にする。

クワイⅡガンは眉をひそめてタールを眺めた。

「何故君がここに来たのだ？私がここに来ることは誰にも知らせなかつたはずだが？」

「そう、いつも貴方は自分一人で背負い込み過ぎるの。もつと周りを信頼したらどう？　——　ここに来たのはオビⅡワンに要請を受けたからよ」

「オビⅡワンから？」

「彼を責めないでね。ただ、コムリンクの周波数を間違えてしまったのよ。親友のバントのものと。でも、私達がここに来なかったら、貴方達、どうやって帰るつもりだったの？」

闇を見据えて浮揚車ホバーカーが完全に黒焦げになっているのを確認すると、クワイⅡガンは溜め息を漏らした。

「そうだな。助かった。ありがとう」

「感謝ばかりしてもいらなくなるかもね。マスター・ヨーダもこのことを知ったから」

悪戯っぽく微笑むとタールは館の跡へと歩いていった。

(勝手に行動したことに對し、また、叱責を受けるのか・・・)

クワイⅡガンは一人暗雲たる思いに囚われた。

「そんなにがっかりしなくてもいいわ。マスター・ヨーダが手配してくれなかったら、こんな早く来られたかどうか」

遠くから嬉しそうに話すタールの声に苦笑しつつ、クワイⅡガンは視線を友に向けた。

「それでメイス。彼女に捕まったとは？」

「私はたまたま聖堂内を歩いていただけなのだ。そこをタールに出会ったのが運の尽きという訳だ。まだ仕上げなくてはならない報告書が三つほどあるのだが」

言い置き、溜め息を漏らす。

「船の操縦はメイスが？」

「いや、タールが操縦した」

意表を突かれクワイⅡガンは驚いた。

「目が見えないのか？」

「前から操縦したかったらしい。勿論2Jがフォローしていた。いや、フォローとは言えないな。どちらかと言えば二人で喧嘩をしていたのだから」

肩を竦め両手を上げる友人に、クワイⅡガンは思わず吹き出した。

「では、メイス。お前は必要なかったのではないか」

「いや、レーザーキャノンを運ぶために男手が必要だったと彼女は言っていた」

「レーザーキャノン？そんな物騒な物を何故？」

「壁をぶち壊すためだそうだが？」

「それもオビⅡワンの要請だな」

「その通り。ところで、ザナトスはどうなったのだ？怪我は大丈夫か？」

「随分と聞くタイミングが遅れてはいないか？」

「タールの操縦に動揺したのだろう。気にするな」

急に悲しげな表情で俯くと、ジェダイ・マスターは静かに口を開く。
「・・・ザナトスは恐らく死んだはずだ。あの破壊された館の下敷きになって」

「確認は取れていないのだな。あとで調査隊を派遣しよう。そして、怪我は？」

「私は右肩に火傷を負っただけだ。それよりオビⅡワンの方が——」

クワイⅡガンは弟子を振り向いて、突如、少年が崩れるように倒れるのを視界に捉えるや素早く抱き留めた。

「手当てが必要だ」

言いつつ、痛む右肩を気にせずオビⅡワンを抱き上げると、クワイⅡガンはシャトルへ歩き出す。

「クワイⅡガン、お前もシャトルに乗っているといい。タールは私が呼んでくる」

「すまない」

褐色のジェダイ・マスターは館の方へ歩を進めた。

美しきナイト・タールは、辺りを油断なくタイガーズ・アイのような煌く瞳で窺ってる。

「タール？」

「しっ」

タールは唇に指を当て、メイスを制した。

「誰かあの木陰にいるわ」

小声で囁く。

まさかザナトスが生きて——？

「そこにいるのは誰？出てきなさい」

澄んだ美しい声が鋭く闇を切り裂く。

ガサツガサツという草を踏みわけけるような音とともに現れたのは一人の青年。

「おお、こんな場所で貴女のような美しい方に会えるとは思いませんでした」

後頭部をさすりながら彼は言った。

「貴方は誰？」

フォースで探りザナトスじゃないわね・・・と内心思いながらタールが問うた。

「レンダー、ソーア・レンダーと言います」

代わってメイスが鋭い眼光で訊ねた。

「どうしてあんな所にいたのだ？」

「マスター・ジェダイの指示でドアのアクセス・パネルにパスワードを入れようとしたら、突然現れた黒づくめの者に突き飛ばされて。地面で頭を打って今まで気を失っていたみたいです」

タールとメイスは顔を見合わせ、嘘についている訳ではなさそうだと判断した。

「良く無事だったわね」

少し感心した風にタールが言葉を漏らす。ザナトスから攻撃を受けて生きてるなんて。しかもフォースを使えぬ者が。

レンダーはニッコリ笑った。

「運が良かったみたいです」

「貴方はどうやってここまで来たの？」

聞かれて青年は視線を転じ、

「ホバーカー浮揚車で。おおっ!!僕の車・・・」

顔をシヨックで凍りつかせた。

「仕方ないわね、私のシャトルに乗りなさい。送って行ってあげるわ」
「光栄です」

再びレンダーは微笑んだ。

「折角助かった命なのに・・・」

と静かに呟くメイスの頭に、タールの平手打ちが小気味良い音とともに飛んだ。

シャトルは夜の闇の中を飛んでいく。

眼下には、コルサントの街の明りが星を散りばめた如く眩い光となり、見渡す限り絨毯のように広がっている。まるで宇宙に浮いているが如く。

「寝てしまつたみたいね」

操縦の手を休め、後部座席をちらりと振り返りタールが静かに言った。

「そうだな、余程疲れたのだろう」

メイスが相槌を打つ。

「こうして見ているとまるで親子みたい」

タールはクスクスと忍び笑いを漏らした。

後部座席にて、師弟は寄り添うように並んで熟睡していた。

内心大きな溜め息を漏らしメイスは、顔を強張らせまいと努力した。

(クワイーガン、オビワン、お前達は幸せ者だぞ？こんなタールの恐ろしい操縦を実感しないで済むとはっ!!)

思つた途端シャトルが大幅に傾き、メイスは悲鳴を上げそうになるのを堪えた。

「タール様、操縦桿を切りすぎています——」

2Jの叫び声が闇の中を流れていった。

心優しき者達にも今は休息を——

黒雲を伴いし嵐が訪れる迄は——

E n d

(2001年頃執筆)